

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

# 元岡・桑原遺跡群28

—第20次・第42次・第53次・第57次・  
第63次・第66次調査の報告—

2017

福岡市教育委員会

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

# 元岡・桑原遺跡群28

—第20次・第42次・第53次・第57次・  
第63次・第66次調査の報告—



遺跡略号 MOT-20・42・53・57・63・66  
調査番号 0001・0451・0768  
1103・1328・1525

2 0 1 7

福岡市教育委員会

## 序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・筑紫地区的キャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原及び、糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めています。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域のまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

統合移転用地内における事前発掘調査もこの一環として平成7年度から福岡市が取り組んでおり、当初は土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社からの受託、平成14年度からはあわせて九州大学からの受託による発掘調査を実施しました。発掘調査の報告書は、遺構・遺物の整理が終了した分から順次刊行しており、九州大学を委託者とする報告書は9冊が既刊です。その他にも福岡市土地開発公社分の調査報告書が18冊、概要報告書が2冊、関連リーフレットを3部発行しています。

本書で報告する各調査からは、先史時代から近世にかけての貴重な考古資料が出土しており、この地域の歴史を物語る上で欠かすことのできない調査になりました。本書が文化財の保護・活用の一助となり、学術研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、九州大学をはじめとする関係各機関並びに地元の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会  
教育長 星子 明夫

## 例　言

- 1 本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が九州大学の委託を受けて発掘調査を実施した元岡・桑原遺跡群の調査報告書である。本書では第20次、42次、53次、57次、63次、66次調査の報告を行っている。このうち、第20次調査と第42次調査はその5として報告する。
- 2 本書に使用した実測図・写真の作成者は各担当者の他、以下の通りである。
- 20次調査  
遺物実測図：熊埜御堂和香子
- 42次調査  
遺物実測図：井上加代子、大庭友子、株式会社九州文化財研究所、株式会社バスコ
- 53次調査  
遺物実測図：吉留秀敏、井上加代子
- 57次調査  
遺構実測図：名取さつき、坂口剛毅、阿部洪太郎　遺物実測図：山崎賀代子
- 63次調査  
遺物実測図：熊埜御堂和香子、鈴木諒子、中村祐子
- 3 本書に使用した図面の製図は各担当者の他、山崎賀代子（第57次）、井上加代子（第42次）が行った。
- 4 第57次調査の空中写真は(有)空中写真企画により撮影されたものである。
- 5 本書に使用した座標は日本測地系で、国土調査法第II座標系に依拠している。
- 6 挿図番号・写真番号・遺物番号は調査ごとの通し番号としている。
- 7 本書の執筆は各調査担当者により以下の通り分担した。(肩書きは平成29年3月現在)
- I・V：大塚紀宜（経済観光文化局埋蔵文化財課管理係長）  
II：菅波正人（経済観光文化局大規模史跡整備推進課歴史館跡整備係長）  
III：米倉秀紀（経済観光文化局文化財活用計画担当課長）  
IV：池田祐司（経済観光文化局埋蔵文化財課事前審査係主任文化財主事）  
VI：大森真衣子（経済観光文化局埋蔵文化財課事前審査係）  
VII：中尾祐太（経済観光文化局埋蔵文化財課調査第2係）
- 8 本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 9 編集は、各担当者の協力を得て、大塚が行った。

遺跡名	元岡・桑原遺跡群		遺跡略号	MOT	遺跡登録番号	2782
調査次数	調査番号	所在地	分布地図	調査期間	調査面積	
第20次	0001	西区大字桑原字戸山	129 桑原	H12.4.5～H15.5.23	20,000m <sup>2</sup>	
第42次	0451	西区大字元岡	140 元岡	H16.10.1～H21.6.30	7,000m <sup>2</sup>	
第53次	0768	西区大字桑原	129 桑原	H20.2.19～H20.4.9	770m <sup>2</sup>	
第57次	1103	西区大字元岡	140 元岡	H23.4.12～H25.9.6	6,700m <sup>2</sup>	
第63次	1328	西区大字元岡	140 元岡	H25.10.1～H26.4.23	1,244m <sup>2</sup>	
第66次	1525	西区大字元岡	140 元岡	H27.9.29～H27.10.8	167m <sup>2</sup>	

## 本文目次

I	はじめに	
1	元岡・桑原遺跡群の調査経過	1
2	元岡・桑原遺跡群の位置と環境	2
3	調査組織	6
II	第20次調査の報告	
1	20次調査の概要	9
2	出土木製品の記録	10
III	第42次調査の報告 - 5 -	
1	第42次調査の概要	45
2	第42次調査1区（SD01及び遺構面）出土石器	45
3	弥生時代・古墳時代層出土繩文土器	81
4	縄文時代包含層出土遺物	83
5	まとめ	90
IV	第53次調査の報告	
1	調査の経緯と経過	115
2	調査の記録	116
	付録 元岡・桑原遺跡53次調査の自然科学分析業務報告	138
V	第57次調査の報告	
1	57次調査の概要	145
2	谷部包含層の調査	152
3	各区の出土遺物	165
4	小結	238
VI	第63次調査の報告	
1	調査の経緯と概要	255
VII	第66次調査の報告	
1	66次調査の概要	279
2	包含層出土遺物	282
3	まとめ	282

## 挿図目次

Iはじめに			
第1図 元岡・桑原遺跡群と周辺の遺跡	1	第5図 出土UF・RF実測図2	51
第2図 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図	3	第6図 出土石核実測図1	52
		第7図 出土石核実測図2	53
		第8図 出土石核実測図3	54
II 第20次調査の報告		第9図 出土石核実測図4	55
第1図 第20次調査遺構配置図	9	第10図 出土石匙・スクレイバー実測図1	56
第2図 SX001出土木製品1	11	第11図 出土スクレイバー実測図2	57
第3図 SX001出土木製品2	12	第12図 出土石盾丁・石鏨実測図	58
第4図 SX001出土木製品3	13	第13図 出土石盾丁未成品・不明石器実測図	59
第5図 SX001出土木製品4	14	第14図 出土筋鎌車・石製円盤実測図	60
第6図 SX001出土木製品5	15	第15図 出土石鏨実測図1	61
第7図 SX001出土木製品6	16	第16図 出土石鏨実測図2	62
第8図 SX002出土木製品1	17	第17図 出土石鏨実測図3	63
第9図 SX002出土木製品2	18	第18図 出土磨製石斧(両刃)実測図	64
第10図 SX002出土木製品3	19	第19図 出土磨製石斧(片刃)・打製石斧実測図	65
第11図 SX002出土木製品4	20	第20図 出土磨石類(磨石・戴石・崖石)実測図1	68
第12図 SX002出土木製品5	21	第21図 出土磨石類(磨石・戴石・崖石)実測図2	69
第13図 SX002出土木製品6	22	第22図 出土磨石類(磨石・戴石・崖石)実測図3	70
第14図 SX002出土木製品7	23	第23図 出土磨石類(磨石・戴石・崖石)実測図4	71
第15図 SX002出土木製品8	24	第24図 出土磨石類(磨石・戴石・崖石)実測図5	72
第16図 SX044出土木製品1	25	第25図 出土砥石実測図1	74
第17図 SX044出土木製品2	26	第26図 出土砥石実測図2	75
第18図 SX044出土木製品3	27	第27図 出土砥石実測図3	76
第19図 SX044出土木製品4	28	第28図 出土砥石実測図4	77
第20図 SX044出土木製品5	29	第29図 出土砥石実測図5	78
第21図 SX162出土木製品1	30	第30図 出土砥石実測図6	79
第22図 SX162出土木製品2	31	第31図 出土砥石実測図7	80
第23図 SX162出土木製品3	32	第32図 弥生時代・古墳時代包含層出土縄文土器実測図	82
		第33図 E-5区東側抜張土層断面実測図	84
III 第42次調査の報告		第34図 縄文時代包含層遺存地区位置図	84
第1図 第42次調査主要遺構配置図	46	第35図 縄文時代包含層出土縄文土器実測図1	85
第2図 第42次調査土器群位置図	47	第36図 縄文時代包含層出土縄文土器実測図2	86
第3図 出土石鏨実測図	49	第37図 縄文時代包含層出土縄文土器実測図3	87
第4図 出土石槍・UF・RF実測図1	50	第38図 縄文時代包含層出土石器実測図	88

第39図 Y-I 区調査区南壁土層柱状図	91	第11図 III区Bトレンチ南壁土層断面図	158
		第12図 III区Cトレンチ南壁土層断面図	159
<b>IV 第53次調査の報告</b>		第13図 III区西侧谷A・Qトレンチ西壁土層断面図	160
第1図 調査地点位置図	115	第14図 III区西侧谷Cトレンチ南壁土層断面図	160
第2図 周辺の調査	116	第15図 III区西侧谷西トレンチ西壁土層断面図	161
第3図 第53次調査全体図	117	第16図 IV区Bトレンチ北壁土層断面図	162
第4図 谷部北壁土層	118	第17図 IV区Dトレンチ北壁土層断面図	163
第5図 I区構構配図	119	第18図 IV区谷部北東隅土層断面図	163
第6図 挖立柱建物SB008、009	120	第19図 V区調査区南東側壁土層断面図	164
第7図 挖立柱建物SB010	121	第20図 V区調査区南東側壁土層断面図	164
第8図 挖立柱建物SB011、012、013	122	第21図 V区2面下Bトレンチ北壁土層断面図	164
第9図 挖立柱建物SB014、015	123	第22図 I-2区斜面3トレンチ出土須恵器実測図	166
第10図 挖立柱建物出土遺物	124	第23図 I区調査区内出土須恵器実測図	167
第11図 SK-001、出土遺物	125	第24図 I区⑦層出土須恵器大甕実測図	168
第12図 SK005	126	第25図 I-1区③~④層出土土師器実測図1	169
第13図 SK005出土木器	127	第26図 I-1区③~④層出土土師器実測図2	170
第14図 SK005出土遺物	128	第27図 I-2区③~④層出土土師器実測図3	171
第15図 SD002・003、SD004出土遺物	129	第28図 I区⑥~⑦層出土土師器実測図	172
第16図 2区谷部包含層出土遺物1	130	第29図 I-2区⑦層出土土師器実測図	173
第17図 2区谷部包含層出土遺物2	131	第30図 I-3区④層・⑦層出土土師器実測図	174
第18図 2区谷部包含層出土遺物3	132	第31図 I-4区⑦層出土土師器実測図	175
第19図 出土石器1	133	第32図 I区出土土師器実測図	176
第20図 出土石器2	135	第33図 II-5区出土須恵器実測図	179
第21図 出土石器3	136	第34図 II-7区出土古墳時代須恵器実測図	180
		第35図 II-6・7区出土須恵器実測図1	181
<b>V 第57次調査の報告</b>		第36図 II-6・7区出土須恵器実測図2	182
第1図 調査地点位置図	145	第37図 II-8区出土須恵器実測図	184
第2図 調査区位置図	146	第38図 II区包含層出土須恵器実測図	185
第3図 57次調査区全体図(第1面)	148	第39図 II-5区出土土師器実測図	187
第4図 57次調査区全体図(第2面)	149	第40図 II-7区出土土師器実測図	188
第5図 57次I区I区~V区区分図・トレンチ位置図	151	第41図 III区Aトレンチ・Bトレンチ出土須恵器実測図	189
第6図 I-1・3区北壁土層断面図	153	第42図 III区Bトレンチ下層(19層)・Cトレンチ出土須恵器実測図	190
第7図 I-2・4区北壁土層断面図	154	第43図 III区西侧谷出土須恵器実測図	191
第8図 II-5・6区北壁土層断面図	155	第44図 III区出土土師器実測図1	193
第9図 II-7・8区北壁土層断面図	156	第45図 III区出土土師器実測図2	194
第10図 I・II区東壁土層断面図	157	第46図 III区北側表土(黄褐色土)出土陶磁器実測図	196

第47図	IV区A・Bトレンチ出土須恵器実測図	197	第74図	V区出土土師器実測図	231
第48図	IV区Dトレンチ出土須恵器実測図	198	第75図	57次出土黒色土器実測図	232
第49図	IV区1面下包含層出土須恵器実測図	199	第76図	57次出土新羅土器実測図	232
第50図	IV区2面下(Dトレンチ北)出土須恵器実測図1	200	第77図	57次出土土製品実測図	233
第51図	IV区2面下(Dトレンチ北)出土須恵器実測図2	203	第78図	57次出土石器・石製品実測図	235
第52図	IV区2面下(Dトレンチ北)出土須恵器実測図3	204	第79図	57次出土埴輪実測図	236
第53図	IV区2面下出土須恵器実測図1	205	第80図	57次出土耳環・玉製品実測図	237
第54図	IV区2面下出土須恵器実測図2	207			
第55図	IV区2面下出土須恵器実測図3	209	VII	第63次調査の報告	
第56図	IV区2面下出土須恵器実測図4	210	第1図	第63次調査地点位置図	256
第57図	IV区2面下出土須恵器実測図5	211	第2図	第63次調査I区全体図	257
第58図	IV区3面下出土須恵器実測図	212	第3図	I区谷内土層断面図	259
第59図	IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図1	213	第4図	出土遺物(包含層及び表探)	260
第60図	IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図2	215	第5図	II区検出近世墓分布図	262
第61図	IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図3	216	第6図	II区検出近世墓北側平面図	263
第62図	IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図4	219	第7図	II区検出近世墓南側平面図	264
第63図	IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図5	220	第8図	近世墓出土遺物①	266
第64図	IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図6	221	第9図	SC008	268
第65図	IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図7	222	第10図	近世墓出土遺物②	269
第66図	IV区出土須恵器実測図1	223	第11図	SC027	270
第67図	IV区出土須恵器実測図2	225			
第68図	IV区1面下包含層出土土師器実測図	226	VII	第66次調査の報告	
第69図	IV区2面下包含層出土土師器実測図	227	第1図	66次調査位置図	279
第70図	IV区3面下包含層出土土師器・弥生土器実測図	228	第2図	66次調査全体図	280
第71図	IV区出土土師器実測図1	229	第3図	調査区基本緯序柱状図及びトレンチ土層断面柱状図	281
第72図	IV区出土土師器実測図2	230	第4図	包含層出土遺物	282
第73図	V区出土須恵器実測図	230			

## 図版目次

### II 第20次調査の報告

- 図版1 H-14区SX044木製品出土状況（北から）
- 図版2 D-23区SX162木製品出土状況（南から）
- 図版3 SX001出土木製品1
- 図版4 SX001出土木製品2
- 図版5 SX001及び002出土木製品
- 図版6 SX002出土木製品
- 図版7 SX044及び162出土木製品1
- 図版8 SX044及び162出土木製品2

### III 第42次調査の報告

- 図版1 元岡・桑原遺跡群第42次調査遠景
- 図版2 元岡・桑原遺跡群第42次調査全景
- 図版3 B-1・2区東壁土層断面・D-6区南壁土層断面・E-6区南壁土層断面
- 図版4 B-2区溝・D-4区縄文土器出土状況・縄文β区縄文土器出土状況
- 図版5 弥生時代・古墳時代包含層出土石器（石鏃・石槍・UF・RF・石核）
- 図版6 弥生時代・古墳時代包含層出土石器（石匙・スクレイバー・石庖丁）
- 図版7 弥生時代・古墳時代包含層出土石器（石庖丁・不明石器・紡錘車・石製円盤）
- 図版8 弥生時代・古墳時代包含層出土石器（石錐・軽石製品）
- 図版9 弥生時代・古墳時代包含層出土石器（石錐・磨製石斧・打製石斧）
- 図版10 弥生時代・古墳時代包含層出土石器（磨石類）
- 図版11 弥生時代・古墳時代包含層出土石器（磨石類）
- 図版12 弥生時代・古墳時代包含層出土石器（砥石）
- 図版13 出土縄文土器
- 図版14 出土縄文土器・縄文時代包含層出土石器

#### IV 第53次調査の報告

図版1 1. 調査区全景（南西から）

2. 調査区全景（東から）

図版2 1. 2区谷部土層（南西から）

2. SK005（東から）

図版3 1. 2区包含層トレンチ（東から）

2. SK005（南西から）

3. SK005西側板列（西から）

4. SK005南・北側板列（東から）

5. SB010周辺ピット群（東から）

6. 1区、段落ち（北から）

図版4 出土遺物

#### V 第57次調査の報告

図版1 1. 調査区全景

2. 調査区俯瞰（IV区2面調査時）

図版2 1. I～III区全景

2. I-1区北壁

3. I-2区北壁

図版3 1. I-4区東壁

2. I-4区北壁

3. I区東壁

図版4 1. II-5区北壁西半

2. II-5区北壁東半

3. II-6区北壁

図版5 1. II-7・8区北壁

2. III区Bトレンチ

3. III区Cトレンチ下層

- 図版6 1. III区Cトレンチ  
2. III区Dトレンチ  
3. III区西側谷Qトレンチ
- 図版7 1. III区西側谷Cトレンチ  
2. III区西側谷西トレンチ  
3. IV区Bトレンチ
- 図版8 1. IV区Dトレンチ  
2. V区南東壁  
3. V区南壁
- 図版9 出土遺物1
- 図版10 出土遺物2
- 図版11 出土遺物3
- 図版12 出土遺物4
- 図版13 出土遺物5
- 図版14 出土遺物6
- 図版15 出土遺物7
- 図版16 出土遺物8

## VI 第63次調査の報告

- 図版1 1. I区全景  
2. I区北壁土層断面
- 図版2 3. II区調査前状況  
4. II区丘陵先端部調査前状況
- 図版3 5. II区全景  
6. II区丘陵基部近世墓
- 図版4 7. II区丘陵先端部近世墓  
8. SC008人骨出土状況①

- 図版5 9. SC008人骨出土状況②
10. SC027人骨出土状況①
11. SC027人骨出土状況②頸部付近
- 図版6 12. SC027頸部付近遺物出土状況
13. SC003完掘状況
14. 人骨取り上げ作業風景

VII 第66次調査の報告

- 図版1 66次調査全景（南西から）

# I はじめに

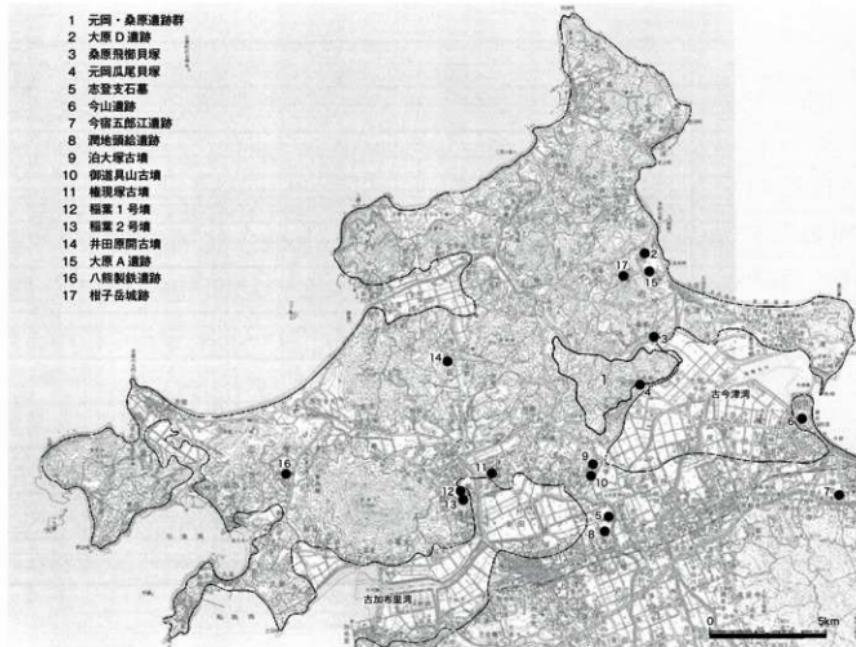
## 1. 元岡・桑原遺跡群の調査経過

九州大学の福岡市西区元岡・桑原地区への統合移転が決定したことを受け、福岡市教育委員会は平成7(1995)年に対象地内の踏査を行い、平成8(1996)年にはこの事業を担当する大規模事業等担当課を設置した。造成予定地の詳細な試掘調査は平成8年3月から同年9月までに実施し、あわせて桑原金屋古墳や元岡石ヶ原古墳などの確認調査を実施した。

移転用地は福岡市土地開発公社が全城を先行取得した後に九州大学が再取得することとなったため、造成工事に伴う発掘調査は福岡市教育委員会と福岡市土地開発公社が受託契約を結び、平成8年から平成20(2008)年まで実施された。しかし、造成工事計画が変更となり、未造成のまま九州大学が再取得した地区についても造成工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。その調査範囲は大規模な面積に及ぶことなどから、福岡市教育委員会が発掘調査を行うことで九州大学と協定書を締結した。これに基づき、平成15(2003)年から平成27(2015)年度まで九州大学との受託契約による発掘調査を実施した。

移転用地内の埋蔵文化財包蔵地は、古墳などを除いて「元岡・桑原遺跡群」と総称しており、同遺跡群内では平成27(2015)年度までに66次の調査が実施されている(表1)。

- 1 元岡・桑原遺跡群
- 2 大原 D道跡
- 3 桑原飛幡貝塚
- 4 元岡鳳尾貝塚
- 5 志支支石墓
- 6 今山遺跡
- 7 今宿五郎江遺跡
- 8 潟地頭船道跡
- 9 治大摩古墳
- 10 御道丸山古墳
- 11 雄現原古墳
- 12 稲葉1号墳
- 13 稲葉2号墳
- 14 井田原古墳
- 15 大原 A道跡
- 16 八熊製鉄遺跡
- 17 柑子岳城跡



第1図 元岡・桑原遺跡群と周辺の遺跡 (1/200,000)

## 2. 元岡・桑原遺跡群の位置と環境

### (1) 地理的環境

元岡・桑原遺跡群は、福岡市西区元岡・桑原地区に所在し、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯に位置する。丘陵には、小河川により樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入り込む。現在の糸島半島はその全面で九州本島と繋がっているが、繩文海進以降、中世のある時期までは中央の一部が陸橋状に繋がっていた以外は、東と西にそれぞれ大きく海が湾入していたと考えられる。この東西の湾入部が干拓によって江戸時代に埋め立てられ、現在のような地形をなすに至っている。元岡・桑原遺跡群は、その東側の湾（古今津湾）の奥部北側に位置する（図1）。

糸島半島の地質は、大きく3つに分類でき、北側の北崎トーナル岩、「野北—今津帶」と言われる三郡変成岩、糸島花崗閃緑岩で形成されている。元岡・桑原遺跡群が立地する元岡丘陵は、北東端が三郡変成岩帯に含まれるが、大部分は糸島花崗閃緑岩帯に含まれている。糸島花崗閃緑岩は斜長石、カリ長石、黒雲母、普通角閃石から構成される中～粗粒岩で、白亜紀に形成されたものと考えられている。三郡変成岩帯は後期古生代からジュラ紀にかけて形成されており、このうち野北—今津帶は3億3千万年～2億8000年前に相当する。

これらの丘陵体から流出した土砂が堆積して、狭い平野を形成している。糸島半島の南側には現在低地が広がっているが、これは古今津湾と古加布里湾が東西から深く入り込み、入海を形成していたものが、瑞梅寺川や雷山川などの南からの河川堆積によって埋まったものである。

### (2) 元岡・桑原地区の発掘調査における成果

元岡・桑原地区では、旧石器時代の明確な遺跡は発見されていない。しかし3次、20次、26次調査などでナイフ形石器、剥片尖頭器、細石核が包含層から出土しており、後期旧石器時代の人々がこの地で活動していたことは確実である。

繩文時代には、第3次調査で繩文草創期～早期の遺構・遺物が出土しており、遺構は石組み炉や集石遺構が20基以上確認されており、連結土坑も1基見つかっている。ともに条痕文土器、押型文土器、燃糸文土器などの土器類、石器類も出土している。繩文草創期から早期の遺跡は桑原地区北側に隣接する大原D遺跡でも見つかっており、付近の低丘陵上に集落が点在していたとみられる。

平成4（1992）年度に調査された桑原飛櫛貝塚は繩文中期～後期の貝塚で、アサリやマガキの貝層が厚さ80cmにわたって堆積していた。貝塚中から土壤墓が検出され、うち1基には貝輪装着の女性が葬葬されていた。元岡丘陵東麓にある元岡瓜尾貝塚は繩文後期の貝塚で、溜池の岸に貝層が露出している。マガキやシジミなどの貝殻や動物骨、魚骨が出土している。繩文時代当時、糸島半島の南部は入海になっていて漁撈採集活動が盛んだったと考えられ、糸島半島南岸は天神森貝塚や岐志貝塚などとあわせて北部九州での貝塚の集中地区になっている。

繩文晩期には2次調査で貯蔵穴が1基検出されており、42次調査では晩期中頃の包含層が自然流路最下層で確認されており、丘陵の谷部や裾部で初期水田耕作が行われていた可能性も示唆される。

弥生時代には42次調査で大規模な遺物堆積がみられる。遺物量は6000箱を超え、弥生中期から後期の土器の他、祭祀に使用された木器や小銅鐸、朝鮮半島系土器をはじめとする外来系土器も出土しており、広範囲にわたって活発に活動していたことがうかがえる。

元岡・桑原遺跡群の南側に広がっていた入海（今津古灣）の沿岸には弥生時代を通じて集落が分布しており、弥生前期の志登支石墓、磨製石斧の材料としての玄武岩産地である今山遺跡、弥生後期以

第2図 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15,000)

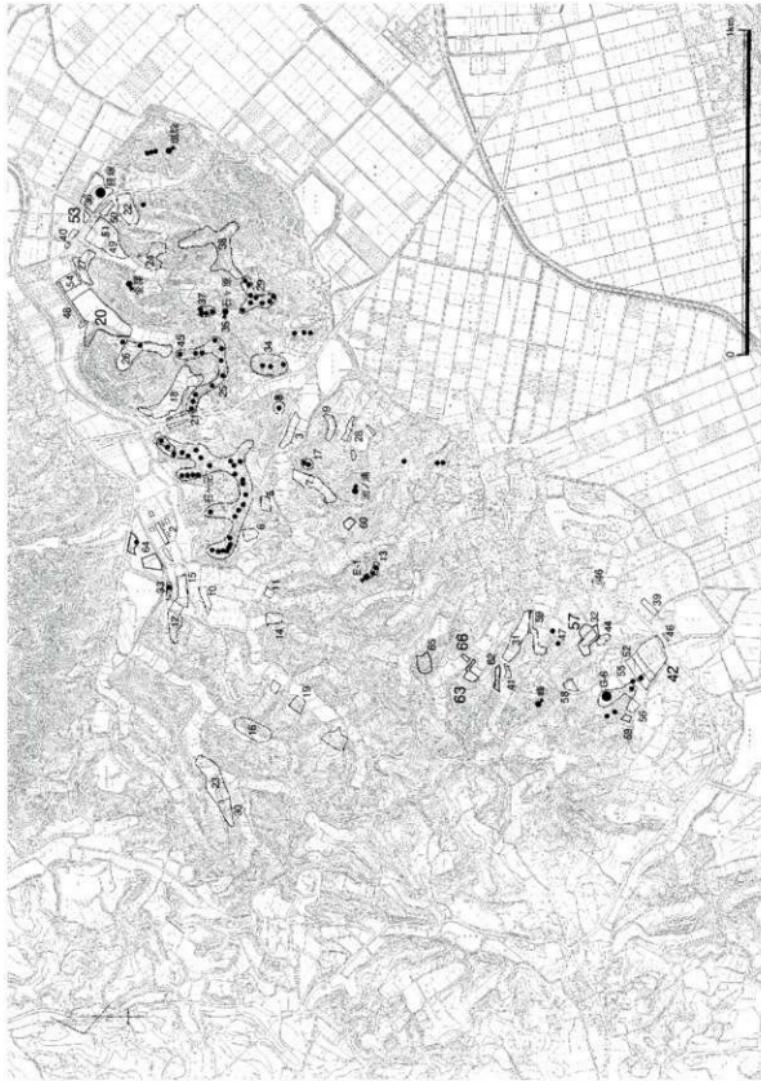


表1 元岡・桑原遺跡群調査一覧

調査番号	遺跡名	原因	調査期間	調査面積	古墳	内容等	報告書(集)
9602	第1次	確認	971201～981031			試掘のみ	743
9656	桑原石ヶ元古墳群	公社	961111～980131	4737	円墳		743
9657	桑原金屋古墳	確認	960820～961129	500	前方後円墳		909
9685	元岡石ヶ原古墳	確認	960827～961129	1280	前方後円墳		909
9658	第2次	公社	961111～970325	3007	古墳時代～古代、溝、土坑、水田		722
9763	第3次	公社	971129～990222	3500	1 碑文時代石組物。弥生時代住居跡、円墳		829
9764	第4次	公社	971201～980331	1219	古代～中世掘立柱建物、溝		829
9771	元岡古墳群第2次	確認	971110～971128	60			
9811	第5次	公社	980427～980623	2500	古代土坑、包含層		639
9812	第6次	公社	980630～980828	2800	古墳時代包含層		639
9813	第7次	公社	980506～990611	7500	古墳時代～古代土坑、溝状遺構、製鉄跡		1012
9829	第8次(元岡古墳群M群)	公社	980916～981225	300	1 円墳		829
9851	第9次	公社	981102～981210	190	弥生時代住居跡		1172
9854	第10次	公社	991006～990225	1336	古代～中世包含層		639
9855	第11次	公社	991006～990320	1650	古墳時代～古代土坑、包含層		829
9902	第12次	公社	991046～000328	5500	古代製鉄跡		860～1063
9903	第13次	公社	990412～000316	600	3 前方後円墳、円墳		861
9904	第14次	公社	990422～990722	1200	古代包含層		639
9923	第15次	公社	990611～990928	3500	古代包含層、中世水田		860
9933	第16次	公社	990602～991110	1200	古代包含層		639
9934	第17次(元岡古墳群B群)	公社	990910～991208	517	2 円墳		861
9946	第18次	公社	991010～020215	16800	2 碑文時代住居跡、製鉄跡建物、窯址遺構、施設跡、円墳	983-101-1172-1246-1380	
9947	第19次	公社	991016～991215	3000	古代包含層		743
0001	第20次	公社	000405～030523	20130	古墳時代住居跡、古代掘立柱建物、製鉄跡	962-103-1063-1105-1228	
0002	第21次(石ヶ元古墳群)	公社	000405～000921	3170	3 円墳		861
0033	第22次	公社	000410～001025	4750	古代掘立柱建物、製鉄関連施構		909
0019	第23次	公社	000601～010331	8110	確認調査		743
0034	第24次	公社	000821～030320	500	古墳時代住居跡、古代製鉄跡		860
0052	第25次(元岡古墳群A群)	公社	001124～011130	2200	7 円墳		861
0110	第26次	公社	010405～011130	5487	1 古墳時代住居跡、円墳、古代掘立柱建物		963
0153	第27次	公社	011201～020820	4495	古墳時代住居跡		909
0154	第28次	公社	020201～020704	2200	古代～中世包含層		909
0202	第29次(元岡古墳群N群)	公社	020405～030930	4000	11 円墳		861
0240	第30次	公社	020801～020930	2450	古代包含層		743
0242	第31次	九大	030401～060113	9000	古墳墓、掘立柱建物、施設跡、古墳時代住居跡		1103
0255	第32次	九大	030120～030331	1700	試掘		
0303	第33次	九大	030408～030519	450	1 円墳		1064
0310	第34次(元岡古墳群J群)	公社	030401～030812	1200	3 円墳		909
0340	第35次(石ヶ元古墳)	公社	030520～050112	1853	1 前方後円墳		909
0341	第36次(絨縷古墳)	公社	030901～050331	3500	1 円墳、中世墓群		1011～1105
0363	第37次(元岡古墳群O群)	九大	031020～040226	461	4 円墳		861
0371	第38次(水崎城)	公社	040308～050117	1000	1 中世山城		1105
0404	第39次	民間	040405～040416	88	弥生時代包含層		1064
0410	第40次	九大	040407～040430	1000	包含層		1064
0435	第41次	九大	040507～041130	900	古代包含層、製鉄関連施構		1064
0451	第42次	九大	041001～090331	7000	1 碑文時代晚期～古墳時代初期自然流域	1174-108-1275-1276-1328	
0486	第43次	九大	050207～050308	500	古墳墓道		1173
0523	第44次	九大	050601～051020	1189	古墳～古代集落		1064
0535	第45次(桑原古墳群A群)	公社	050720～051122	1128	3 円墳		1105
0538	第46次	調査市木局	050808～051011	403	1 弥生～中世集落		965
0562	第47次(元岡I-1号墳)	九大	060105～060310	107	1 円墳		1064
0563	第48次	公社	060110～060223	447	弥生～古墳集落		1173
0611	第49次	公社	060403～070322	4000	古墳時代～古代集落		1173
0709	第50次	公社	070401～070827	811	近世末～近代墓地		1173
0741	第51次	公社	070829～081003	6888	古墳時代～古代集落		1173
0763	第52次	九大	080121～100331	3000	弥生～古墳時代初期自然流域		
0768	第53次	九大	080215～080409	770	古代集落		1328
0844	第54次	公社	081006～090109	1872	古代集落		1173
1001	第55次	九大	100401～110330	3300	2 大型方墳		
1043	第56次	九大	110411～111228	6970	2 大型円墳、中世集落		1210
1103	第57次	九大	110413～130906	6700	古墳時代包含層、古代～中世集落		1328
1110	第58次	九大	110620～130315	1152	碑文時代早期集落、古代包含層		1301
1140	第59次	九大	120123～130315	2298	古墳時代～中世集落		1246
1306	第60次	九大	130522～130829	271	古墳～古代包含層		1302
1315	第61次	九大	130701～131023	407	古代包含層		1275
1327	第62次	九大	130901～131115	1374	1 中世集落		
1328	第63次	九大	131001～140423	1244	古代～中世集落		1328
1331	第64次	九大	131110～140430	2900	1 弥生集落、円墳、中世集落		1302
1413	第65次	九大	140501～141226	2451	弥生～古代包含層		
1525	第66次	九大	150929～151008	167	中世～近世包含層		1328

降の拠点集落である今宿五郎江遺跡や潤地頭給遺跡など、湾岸一帯で活発な生業が営まれていたことがわかる。42次調査も今津湾岸での生業活動に係わる集落に付随する遺物包含層と考えるべきであろう。

なお、元岡・桑原遺跡群の弥生時代の遺構の特徴として、北部九州の独自の埋葬形態である甕棺墓が全くみられないことが挙げられる。甕棺墓の存在をうかがわせる甕棺破片も出土しないため、もともと甕棺墓が作られなかつたものとみられる。一方、甕棺墓の欠落を補うような土壙墓の存在も確認できない。弥生時代の元岡丘陵における墳墓については、その存在も含めて検討すべき課題となっている。

古墳時代には丘陵上に7基の前方後円墳が築かれ、丘陵の南方にも2基の前方後円墳が確認されているが、調査が行われた古墳が少なく、詳しい状況は不明である。調査が実施された前方後円墳では13次調査の金屋古墳があり、前期の古墳で割竹形木棺を主体部とし、2面の鏡が副葬されていた。35次調査の元岡石ヶ原古墳は横穴式石室を持つ後期の古墳であった。糸島半島には元岡・泊地区の前方後円墳群をはじめ、井田原開古墳、権現塚古墳等の前方後円墳があるが、いずれも半島の南側に位置している。このことは当時の集落拠点の分布や支配構造を考える上で着目すべきものであろう。

古墳時代後期になると丘陵の各所に小型の円墳が集中的に築造され、群集墳として形成される。その中で桑原石ヶ原古墳群からは鍛冶に関する工具が副葬されており、被葬者が鍛冶活動に従事していたことが想定され、桑原地区での鉄器製作が6世紀後半にはすでに行われていたことを物語っている。

奈良時代には元岡・桑原地区は嶋郡に属し、登志、川辺、韓良、明敷、久米、志麻、鷦永の七郷が『和名類聚抄』に記載されている。このうち川辺郷については正倉院文書の「筑前国嶋郡川辺里戸籍」(大宝2年)に記録が残されており、郷戸主肥君猪手以下18名の郷戸主と各戸の成員が記されている。肥君猪手は当時の志摩郡の大領職で、他に元岡・桑原遺跡群出土木簡には当時の氏姓が具体的に記載されている。川辺郷(川辺里)の所在については諸説あるが、桑原地区を川辺里に比定する説もある。

古代に関する発掘調査では、7次、12次、18次、20次、24次の各調査で製鉄炉を主とする製鉄関連遺構が多数検出されている。これらの調査では製鉄の過程で生成された鉄滓が大量に確認されており、総量で80トン以上の鉄滓が廃棄されたことが判明している。

鉄生産に関連する資料は他に、7次調査で出土した「壬辰年韓鐵」木簡や15次調査出土の「祓」に関する木簡等の文字資料もあり、元岡で行われた製鉄事業が公的なものであったことが裏付けられる。周辺では大原A遺跡や大原D遺跡で8~9世紀の製鉄炉や鍛冶炉が出土し、糸島半島西側の八熊製鉄遺跡でも8世紀の製鉄炉や鍛冶炉、木炭窯などが出土している。今津湾南岸の今宿から飯氏にかけての地区でも製鉄炉や木炭窯が見つかっており、8世紀から9世紀にかけて糸島地区で製鉄、鉄器生産が大々的に行われたとみられる。

また31次調査で平安時代の瓦窯跡が検出され、鴻臚館で使用された瓦の生産が行われたことが確認されている。

中世には、志摩郡に広大な皇室領莊園(法金剛院領怡土庄)が設定され、他に觀世音寺領船越庄、安楽寺領板持庄、同桑原庄等の寺社領もあった。桑原地区の18次調査では斜面を造成して集落が形成されていたことが確認されており、寺院莊園の「別所」と推定されている。このほかに46次調査でも11~15世紀の集落が検出されている。

弘安の役後は恩賞地として大友氏に与えられ、大友氏が志摩郡を領する淵源となった。柑子岳城は志摩郡代の番城として築かれたものである。戦国期、16世紀前半には一時大内氏が志摩郡を支配した時期もあり、この地を巡って大友、大内の争いが繰り広げられた。58次調査では堀切とみられる大型の溝が検出されているが、丘陵上には『筑前國統風土記拾遺』に記載のある水崎城をはじめとする柑

子岳城の枝城が築かれており、38次調査では水崎城に関する堀切等を確認している。58次で確認された溝も中世山城に関する遺構とみられる。天正7（1579）年に柑子岳城が高祖城主原田了栄によつて落とされ、以後志摩郡は原田氏の支配下に置かれた。

近世には糸島半島は21村を含む元岡触と26村の御床触に分けられ、元岡・桑原地区は一農村として構成される。36次、63次調査では近世の墓群を確認している。

明治22年には元岡・桑原を含む5カ村が合併して糸島郡元岡村が成立し、この元岡村が福岡市に編入されたのは昭和36（1961）年のことである。

### 3. 調査組織

（第20次調査：平成12年度～平成15年度）

調査主体：福岡市教育委員会

教育長 西憲一郎（12年度）生田征生（13～15年度）

文化財部長 柳田純孝（12～13年度）堺 徹（14年度～）

調査担当：大規模事業等担当

課長 二宮忠司

主査 松村道博（～13年度）濱石哲也（14年度～）

調査担当 菅波正人

庶務担当：文化財整備課

課長 上村忠明（～13年度）平原義行（14年度～）

管理係長 井上和光（12年度）市坪敏郎（13年度～）

管理係 岩屋淳美（12年度）中岳 圭（13・14年度）鈴木由喜（15年度）

（第42次調査・第53次調査：平成16年度～平成20年度）

調査主体：福岡市教育委員会

教育長 植木とみ子（16～18年度）山田裕嗣（19年度～）

文化財部長 山崎純男（16～18年度）矢野三津夫（19年度～）

調査担当：大規模事業等担当（16・17年度）埋蔵文化財第2課（18年度～）

課長 力武卓治（16～19年度）田中壽夫（20年度）

第42次調査担当 米倉秀紀（16～17年度大規模事業担当等主査

18年度調査第2係長）

常松幹雄（19年度～ 調査第2係長）

第53次調査担当 池田祐司

庶務担当：文化財整備課（16・17年度）文化財管理課（18年度～）

課長 榎本芳治

管理係長 市坪敏郎（16年度）栗須ひろ子（17～19年度）白川国俊（20年度）

管理係 鈴木由喜（16年度）鳥越由紀子（17～19年度）垣替美香（20年度）

（第57次調査：平成23年度～平成25年度）

調査主体：福岡市教育委員会

教育長 山田裕嗣（23年度）酒井龍彦（24・25年度）  
文化財部長 藤尾 浩（23・24年度）西島裕二（25年度）  
調査担当：福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課（～23年度）  
福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課（24年度～）  
課長 田中壽夫（23年度）宮井善朗（24・25年度）  
調査第2係長 菅波正人（～24年度）榎本義嗣（25年度）  
調査担当 長家 伸（23年度）  
大塚紀宜（24・25年度）  
佐々木蘭亭（25年度 嘴託）  
庶務担当：福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課（～23年度）  
福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課（24年度～）  
課長 濱石哲也（23年度）米倉秀紀（24・25年度）  
管理係長 和田安之  
管理係 井上幸江（23年度）川村啓子（24～25年度）

(第63次調査：平成25年度～平成26年度)  
調査主体：福岡市教育委員会  
教育長 酒井龍彦  
文化財部長 西島裕二  
調査担当：福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課  
課長 宮井善朗（25年度）常松幹雄（26年度）  
調査第2係長 榎本義嗣  
調査担当 大森真衣子  
庶務担当：埋蔵文化財審査課  
課長 米倉秀紀  
管理係長 和田安之（25年度）内山広司（26年度）  
管理係 川村啓子

(第66次調査：平成27年度)  
調査主体：福岡市教育委員会  
教育長 酒井龍彦  
文化財部長 菊田浩二  
調査担当：福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課  
課長 常松幹雄  
調査第2係長 榎本義嗣  
調査担当 中尾祐太  
庶務担当：埋蔵文化財審査課  
課長 米倉秀紀  
管理係長 大塚紀宜  
管理係 川村啓子

表2 元岡・桑原遺跡群関係発掘調査報告書一覧

書名	調査次数	集数
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報1		福岡市埋蔵文化財調査報告書第693集
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報2		福岡市埋蔵文化財調査報告書第743集
元岡・桑原遺跡群1	第2次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第722集
元岡・桑原遺跡群2	桑原石ヶ元古墳群	福岡市埋蔵文化財調査報告書第744集
元岡・桑原遺跡群3	第3・4・8・11次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集
元岡・桑原遺跡群4	第12・15・24次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第860集
元岡・桑原遺跡群5	第13・17・25・29・37次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第861集
元岡・桑原遺跡群6	第22・27・28・34次・金属古墳・石ヶ原古墳	福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集
元岡・桑原遺跡群7	第28次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第910集
元岡・桑原遺跡群8	第20次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第962集
元岡・桑原遺跡群9	第26次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第963集
元岡・桑原遺跡群10	第46次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第964集
元岡・桑原遺跡群11	第23・30・36次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1011集
元岡・桑原遺跡群12	第7次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1012集
元岡・桑原遺跡群13	第20次・2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1013集
元岡・桑原遺跡群14	第12・18次・20次・3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1063集
元岡・桑原遺跡群15	第33・40・41・44・47次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1064集
元岡・桑原遺跡群16	第18次・2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1102集
元岡・桑原遺跡群17	第31次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集
元岡・桑原遺跡群18	第20次・4・36次・2・38・45次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1105集
元岡・桑原遺跡群19	第9・18次・3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1172集
元岡・桑原遺跡群20	第43・48・49・50・51・54次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1173集
元岡・桑原遺跡群21	第42次・1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集
元岡・桑原遺跡群22	第56次・G-6号墳	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1210集
元岡・桑原遺跡群23	第18次・3、第42次・2、第59次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1246集
元岡・桑原遺跡群24	第42次・3、第61次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1275集
元岡・桑原遺跡群25	第42次・4	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1276集
元岡・桑原遺跡群26	第58次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集
元岡・桑原遺跡群27	第18次・4、第60・64次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1302集
元岡・桑原遺跡群28	第20次・5、第42次・5、第53・57・63・66次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1328集
桑原遺跡群1 第1次発掘調査報告	第1次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第432集
桑原遺跡群2 飛鶴貝塚第1次調査	桑原飛鶴貝塚第1次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第480集

## II 第20次調査の報告

### 1. 20次調査の概要

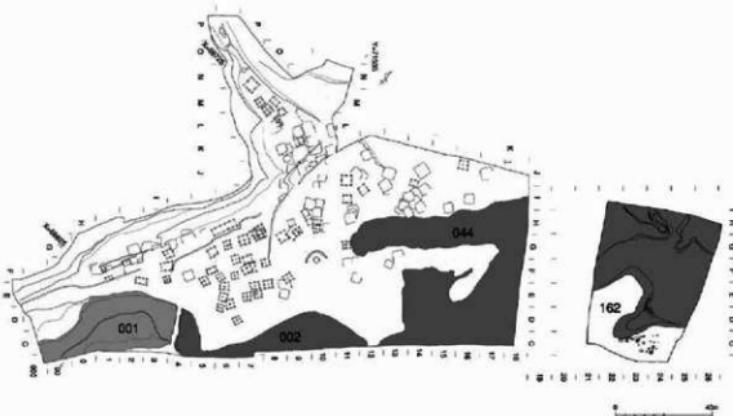
#### (1) 木製品出土遺構・遺物の概要

平成12年4月～平成15年5月にかけて調査を実施した第20次調査では、古墳時代から古代にかけての池状遺構等から多量の木製品が出土した。その中で古代の木簡や祭祀関係の木製品の一部については報告（市報962集、1013集、1063集）したが、それ以外の木製品については未報告であった。今回、それらの古墳時代と古代にかけての木製品について報告するものである。

池状遺構SX001は、谷を幅約3m、長さ約14mの築堤により堰きとめたもので、長さ約35m、幅約20m、深さ約50～80cmを測る。池状遺構の存続時期は紀年銘資料（大宝元（701）年、延暦四（785）年）から8世紀を前後する時期から約1000年間機能したものと考えられる。SX002はSX001から連なる流路で、それらから多量の木製品が出土した。既往の報告分では工具（刀子柄）、農具（鋤、杵）、紡織具（糸巻、紡錘車、機打具）、服飾具（櫛、下駄）、容器（挽物、到物、曲物桶、蓋板、栓）、食事具（杓子）、遊戯具（琴柱）、丸木弓、祭祀具（舟形、人形、男根形）等がある。

池状遺構SX044は4世紀後半から5世紀の時期に造られた池状遺構で、長さ約65m、幅約10～15mを測る。ここからは5世紀後半の建築材の貯木遺構や農工具等が出土した。池状遺構は6～7世紀頃までは利用され、8世紀には整地されたと考えられる。ここからは多数の土器類の他、子持ち勾玉や滑石製有孔円盤、白玉等の祭祀遺物も出土しており、長きに亘って、祭祀の場でもあったと考えられる。

貯木遺構SX162は調査区北東端にあり、SX002の延長部にあたり、SX162はそれに合流する狭長な窪みである。長さ約18m、幅約9mを測る。ここからは枘や枘穴がつく柱材やネズミ返し等の建築部材が多数出土した。埋土の状態からこれらは水につかっていたと考えられる。遺構の時期は6世紀後半位に位置づけられる。



第1図 第20次調査遺構配置図 (1/2,000)

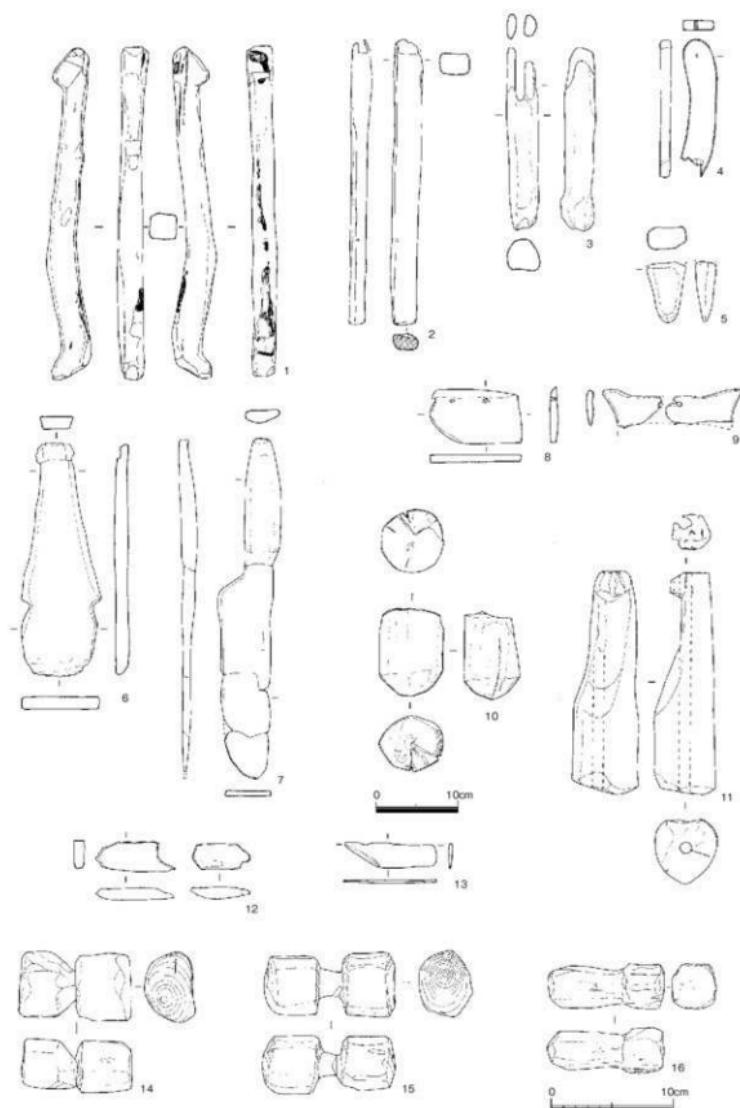
## 2. 出土木製品の記録

### (1) SX001 及び002出土木製品 (SX001は第2～7図、SX002は第8～15図)

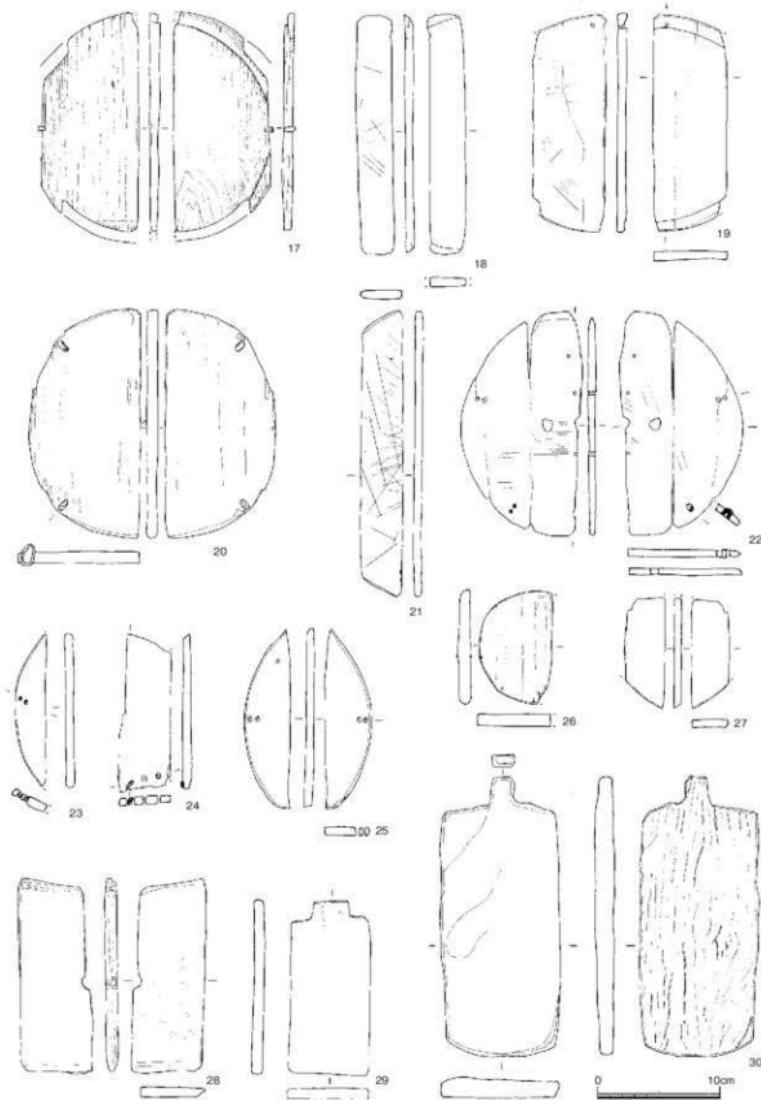
1～3は鎌柄である。5～7は歟である。9は摘み鎌である。紐孔が残る。14～16は編み台の鍤である。17～19は曲物の底板。側板を止めるための段と穿孔が施される。20～27は曲物の蓋板か。側板の孔に、固定に使用した桜皮が残る。22は中央に円形の孔。29～30は容器の蓋か。片側に突起がつく。31は黒漆を塗布した椀か。32は槽。33～35は火鑽棒である。先端は焦げている。36～38は火鑽臼である。数ヶ所の円錐形の焦げの痕跡がある。39は机の脚か。柄の先端に方形の孔があけられる。40は断面方形の棒の先端を宝珠状に削り出す。側面に5ヶ所の切り込みがある。41は切り込みをもつ板である。木簡の可能性もあるが、文字は見られない。42～44は横櫛である。歯は1 cm当たり5本程度で目が細かい。42は湾曲する峰、43は峰と小口が角張ったものである。45は鳴鏑か。一方に円形の孔があけられる。46は内側に円形の孔があり、一方に幅5 mm程の縁り込みがあることから、絞具様の木製品か。47～72は切り込みや枘孔がある棒状及び板状の木製品である。用途は不明。74～80は槌形の木製品で、大きさは約14～25 cm程で、丸木材を利用し、端部の一方を削り出し、グリップ状に加工する。もう一方は平坦もしくは丸みを持たせるよう加工する。それ以外の部分は樹皮を残したもののが大半である。既往の報告書で人形の可能性を想定しているものである。82は斎串か。83は舟形で、丸木材の両端を加工し、中央に縁り込みを入れ、舟形を表現している。84は衣笠の鏡板か。側面にヒゴをさす孔が10個あけられる。85も側面に5個の孔があけられる。90は横櫛である。持ち手はグリップ状を呈する。96、97は編み台の鍤である。98～100は糸巻の軸で、98は組み合った状態で出土した。101は曲物の底板、102～109は曲物の蓋で、105は中央に円形の孔があけられる。110は中央に円形の孔があり、容器の蓋か。111は瓶などに使用する蓋か。112、113は箱型の容器の側板、縁に小孔があけられる。116は桜の皮。117は壺鏡で方形の孔があけられる。118は櫛状の加工があり、馬用の櫛か。119は刀の鞘。120～122は丸木弓。127、128は浮子か。129は薄い羽子板状の木製品。片側に小孔があけられる。130は羽子板状の木製品で、たたき板か。134は組み合わせ式の楕円形の卓で、側面に枘孔と脚を固定する彫り込みがある。四脚と考えられる。表面には黒漆が塗布され、天板（134の上側）の中央のくぼみの部分には赤漆が塗布される。135～137は横櫛で目の細かいものである。138は題箋か。墨書きは見られない。139～153は加工痕がある棒状木製品、154～173は板状木製品で器具の一部と考えられるが、用途不明。176は丸木材で、小型の容器の材か。177は小孔とのこぎりによる切り込みがある。178～183は人形の可能性がある木製品である。丸木材の一端をグリップ状に加工したもので、樹皮を残すものもある。184～188は舟形で、184、185、187は屋形船風の形態となる。189は鳥形の木製品か。

### (2) SX044 及び162出土木製品

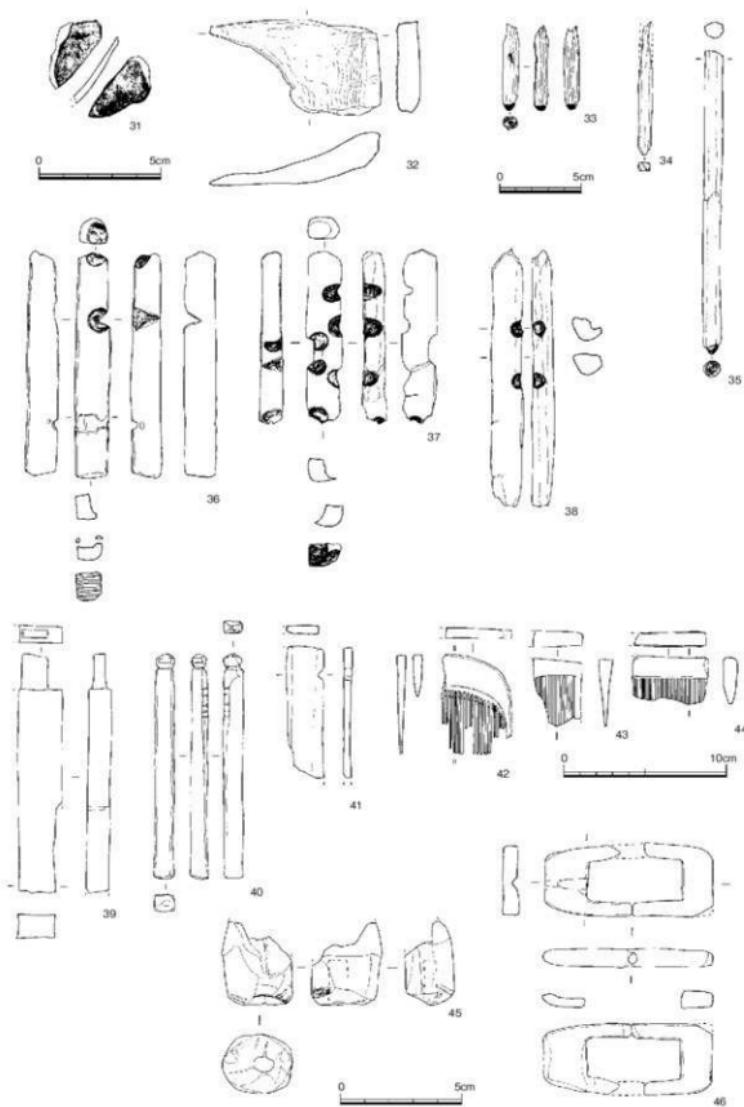
194～202は鎌で、202は三叉である。204は堅杵、203は摘み鎌である。205、206は横櫛、208、209は編み台の鍤である。212は黒漆を塗布した容器、215は盤である。213、214は全面漆塗りの堅櫛で、歯の部分は欠損している。243、244は同一個体で、櫛である。扉の受け孔、扉止めの突起がつく。247はネズミ返し。255は漆塗りの容器で、円形の赤彩が施される。259はSX044出土の股柱。260は片側に枘の加工がある。262、263は丸木のはしごである。



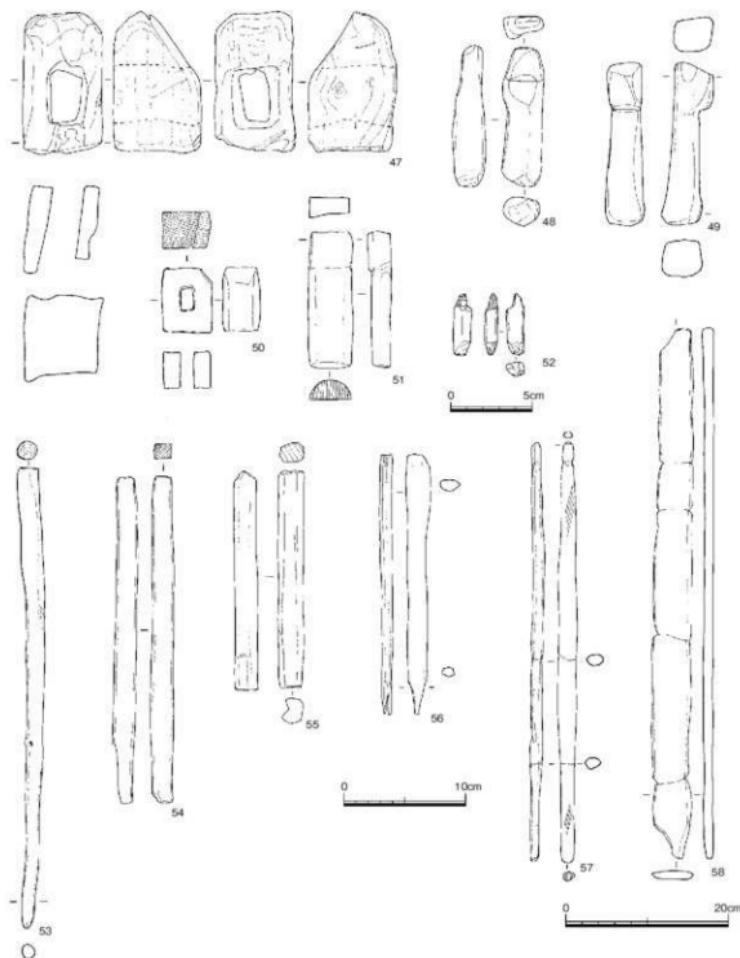
第2図 SX001出土木製品1 (1/4、1/6)



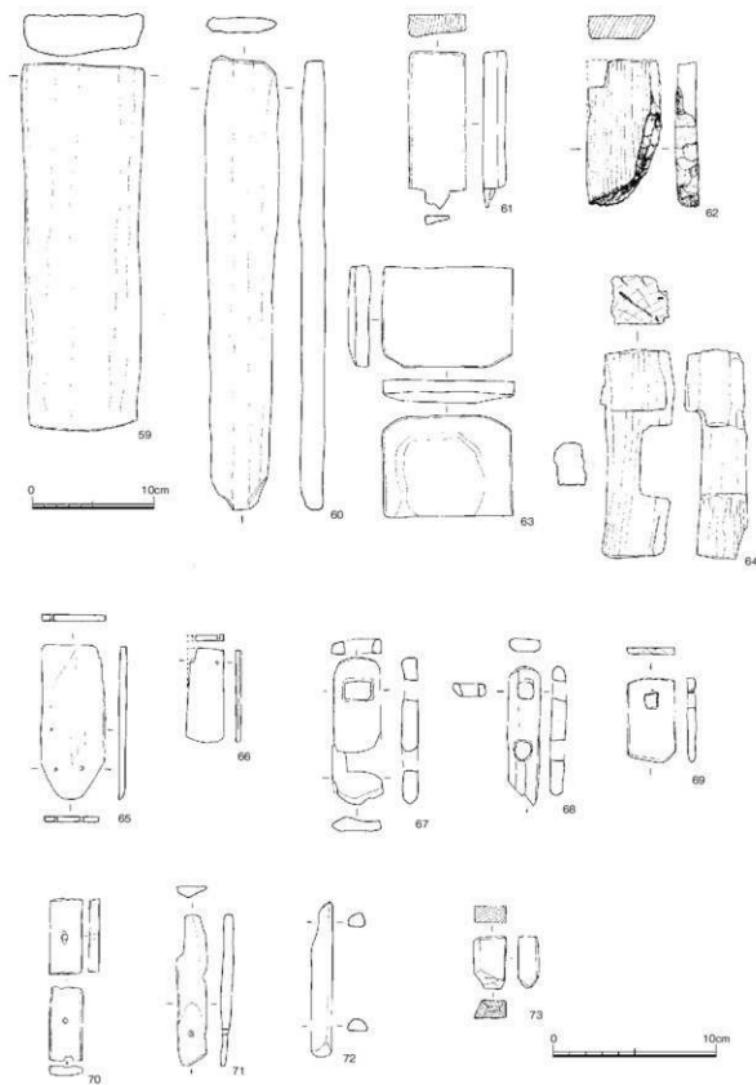
第3図 SX001出土木製品2 (1/2, 1/3)



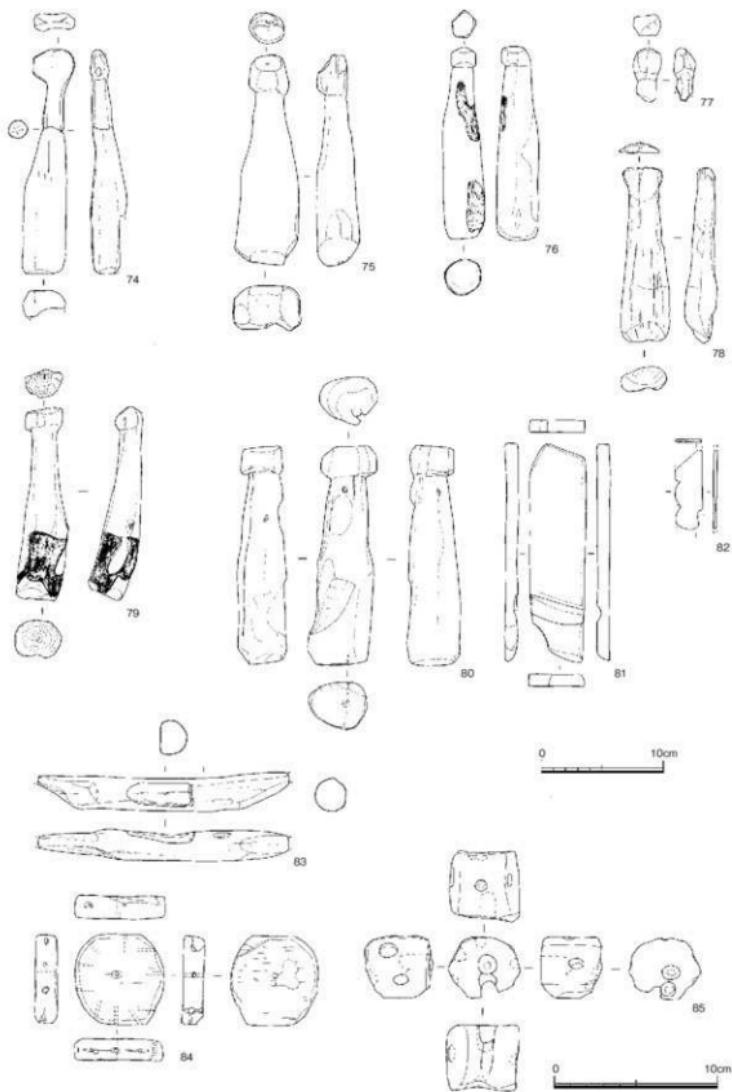
第4図 SX001 出土木製品3 (1/4)



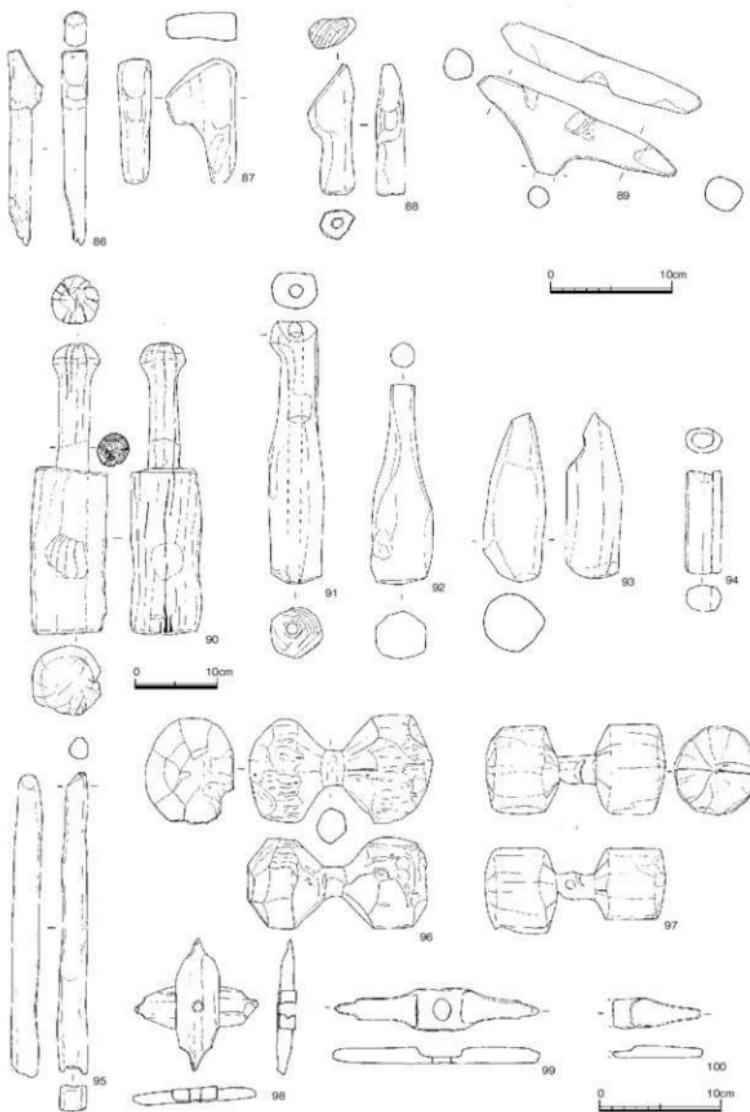
第5図 SX001出土木製品4 (1/3, 1/4, 1/6)



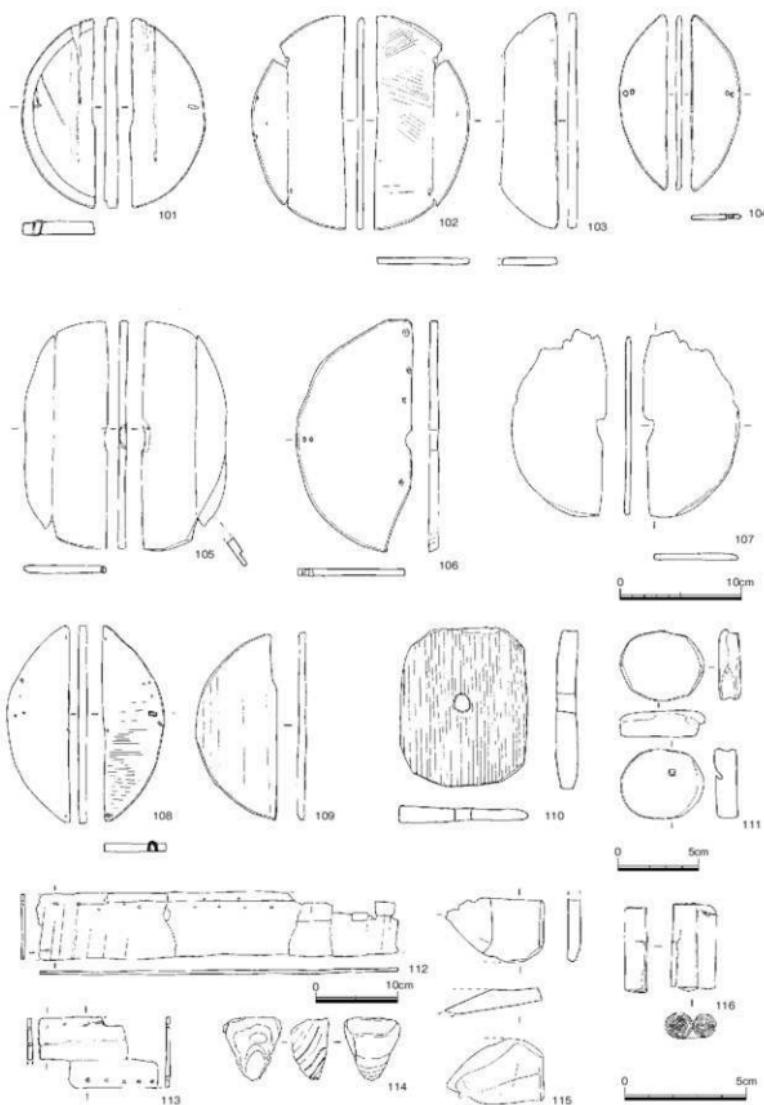
第6図 SX001出土木製品5 (1/3, 1/4)



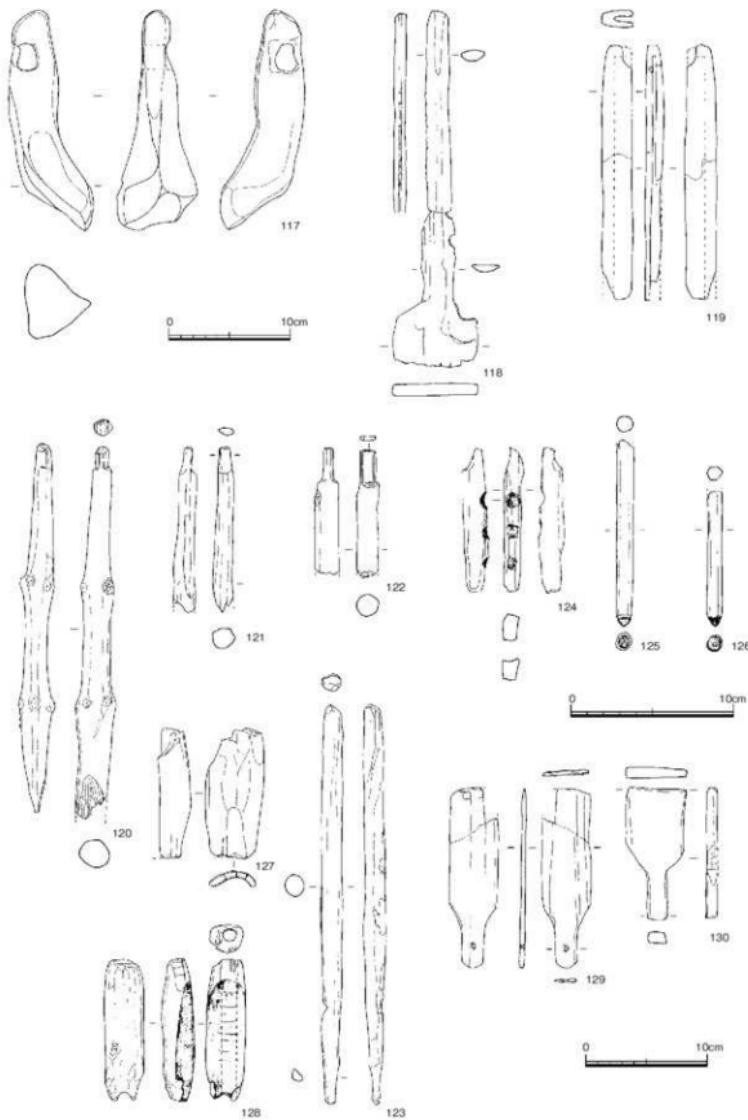
第7図 SX001出土木製品6 (1/3, 1/4)



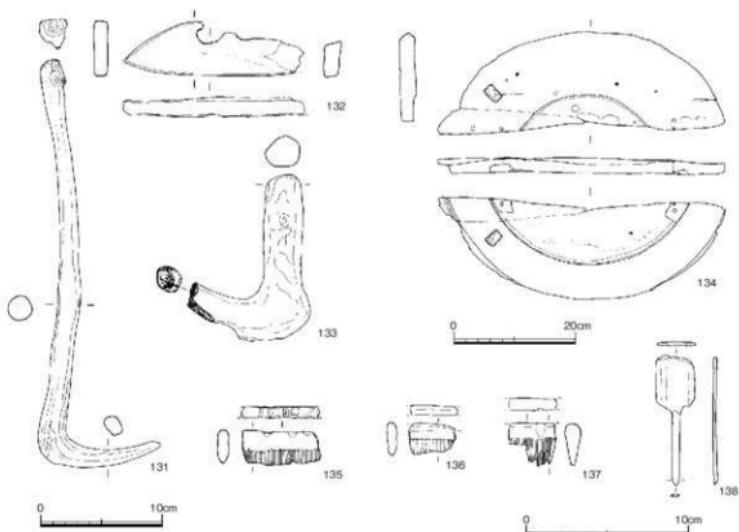
第8図 SX002出土木製品1 (1/4, 1/6)



第9図 SX002出土木製品2 (1/2、1/3、1/6)



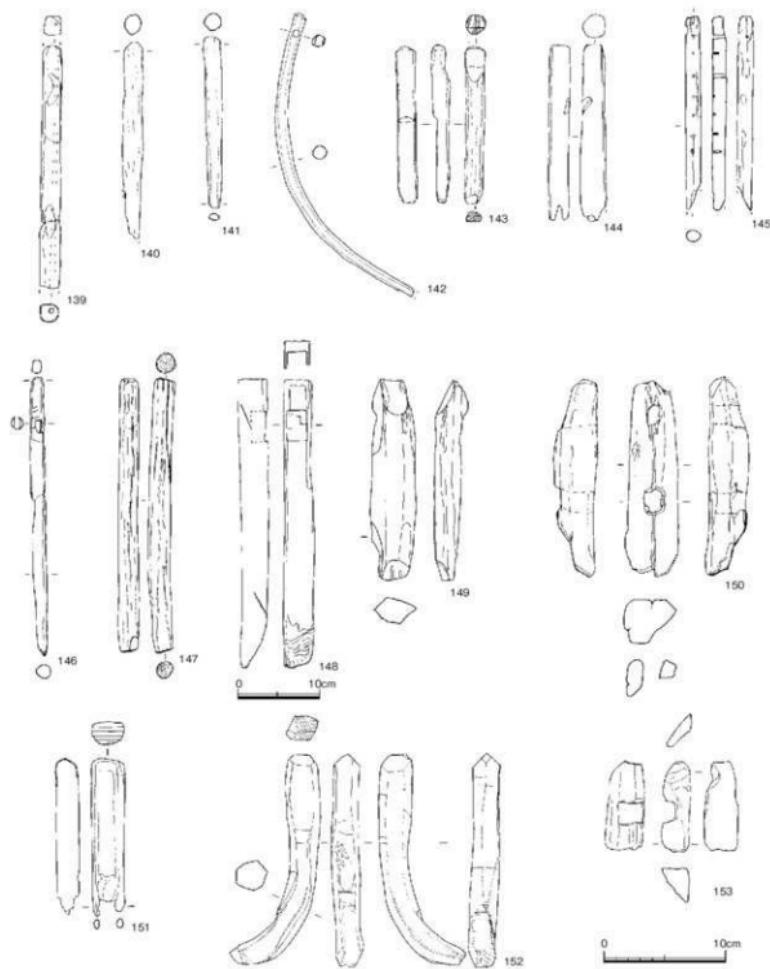
第10図 SX002出土木製品3 (1/3, 1/4)



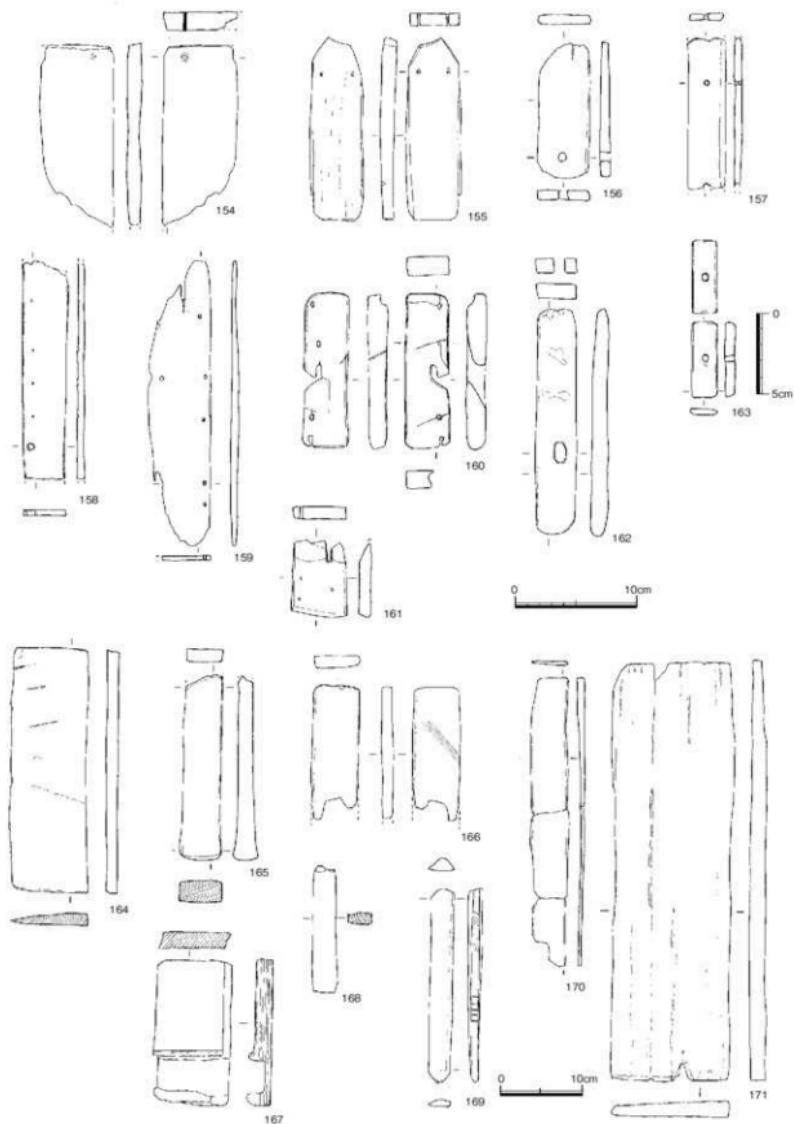
第11図 SX002出土木製品4 (1/3, 1/4, 1/8)



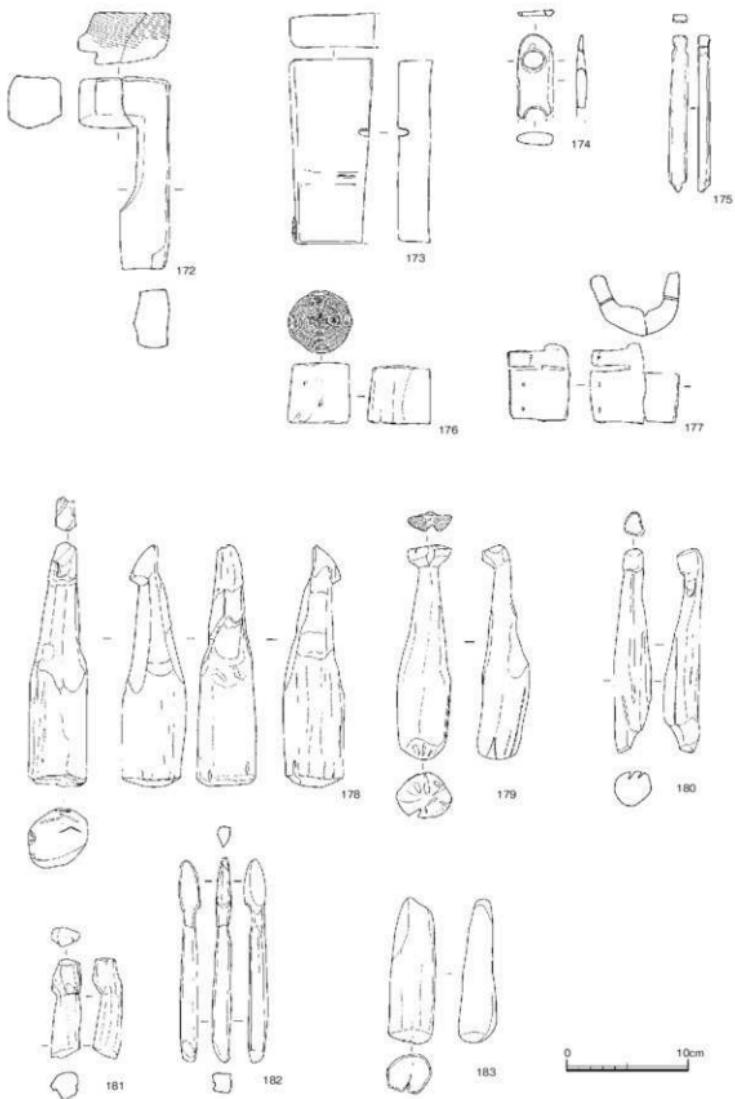
図版1 H-14区 SX044 木製品出土状況 (北から)



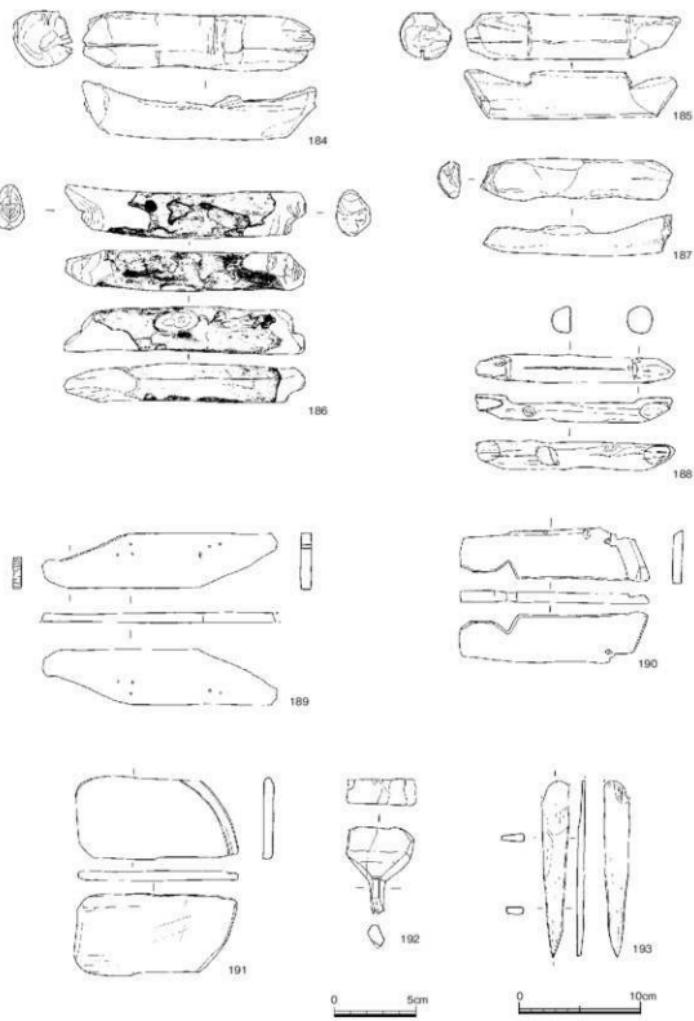
第12図 SX002出土木製品5 (1/4, 1/6)



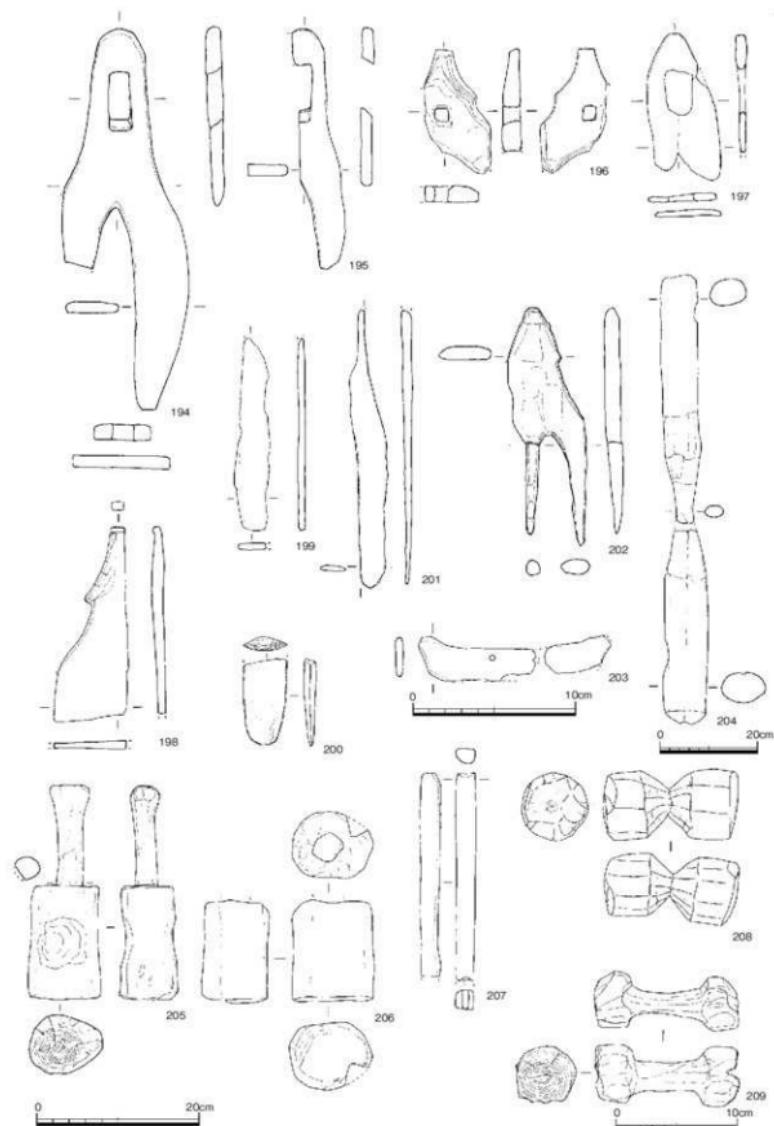
第13図 SX002出土木製品6 (1/3, 1/4, 1/6)



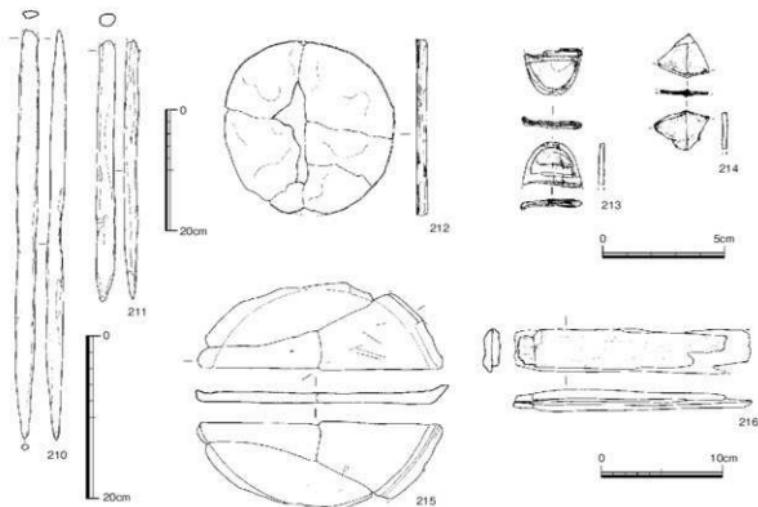
第14図 SX002出土木製品7 (1/4)



第15図 SX002出土木製品8 (1/3, 1/4)



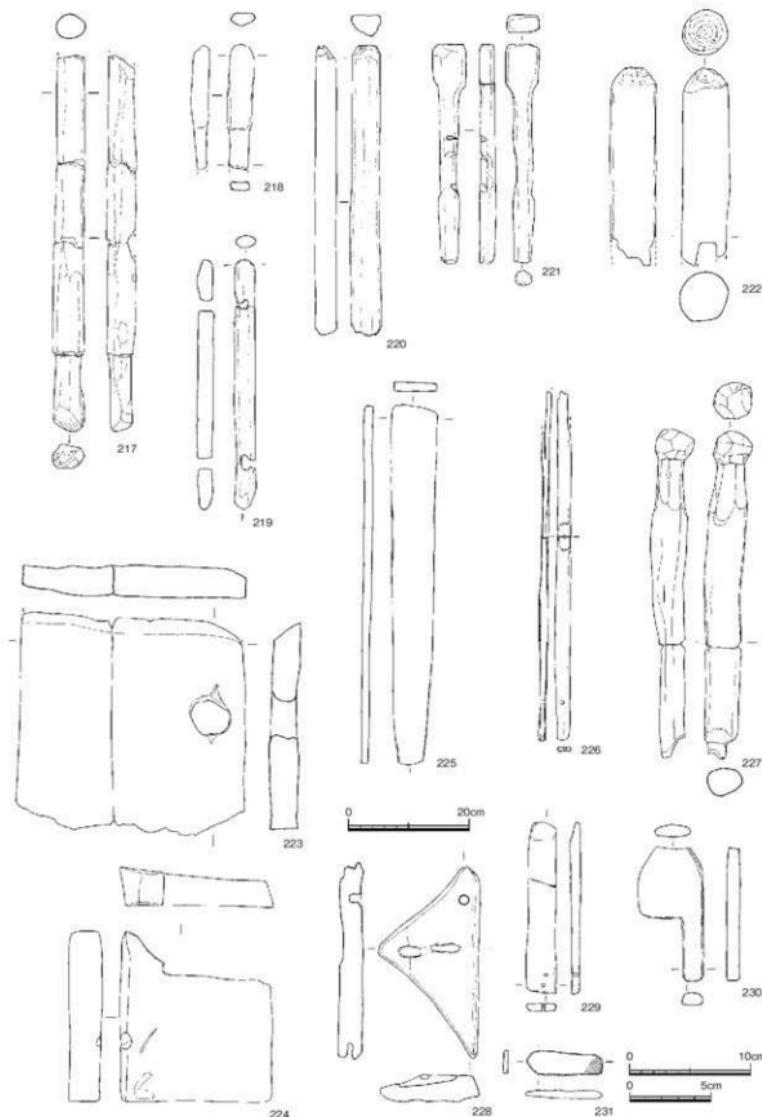
第16図 SX044出土木製品1 (1/3, 1/4, 1/6, 1/10)



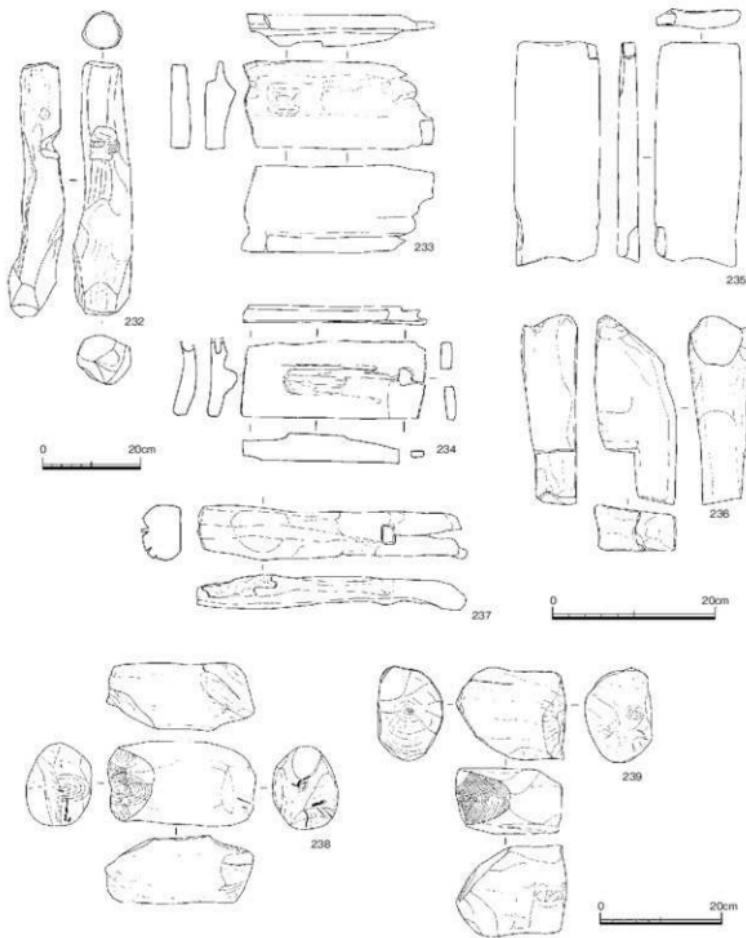
第17図 SX044出土木製品2 (1/4, 1/6, 1/8)



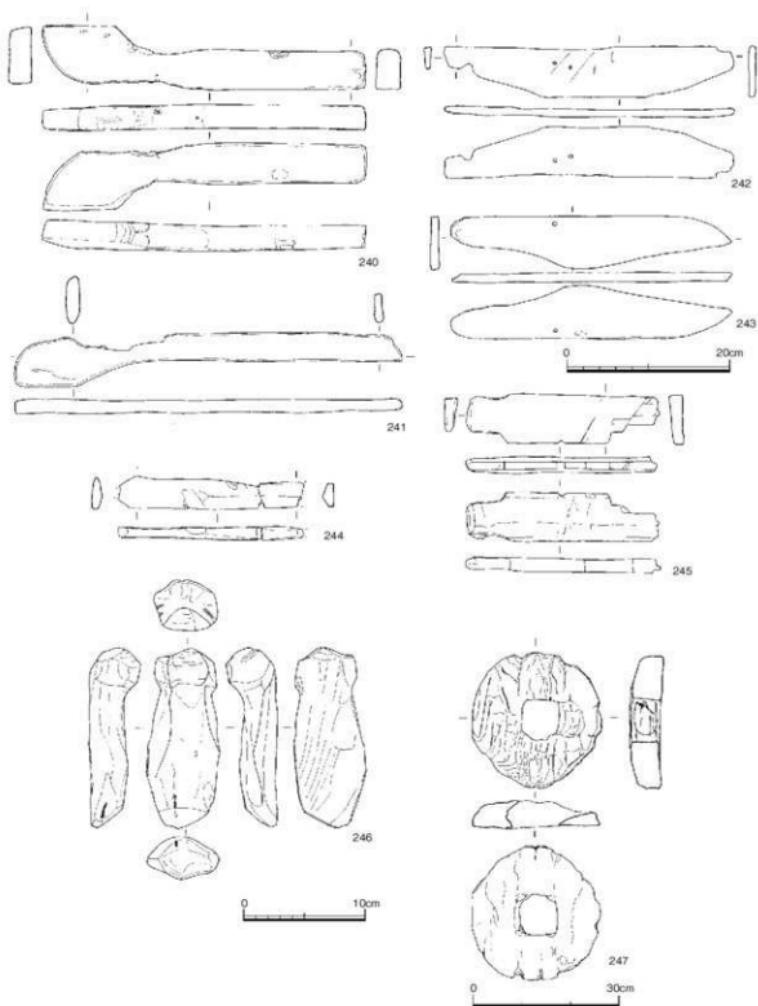
図版2 D-23区 SX162木製品出土状況（南から）



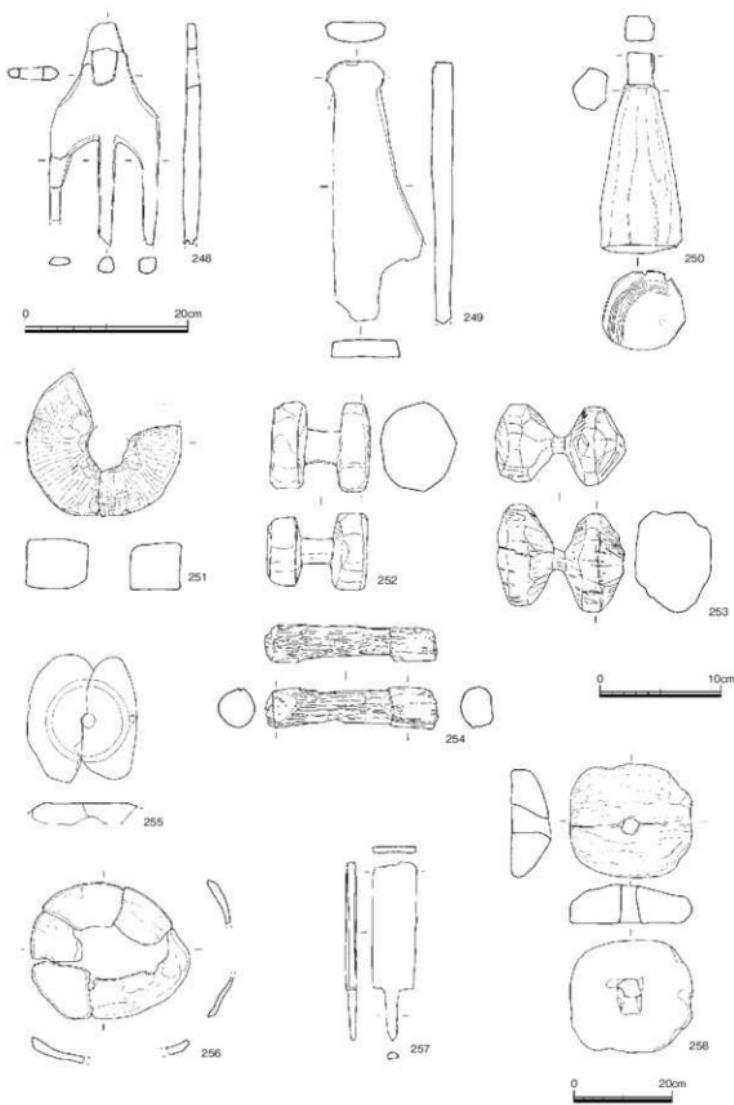
第18図 SX044出土木製品3 (1/3、1/4)



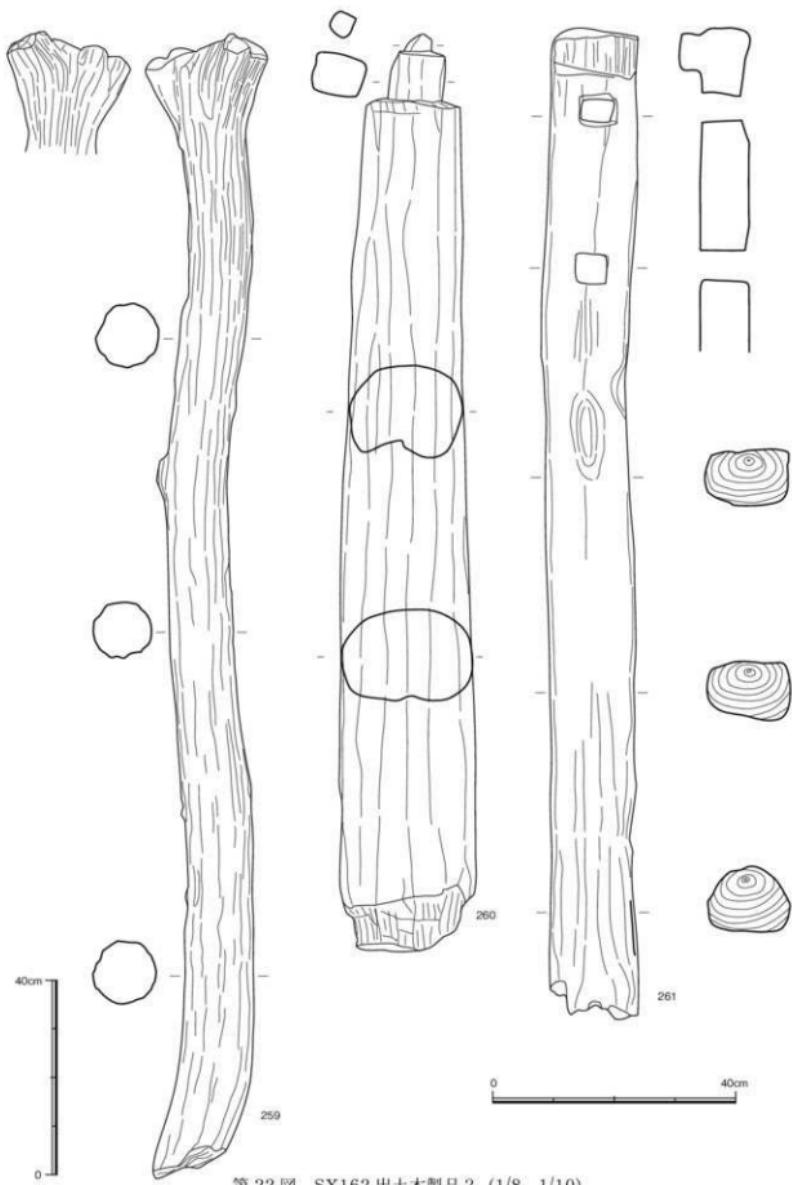
第19図 SX044出土木製品4 (1/6, 1/8, 1/10)



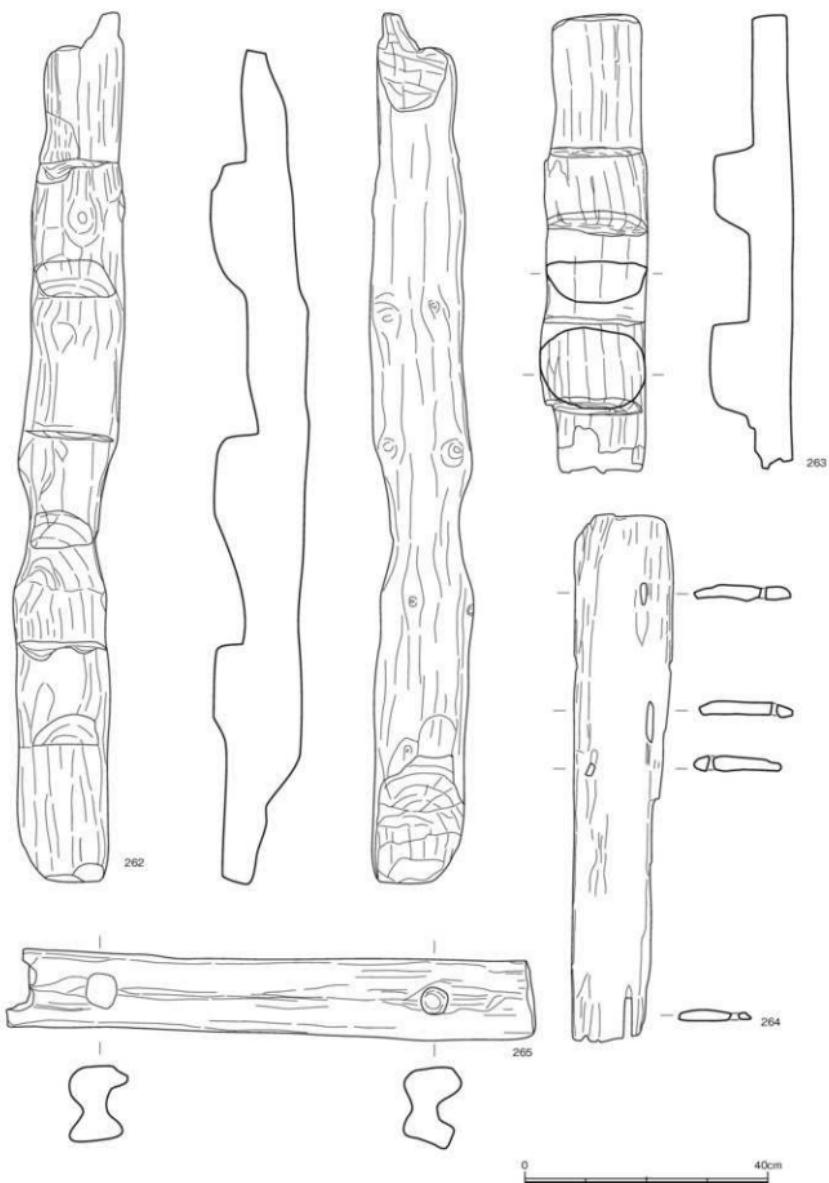
第20図 SX044出土木製品5 (1/4, 1/6, 1/10)



第21図 SX162出土木製品1 (1/4, 1/6, 1/10)



第22図 SX162出土木製品2 (1/8, 1/10)



第23図 SX162出土木製品3 (1/8)

表1 出土木製品観察表

種別 番号	図版 番号	番号	遺構	種類	器形	材質	法量	長さ/幅/厚さ	備考
2	1	1	D-3区001 晴灰砂±GL-90cm	農具	鍬柄	広葉樹 板目	27.4	/2.0/2.4	未製品
2	2	2	D-3区001 晴灰砂±GL-80cm	農具	鍬柄	スギ 板目	(23.0)	/2.0/2.2	鉄鍬
2	3	3	D-3区001 晴灰砂±GL-50cm	農具	鍬柄	広葉樹 芯持ち	(14.5)	/2.5/2.5	
2	4	4	C-0区001 晴灰砂±GL-40cm	農具	鍬の柄	スギ 板目	(10.3)	/2.4/0.75	
2	5	5	C-0区001 晴灰砂±GL-70cm	農具	鋤の歯	カシ 板目	(4.3)	/-/	杷(さらえ)
2	6	6	C-0区001 晴灰砂±GL-90cm	農具	反柄鍬	不明	(19.0)	/6.0/1.0	
2	7	E-3区001 北トレンチGL-60~70cm	農具	膝柄鍬	カシ 板目	(27.0)	/-/1.0		
2	8	E-3区001 晴灰砂±GL-80~90cm	農具?	摘み鏟?	スギ 板目	(7.0)	/-/0.5~0.6		
2	9	E-4区001 晴灰砂±GL-110cm	農具	摘み鏟 木質部	カシ	11.4	/3.2/0.6		
2	10	E-3区遺構曲 晴灰砂	工具	横耙?	広葉樹 芯持ち	10.6	/12.5/7.0		
2	11	C-3~4区 ペルト4層	工具	耙	広葉樹 芯持ち	18.3	/5.2/5.0	耙抜け	
2	12	C-3~4区 ペルト4層	紡織具	糸巻	スギ 不明	—			
2	13	C-2区001 晴灰砂±GL-100cm	工具	ヘラ	不明	(8.2)	/2.2/0.4		
2	14	D-2区001 晴灰砂±GL-80cm	編み具	鍔	広葉樹 芯持ち	9.0	/5.5/4.0		
2	15	D-3~4区 ペルト3層	編み具	鍔	広葉樹 芯持ち	10.8	/5.4/4.6		
2	16	D-1区001 晴灰砂±GL-60~80cm	編み具	鍔	広葉樹 芯持ち	9.2	/3.7/3.5		
3	1	17	D-3区001 晴灰砂±GL-100cm	容器	曲物 底板	スギ 板目	18.7	/7.8/0.8	樹皮
3	1	18	D-3区001 晴灰砂±GL-100cm	容器	曲物 底板	スギ 板目	—	/-/0.7	
3	1	19	C-0区 晴灰砂±GL-70cm	容器	曲物 底板	針葉樹 板目	17.8	(6.0)/0.7~ 0.8	
3	1	20	D-3~4区 ペルト3層	容器	曲物 盖	ヒノキ 板目	18.7	/9.2/0.9	桺の皮使用
3	1	21	SX-001 土手-301	容器	曲物 盖?	針葉樹 板目	(23.4)	/3.4/0.6~ 0.7	漆?
3	1	22	D-3区001 晴灰砂±GL-100cm	容器	曲物 盖	スギ 板目	18.4	/-/0.5~0.6	
3	23	D-0区001(東区) 晴灰砂±GL-70cm	容器	曲物 盖	スギ 板目	(12.5)	/-/0.7	桺の皮	
3	24	E-2区001 晴灰砂±GL-80~90cm	容器	曲物 盖or底	針葉樹 板目	(13.0)	/-/0.7	桺の皮	
3	25	D-3区001 晴灰砂±GL-80cm	容器	曲物 盖	スギ 板目	(14.0)	/-/0.8	穿孔2ヵ所	
3	1	26	D-4区001 晴灰砂±GL-110cm	容器	曲物 盖	ヒノキ 板目	9.2	/6.0/1.05	
3	27	E-2区001 晴灰砂±GL-80~90cm	容器	曲物 盖	スギ 板目	(9.0)	/-/0.5		
3	1	28	C-3区001 晴灰砂±GL-80cm	容器	箱	針葉樹 板目	16.2	/-/1.0	
3	1	29	C-3~4区 ペルト3層	容器	箱 盖	スギ ナナメ	14.4	/6.6/1.0	未製品
3	1	30	E-3区001 (削型?)	容器	箱盖	クスノキ 板目	23.0	/9.6/1.6	
4	31	D-3区001 晴灰砂±GL-90cm	容器	椀?	不明	—			黒漆
4	1	32	D-5区SX-001 土手No.342	容器	杓	スギ 板目	(10.0)	/-/	
4	2	33	C-2区001 晴灰砂±GL-60~80cm	発火具	火鑽棒	スギ 不明	(5.0)	/0.8/0.85	コゲ有
4	2	34	C-2区001(東区) 青灰粗砂±GL-50cm	発火具	火鑽棒	スギ 不明	(9.0)	/0.7/0.7	
4	2	35	C-0区001 晴灰砂±GL-80cm	発火具	火鑽棒	カヤ	(13.4)	/1.0/1.0	コゲ有
4	2	36	C-4区001 (削型?)	発火具	火鑽臼	スギ 板目	(10.2)	/1.5/1.6	コゲ有
4	2	37	C-3~4区 ペルト3層	発火具	火鑽臼	スギ 板目	(13.5)	/2.0/1.4	コゲ有
4	2	38	D-2区001 晴灰砂±GL-80~90cm	発火具	火鑽臼	スギ ナナメ	(15.4)	/2.0/1.21	コゲ有
4	2	39	E-3区001 晴灰砂±GL-100~110cm	雑具	机の脚?	針葉樹 板目	(14.4)	/-/1.4	or 施設器具
4	2	40	C-0区001 晴灰砂±GL-80cm	文具	算木?	針葉樹 不明	13.9	/1.1/0.75	
4	2	41	C-3区001 晴灰砂±GL-50cm	木簡?	木簡?	不明	(8.0)	/2.4/0.5	切り込み有
4	2	42	E-3区001 晴灰砂±GL-100cm	服飾具	横襷	不明	(4.0)	/-/0.6	
4	2	43	E-3区001 晴灰砂±GL-100cm	服飾具	横襷	広葉樹	(3.0)	/-/0.8	
4	2	44	D-3区001 晴灰砂±GL-100cm	服飾具	横襷	広葉樹	(4.8)	/-/0.8	

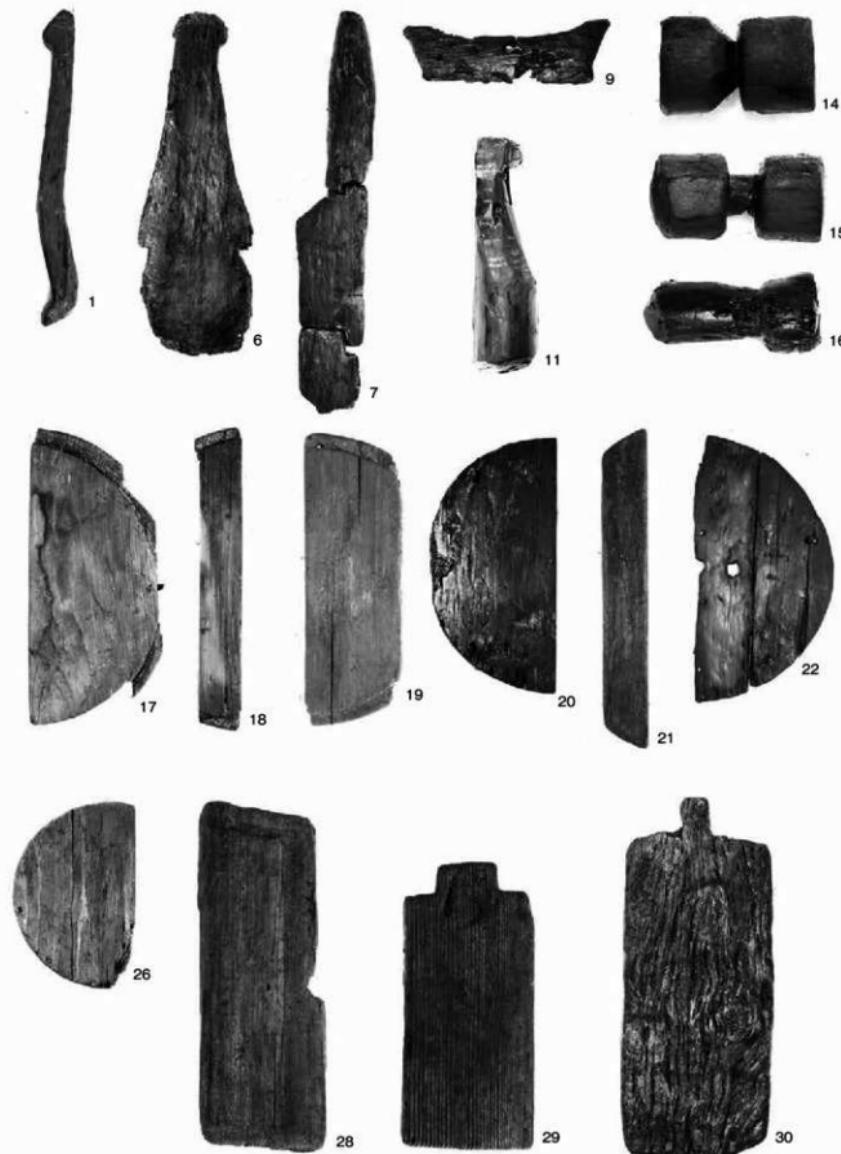
埋蔵番号	図版番号	番号	遺構	種類	器形	材質	法量 長さ/幅/厚さ	備考
4	2	45	D-2区001 晴灰砂土	武具	鳴り鐘	広葉樹 芯持ち	(3.5)/2.8/2.5	
4	2	46	D-2区001 晴灰砂土+GL-100~110cm	馬具	鞍具	ガシ 板目	(10.5)/4.4/1.0	
5		47	C-3区 晴灰砂土+GL-120cm	施設器具	棒	広葉樹 割り材	(12.0)/6.5/7.2	孔段有
5		48	C-0区001 晴灰砂土+GL-40cm	施設器具	棒	広葉樹 芯持ち	11.5/2.3/3.0	段有
5		49	C-1区001 晴灰砂土+GL-60~70cm	施設器具	棒		13.5/2.5/2.5	段有
5		50	D-3区001 晴灰砂土+GL-80cm	施設器具	棒	スギ 板目	(5.0)/4.0/3.0	孔有
5		51	C-4区001 (鉢型内)	施設器具	棒	スギ 板目	11.2/3.5/-	段有
5		52	C-3区001 晴灰砂土+GL-60~70cm	施設器具	棒	針葉樹	4.9/1.4/1.2	段有
5		53	D-0区001 晴灰砂土+GL-40~80cm	施設器具	棒	広葉樹 芯持ち	38.0/1.8/1.2	
5		54	D-0区001 晴灰砂土+GL-70~80cm	施設器具	棒	スギ 板目	(26.5)/1.2/1.3	
5		55	D-3区001 晴灰砂土+GL-100cm	施設器具	棒	スギ ナナメ	(18.0)/1.8/2.2	
5	2	56	C-3~4間 ペルト4層	施設器具	棒	広葉樹 割り材	(21.2)/1.3/0.8	段有
5		57	E-4区001 晴灰砂土+GL-10~20cm	施設器具	棒	スギ 板目	(34.0)/1.4/0.8	先端に縦り込み有
5		58	E-4区001 青灰粘土-GL-80cm	施設器具	部材	広葉樹 不明	(65.7)/5.0/1.0	段有
6		59	C-3区001 晴灰砂土+GL-40~80cm	施設器具	板	スギ 板目	30.0/10.0/3.0	
6		60	D-3区001 晴灰砂土+GL-90cm	施設器具	板	広葉樹 板目	37.3/6.0/1.8	段有
6	2	61	D-3区001 晴灰砂土+GL-80cm	施設器具	板	スギ 板目	(12.5)/4.5/1.8	段有
6		62	E-2区001 晴灰砂土+GL-不明 出土地不詳	施設器具	板	スギ ナナメ	(11.0)/6.0/1.9	一部炭化している
6		63	C-3区001 晴灰砂土+GL-40~80cm	施設器具	板	スギ 板目	8.0/10.5/1.8	
6	2	64	C-4区001 (塗壁上面)	施設器具	板	スギ 割り材	17.2/-/-	段有
6	2	65	C-0区001 晴灰砂土+GL-80cm	施設器具	板	スギ 板目	12.6/最大5.3/0.5	少円孔3有
6		66	D-3区001 晴灰砂土+GL-80cm	施設器具	板	スギ ナナメ	8.6/3.0/0.5	少円孔2有
6	2	67	D-1区001 晴灰砂土+GL-100cm	施設器具	板	広葉樹	(13.8)/4.0/1.2	方形孔有
6		68	E-2区001 晴灰砂土+GL-不明 出土地不詳	施設器具	板	広葉樹 板目	(10.6)/2.7/1.1	方形孔有
6		69	D-2区001 晴灰砂土+GL-70cm	施設器具	部材	スギ 板目	(7.0)/3.9/0.65	方形孔有
6	2	70	D-3区001 晴灰砂土+GL-90cm	施設器具	板	針葉樹 (カヤ)板目	(4.6)/2.0/0.6	少円孔1有
6	2	71	C-0区001 青灰粘土+GL-70cm	施設器具	板	不明	(7.2)/2.4/0.8	少円孔1有
6		72	C-2区001(東半) 青灰粗砂+GL-50cm	施設器具	板	スギ 板目	(12.2)/1.8/1.2	段有
6		73	D-5区SX001 土手No.367	施設器具	残材	スギ ナナメ	3.3/1.9/1.0	
7	3	74	D-3区001 晴灰砂土+GL-110cm	祭祀具	人形?	広葉樹 芯持ち	18.5/3.5/-	
7	3	75	C-3~4間 ペルト4層	祭祀具	人形?	広葉樹 芯持ち	17.3/5.0/-	
7	3	76	C-0区001 青灰粘土+GL-100cm	祭祀具	人形?	広葉樹 芯持ち	16.0/3.0/-	樹皮が残る
7		77	D-3区001 晴灰砂土+GL-60~70cm	祭祀具	人形?	広葉樹 芯持ち	(4.0)//-	
7	3	78	C-4区001 (鉢型内)	祭祀具	人形?	広葉樹 芯持ち	14.4/4.0/-	
7	3	79	E-3区001 晴灰砂土+GL-不明 出土地不詳	祭祀具	人形?	広葉樹 芯持ち	15.9/3.5/-	樹皮か
7	3	80	D-4区001(南半) 晴灰砂土+GL-60cm	祭祀具	人形?	広葉樹 芯持ち	18.0/4.4/-	
7	3	81	E-2区001 晴灰砂土+GL-80~90cm	祭祀具	形代?	不明	18.0/4.5/1.0	曲物底板軸用
7	3	82	D-3区001 晴灰砂土+GL-110cm	祭祀具	盞串	ヒノキ 板目	(6.2)/-/0.25	
7	3	83	E-3区001 晴灰砂土+GL-80cm	祭祀具	舟形	広葉樹 芯持ち	20.4/2.7/2.5	中央縦り込み
7	3	84	C-0~0区間 ペルト中	儀具	衣笠・箇板?	不明	5.4/5.4/1.3	中央と側面に小円孔
7	3	85	C-3区001 晴灰砂土+GL-40~80cm	儀具	衣笠・箇板?	スギ 板目	3.8/4.3/4.0	
8	3	86	C-6区002 晴灰砂土+GL-30cm	農具	鍬柄	広葉樹 芯持ち	(15.0)/-/2.1	
8		87	C-5区002(南半) 晴灰砂土	農具	鍬柄	不明	(10.0)/-/2.2	
8		88	C-D~E間 ペルト3層	農具	柄	カシ 割り材	(10.8)/-/2.0	

種別番号	図版番号	番号	遺構	種類	器形	材質	法量 長さ/幅/厚さ	備考
8		89	D-6区 直横面	農具	鋸曲柄	広葉樹 枝分かれ部	(18.0)/-/2.5	鍼部のみ
8	3	90	D-5~6間 ベルト1層	工具	横耙	—	35.9/9.0/88 (鍼部)	
8	3	91	C-D4区 ベルト3層	工具	耙	カシ 芯持ち	20.8/4.2/4.3	
8		92	C-D4区 ベルト3層	工具	耙	カシ 割り材	(16.5)/4.1/3.9	
8		93	C-D4区 ベルト3層	工具	耙	カシ?	(13.5)/5.0/4.7	
8		94	D-4~5区 ベルト中2層	工具	柄	広葉樹 芯持ち	(8.0)/2.9/2.1	
8		95	C-4区002(北半) 硝灰砂+GL-60cm	紡織具	糸巻 支え輪?	スギ ナナメ	(25.0)/2.0/2.1	
8	3	96	C-5区黒粘 18cm No.38	編み具	鍔	広葉樹 芯持ち	15.1/8.9/7.5	
8	3	97	D-5区 硝灰砂土	編み具	鍔	広葉樹 芯持ち	14.7/7.5/-	
8	3	98	C-5区002(東半) 硝灰砂土	紡織具	糸巻	スギ 板目	10.8/10.1/1.5	
8	3	99	D-4~5間 ベルト3層	紡織具	糸巻	スギ 板目	16.4/-/1.0	
8		100	C-5区002(南東半) 硝灰砂+GL-70cm	紡織具	糸巻	スギ 板目	(7.2)/-/0.8	
9		101	D-4区002(北半) 硝灰砂+GL-70cm	容器	曲物 直板	ヒノキ 板目	15.5/6.0/1.1	縦に彫り込み有。桜の皮残存
9		102	C-4区002(南半) 硝灰砂+GL-70cm	容器	曲物 盖か	スギ 板目	16.5/-/0.5	
9		103	D-4区002(北区) 硝灰砂+GL-30cm	容器	曲物 盖か	スギ 板目	17.8/-/0.5~0.7	
9		104	C-6区002 硝灰砂+GL-40cm	容器	曲物 盖か	スギ 板目	14.3/4.0/0.4~0.5	小円孔2有
9		105	D-6区0021	容器	曲物 盖か	ヒノキ 板目	18.4/-/0.7	中央に円孔。小円孔1有
9		106	C-5区002(南半) 硝灰砂	容器	曲物 盖か	スギ 板目	19.0/9.4/0.6	中央に円孔、小円孔6有
9		107	D-5区 硝灰砂	容器	曲物 盖か	スギ ナナメ	-/8.0/0.5	中央に円孔
9		108	D-4~5間 ベルト3層	容器	曲物 盖か	ヒノキ? 板目	19.2/5.2/0.6~0.7	桜の皮残存
9		109	D-4区 ベルト3層	容器	曲物 盖か	スギ 板目	15.3/-/0.6	
9		110	C-6区002(東半) 硝鉢粘 GL-30cm	容器	蓋	スギ ナナメ	9.8/7.9/1.3	
9		111	C-6区002(東半) 硝鉢粘 GL-30cm	容器	蓋	スギ ナナメ	5.0/4.2/1.4	洩き物
9	3	112	D-4区002(北半) 硝灰砂+GL-40cm	容器	箱側板	不明 板目	-/8.2/0.4	
9	3	113	C-4区002(北半) 硝灰砂+GL-80cm	容器	箱側板	スギ —	-/5.8/0.5	
9		114	C-5区002(南東半) 硝灰砂+GL-50cm	容器	脚か	スギ —	(4.5)/-/—	
9		115	D-4区002(北半) 硝灰砂+GL-70cm	容器	皿	不明	(8.0)/-/—	鋼丸方形
9		116	C-6区002 硝灰砂+GL-30cm	容器	板の皮	—	4.2/-/-	
10	4	117	D-4区002(南半) 青灰砂+GL-60cm	馬具	牽蹬	広葉樹	(17.5)/-/—	方形孔有
10	4	118	D-4区002(南半) 硝灰砂+GL-60cm	馬具	馬嚙か	カシ 板目	(29.0)/7.0/-	斬衝付
10	4	119	C-6区 硝灰砂土	武具	鞆	スギ 板目	(20.5)/2.5/1.4	
10	4	120	C-5区002(南半) 硝灰砂+GL-50cm	武具	弓	サガキ? 芯持ち	(30.0)3.2/2.4	
10	4	121	D-4区002(南半) 硝灰砂+GL-60cm	武具	弓	カヤ? 芯持ち	(13.0)/1.6/1.7	
10	4	122	D-4区002(南半) 硝灰砂+GL-60cm	武具	弓	広葉樹 芯持ち	(10.0)/1.8/1.7	再利用痕有
10	4	123	C-7区002 硝灰砂+GL-30~40cm	漁撈具	箱(ヤス)	クヌギ 板目	(32.9)1.6/1.5	
10		124	D-6区002 硝灰砂	発火具	火薬臼	スギ 板目	(11.2)1.0/1.6	コゲ3有
10		125	C-5区002(南東半) 硝灰砂土	発火具	火薬棒	カヤ	-/0.9/1.1	コゲあり
10		126	C-6区002(東半) 硝鉢粘 GL-10~20cm	発火具	火薬棒	カヤ	-/0.8/0.9	コゲあり
10		127	D-5区002 硝灰砂土	漁撈具	浮子	不明	(11.0)/-/—	
10	4	128	D-5区 硝灰砂土	漁撈具	浮子	広葉樹 芯持ち	8.7/2.1/1.8	コゲあり
10		129	C-5区002(南半) 硝灰砂土	施設器具	板	ヒノキ(鉛) 板目	14.8/3.8/0.3	羽子板状。小円孔1有
10	4	130	C-4区002(東半) 硝灰砂+GL-80cm	工具	叩き板?	スギ 板目	-/5.0/1.0	
11		131	D-4区002(東半) 硝灰砂+GL-60cm	雜具	自在鉗	スギ 芯持ち	43/-/-	
11		132	C-4区002(北半) 硝灰砂+GL-40cm	雜具	自在鉗 木板	針葉樹 板目	(14.5)/-/0.8	

掛図 番号	図版 番号	番号	造構	種類	器形	材質	法量	長さ/幅/厚さ	備考
11		133	C-4区002(北半) GL-80cm	雑具	自在脚 芯持ち	庄葉樹 板目	(12.5)/-/0.8		コゲ有 棟分を利用
11	4	134	D-4区002(北半) 硝鉄粘	雑具	梢円卓	タスノキ? 板目	(46.0)/-/2.0		全体に黒漆、中央は赤漆
11	4	135	D-5区 硝灰砂土	服飾具	横綱(挽物)	不明	(7.0)/-/0.7		
11		136	D-5区002 硝灰砂土	服飾具	横綱(挽物)	不明	(4.0)/-/0.6		
11		137	C-6区002(東半) 硝鉄粘GL-10cm	服飾具	横綱(挽物)	クスノキ	(3.8)/-/0.7		
11		138	C-6区002 硝灰砂土GL-30cm	木簡?	題箋	不明	8.0/2.3/0.2		
12		139	D-4区002(南半) 硝灰砂土GL-70cm	施設器具	棒	芯持ち	(20.0)/-/1.6		芯抜け
12		140	D-4区002 ペル-1型	施設器具	棒	不明	(16.0)/-/1.6		
12		141	C-4区002(南半) 硝灰砂土GL-60cm	施設器具	棒	庄葉樹 芯持ち	(14.0)/1.4/-		
12		142	C-4区002(北半) GL-80cm	施設器具	棒	スギ 芯持ち	-/-1.0		小孔有
12		143	C-4区002(北半) GL-80cm	施設器具	棒	スギ 板目	(12.5)/-/1.6		团有
12		144	C-6区 硝灰砂土	施設器具	棒	スギ 板目	(14.5)/-/1.6		方形孔有
12		145	D-5区 硝鉄粘	施設器具	棒	不明	(15.6)/1.2/1.05		小円孔有、
12		146	D-4区001 硝灰砂土内	施設器具	棒	- 芯持ち	(22.2)/-/1.0		小方形孔1有
12		147	D-4区002(南半) 硝灰砂土GL-60cm	施設器具	棒	スギ 芯持ち	22.0/-/2.0		
12		148	D-4区002(南半) 硝灰砂土GL-70cm	施設器具	棒	スギ 板目	(34.5)/-/2.0		方形孔有、端部炭化
12		149	C-5区 ペル-1型	施設器具	棒	庄葉樹 芯持ち	16.0/3.5/2.2		端面加工、舟形か
12		150	C-6区002 硝灰砂土GL-30cm	施設器具	棒	庄葉樹 芯持ち	(15.4)/4.0/3.2		方形孔2有、炭化
12		151	C-4区002(南半) 硝灰砂土GL-60cm	施設器具	棒	スギ 板目	(12.0)/3.5/2.0		
12		152	D-5区002 硝灰砂土	施設器具	棒	不明	17.5/-/2.0		段有
12		153	D-4区002(北区) 硝灰砂土GL-40cm	施設器具	板	不明 割り材	(7.0)/-/		
13		154	C-5区002(北半) 硝灰砂土	施設器具	板	スギ 板目	(15.0)/6.2/1.4		釘付
13		155	C-5区 硝灰砂土	施設器具	板	ヒノキ 板目	15.0/4.0/1.0		小円孔2有
13		156	C-6区 硝灰砂土	施設器具	板	不明	(11.0)/-/0.8		
13		157	C-4区002(北半) GL-80cm	施設器具	板	スギ ナナメ取り	(12.4)/3.0/0.6		小円孔2有
13		158	D-4区002(北半) 硝灰砂土GL-50cm	施設器具	板	スギ 板目	(17.5)/3.5/0.6		貫通していない孔4
13		159	D-4区-5間 ペル-1型	施設器具	板	スギ 板目	(23.4)/3.5/0.6		小円孔6有
13		160	C-6区002 硝灰砂土GL-30cm	施設器具	板	スギ 板目	(12.8)/3.7/1.5		小円孔4有
13		161	C-6区002 硝灰砂土GL-30cm	施設器具	板	ヒノキ 板目	(6.3)/4.5/1.0		小円孔3有
13		162	C-6区002 硝灰砂土GL-30cm	施設器具	板	スギ 板目	(18.5)/3.3/1.3		横円形孔1有
13		163	D-4区002(南半) 硝灰砂土GL-70cm	施設器具	板	-	(4.4)/1.6/0.6		小円孔1有
13		164	D-4区002(南半) 硝灰砂土GL-60cm	施設器具	板	スギ 板目	20/7.4/0.9~1.0		
13		165	D-4区002(南半) 硝灰砂土GL-60cm	施設器具	板	スギ 板目	(15.0)/3.5/1.2		
13		166	D-12区トレーンチ41 (下削青灰砂)	施設器具	板	スギ 板目	(11.0)/3.8/1.1		
13		167	D-4区 ペル-1型	施設器具	板	スギ ナナメ取り	(12.2)/6.3/1.3		縦り込み有
13		168	D-12区トレーンチ41 (下削青灰砂)	施設器具	板	-	(10.2)/1.8/1.0		
13		169	D-5-6間001 ペル-1型	施設器具	板	ヒノキ 板目	(16.0)/2.0/0.8		側面に斜目有
13		170	C-5区002(南東半) 硝灰砂土GL-50cm	施設器具	板	庄葉樹 板目	(35.0)/4.5/1.0		
13		171	C-4区002(東半) 硝灰砂土	施設器具	板	スギ 板目	51.2/15.0/2.0		
14		172	D-4区002(南半) 硝灰砂土GL-60cm	施設器具	板	スギ 板目	(15.0)/-/		方形孔有
14		173	D-5区002 硝灰砂土	施設器具	残材	スギ 板目	15.0/7.0/2.5		
14		174	C-5区 硝灰砂土	施設器具	棒	不明	(6.5)/4.2/1.6		円孔2有
14		175	D-5区002(南半) 硝灰砂土	施設器具	棒	スギ 板目	(12.0)/1.2/0.8		切り込み有
14		176	D-5区002 硝灰砂土	加工材	未製品	芯持ち	5.0/5.1/5.1		皮が残る

埋蔵番号	図版番号	番号	遺構	種類	器形	材質	法量 長さ/幅/厚さ	備考
14		177	C-4区002(北半) 硝灰砂+GL-80cm	不明	不明	不明	(6.0)/7.2/1.4	小円孔3有
14		178	C-5区002(東半) 硝灰砂土	祭祀具?	人形?	針葉樹 芯持ち	20.1/5.0/-	
14		179	C-D-4-区 ペルル3層	祭祀具?	人形?	不明	17.5/4.0/-	
14		180	D-4区002(北半) 硝灰砂+GL-60cm	祭祀具?	人形?	不明	16.8/(3.0)/-	木の皮残る
14		181	C-4区002(北半) 硝灰砂+GL-70cm	祭祀具?	人形?	広葉樹 芯持ち	(8.0)/-/	
14		182	C-6区002 硝灰砂+GL-30cm	祭祀具?	人形?	クスノキ 板目	16.8/1.5/1.6	炭化?
14		183	C-D-4-区 ペルル3層	祭祀具?	人形?	広葉樹 芯持ち	(12.4)/-/	
15	4	184	D-4区002(南半) 硝灰砂+GL-60cm	祭祀具	舟形	広葉樹 芯持ち	19.0/4.5/-	木の皮残る
15	4	185	D-4区002(南半) 硝灰砂+GL-60cm	祭祀具	舟形	広葉樹 芯持ち	17.7/3.8/-	木の皮残る
15	4	186	D-4区 硝灰砂+GL-60cm	祭祀具	舟代 舟	広葉樹 芯持ち	19.7/3.0/3.8	皮が残る
15	4	187	D-4区002(南半) 硝灰砂+GL-60cm	祭祀具	舟形	広葉樹 芯持ち	15.7/3.4/-	木の皮残る
15	4	188	C-4区002(北半) 硝灰砂+GL-70cm	祭祀具	舟形	広葉樹 芯持ち	(16.3)/2.2/115	模造舟
15	4	189	C-6区002(東半) 硝灰砂+GL-30cm	祭祀具	鳥形	スギ 板目	19.0/4.6/0.8	小円孔5有
15		190	C-4区002(北半) 硝灰砂+GL-70cm	祭祀具	形代? 人或鳥或馬	スギ 板目	(15.4)/-/0.8	曲物の転用
15		191	D-4~5層 ペルル3層	容器	曲物底板	スギ 板目	13.4/6.7/0.8	
15		192	C-5区 硝灰砂土	不明	不明	広葉樹 芯持ち	(6.8)/2.9/-	切り込み有
15	4	193	C-4区002(南半) 硝灰砂+GL-60cm	祭祀具	蓋串	針葉樹 板目	(14.0)2/0.0/0.6	
16	5	194	G-17区044 (赤土)	農具	直柄二又鋤	カシ 板目	(46.9)/-/2.0	方形柄孔
16	5	195	G-17区044 黒土色	農具	直柄二又鋤	カシ 板目	(29.7)/-/1.5	方形柄孔
16		196	H-15区044 GL-80cm 黒色土	農具	鍬	カシ 板目	(15.0)/-/2.0	方形柄孔, 2 or 3叉 鍬
16		197	H-15区044 GL-80cm 黒色土	農具	鍬	カシ 板目	(17.0)/-/1.5	方形柄孔
16	5	198	H-17区044 硝灰砂GL-70cm	農具	反柄鍬	カシ 板目	(23.0)/-/1.5	
16		199	H-17区004 GL-80cm 硝褐粘	農具	曲柄又鋤	カシ 板目	(23.0)/-/1.0	
16		200	H-15区044 GL-80cm 黒色土	農具	又鍬(苗)	カシ 板目	(10.0)/-/1.0	
16		201	H-14区044(部材) No.40	農具	曲柄二又鋤	カシ 板目	(33.0)/-/1.0	
16	5	202	H-16区044 GL-80cm 黒色土	農具	反り柄 三叉鋤	カシ 板目	(27.5)/-/2.0	
16	5	203	H-15区044 GL-70cm	農具	镐み鍬	広葉樹 木明	11.8/2.0/0.6	
16	5	204	044	農具	鋤柄	クスゴ 芯持ち	90.0/7.5/-	
16	5	205	F-23区044 (黒色土)	農具	横柄	広葉樹 芯持ち	26.7/8.9/-	
16	5	206	H-14区044 No.38	農具	鍬	広葉樹 芯持ち	12.5/10.0/0.7.5	柄が欠損
16		207	F-23区044 (東岸)	筋織具	糸巻き輪	スギ 板目	(12.0)/1.5/-	孔有
16	5	208	H-16区044 GL-80cm	編み具	鍼	広葉樹 芯持ち	11.1/5.6/5.4	
16	5	209	H-13区044 GL-80cm H=6.35m	編み具	鍼	スギ 芯持ち	11.8/4.9/4.7	
17		210	044 部材71	漁撈具	鉛	クスノキ 板目	(51.0)/2.5/-	
17		211	H-16区044 GL-60cm	漁撈具	鉛	広葉樹 芯持ち	(20.0)/1.2/-	
17		212	H-15区044 GL-80cm	容器	蓋	広葉樹?	14.0/13.0/0.8	黒漆
17	5	213	H-13区044 GL-110cm	服飾具	豊螺	不明	(1.5)/(2.3)/-	黒漆
17	5	214	H-15区044 GL-80cm 黒色土	服飾具	豊螺	不明	(1.6)/(2.3)/-	黒漆
17		215	H-14区044 No.36	容器	皿	不明	(20.0)/(7.0)/1.0	挽き物?
17		216	G-16 044 (GL-40cm) H-5.6m	武器	鞘	針葉樹 板目	(19.0)/3.6/-	
18		217	H-15区044 GL-80cm 黒色土	施設器具	棒	広葉樹 芯持ち	(30.0)/-/	段有
18		218	H-15区044 GL-80cm	施設器具	棒	不明	(10.2)/-/	
18		219	H-16区044 GL-60cm	施設器具	棒	スギ 板目	(20.6)/1.7/1.0	円孔2有
18		220	F-22 044 (黒色土)	施設器具	棒	スギ 板目	(24.0)2.5/1.7	

種別番号	図版番号	番号	遺構	種類	器形	材質	法量 長さ/幅/厚さ	備考
18		221	G-13区044 GL-110cm	施設器具	棒	スギ 板目	(17.9)/-/1.4	
18		222	F-23区044 (東岸)	施設器具	棒	広葉樹 芯持ち	(16.0)/3.8/3.7	孔有
18		223	H-16区044 GL-80cm	建築部材	板	スギ 板目	(17.0)/18.4/-	孔有、壁?
18		224	044部材61	施設器具	板	針葉樹 ナラ木	(13.5)/12.5/-	
18		225	H-15区044 GL-80cm	施設器具	板	スギ 板目	58.0/7.5/1.8	
18		226	H-16区044 GL-60cm	施設器具	板	スギ 板目	(28.5)/1.0/0.5	孔2有
18		227	H-16区044 GL-60cm	施設器具	棒	広葉樹 芯持ち	(26.0)/-/	切り込み有
18	5	228	G-17区044 黒色土	施設器具	板	スギ 板目	16.7/-/-	孔2有
18		229	H-16区044 GL-60cm	施設器具	板	スギ 板目	14.1/2.5/0.7~0.8	小円孔2有
18		230	H-23区044 黒色土	施設器具	板	広葉樹 板目	(11.0)/-/1.0	方形孔有
18		231	H-15区044 GL-80cm 黒色土	不明	不明	スギ 板目	(4.5)/-/	
19		232	044 ④	建築材	サス?	広葉樹 芯持ち	52.3/-/-	完型
19	5	233	H-14区044 部材No.9	建築材	柵	広葉樹 割り材	(36.0)/-/	233と234は同一個体
19	5	234	H-14区044 部材No.9	建築材	柵	広葉樹 割り材	(36.0)/-/	孔有、屢々の突起
19		235	H-14区044 部材No.9	建築材	壁	不明 板目	46.2/17.4/2.7~ 4.5	完型
19		236	H-15区044 GL-80cm 黒色土	建築材	部材	広葉樹 板目	23.5/10.0/-	切り込み有
19		237	G-15区044 GL-80cm	建築材	横架材	広葉樹 芯持ち	65.0/-/-	方形孔有
19		238	H-14区044 部材No.8	加工材	-	広葉樹 芯持ち	24.3/14.0/11.1	
19		239	H-16区044 GL-80cm	加工材	-	広葉樹 芯持ち	18.0/11.1/-	
20	5	240	H-17区044 GL-80cm 黒色土	祭祀具	形代? (扇)	スギ 板目	39.8/-/-	
20	5	241	H-14区044 GL-110cm 黒色土	祭祀具	形代?	不明	-/-/-	
20	5	242	H-23区044 黒色土	祭祀具	形代? (扇)	スギ 板目	35.6/6.5/1.0	孔2ヶ組み合わせ 孔1ヶ所
20	5	243	H-23区044 黒色土	祭祀具	形代? (扇)	スギ 板目	34.5/6.5/1.0	孔2ヶ組み合わせ 孔2ヶ所
20		244	H-15区044 GL-80cm 黒色土	祭祀具	形代?	不明	(22.0)/-/	
20		245	F-22 044 (黒色土)	祭祀具	形代?	スギ 板目	(23.0)/-/	
20		246	H-14区044 部材No.11	建築材	不明	広葉樹 芯持ち	14.7/5.9/-	切り込み有
20	5	247	H-12区044 (セクションベルト中)	建築材	ネズミ道し	広葉樹 板目	27.6/26.5/- 孔8.1×7/6	方形孔有
21		248	162 No.20	農具	直柄三叉鋤	カシ 板目	(26.0)/13.5/2.0	
21		249	162 No.38	農具	反柄鋤	カシ 板目	(30.5)/-/1.7	ナスピ型
21	5	250	162 No.2	工具	土鉗キ	広葉樹 芯持ち	41.5/16.5/-	
21	5	251	162 No.51	農具	臼	広葉樹 芯持ち	31.7/-/10.0	ウス脚部
21		252	162 No.37	編み具	鍔	カシ 割り材	8.1/7.2/6.3	焼けている
21		254	162 No.36	編み具	鍔	不明 芯持ち	14.1/3.5/2.6	
21		255	E-23区162 (日トレ黒色土)	容器	蓋	不明	(10.5)/(9.5)/-	前面黒漆 底部に赤色 の目輪文
21		256	162 No.1	容器	皿	クスノキ	28.2/32.4/-	剝物
21		257	E-23区162 (日トレ黒色土)	施設器具	板	スギ ナラ木取り	22.0/5.0/1.0	羽子板状
21		258	162 No.1	施設器具	脚台	広葉樹 割り材	23.5/25.0/8.0	完型
22	6	259	H-14区044 No.34	建築材	段柱		(233.5)/24.3/15.1	
22	6	260	162 No.112	建築材	柱		150/22/15	片側に柄
22	6	261	162 No.113	建築材	横架材		(162)/14.5/11	方形孔2有
23	6	262	H-16区044 GL-80cm 黒色土	建築材	階段		141.2/15.7/14.5	
23	6	263	162 No.150	建築材	階段		(73.8)/17.2/13.2	3片
23	6	264	162 No.84	建築材	板		86.3/16.5/2.3	孔4つ
23	6	265	162 No.31	建築材	横架材		(87.2)/13.2/9.7	丸孔2つ V字溝有り

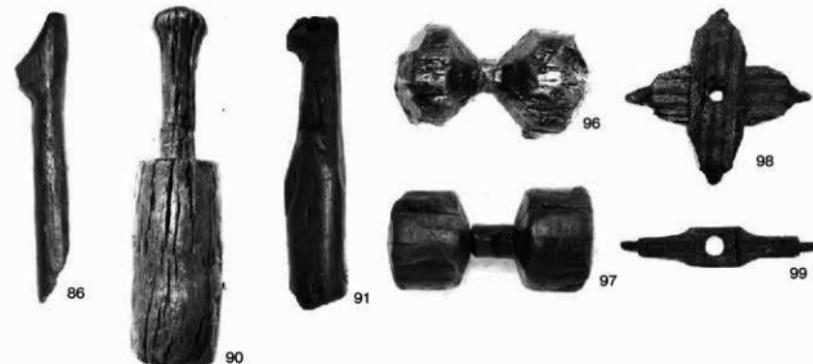


SX001 出土木製品 1

図版 4

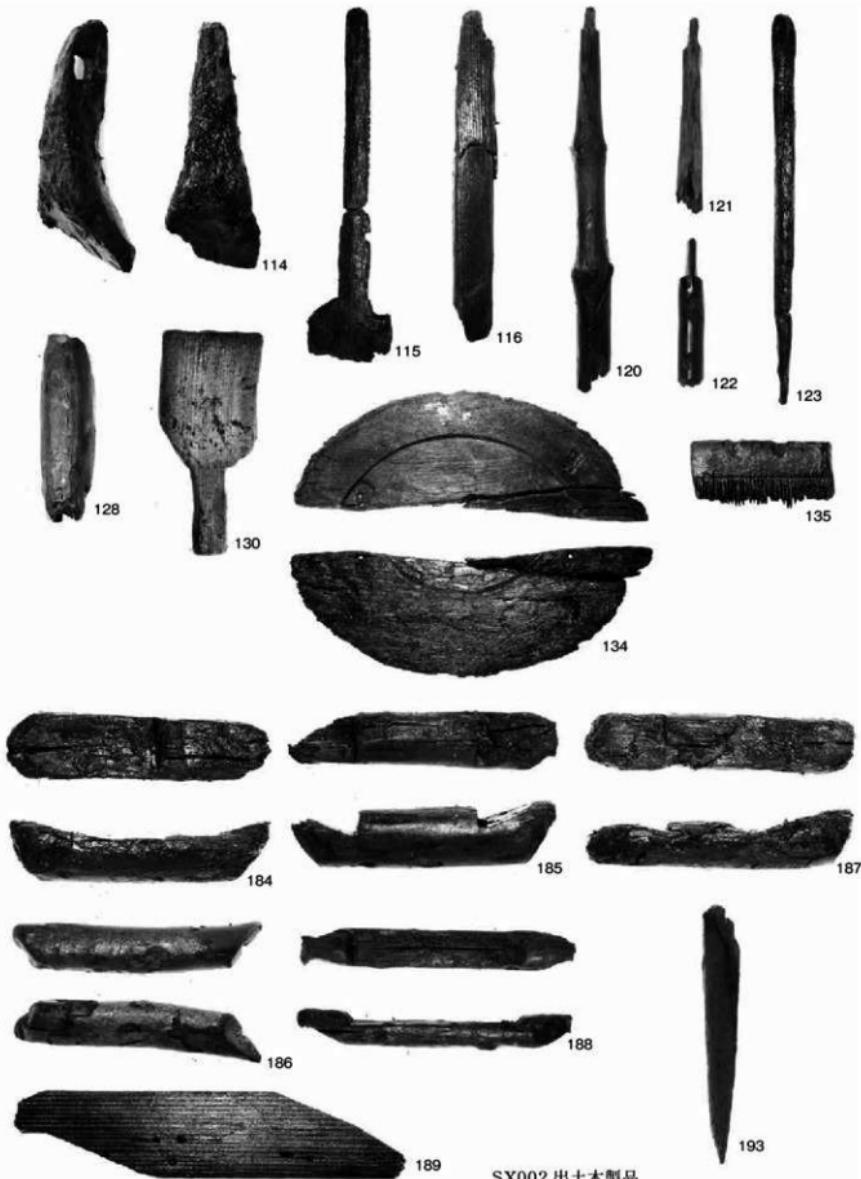


SX001 出土木製品 2

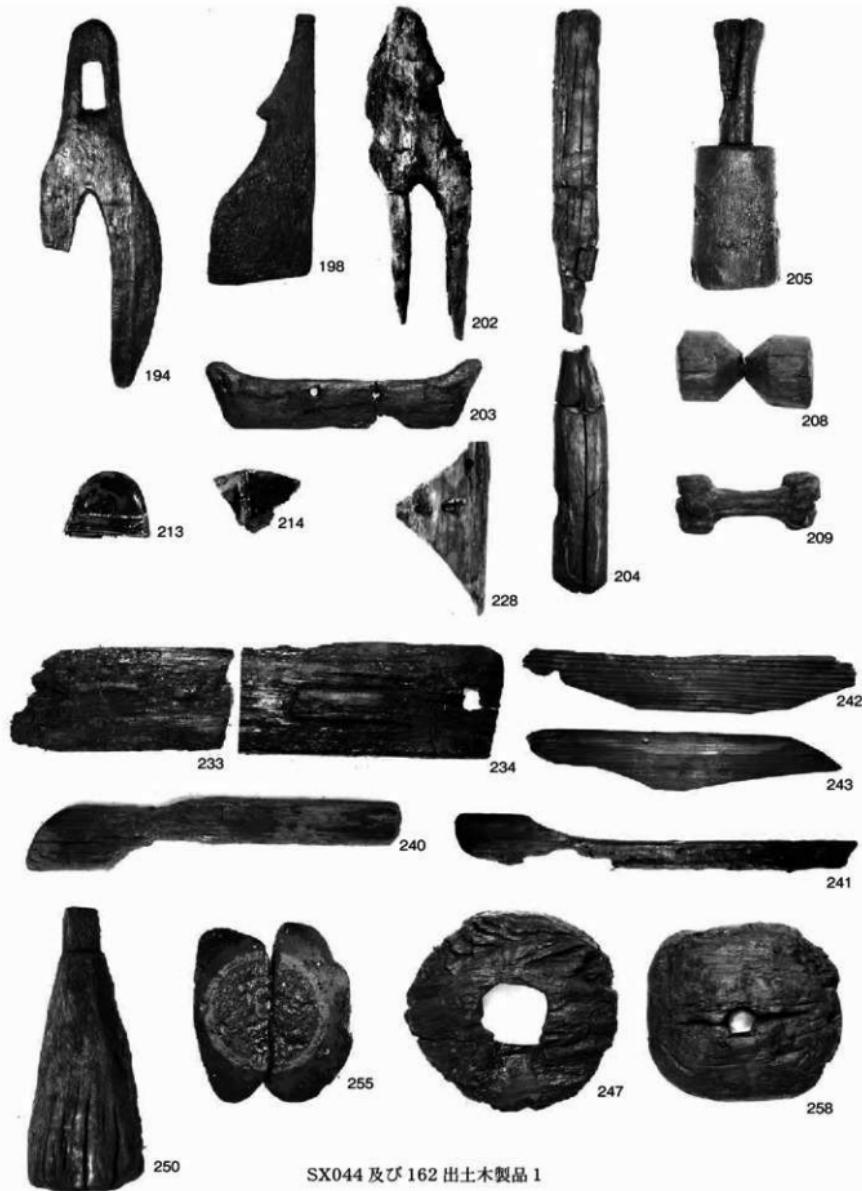


SX001 及び 002 出土木製品

図版 6



SX002 出土木製品



SX044 及び 162 出土木製品 1

図版 8



SX044 及び 162 出土木製品 2

### III 第42次調査の報告－5－

#### 1 第42次調査の概要

第42次調査は、元岡桑原遺跡群の最南端にある。調査地点の約200m先は、古今津湾である。調査区は東半分（I区）と西半分（II区）に分け、平成17年1月～21年6月まで実施した。I区の東端には幅約30mの自然流路SD01、II区の西端に、やはり幅30m前後の自然流路SD02が流れ、2つの流路の間に若干数の建物や住居が営まれている。

SD01・02の中には弥生時代中期から古墳時代初頭の遺物が大量に含まれており、その量は1万箱に及ぶ。土器・石器、1000点に及ぶ木製品のほか、朝鮮式小銅鐸2点、小形仿製鏡4点、中国製銅鏡9点、楽浪系土器をはじめとする朝鮮半島系土器の他、絵画入りの土器や木製品など、大量の出土遺物と特徴的な遺物が出土した。

福岡市全域で出土する量の3～4年分が本調査地点から出土したため、出土遺物の整理・報告には長年の期間を費やした。現在までに4冊の報告書を刊行しており、本報告で第42次調査の報告を完結するが、第42次調査の北側に隣接する第52次調査でも、SD01・02の上流が検出されており、全体的な知見等については第52次調査の報告時にまとめたい。

本書では、I区のうち未報告であった調査区全体から出土した石器・縄文土器と縄文時代晩期包含層出土遺物について報告する。SD01は弥生時代中期以降の遺物が大量に出土しているが、調査区北側川底の一部（D・E-6区付近）に縄文時代晩期の遺物を包含する層があり、また川の西側岸の一部（C-4区、C-2区付近）に厚さ5～10cm程の薄い包含層がある。後者についてはドットを落として取り上げた。

本書では、まずSD01を中心にしてI区から出土した石器（縄文時代晩期包含層出土遺物を除く）について記述し、さらに弥生時代・古墳時代包含層出土の縄文土器、その後に縄文時代晩期包含層から出土した縄文土器及び石器について記述する。今報告で第42次調査の事実報告を終える。なお、第42次調査の北側隣接地を調査した第52次調査については、平成29年度に報告予定で、第42次・52次をあわせた知見も、その報告で行いたい。

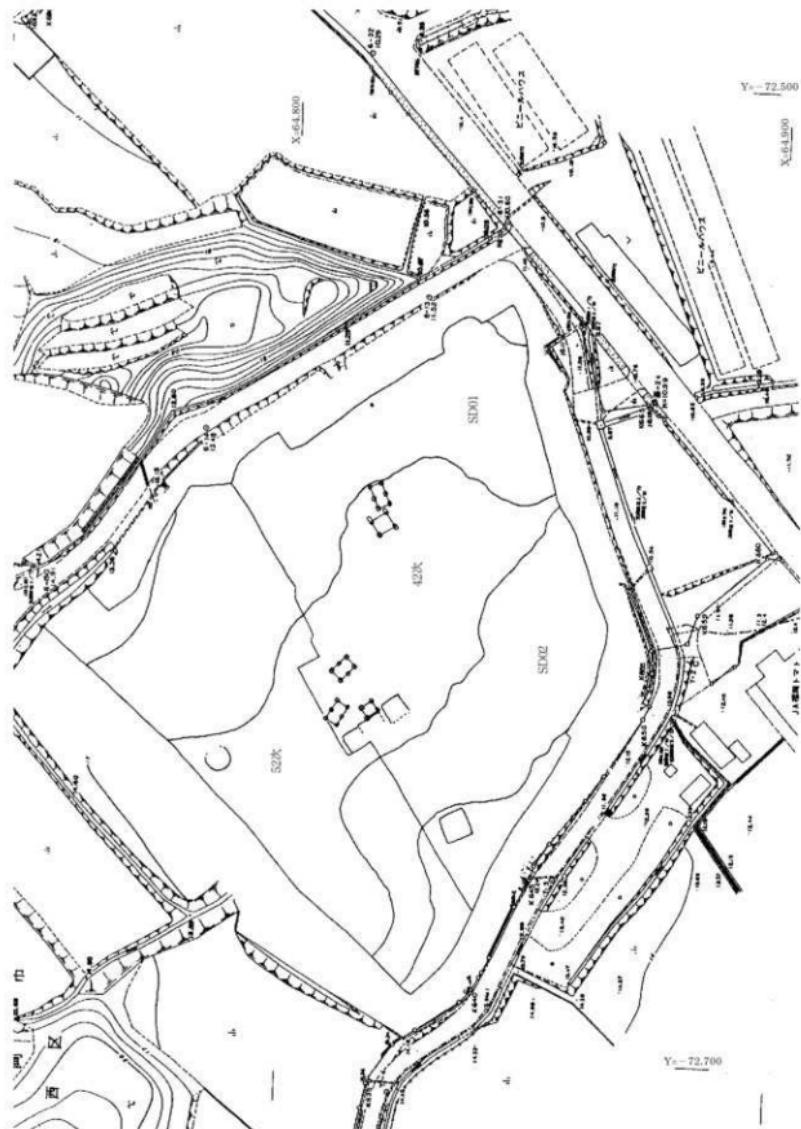
#### 2 第42次調査 I区（SD01及び遺構面）出土石器

I区から出土した石器は、コンテナ30箱に及ぶが、コンテナ数の大半は礫石器である。黒曜石・安山岩等の剥片石器はコンテナ3箱の出土である。報告に当たっては、極力図化するように努めたが、剥片類・礫石器の破片など一部は図化できなかった。礫石器のうち、砥石はかなり細かく剥離したもののがあること、磨石や敲き石などで風化の状況によって石器の判別が難しいものがあり、個体数を出しにくい面があった。

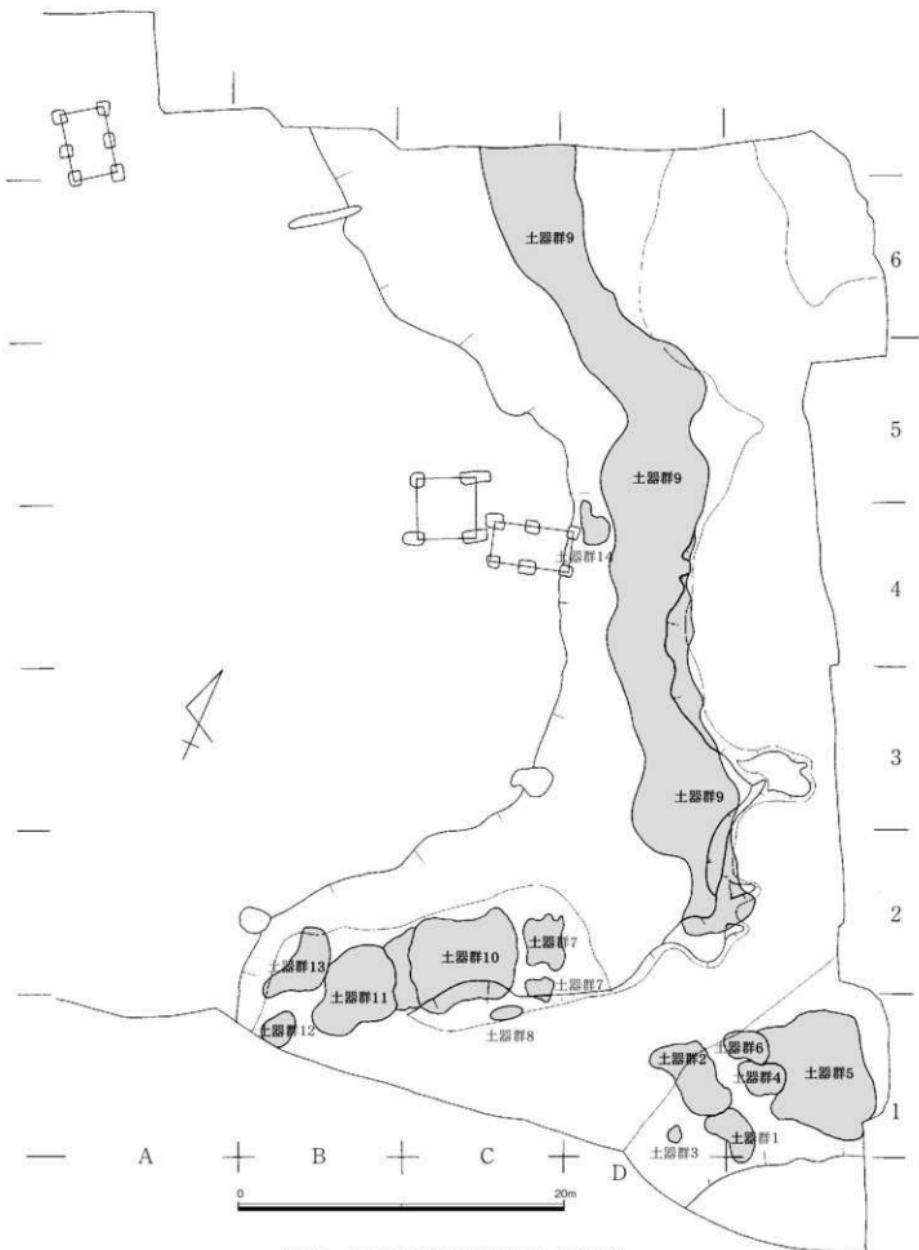
報告にあたっては、出土グリッド・層に関係なく器種別に行う。層ごとの特徴等があれば、各器種の項で、説明を行う。

##### 石鎚（第3図、図版5）

石鎚は細片数点を除いて全点実測掲載した。打製石鎚13点と磨製石鎚1点がある。1は黒曜石製でわずかに凹基を呈している。2は安山岩製で、3～6は黒曜石製である。3は細みの石鎚であるが、



第1図 第42次調査主要構造配置図 (1/1,000)



第2図 第42次調査土器群位置図 (1/300)

周縁部が鋸歯状に近い形態を成している。4は平基に近い。7は安山岩製で、平基式である。全体的に調整が粗く、先端部が尖らずにやや厚いことから、未製品の可能性もある。全体の形状は草創期末頃の三角錐に似ている。8は安山岩製で平基である。先端部を欠失する。9は黒曜石製。10は安山岩製で全体が分厚く、細かな押圧剥離が施されておらず、未製品の可能性もある。11は黒曜石製で、推定長5cm前後を測る。長めの押圧剥離でていねいに作られている。12はチャート製で鍬形錐に近い形態である。全面に細かい押圧剥離が施され、欠損部は無い。形状・材質から見て早期のものと考えられる。13は黒曜石製で、主要剥離面を大きく残している。14は磨製石錐と思われ、両面とも全面を磨き、縁は稜を成している。幅1.7cmを測る。石材はよくわからない。

#### 石槍（第4図、図版5）

15は安山岩製で、やや厚手の石槍である。D-6区の最下層から出土しており、あるいは後述する縄文時代晩期包含層から出土した可能性もある。先端部と基部を欠いている。全体にていねいに押圧剥離を施している。現状の長さ7.8cmを測る。

#### 加工痕・使用痕がある剥片（第4・5図、図版5）

剥片に微細な加工痕や使用痕が認められる剥片である。16は黒曜石製の縦長剥片の片側に大ぶりの加工を施している。反対側の側縁には細かな調整を連続して施しているが、バティナが他より新しく、あるいはこの細かな調整は、後の時代のものかとも思われる。17～19は黒曜石製で、側縁に微細な使用痕が認められる。20は黒曜石製で、バティナが他の剥片に比べ進んでいる。21・22は黒曜石製である。23も他に比べてバティナが進んでいる。24・25は整った縦長剥片であることから縄文時代晩期のものか。26は先端部が尖っているが、使用痕は両側縁に密に入っている。27は赤っぽい縞と灰色の縞が入った黒曜石を使用している。30は安山岩製で、片面に自然面を残し、全体に粗い加工で三角形状に作っている。石錐未製品の可能性もある。

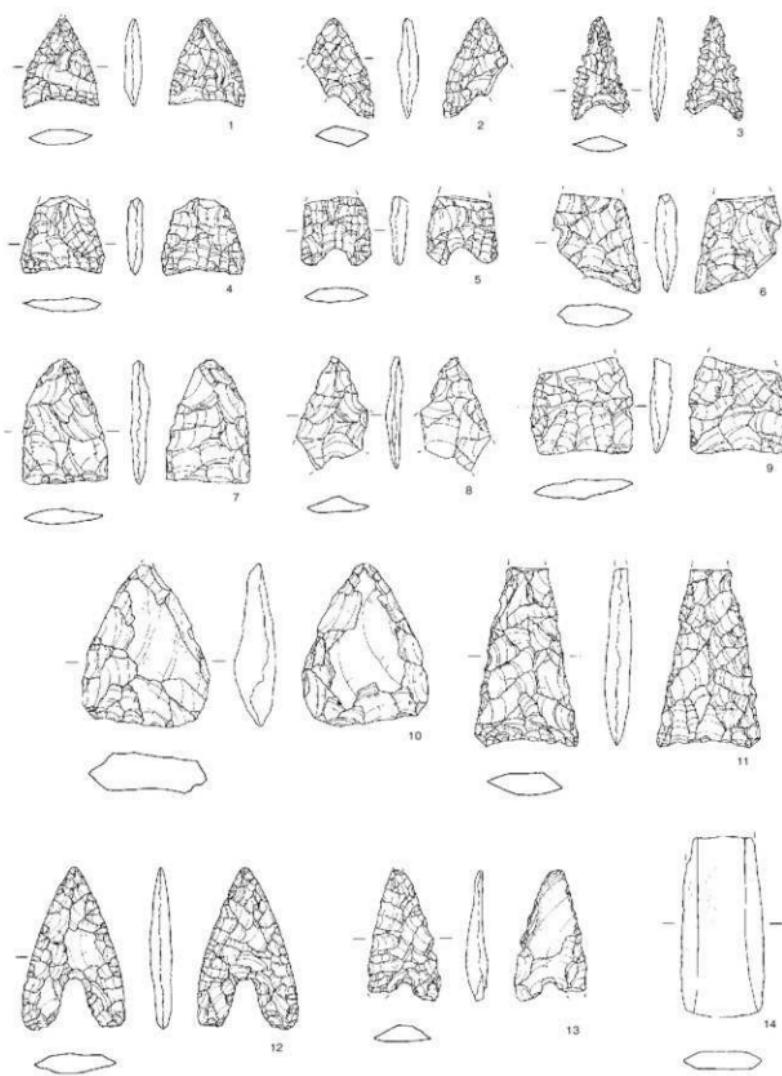
#### 石核（第6～9図、図版5）

31～40は石核である。32・33は安山岩、31・34～40は黒曜石である。32は半分が自然面で、大きく半切した原石の切断面からやや大きめの横長剥片を剥出しているようである。33は安山岩製で最後は横長剥片を剥出している。34はバティナが他より古く、摩耗が進んでいる。38は全体に古いバティナであるが、新しいバティナの剥離が、図の下部両面と上部片面に施されている。新しい剥離は、さほど大きくなことから、剥片を取るというより、この個体を別の用途に使おうとして断念したのかもしれない。37は全体がおにぎり状の形態を呈している。特に図の上面をプラットフォーム状に調整し、縦長剥片を剥出している。大半が灰色を呈した黒曜石製である。39・40は小さな黒曜石の円礫を利用したもので、39は数枚の剥片を剥いだだけである。バティナが古い。

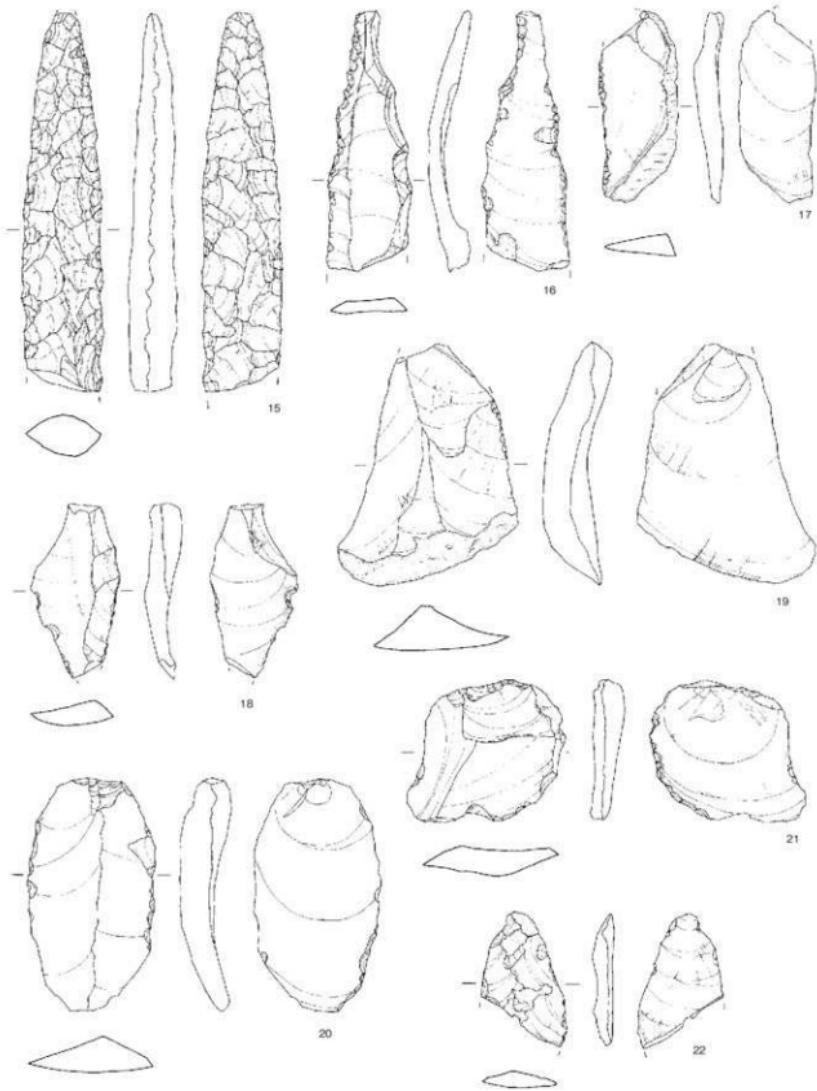
#### 石匙・スクレイバー（第10・11図、図版6）

41～43は石匙で、安山岩系の石材を使用している。41は、左図の下から左側面は自然面で、バルブも下の側面側にあり、異質な形状をした石匙である。42は横長の石匙で、左右両側は折れている。下面側縁の調整はかなり粗い。43は縦形の石匙で、大きめのつまみである。

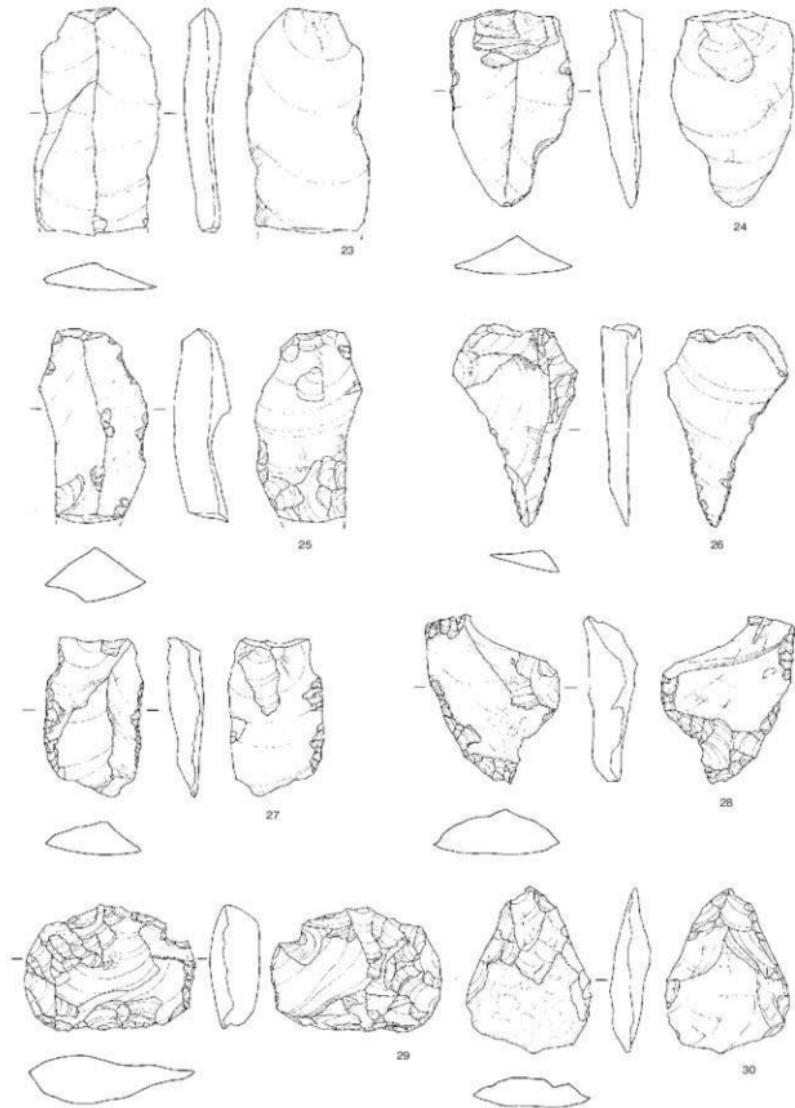
44～56はスクレイバーですべて安山岩系の石材を使用している。44は半折しており、石匙の可能性もある。45はやや厚手の剥片素材で、ほぼ全側縁に調整を施している。図の上部にも使用痕跡らし



第3図 出土石器実測図 (1/1)

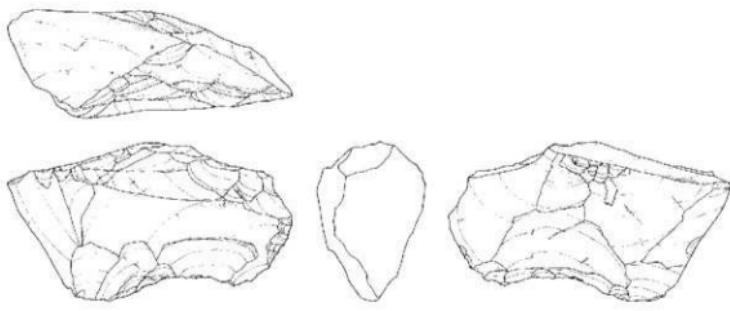


第4図 出土石槍・UF・RF実測図1 (1/1)

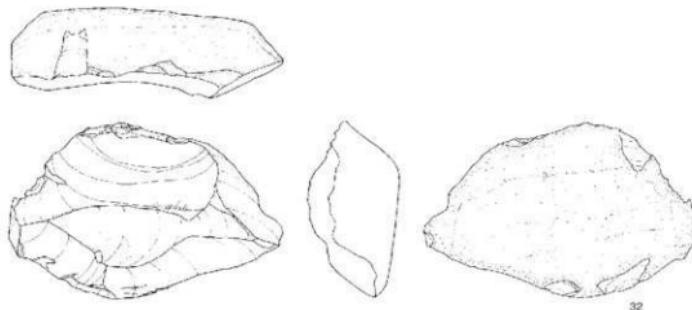


第5図 出土UF・RF実測図2 (1/1)

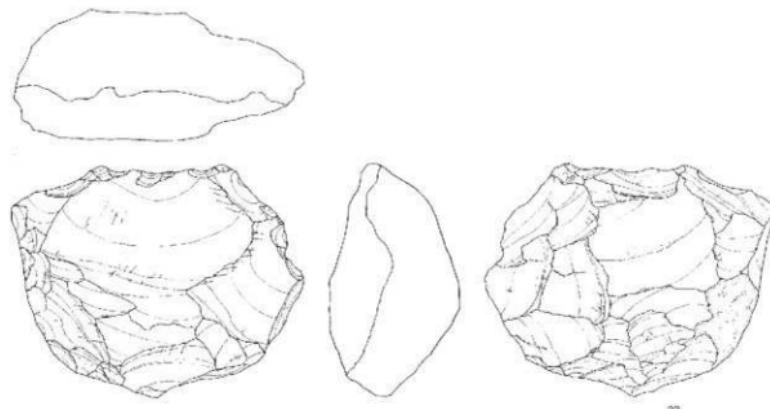
0 3cm



31



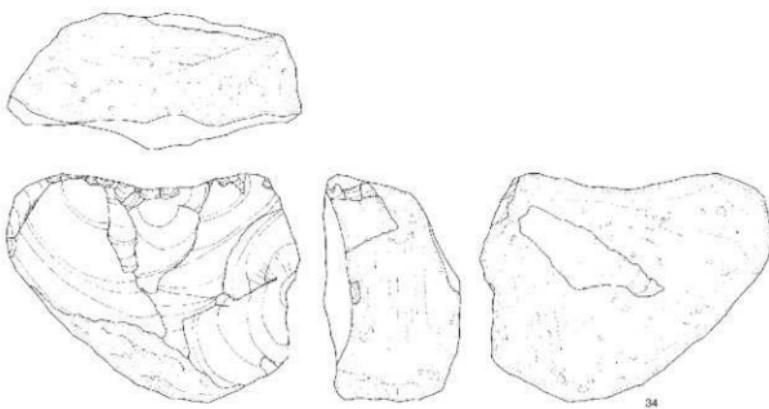
32



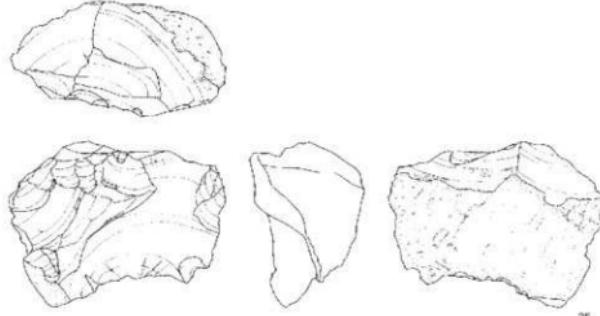
33

第6図 出土石核実測図1 (1/1)

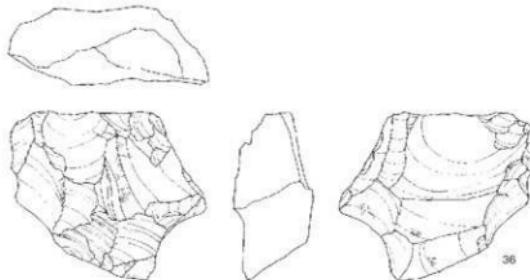




34



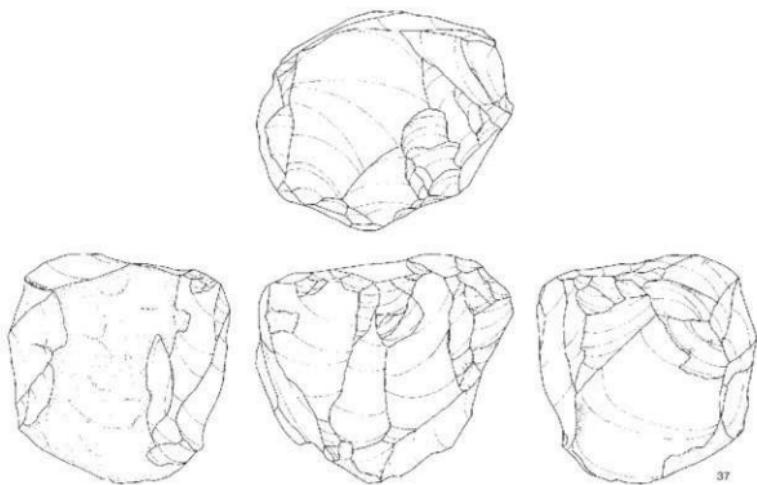
35



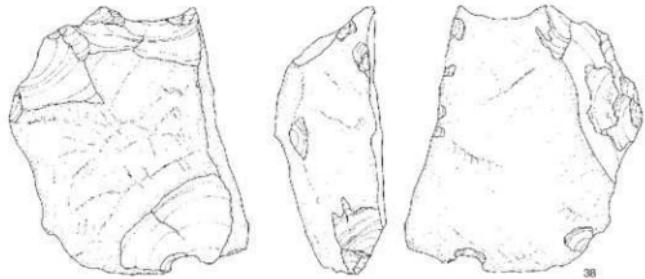
36

0 3cm

第7図 出土石核実測図2 (1/1)



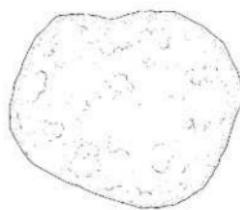
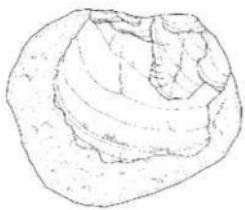
37



38



第8図 出土石核実測図3 (1/1)



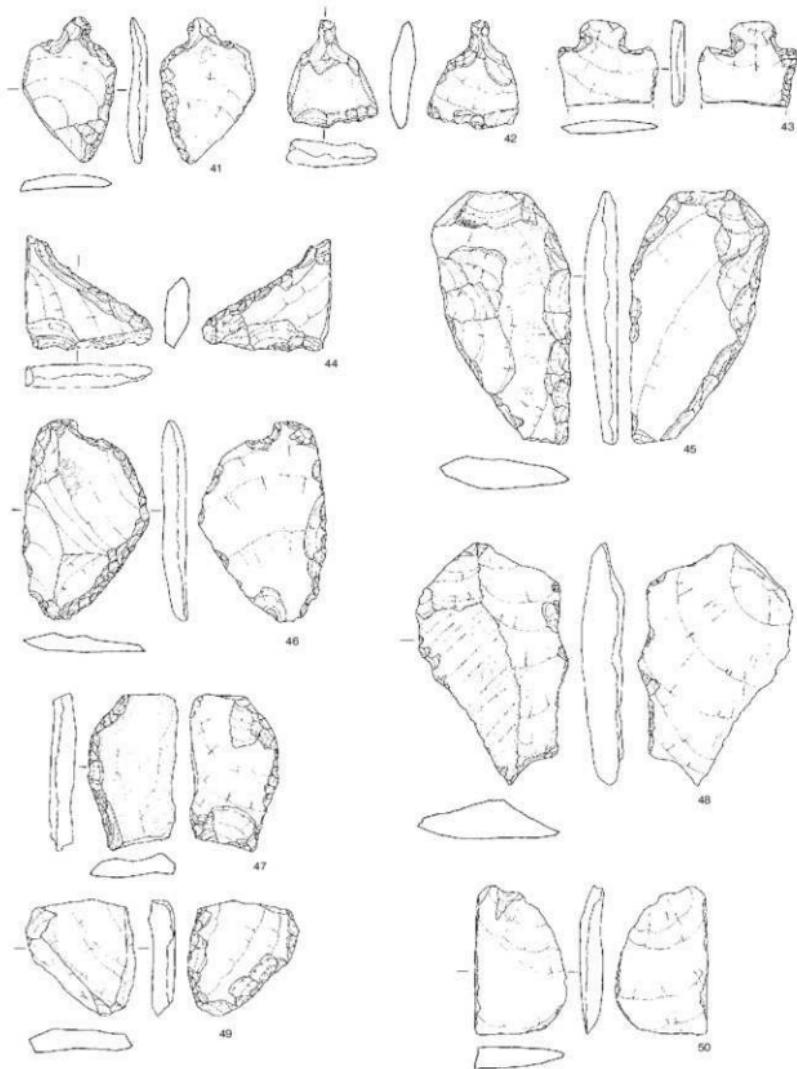
39



40

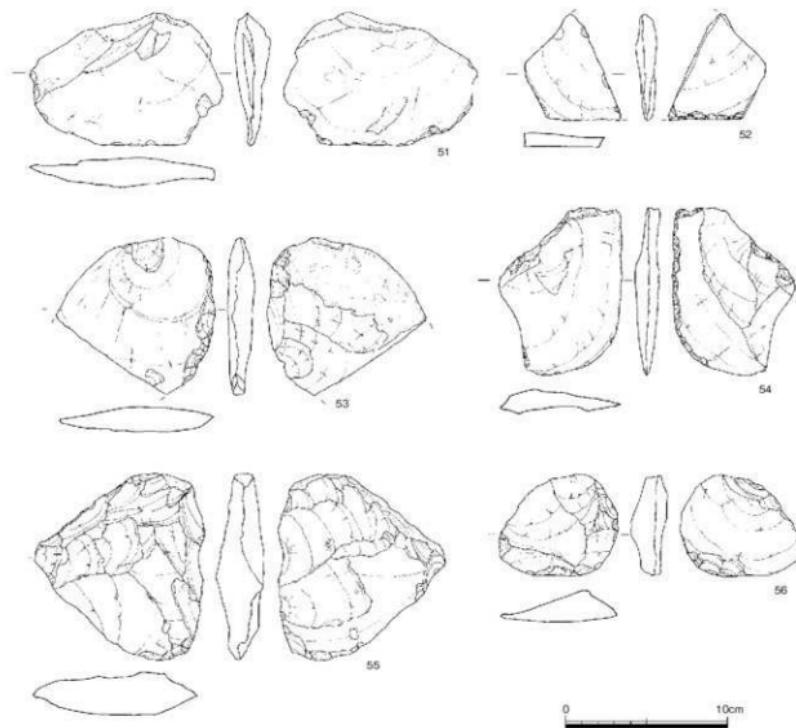


第9図 出土石核実測図4 (1/1)



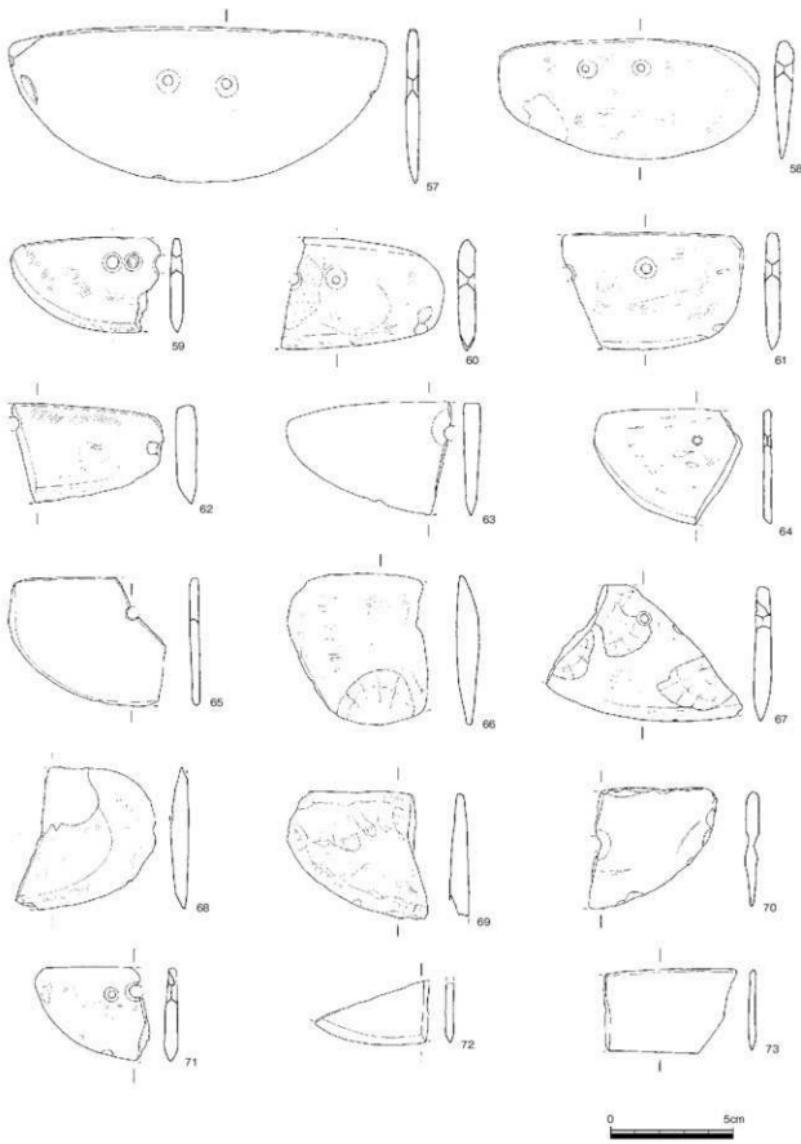
0 10cm

第10図 出土石器・スクレイバー実測図1 (1/3)

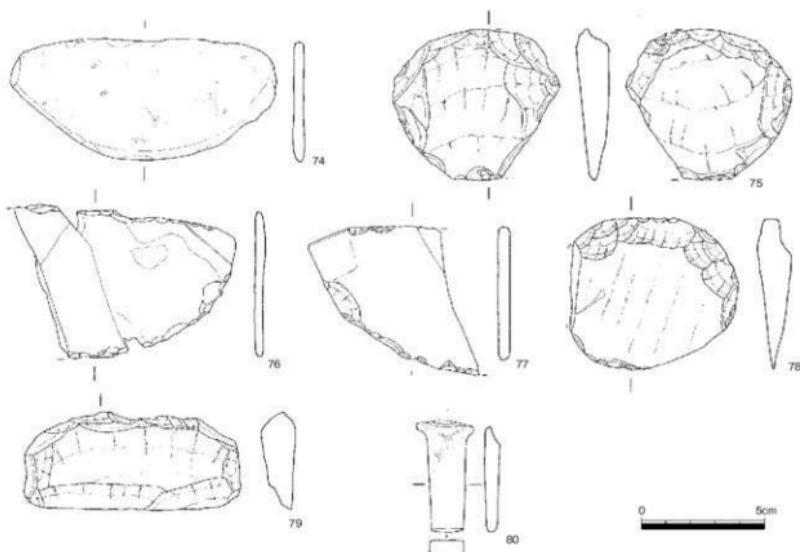


第11図 出土スクレイパー実測図2 (1/3)

き痕跡があり、あるいは上下逆で打製石斧の可能性もある。46は基部に摘みを作るようノッチを入れており、石芯に分類できるかもしれない。主要剥離面側からの調整はあまり行われていない。47は原石から剥いだ縦長の第一剥片を利用している。片面と上下端の面も自然面である。片側縁に連続的に調整を施している。48も自然面が残っており、自然面の残っていない辺にのみ調整を施しているが、調整を施した面は一直線にはなっていない。49は右図上面と右側面が自然面である。調整を施している部分は全体に厚めで、調整を施している範囲が狭い。製作途中のものかもしれない。50は薄手の剥片の側縁に微細剥離が確認できる。一部調整も確認できるが、使用痕のある剥片に分類できるかもしれない。51は図の下側縁全面に連続的な細かな調整を施している。52は左図下面と左側面は自然面で右側面は切断面である。図の上面に連続的な細かな調整を施している。53は自然面を一部残している。右図下面も自然面である。自然面のない側縁に調整を施している。54は円弧を描く側縁に連続する細かな調整を施している。左面側にはほとんど調整を施していない。55は一側面に自然面を残している。平面三角形を呈する厚めの剥片の一辺に微細剥離が確認できる。両面に剥片剥出がみられ、剥片石核を利用したものである。56は右図右側縁から下面の右側にかけて調整が施されている。



第12図 出土石庖丁・石鎌実測図 (1/2)



第13図 出土石庖丁未成品・不明石器実測図 (1/2)

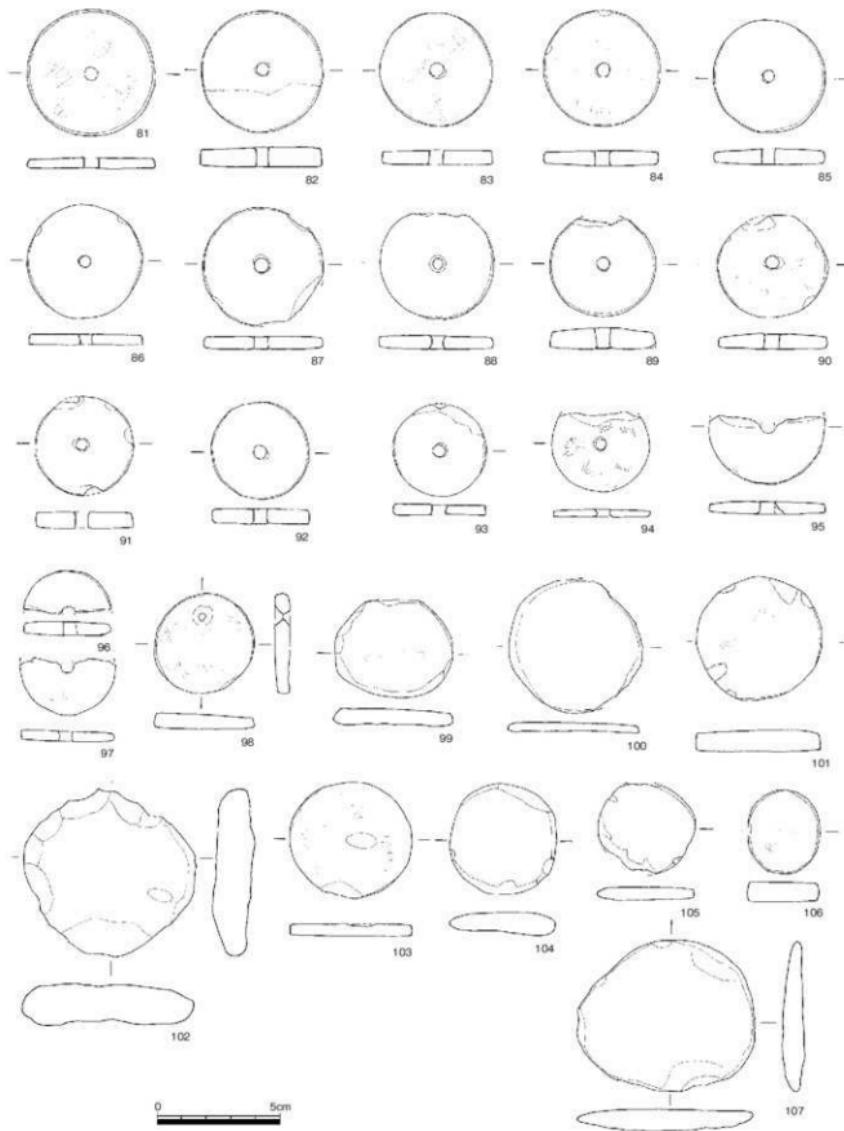
#### 石庖丁・石鎌・石庖丁未成品 (第12・13図、図版7)

57～72は石庖丁である。57・58はほぼ欠損が無い。57は凝灰岩質の石材で、長さ15.5cmを測る。きれいな半月形を成している。58は立岩産で、長さ10.7cmを測る。59は3穴穿孔が施され、真中の穴は小さい。60は立岩産である。61は長方形に近い形状である。側縁部は剥離のままで磨かれていない。66は立岩産で、両面とも一部磨きが施されていない部分がある。また、刃部もシャープではなく、製作途上かもしれない。67も立岩産で、かなり大きい製品である。68も立岩産で、図の反対面は剥離面のままでほぼ研磨が施されておらず、図の上面も剥離が残っており、失敗品と思われる。69も立岩産だが、68とはやや色調が異なる。やはり研磨が施されていない部分が多く、失敗品と思われる。70は磨削で明瞭ではないが、研磨されていない部分が多く、刃も調整が残ったままである。孔は穿かれているが、未成品と思われる。

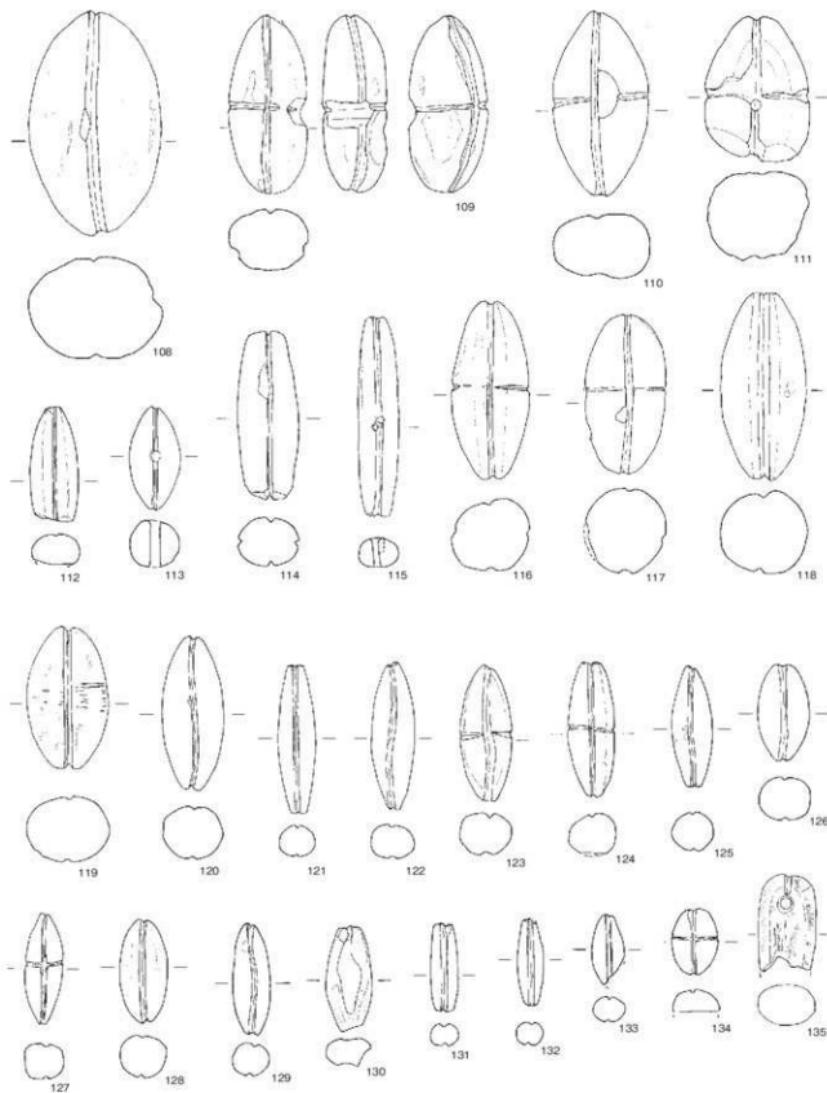
73は石鎌と思われる。凝灰岩質の石材である。74は石庖丁の未成品で、ほぼ形は整っている。片面は研磨を施し、反対面は節理のままである。刃部も一部は磨いているが、孔は穿っていない。破損部は見当たらず、途中で製作を中断した理由が見当たらない。75は立岩産の石材で、周縁部調整を行っている段階で折れたものと思われる。かなり厚く、研磨によって厚さを減じるのであろうか。76・77はやや大型の石庖丁未成品で、半折している。78は立岩産の石材で、周縁部調整を行っている段階で折れたものと思われる。79も立岩産の石材である。全体の形状から石庖丁の未成品と思われるが、小振りで厚い。

#### 不明石器 (第13図、図版7)

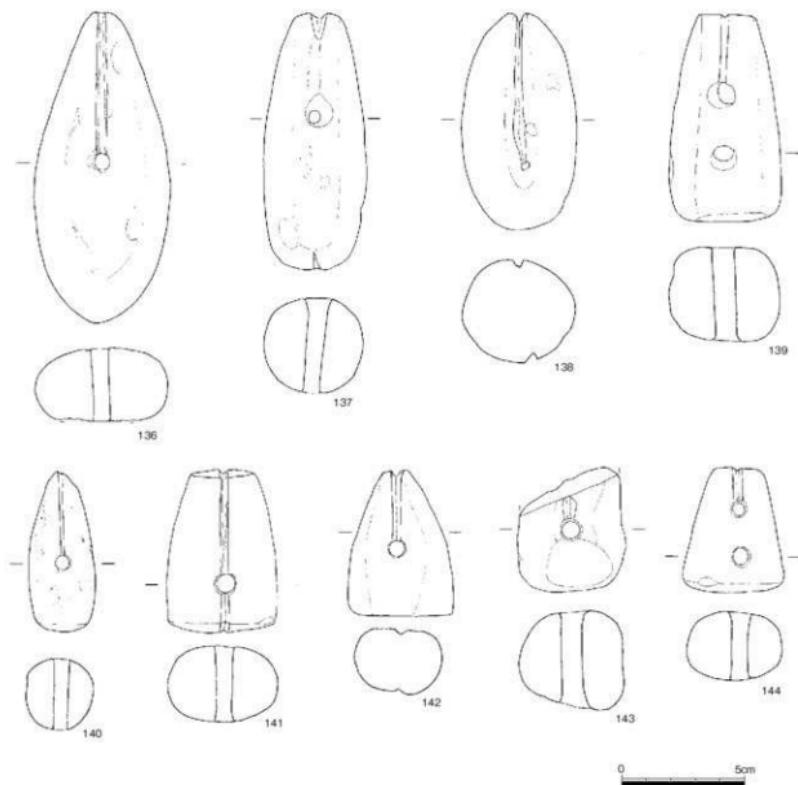
80は凝灰質安山岩系統の石材と思われる。全図の上部は破損しているが上端の両側上面は磨きが



第14図 出土紡錘車・石製円盤実測図 (1/2)



第15図 出土石錐実測図1 (1/2)



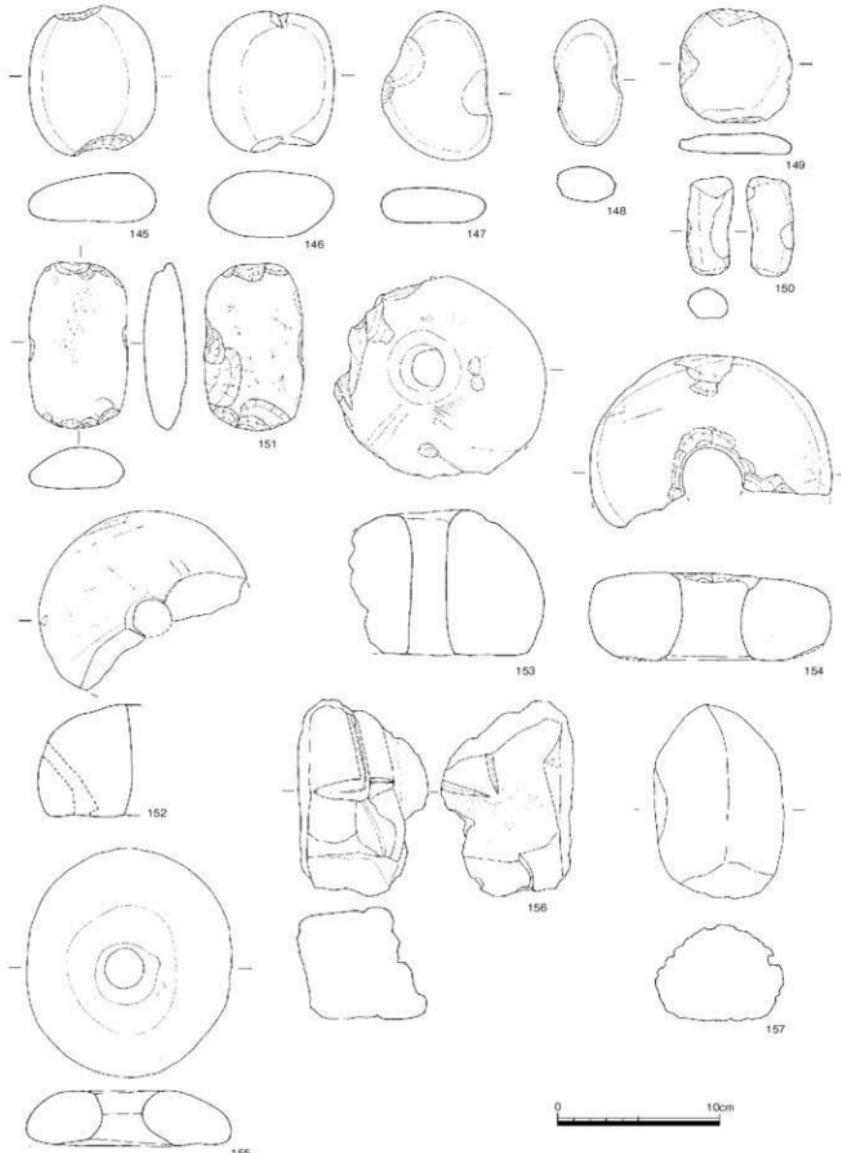
第16図 出土石錘実測図2 (1/2)

施され、上部の左右もさほど伸びびそうに無く、概ね図に近い全形と思われる。全面丁寧に研磨が施されている。用途不明の石器である。

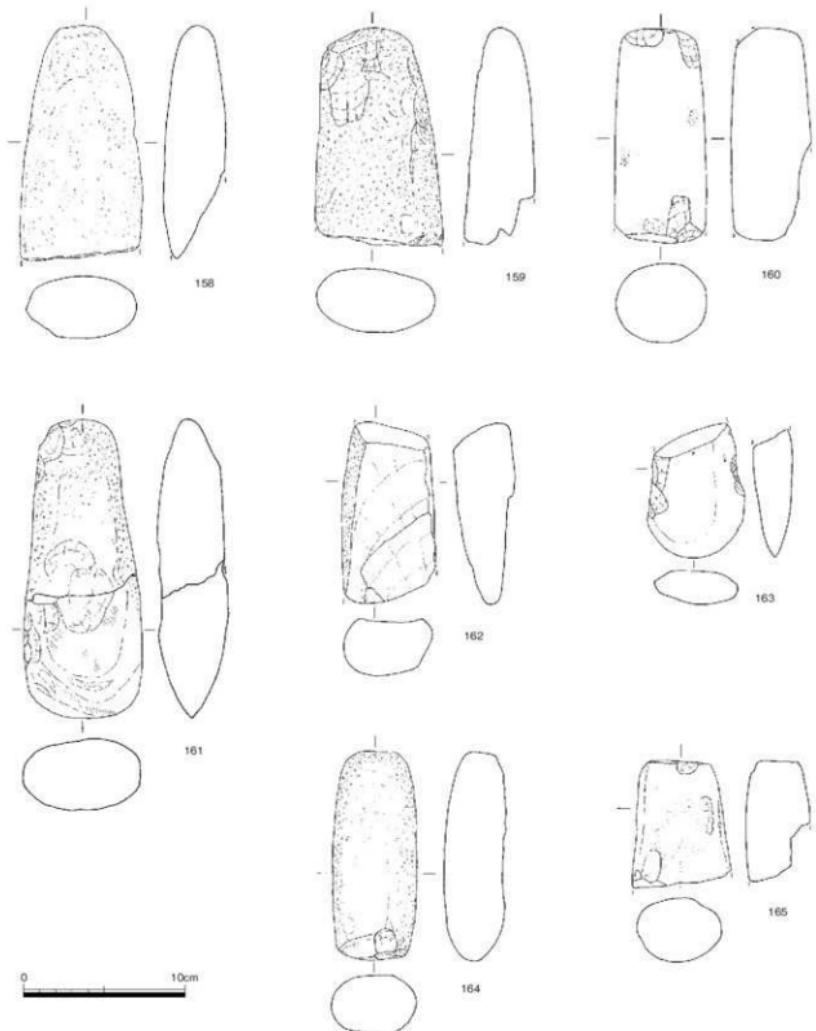
#### 紡錘車・石製円盤（第14図、図版7）

81～97は石製紡錘車である。直径3.5～5.2cm、厚さ5～8mmを測る。石材は滑石が多い。全面を丁寧に磨いている。98は片岩系の石材で、孔が片方に寄っている。歪んだ円形を呈している。紡錘車の孔はドリルであけたように直線的できれいにあいているのに対し、本品は両側から釘をハンマーでたたいて穴を開けたような形態で、直線的ではなく見た目が悪い。

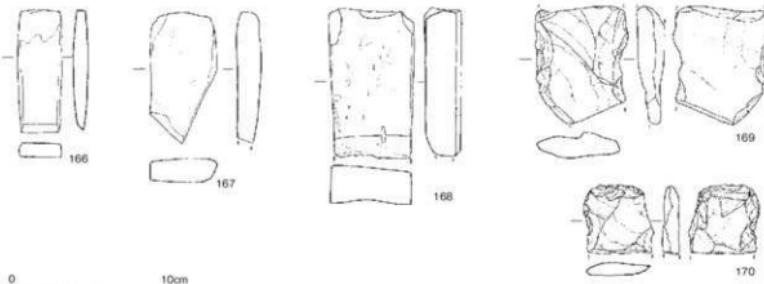
99～107は、孔の無い石製円盤と呼んでよい石器で、紡錘車の未成品も含まれると思われる。99は片面と側面の一部を研磨している。全形は楕円形を呈している。100は片面のみ研磨している。製品の紡錘車に比べて薄く、研磨していない面が剥落した可能性がある。101は全面研磨を施している



第17図 出土石錘実測図3 (1/3)



第18図 出土磨製石斧（両刃）実測図（1/3）



第19図 出土磨製石斧（片刃）・打製石斧実測図（1/3）

が、図の反対面の一部が欠失している。研磨以前からの欠失なのか研磨中もしくは研磨後の欠失のかわからないが、紡錘車の未成品ならば研磨後に欠失し、遺棄したと考えられる。102は滑石製で、全形は円形に近いが、両面とも研磨を施しておらず、表面の凹凸が激しい。厚さも1cmを超えている。103は硬質砂岩のような石材で、全面研磨している。側縁の一部を欠失している。また中央部からややずれた位置に $1 \times 0.5$ cmの範囲で数ミリ窪んでいるところがある。104は両面とも軽い研磨を施している。105は両面とも研磨を施しているが、縁辺部の欠失部分が多い。106は $3.4 \times 2.9$ cmと平面梢円形を呈し、厚さ0.8cmを測る。青黒味を帯びた滑石製で、何かの模造品であろうか。107は青白味の滑石製で、長さ7.2cm、幅6.3cmを測る。中心部は8mmの厚さがあるが、縁辺部にいくほど薄く作っている。

#### 石錐（第15～17図、図版8・9）

108～156は石錐である。石材の多くは滑石である。108～134は長梢円形の石材に縦方向、もしくは十字方向に筋を入れ、紐で緊縛したものである。108は滑石製で縦方向の溝を彫っている。重さ290gを量り、このタイプでは最も重い。109～111は十字に溝を彫っている。111は図の下面を研磨で平坦に作っている。破損後に再加工したものであろうか。また十字の交差点付近に深さ5mmほどの小さな穴を彫っている。112～115は細長い形態で縦方向のみに溝を有するものである。113は中央部に貫通した孔を穿っている。115は小さな孔を2つ穿っているが、一つは貫通していない。貫通しなかったため、やり直したものであろうか。116・117は十字に溝を彫っているが、横方向の溝は途切れ途切れになっている。119は縦方向の溝だけであるが、横方向中央部に紐づれの痕跡が残つており、溝を彫らなくても紐で緊縛しているものがあることがわかる。120～134は小型・中型のもので、完形品で最も軽い132は5gである。

135は粘板岩に似た石材で、端部近くに孔を穿っている。上端には、両面の孔を繋ぐように筋を入れている。孔の下には、縦方向の傷もしくは筋が数本認められる。半折しているので確証は無いが、遺失している反対側にも孔があるのではないだろうか。そうだとすると、古墳時代にある、両端に孔を穿った土製の錐に近い形態となる。

136～144は、いわゆる玄界灘式の石錐である。136・137は1穴を有する大型品で、136は338gを量りもっとも重い。138は溝を全周させていないこと、先端がとがるタイプのためここに分類したが、あるいは前のタイプの未成品の可能性もある。あるいは、溝の先端部に穿孔しかけたような

痕跡があり、このタイプの未完成品かもしれない。140～143は1穴で、139・144は2穴を有する。また141のみは溝を周全させている。

145～151は扁平な石材の両端もしくは四隅を打ち欠いたものである。様々な石材が用いられており、川原などで拾った石材を利用したものが多いと思われる。145は両端を両側から明確に打ち欠いている。146は自然にできた端部の凹部を少し打ち欠いている。ともに白色の硬い石材で、自然に磨かれた石材を利用している。147は打ち欠いたというより、磨いて削った凹部に紐状の痕跡が認められる。川原石のように見える。148は花崗岩製で、長い方の2辺を打ち欠いている。149は扁平な滑石の4辺に加工痕が認められるが、あるいは石製円盤や模造品に分類できるかもしれない。150は四角柱状を呈する花崗岩の両側縁の一部が窪み、その部分に紐状の擦痕があるが、形状が異質で、石錘ではないかもしれない。151は玄武岩製で、表面に敲打痕が残り、石斧の破片のような印象をうける。両端部を打ち欠き、両側縁中央を打ち欠いているが、あるいは石錘ではないかもしれない。

152～155は平面円形の厚い石材の中央に一孔を有する大型の石錘で、碇として使用したものもあるかもしれない。すべて滑石製である。152は側面に小さな一孔を有するが、中央の大きな孔とは平行しない。153は厚さ約9cmとかなり厚い、側面数箇所に刃物傷状のものが数本ある。重さ1900gを量る。154は側面に一孔を有するが、152と同様に中央の孔と平行しない。155は完形品で重さ966gを量る。厚さ3.5cmともっとも薄い。156は滑石製の塊という表現があつてあるが、一部に研磨痕があり、紐状の痕跡が認められることから、石錘と判断した。重さ940gを量る。

#### 軽石製品（第17図、図版8）

軽石は破片も含めて數十点が出土しているが、小片を除いて明確に加工が認められるのは157だけである。ほぼ全面を磨いている。側面の一部が窪んでいるように見えるが、明確ではない。長さ11.6cmあり、浮子にしては大きすぎるような印象を受け、さらに孔もなく、明確な紐の引っかかりもない。あるいは自然に磨かれたものかもしれない。

#### 磨製石斧（第18・19図、図版9）

磨製石斧と考えられる石器は、図示した以外に小破片が數点ある。158～165は両刃の磨製石斧である。158は安山岩系の石材で、ほぼ全面に敲打痕が残り、研磨の痕跡は少ない。先端部に敲打痕があり、刃部が折れた後、敲打具として利用したものと考えられる。159も安山岩系の石材で、側縁の一部に剥離痕が、全面に敲打痕が残っており、研磨は顕著ではない。160は玄武岩製である。断面形は円形に近く、全体的に円柱状の形態を呈し、頂部は平坦に作っている。磨製石斧としては、やや異質な形態を呈している。ほぼ全面を研磨している。折れた面は、折れた後に敲打によって平坦化しており、敲打具として使用されている。161は表面に粒が多く出た堆積岩を利用していている。ほぼ中央で2分割し、ともにE-1区から出土している。ほぼ全面に敲打痕が残り、研磨痕は刃部周辺と片面の下部にしか確認できない。頂部の縦断面は尖っている。長さ18.5cm、幅7.2cm、厚さ4.3cm、重さ832gを測る。162は玄武岩製で、半折し、両面表面部分の大半も欠失している。残存部分にはていねいな敲打痕が残っている。破損後に先端部を敲き石として使用している。163も玄武岩製である。他の石斧に比べて薄く、刃部より上が剥離によって幅を狭く作っており、一見は有肩打製石斧のような形態を呈している。また風化が進んでおり、全体的に白味を帯びている。SD 0 1の川底に流れで溜まった流土から出土しており、後で述べる縄文時代包含層に含まれていた可能性が高いものと思われる。164は石材不明であるが、破損の少ない製品であるが、先端部は最終的に敲打具として利用し

ており、あるいは刃部を欠損した後に転用したものかと思われる。刃部周辺にわずかに研磨が施されている以外は、全面敲打によって仕上げ、頂部は平坦に作っている。長さ10.3cm、幅5.1cm、厚さ3.6cm、重さ445gを測る。165は玄武岩製で、160よりやや扁平であるが、頂部を平端に作り似た形態である。頂部には敲打痕が残っているが、それ以外は全面研磨で仕上げている。

166～168は扁平片刃石斧で、3点とも石材が異なっている。166は凝灰岩質安山岩ホルンフェルス製で、長さ5.1cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重さ11gとかなり小型である。全面ていねいに研磨で仕上げている。167は頁岩質の石材で、全面研磨で仕上げているが、頂部と片面に剥離痕が残っている。刃部のみを欠失し、推定の長さ約7cmを測る。168の石材は不明。図の裏面は両側縁が高く、中央部が縱方向に窪んでおり、砥石に転用している。

#### 打製石斧（第19図、図版8）

打製石斧は2点確認した。169は玄武岩製打製石斧である。両端を欠失しており、上下は不明である。C-4区のSD01岸の包含層最下部から出土しており、縄文時代晩期の可能性がある。170は安山岩製であるが、幅が狭く、ここでは打製石斧としたが、スクレイパーなどの可能性もある。

#### 磨石・敲石・窪石類（第20～24図、図版10・11）

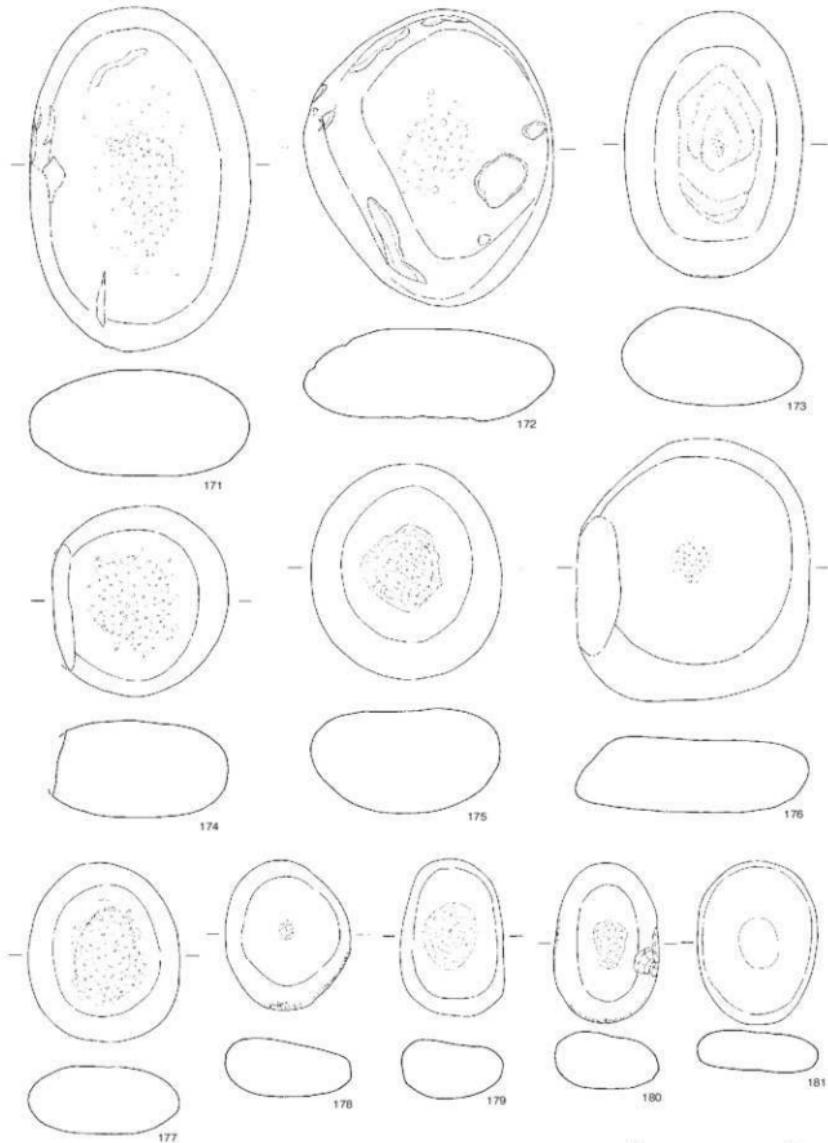
礫に磨きや敲き・窪みがあるので、1つの礫に磨き・敲き・凹みがあるものが大半であることから、それらの痕跡があるものを集めた。

171～173・175・176は大型の磨石類である。171は研磨痕は明瞭ではないが、両面中央に敲打痕があり、片面は若干窪んでいる。172は全面に自然にできた窪み（孔）があり、海岸部にある転石と思われるが、図の中央部に敲打による窪みがある。173は片面がミガキによって平坦化し、反対面中央に敲打痕が認められる。175は全面磨かれているが、片面は平坦化し中央部分が敲打によって窪んでいる。反対面にも敲打痕がある。176は扁平な原石で、中央部に敲打痕がある。ミガキの形跡は無い。

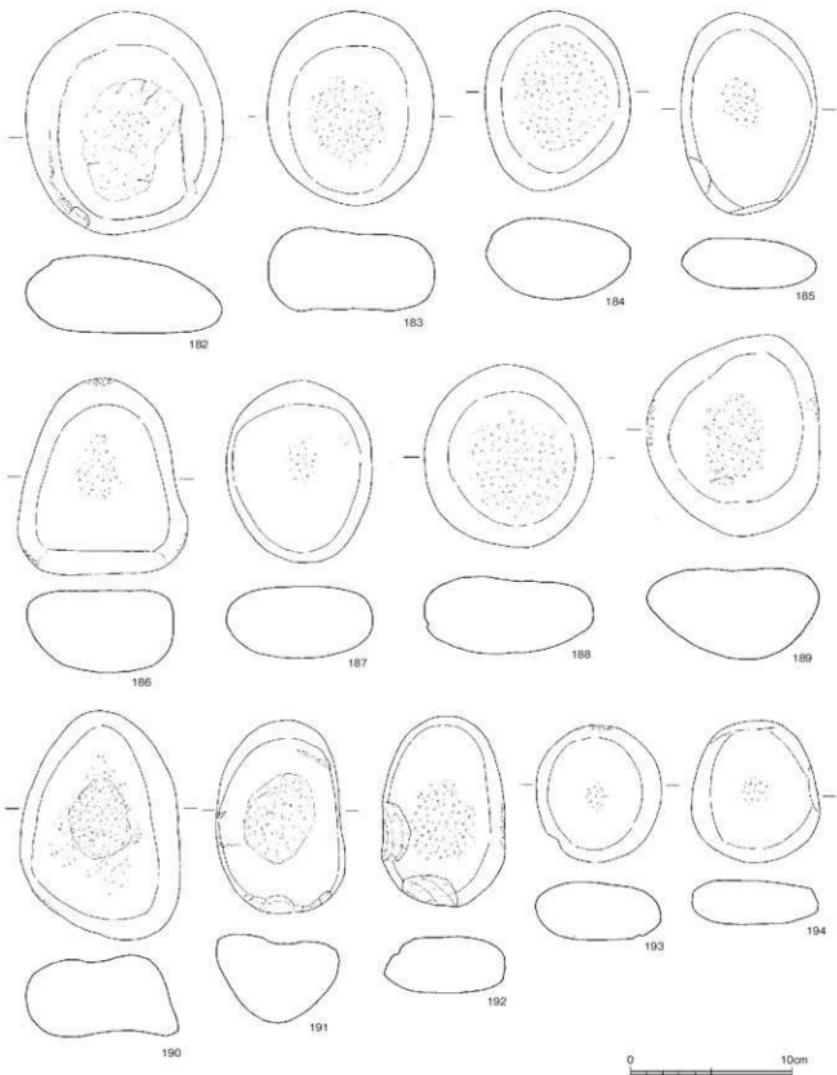
174・177～195は中型からやや小型で平面円形から稍円形に近いものである。概ね全面が磨かれ、両面中に敲打痕がある。両側縁にも敲打が認められるものもある。174は全面ミガキがかかり、両面中央に敲打痕跡が残っている。177もほぼ同様。178は一側縁が敲きによって、表面が剥落している。179は片面がかなり磨かれ、両面中央付近に敲打痕が認められる。180・181はミガキ・中央部の敲打に加え、端部と両側縁中央部にも敲打が加えられている。182はミガキの痕跡は認められず、両面中央に敲打痕が認められる。183は両面とも平坦になるほど磨いており、両面中央部が窪んでいる。184は側縁に敲打痕が激しく付いている。185は片側の端部と中央部両面に敲打痕が認められる。186は全面自然に磨かれた花崗岩であるが、端部と片面中央部に敲打痕がある。187は全面磨かれ、側面に敲打痕がついている。188もそれに近い。189は、ミガキは自然による可能性がある。両面中央に敲打痕がついている。190は全面に敲打痕が付いており、片面中央部は大きく窪んでいる。191は断面形が三角形を成している。その一面の中央部は大きく窪み、別の面にも小さな窪みが2箇所ある。また端部も敲打痕が残っている。192は両面にミガキ、側縁と両面中央部に敲打痕が残っている。2箇所の剥離があるが、打撃によるものかもしれない。193・194も両面にミガキ、側縁と両面中央部に敲打痕が認められる。

196～199は小型のもので、手持ちにちょうど良い大きさである。4点ともほぼ全面をミガキ、側縁に敲打痕が残っている。

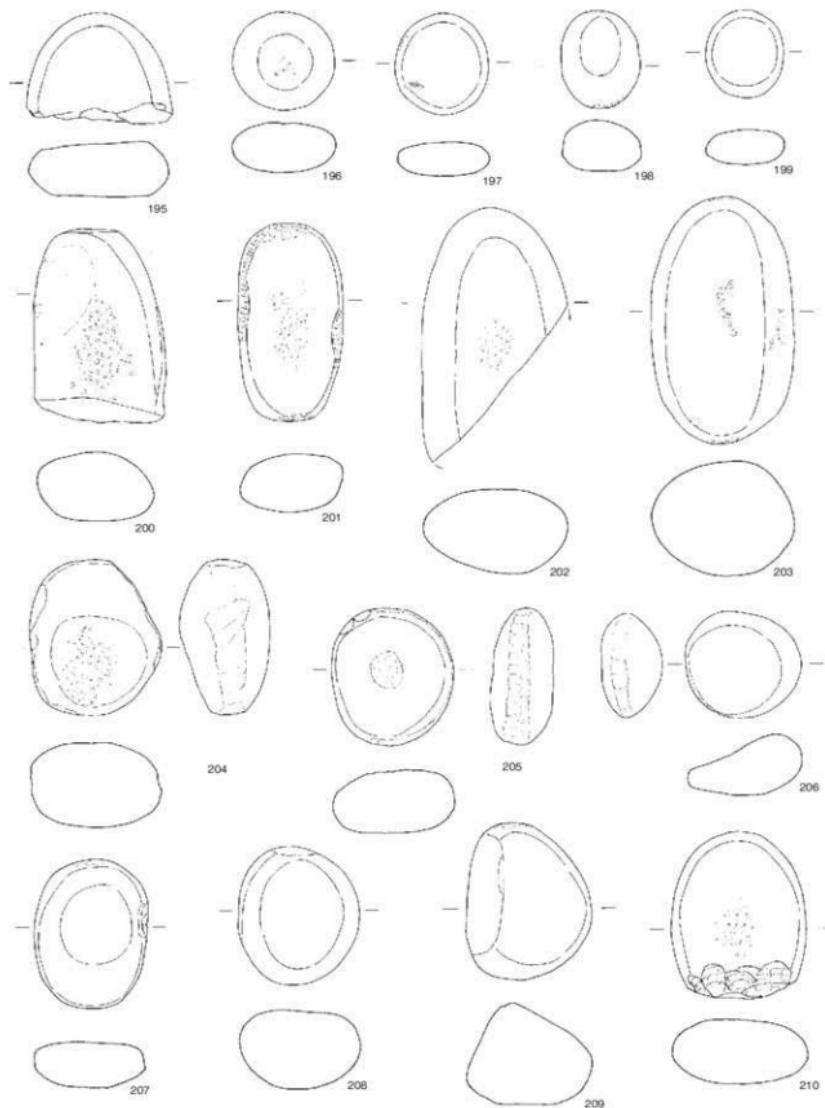
200～203はやや長めのもの。200は全面に敲打痕が多く付いており、特に端部は敲打によって平



第20図 出土磨石類（磨石・礫石・壘石）実測図1 (1/3)

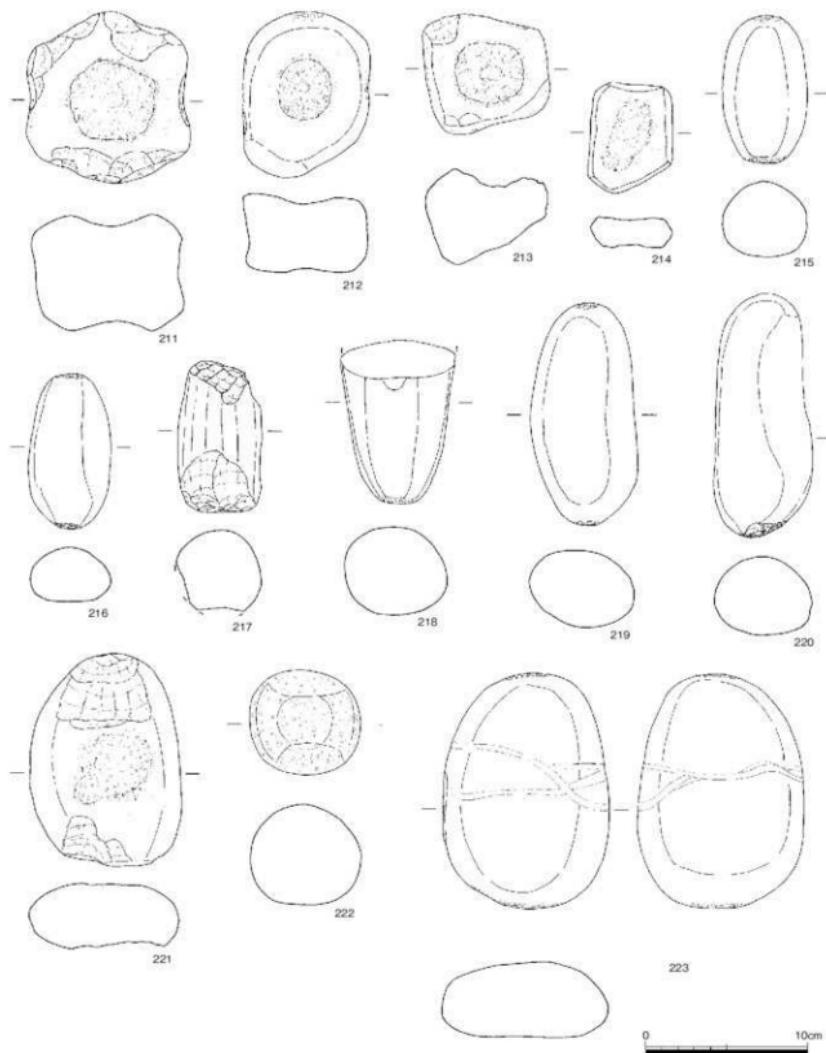


第21図 出土磨石類（磨石・敲石・窪石）実測図2 (1/3)

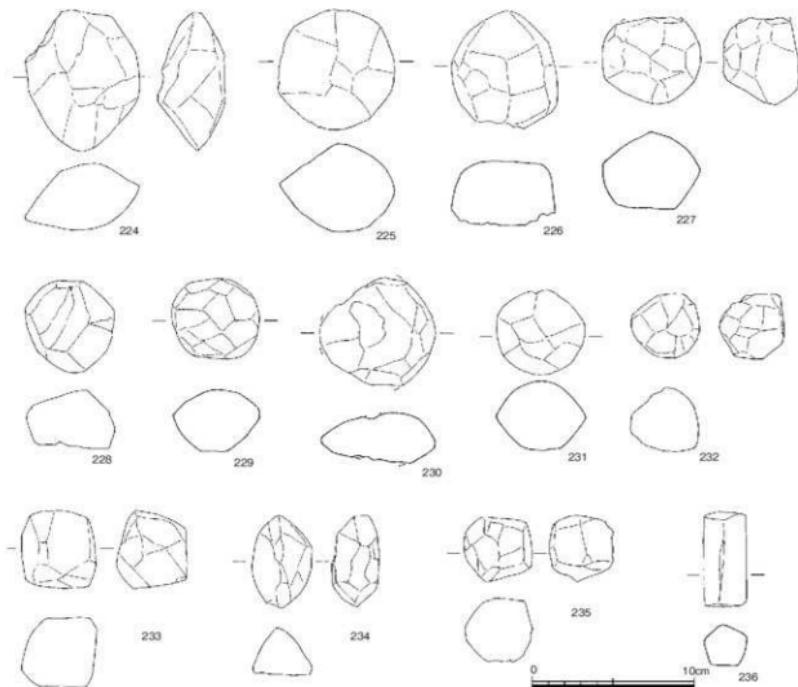


第22図 出土磨石類（磨石・敲石・窪石）実測図3 (1/3)





第23図 出土磨石類（磨石・敲石・窪石）実測図4 (1/3)



第24図 出土磨石類（磨石・敷石・崩石）実測図5 (1/3)

坦化している。201も敲打痕が多く付いている。両側縁に1～2箇所窪みがあるが、通常の敲打による窪みとは、若干様相が異なるが、どのようにしてできたものか判然としない。202は全面磨かれているが、自然によるものと思われる。敲打痕が両面中央部にある。203も全面自然によるミガキ状を呈している。中央部など数箇所に敲打痕がある。

204～207は側面に剥離状の激しい敲打痕を有するものである。204は側縁から片面に剥離部分が多く認められる。緑色片岩系の石で敲打具と考えられる。205は剥離部分は無いものの、側面に敲打痕跡が多く付き、片面中央部分は窪んでいる。206は側縁の一箇所に細かな剥離が多く付いている。207は端部・側縁に敲打によって窪み、両面中央部にも敲打痕が残っている。208は、図面上はわからないが、側縁に敲打痕が多くつき、片面中央部にも敲打痕が残っている。その部分周辺が赤化しており、水銀朱かとも思われたが、付き方が不自然で、色合いも鉄さびに近いことから、鉄分の付着によるものと思われる。

209は花崗岩製で、断面三角形を呈する。ほぼ全面きれいに磨かれており、敲打の痕跡や打撃痕は無い。210も全面磨かれている。両面中央部に敲打痕跡がある。片側端部が剥離が施されているが、その後の剥離の後に端部中央が敲打によって潰れている。剥離自体が敲打時のものではないか、とも考えられる。

211～214は大きなくぼみを持つものである。211は両面と側面5箇所が大きく窪んでいる。窪みの中には敲打痕跡が無数残っており、敲打による窪みであることがわかる。212は両面中央と側面1箇所が大きく窪んでいる。窪み以外にも敲打痕が残っている部分が多い。213は一箇所が大きく窪んでいるが、敲打によって剥離したと思われる部分がある。214は薄い材であるが、両面中央部が窪み、側面にも敲打痕が無数についている。

215～221は人為的な研磨があまり無く、端部に敲打痕がある長めのものである。215は玄武岩製で両端部と中央部2箇所に敲打痕があるが、特に端部片側は敲打によって潰れている。216の敲打痕はわずかである。217は両端部が大きく剥離している。いわゆる敲打による剥離ではない。たとえば大型の原石を叩き割った際などに剥離とも考えられないか。玄武岩製。218は先端部に剥離が1箇所と若干の敲打痕が認められる。219・220は両端部に敲打痕がある。221は両端部の逆の面に大きな剥離がある。217と同様な使い方が考えられる。

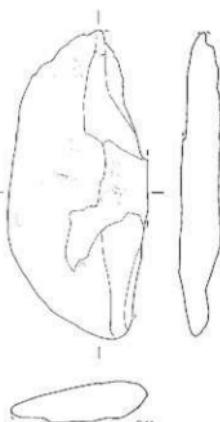
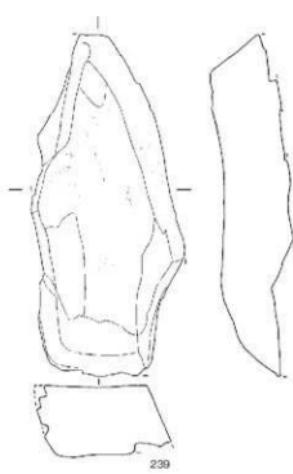
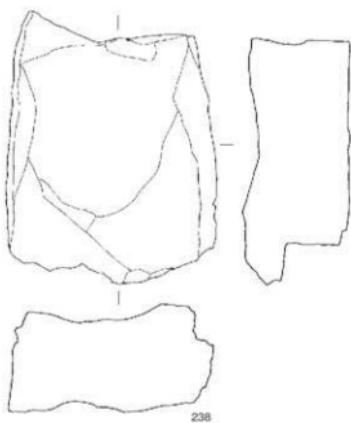
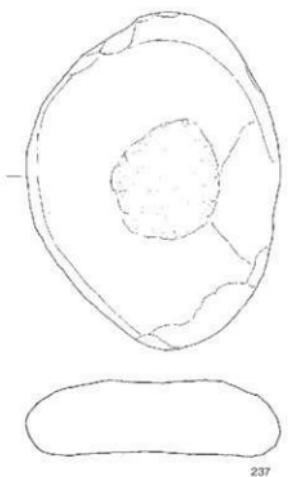
222は玄武岩製で、球形に近い。全面に敲打痕があり磨いている。223は自然に磨かれたと思われる片岩系の石で、両端部と一側面に敲打痕があり、その部分は平坦化している。図にあるように緊縛状の痕跡が残っている。線状の部分だけ石の表面が擦れています。紐であるなら、2重に巻いていることになるが、紐の痕跡は直線では無い。

224～235は異質な石器である。小さな花崗岩を平坦な面になるまで擦り、平坦面をいくつも作り出している。まさに多面体石器とも呼んで良いような形態をしている。そろばんのコマのような形態のもの、さいころに近いものなど様々である。花崗岩製であること、小さいこと、ほぼ全面が磨かれていることが共通している。何かを磨いた結果なのか、本品磨くことが目的なのか、皆目不明である。236も花崗岩製で、五角柱の形態を呈している。片側の端面はほぼ平坦で磨かれている。その反対側の端面は完全に平坦ではないが、敲打痕があり、一部磨いているようで、完形品と考えられる。以上の多面体石器は弥生時代中期層を中心に出土している。

#### 台石・石皿・砥石（第25～31図、図版11・12）

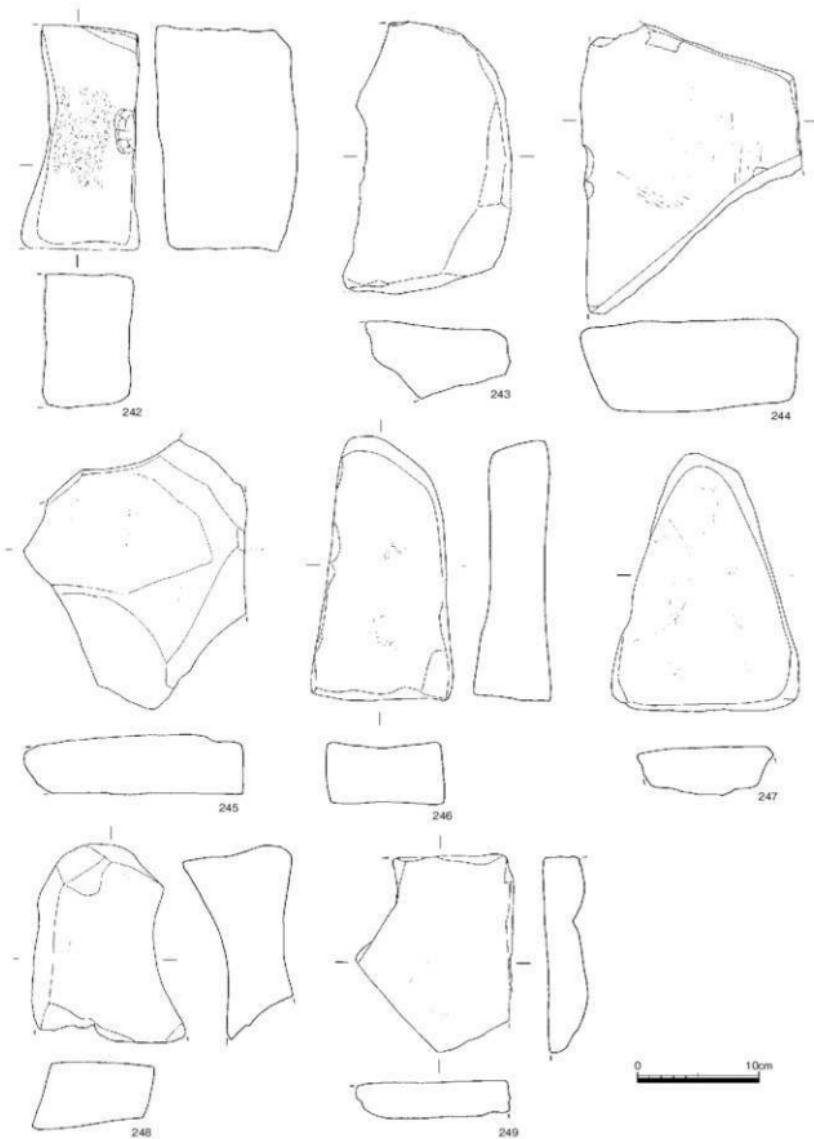
石皿状のもの、台石と呼ばれる形態のものと砥石を一括して掲載した。237は長さ28cm、重さ5850gを測る花崗岩製で表面は中央部が窪み、反対面は平坦である。石皿に近い。238は砂岩質の石材で、両面の一部に磨かれたような痕跡がある。239は細かく割れる堆積岩で、粘板岩か。表面と右側面が砥面である。240は扁平な石材で、安山岩に似る。周縁部は一部調整を施している。裏面全面と左側面が磨かれているが、表面の状況は砥石という印象を受けない。重量は3.5kgに近い。241は泥岩に近い石材で、一部を欠失している。両面の一部に研磨の痕跡があるが、積極的に砥石といえる印象ではない。242は砂岩質の石材で、10cm近い厚さがある。使用しているのは図の表面だけで、中央に敲打痕、その周囲に研磨が残る。兼用品であろうか。243は玄武岩か。風化のため明確ではないが、石皿状を呈している。ただし自然にできた可能性もある。244は砂岩質の石材。研磨状の痕跡と、擦痕が数条確認できるが、表面は小さな凹凸が多く、砥石と呼ぶほど使い込まれていない。245は砂岩質の石材で、一部研磨痕があるが、これも砥石と積極的に呼べるものではない。

246以下は、明確に砥石と呼べるものである。砥石は特に粘板岩質の石材のものが細片に分離しており、正確な個体数はわからないが、60点を図化した。246は砂岩質で、4面ともかなり使用している。また図の表面・裏面には敲打痕が残っている。247は平坦な泥岩質ので、表面全面がよく磨かれ、ほぼ平坦になっている。他の面はほぼ自然面である。248は白色を呈する石材で、4面と図の上面も使用している。裏面には沈線状の擦痕が1条ある。249は泥岩状の石材で、図の表面全面を砥

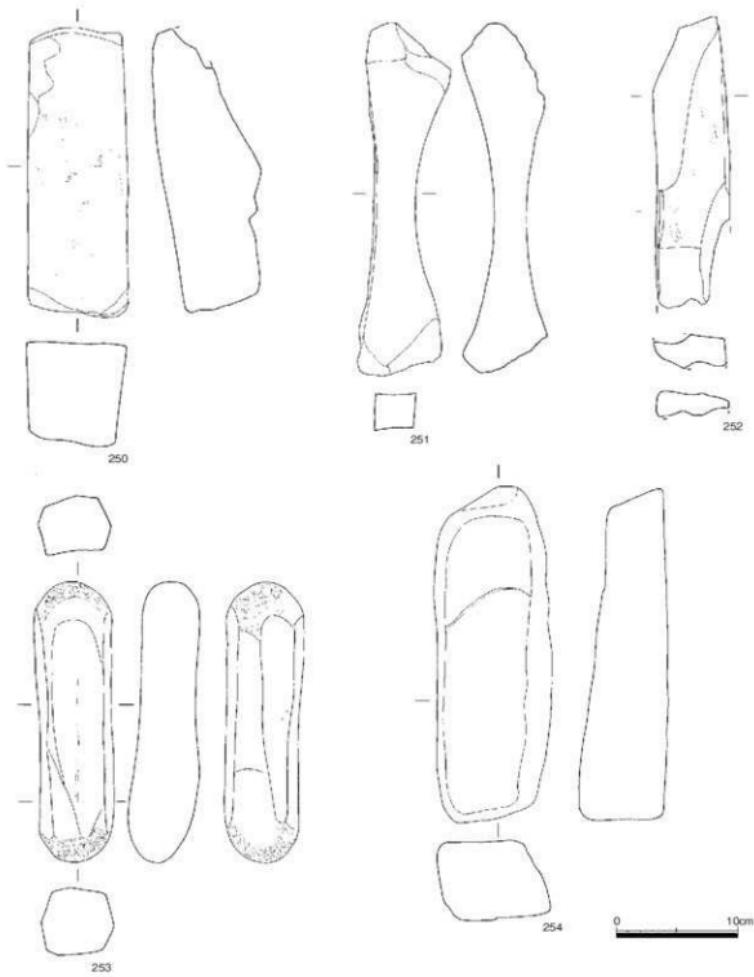


0 10cm

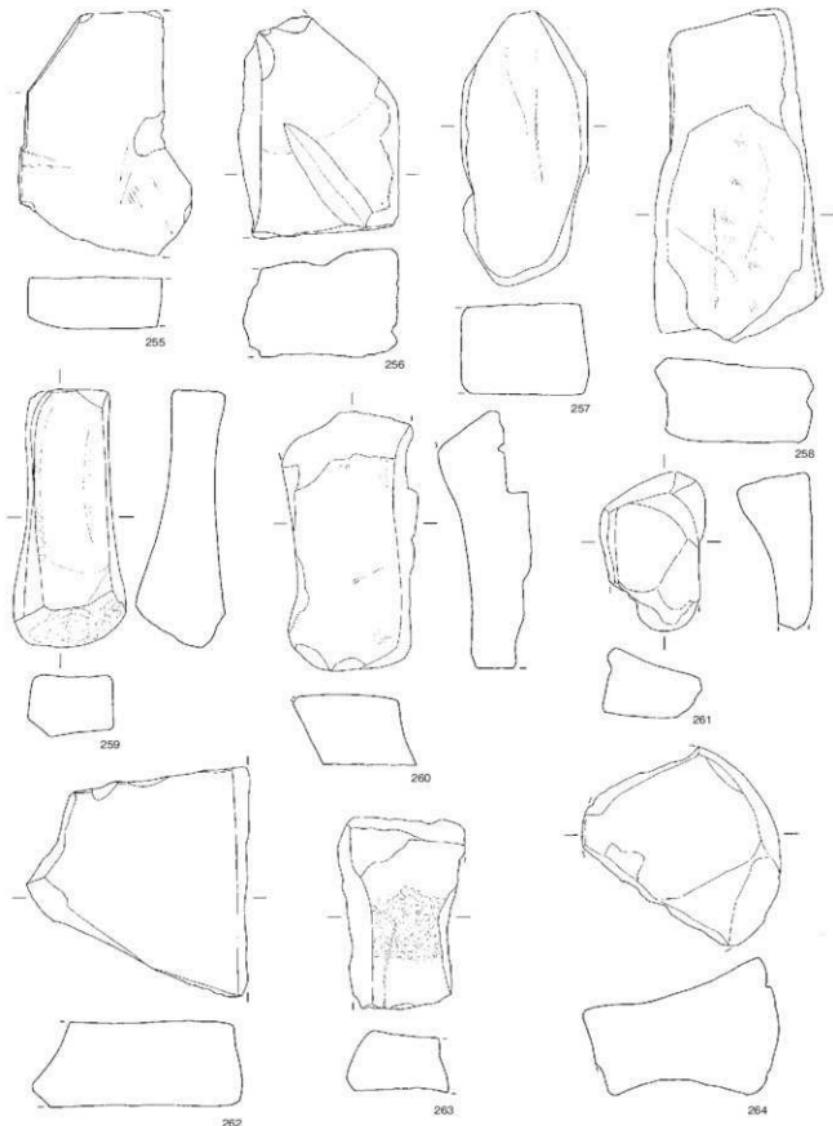
第25図 出土砥石実測図1 (1/4)



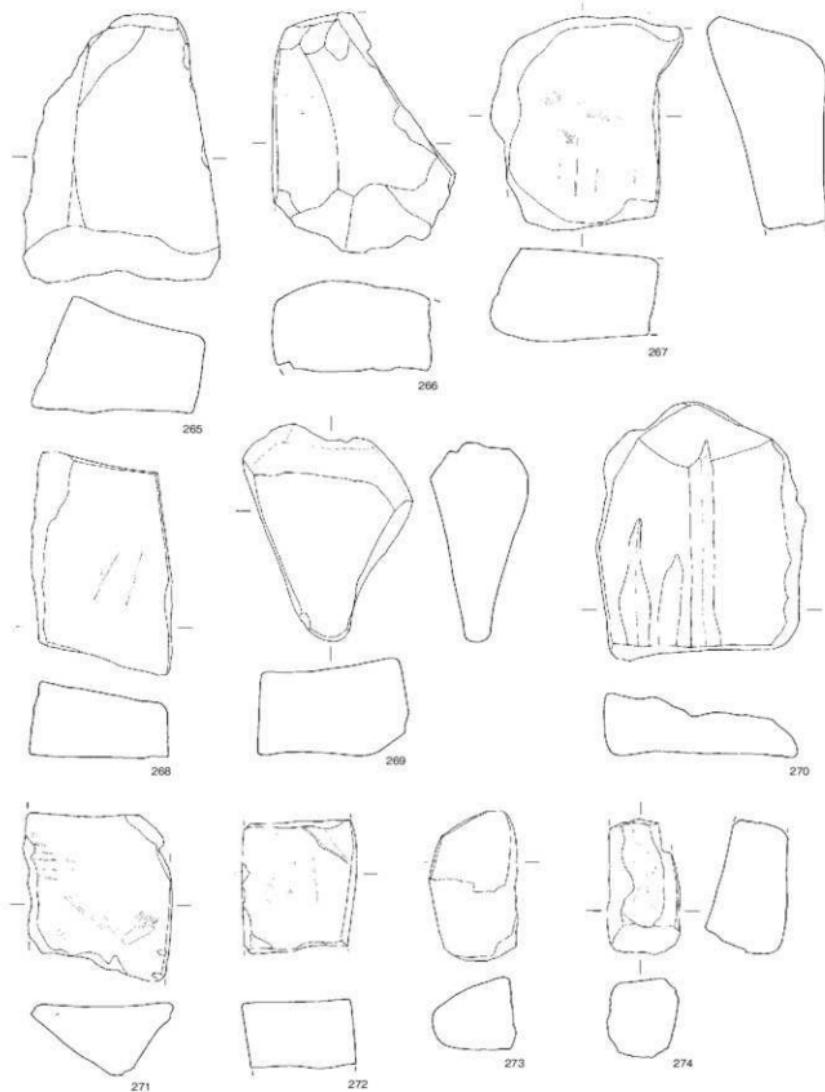
第26図 出土砥石実測図2 (1/4)



第27図 出土砥石実測図3 (1/4)



第28図 出土砥石実測図4 (1/3)

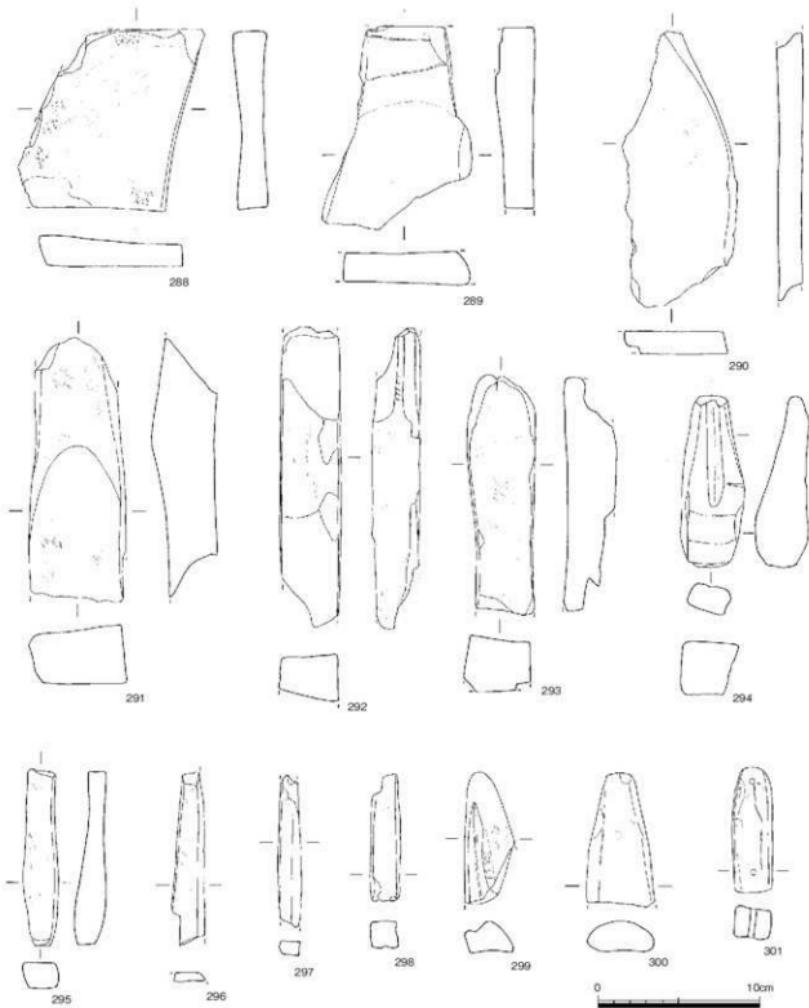


0 10cm

第29図 出土砥石実測図5 (1/3)



第30図 出土砥石実測図 6 (1/3)



第31図 出土砥石実測図7 (1/3)

面として使用し、平坦化している。250は泥岩質の厚手の砥石である。図の表面と両側面を使用し、特に表面はツルツルになっている。裏面は起伏が激しく、据え付けるには具合がよくない。251は砂岩質の石材で、中央部付近で折れそうな細さになるまで使用している。252は粘板岩質の石材で、大型の砥石が剥離したものである可能性がある。表面と左側面がよく使用されている。253は砂岩製。細かく見ると、7角柱の形状をしており、各面が砥面として使用されている。また両端面には敲打状の痕跡が全面に残っている。254は石材不明。両面がかなり使用されている。

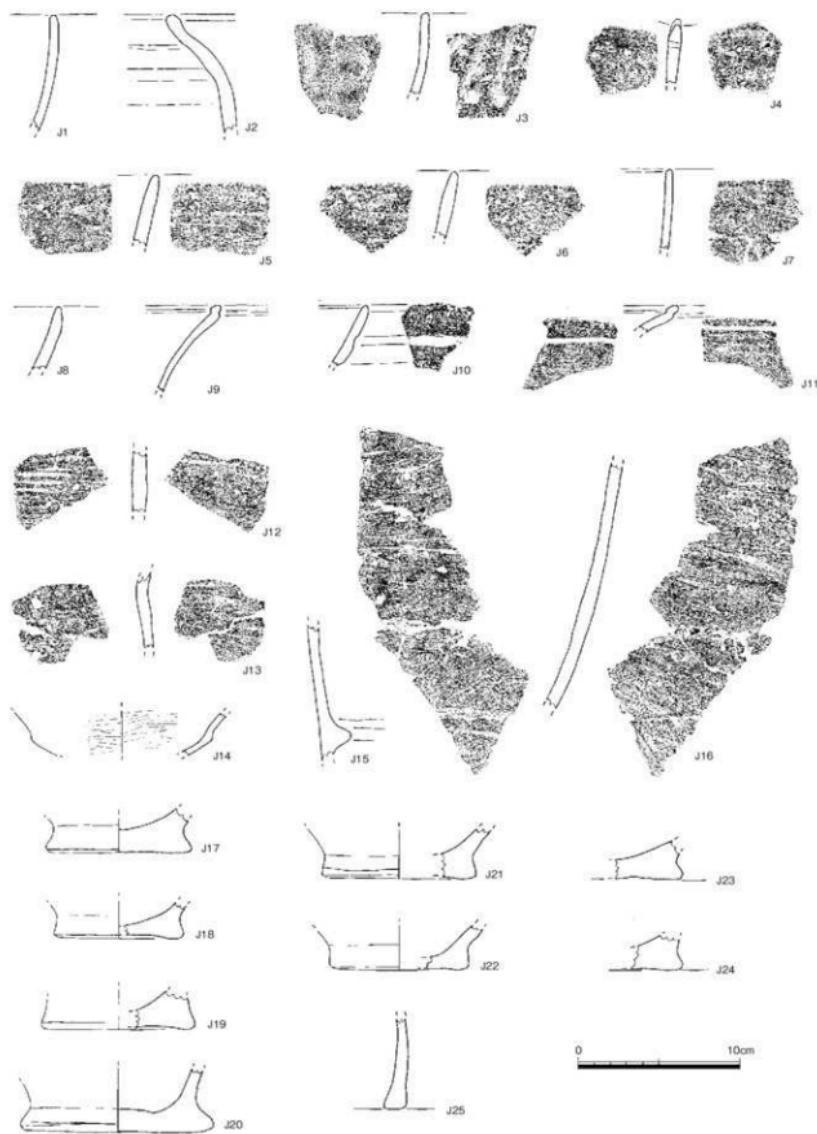
255以下は中・小型の砥石である。255は表面のみの使用。256は矢柄研磨器のように深い溝がある。斧などの刃部を研磨したのか。257は両面と左側面を使用している。258は両面の下半を使用しており、線状の擦痕が残っている。259は砂岩製で、端部以外を砥面として利用し、端部には敲打痕が残っている。260は裏面を欠いており、他の3面は砥面である。263は遺存している3面を砥面として使っているが、表面と裏面に敲打痕が多く残っている。砥石として使用した後に敲打されている。265は花崗岩質の石材で、表面と右側面のみ使用している。267は凝灰岩質に近い石材だが、左側面に自然にあいたと思われる孔があり、海岸べたで拾ったのか。両面をよく使用している。269は小型の完形品である。4面とも砥面として使用しており、原形がわからないほど使い込んでいる。270は石材不明。表面中央に、矢柄研磨器のような深い溝1条とその左側に浅い溝が2条ある。表面の研磨痕はさほど明瞭ではなく、裏面の一部に研磨痕が認められる。

271～274は小型品または小型の破片である。271は白色の石材で、砥面は一面のみで、断面形が三角形を呈しているため、このままでは据え置きができない。手持ちの砥石か。273は小型の砥石で、図の上部のみが砥面として使用されている。274も小型の砥石で、表面全面と裏面の一部のみが使用されている。275～286は縦長の砥石。275は粘板岩製で、細かく割れた接合資料である。ほぼ全面を使用し、擦痕が無数についている。279は両面とも中央部が研磨によって大きく窪んでいる。286は中央部に1条の深い溝とその左側に浅い溝を1条有している。288は表面に無数の擦痕がついている。

291から294・296～298は粘板岩系の石材を用いた小型で縦長の砥石である。石材の性質上、縦方向に剥離しているものが多いが、遺存面はよく磨かれている。295は石材不明。小型であるが、4面ともよく使用されている。299は狭い面の全面が溝状で、研磨の痕跡が明瞭である。他の面も使用されている。300は砂岩質。表面は円弧を描いた断面形で、裏面は途中に段を有しているが、いずれの面もよく研磨されている。301は粘板岩製か。両端部に径2～3 mmの孔を穿っている。図の左側面は研磨に相当使用されているが、ほかの面は少量の研磨とともに敲打痕が認められる。片端に孔をあけ、紐を通して携帯用にした砥石は多いが、両端にあけたものは比較的珍しい印象を受ける。

### 3 弥生時代・古墳時代層出土繩文土器（第32図、図版13）

SD01の弥生時代・古墳時代包含層から出土した繩文土器である。既報告書でもごく一部報告をしているが、既報告分を除いて、まとめて報告する。1～3・10・15・25は滑石を含んだ土器で、阿高式系統の土器と思われる。1は文様は無い。色調が黒褐色を呈し、器壁が5 mm以下で曾畠式の可能性もある。2は胴部が大きく膨らむ無頬の壺か鉢の形状で、この時期としては珍しい器形である。器壁は1 cm前後と厚く、煤は付着していないが、下部がやや煤茶けているような色調である。3は上下・左右ともによくわからない。凹線文を施している。10は凹線文1条を施している。15は深鉢形土器で、太くて厚めの突帯を1条持っている。25は異質な土器片である。口縁部・脚部の両方とも可



※本文中はJを略している。

第32図 弥生時代・古墳時代包含層出土縄文土器実測図（1/3）

能性があるが、端部が水平面を成していることと、口縁部の場合、全体の形状が想像つかないところから、阿高式系土器に散見される高環形土器の脚部ではないかと考えられるが、それでも直立に立つ形態となり、やや異質である。1～3の3点は黒っぽい色調であるが、10・25は橙色を呈している。15は橙色の色調であるが、突帯のみ黒い。

4～9、11～24は晩期の土器片である。4～9は晩期の粗製深鉢口縁部で、外面は条痕もしくはナデ、内面はナデで仕上げている。4はいわゆる孔列文土器で、焼成前に孔を2つあけている。10は大型の鉢の口縁部で、精製土器と粗製土器の中間的な土器である。全面ていねいなナデで仕上げているが、胎土が粗い砂粒であるため、精製土器の印象が無い。

11は浅鉢の口縁部で、全面ナデで仕上げている。胎土は粗く、精製土器とは言えない。12・13・16は粗製深鉢で両面とも条痕を施している。14は精製の浅鉢で、両面とも磨いている。灰黒色を呈している。

17～24は晩期粗製深鉢の底部と思われる。いずれも胎土が粗く、圧痕条の窪みが多数あるものが多い。20は底端部の張り出しが強い。

#### 4 縄文時代包含層出土遺物

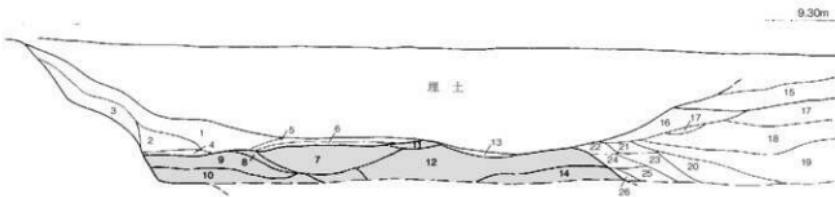
SD01の最下層には縄文時代晩期の遺物を含む層がある（第33図・図版3）。SD01下層は當時水が流れ、溝の中は土砂の堆積・削平を繰り返していたため、縄文時代晩期の層は点々と残存している状況である。縄文時代晩期の層は、D・E-5・6区川底でまとまって残り、C-1区及びE-3区川底でも小さな範囲で検出された。このうちE-6区南側では、縄文時代晩期の包含層形成後、東側から山土が崩落し、土砂が流入したため比較的良好な状態で残存している。また崩落の結果、弥生時代中期時の川幅は、東側で約4m狭くなっている。

川の西側立ち上がり付近で、遺構面であるシルト層上部の5cm前後に縄文時代晩期の遺物を含んでいる地点があった（第34図・図版4）。確認できたのは、C-4区、D-4区、D-5区で、川のほとりのみでの検出である。いずれの区でもドットをとった。C-4区では比較的まとまりがあり約150点出土したが、D-4区・5区では合わせて100点に満たない。また、土器片はいずれも細片に近く、石器もD-5区で石礫片1点が出土しただけで、黒曜石等のチップ・フレイク等の量もさほど多くない。以下、地点ごとに記述する。

##### （1）C-1区出土縄文土器（第35～37図、図版13・14）

B・C-1～2区付近では、SD01は大きく流れの方向を変えているが、川底は広く平坦になっている。B・C-1区では、弥生時代・古墳時代の遺物は上層付近のみから出土し、中層はほぼ無遺物、下層からは縄文時代晩期の遺物が少量出土した。B-2区付近の川底でL字に曲がる幅約1.5mの小溝を検出したが、この溝の中に種実（ヤマモモ・イチイガシ・コナラ属等）が多量に入っており、種実の<sup>14</sup>C年代はB.C.770年～同400年の年代が出ている。小溝からの人工物は出土しておらず、B-2区では川底付近からの出土遺物もほとんどない。<sup>14</sup>C年代からは弥生時代早期の年代が考えられるが、同期の遺物はD-1区から有軸羽状文を施した板付式土器の小片が1点出土しているだけである（元岡・桑原遺跡群21P86）。

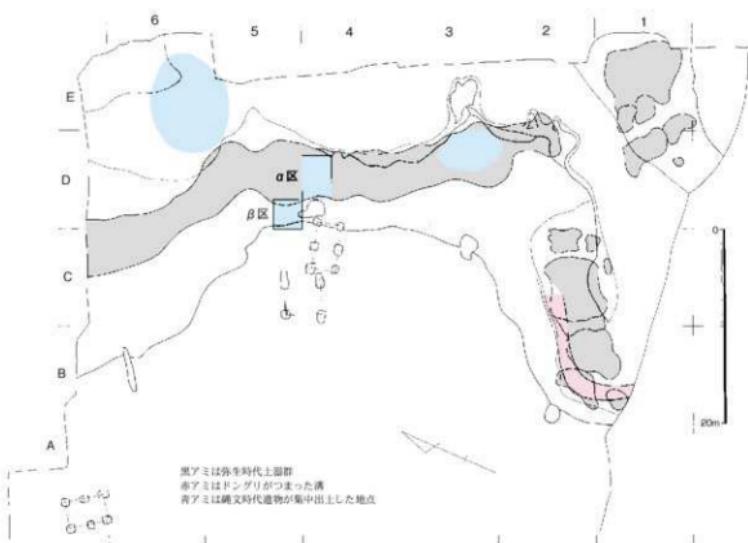
26～31は粗製深鉢である。26は口縁下1.5cmに土器焼成前に施した連続する刺突孔を施しており、3つの穿孔が確認できる。外面は条痕、内面はナデで仕上げている。いわゆる孔列文土器である。

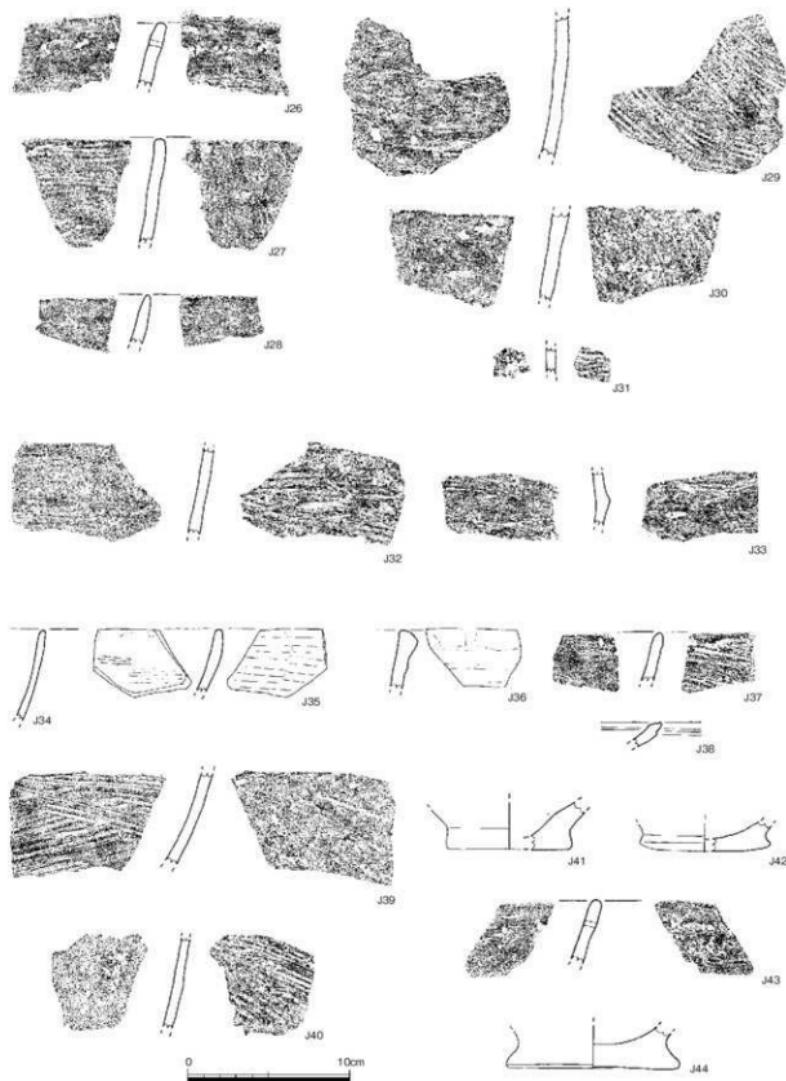


第33図 E-5区東側拡張区土層断面実測図 (1/400)

アミ部分は縄文時代包含層

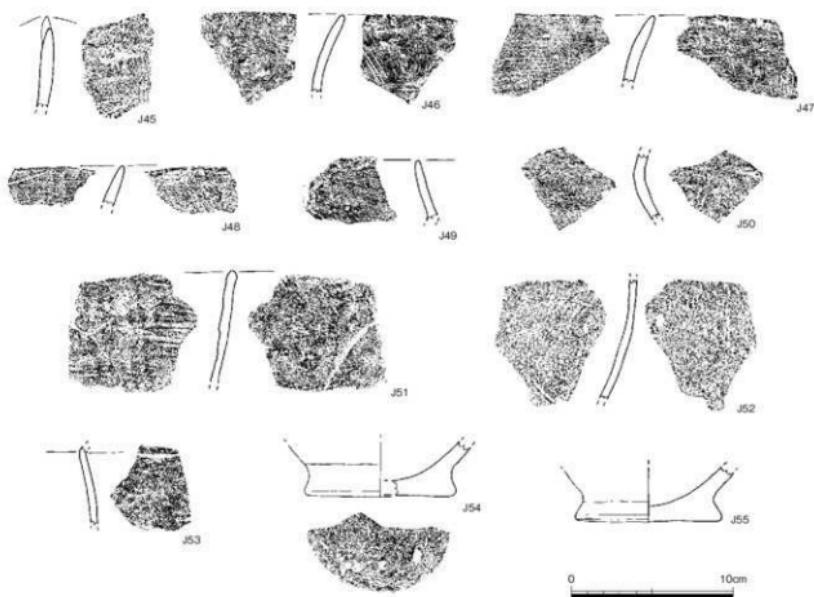
1 赤味を帯びた花崗岩風化土	10 明赤褐色粗砂	19 黒色粘質土(腐葉土)
2 花崗岩風化土	11 浅黄色細砂	20 オリーブ黑色砂混じり腐葉土
3 赤みを強く帯びた花崗岩風化土	12 浅黄色～橙色粗砂	21 黒褐色土混じり細砂
4 橙色粘質土	13 5と同じ	22 灰白色細砂
5 明青灰色砂混じり粘質土	14 灰白色細砂	23 灰色～灰白色細砂
6 明赤褐色砂混じり粘質土	15 淡黄色砂混じり粘質土	24 緑灰色シルト
7 淡黄色～橙色粗砂	16 明青灰色砂混じりシルト	25 黒褐色粘質土
8 5より明るい	17 黒色腐葉土	26 明緑灰色粗砂
9 暗青灰色砂混じり粘質土	18 灰白色～オリーブ黑色細砂・粗砂・腐葉土互層	





※本文中はJを略している。

第35図 繩文時代包含層出土繩文土器実測図1(1/3)



第36図 縄文時代包含層出土縄文土器実測図2 (1/3)

孔列文土器は後述するE-3区でも出土している。27は外面は条痕の後ナデ、内面は条痕で仕上げる。28は両面ともナデ仕上げである。29は胴部片で、両面とも条痕を施しているが、内面は一部条痕の後にナデを施している。30は外面条痕、内面はナデで仕上げ、内面に粘土の接合痕が明瞭に残っている。

#### (2) D-3区出土土器

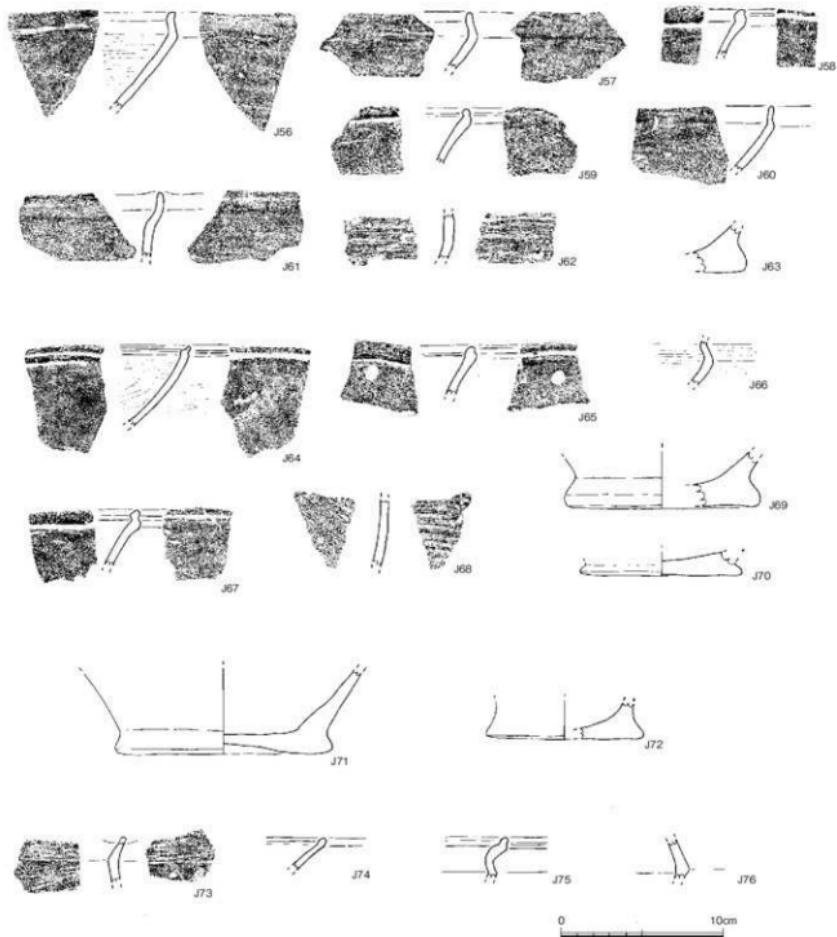
D-3区ではSD01川底の西側がやや広めの平坦を成しており、基盤層であるシルト層上部から縄文時代晩期の遺物が出土した。遺物はドットを取って取り上げたが、約200点の遺物が出土した。出土した土器のほとんどは粗製深鉢で、細片が多く、実測したのは2点のみである。32・33は粗製深鉢の胴部片で、条痕を施している。

#### (3) E-3区出土土器

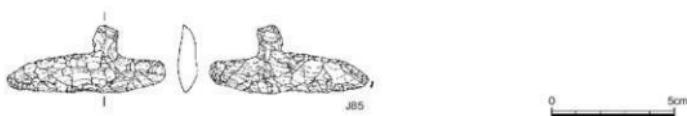
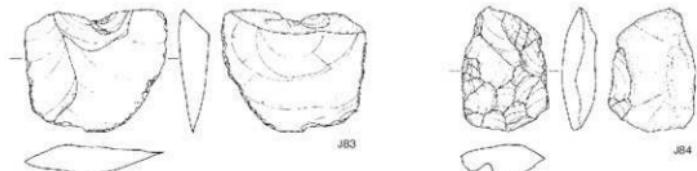
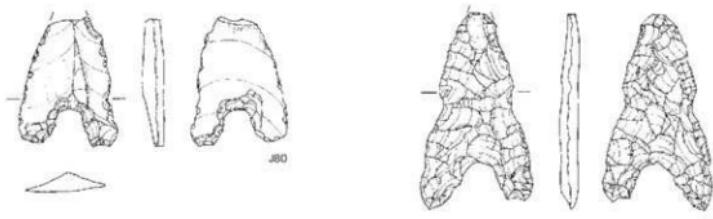
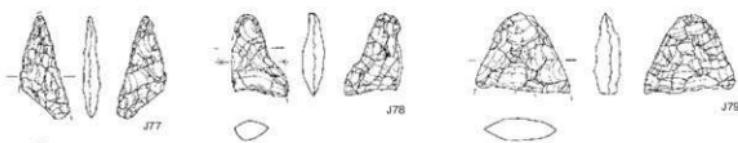
E-3区川底にある砂礫層のごく一部で縄文土器が出土した。43は晩期の粗製深鉢で、孔列文土器である。26と同様、口縁下約1.5cmの位置に、焼成前に孔を穿っている。両面ともナデで仕上げている。44は粗製深鉢土器の底部で、底径10.3cmを測る。器面には圧痕状のものが無数に観察できる。

#### (4) C-4区周辺出土土器

C-4区にあるSB08南側あたりの遺構面であるシルト層中から出土した。約100点出土したが、



第37図 繩文時代包含層出土縄文土器実測図3 (1/3)



第38図 繩文時代包含層出土石器実測図 (1/1, 1/2)

比較的大きな破片が多い。34は薄手で滑石を含む土器である。曾畠系か阿高系か判断付かないが、器面の薄さから、前者かと思われる。35は半精製の土器で鉢か。ミガキに近いナデ調整で、両面に赤い粒子状のものがわずかに残っており、あるいは顔料を塗布していた可能性もある。36は口縁部に太い凹線を2条めぐらしている。37は外面が条痕、内面はナデで仕上げている。38は浅鉢の小片。39・40は粗製深鉢の胴部片で、条痕・ナデで仕上げている。41・42は粗製土器の底部で、41は黒褐色系、42は赤褐色系の色調を呈している。

#### (5) D-4区(α区)出土土器

遺構面であるシルト層中から最初に縄文土器を発見した地点で、縄文α区と名付け、ドットを取つて取り上げた。総数130点が出土した。45は山形を呈すると思われる。両面ともナデ調整である。46～48は粗製深鉢で、条痕もしくはナデ仕上げている。49は内傾する口縁部片で、頸部で折れ曲がる。遺存状況が悪いため不明瞭ではあるが、刻みが施しているようである。突堤文土器と考えられる。50は頸部の破片で、口縁部は外傾している。粗製だが壺形であろうか。51・52は粗製深鉢で、53は壺ないし鉢かと思われるが、胎土はやや粗い54・55は粗製土器の底部で、54の外底部には圧痕がある。

#### (6) D-5区(β区)出土土器

α区の北側に位置し、β区と名付けた。α区・β区周辺でも縄文土器が散見できるが、量が極端に少ない。β区では約140点が出土した。粗製土器が極端に少なく、図化したものもほとんど半精製の鉢形土器で、精製の黒色磨研土器と呼べるものも極めて少ない。56は半精製の鉢で、ていねいなナデで仕上げている。57は数少ない赤褐色系の色調である。61はわずかに山形気味である。

64～70はD-5区地山の注記がある土器で、α区を認識する前に掘り出した土器と思われる。64は半精製の鉢で、ていねいなナデで仕上げている。65も半精製の鉢で、焼成後の穿孔を施しており、補修孔と考えられる。65は精製の鉢で、色調は灰白色を呈している。69・70は粗製深鉢の底部で、69は底径12cm、70は9.9cmを測る。

#### (7) D-4区～E-6区底出土土器

D・E-4区の北側から同6区の南側の川底で晩期土器が出土した。特にE-5区北側から同6区南側にかけては、上述のとおり縄文時代晩期以後に東側斜面が崩落したため、晩期包含層がパックされた状態で保存されていた（第37図、図版3）。晩期包含層は川底に溜まった砂礫層で、もっとも厚い部分で30cmの厚さがある。この層から出土した種子の<sup>14</sup>C年代は1390B.C.～1295B.C.（曆年較正後、68.2%確率）で、矛盾しない年代がでている。E-6区川底では、後述する石鎚が4点が出土したが、土器の出土量は多くなく、かつ細片がほとんどであった。

71は滑石を含む底部で、底部径13.2cmを測る。D-4区出土。72は晩期粗製土器の底部で底径9.7cmを測る。E-5区出土。73～76はD-6区・E-6区南側川底から出土した。73は外反する口縁部を有し、鉢か。条痕を施している。74は浅鉢、75は鉢である。76は胴部屈曲部で鉢であろうか。

#### (8) 縄文時代包含層出土石器

SD01川底と川の西岸付近の縄文時代包含層から明確に出土した石器（フレイク・チップ含む）は浅コンテナ1箱で、9点が利器である。このほかにも弥生時代・古墳時代包含層で報告したうち、川底から出土した石器の内、数点が縄文時代のものである可能性がある。

77は黒曜石製石鎌で、D-3区土器群9の下の遺構面から出土した。78はE-6区川底から出土した黒曜石製石鎌である。79は縄文B区から出土した黒曜石製石鎌。80はいわゆる剥片鎌で、両面とも剥離面を大きく残している。黒曜石製でE-6区川底から出土した。81はほぼ完形で、長さ2.9cmを測る。黒曜石製で、E-6区川底から出土した。82は先端部をわずかに欠いている。同じくE-6区川底から出土した。黒曜石製で、長さ4cmを測る。83は安山岩の剥片を利用したスクレイパーで、長さ5.8cmを測る。84は安山岩製の剥片で加工痕が認められる。85は横長の石匙で、黒曜石製である。長さ6.5cmを測る。

## 5 まとめ

この報告で、第42次調査の事実報告を完結する。北側隣接地である第52次調査で、当調査区から統くSD01・02を検出しているため、全体的なまとめに際しては第52次調査区の報告時にあわせてまとめるにし、ここでは、本書で報告した石器と縄文時代遺物に関する知見をまとめ、次に本調査区の立地、最後に時期別に簡単にまとめることで結語としたい。

### 1 本報告書掲載遺物について

#### (1) 弥生時代以降の石器

SD01は、縄文時代晩期に開削され、古墳時代初頭には概ね埋まったが、多種多様な石器が出土した。その総量はコンテナ40箱以上に及ぶが、ここでは概略の傾向を示すことでその責としたい。

出土した土器が弥生時代中期中頃後半～古墳時代初頭であることから、石鎌や剥片石器の数は多くはない、石斧も数は多くない。それに比して紡錘車・石錐・磨石系・砥石は多く出土している。特に磨石・凹石・敲石の類は多種多様なものが出土した。この中には元岡・桑原遺跡群第18次調査で出土した、側面にひっかき傷のような敲打痕が無数についている磨石も数点出土しているが、川の最上層で、古墳時代層からの出土である。第18次調査で推定したように鉄製品との関係が考えられる。224～235の石器は、全面を磨いて多面体を成しているが、大きさは5～10cmと小型で、用途は判然としない。

石庖丁は比較的数量があり、未成品も出土した。中でもいわゆる輝緑凝灰岩製のものは半数近くを占め、原石に近いものや未成品も含まれている。弥生時代中期の今山産石斧が、ほぼ完成形に近い形で移出されるのは大きな相違である。砥石の多さは、鉄器の多さを物語るのかもしれない。鉄器自身の出土はさほど多くは無いが、後述するように、大陸系の遺物の多さからみても、「見えない遺物」として、鉄製品の存在は考慮すべきところである。

#### (2) 縄文時代遺物

出土縄文土器は、前期・中期後半～後期初頭・晩期後半のものが出土したが、前2時期は数点の出土で、大半がSD01開削時期のものである晩期後半に属するものである。時期的には黒川式土器前後で、突帯文土器とみられる土器が数点含まれている。出土位置は川底と川岸に限られている。川以外の遺構は検出されていない。出土した土器の破片は細片に近いものが多く、遺構の検出も無く、生活域は今回出土した地点からやや離れたところにあるものと思われる。

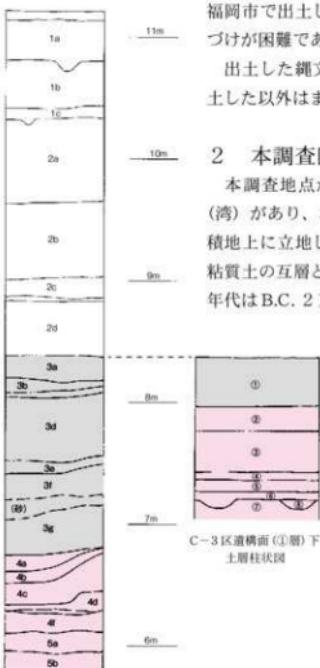
出土した土器の中に、孔列文土器と呼ばれるものが3点出土した(J4・26・43)。いずれも粗製の深鉢で、口縁部直下に、焼成前に径5mm前後の孔を連続的にあけている。同種の土器は、福岡市内で野多目A遺跡第2次調査で1点と田村遺跡第5次調査で2点出土しており、3点とも粗製の深鉢で、当遺跡の3点も含めてすべて孔は貫通している。孔列文土器については、以前より朝鮮半島の土器との関係が論じられ、近年では九州南東部域の孔列文土器を中心に吉本正典氏がまとめているが<sup>(1)</sup>、



当遺跡出土の孔列文土器



田村遺跡（左2点）・野多目遺跡出土の孔列文土器



左：スミアミは SD01 墓上  
赤アミは縄文時代前期以前の層  
(旧石器時代の可能性大)  
右：スミアミはシルト層  
赤アミは縄文時代前期以前の層  
(7層は 20000 年前の樹木出土)

第39図 Y-1区調査区南壁土層柱状図（左）及びC-3区遺構面下土層柱状図

福岡市で出土した6点は、いずれも小破片で、土器の個体全体での位置づけが困難であり、詳細が論じられる状況では無い。

出土した縄文時代石器は少なく、E-6区で石鏃が数点まとめて出土した以外はまとまりもなかった。

## 2 本調査区の立地

本調査地点から200m南側は、中世頃まで古今津湾と呼ばれる入江（湾）があり、本調査区は前面は海で、背後には丘陵がある、ごく狭い沖積地上に立地している。遺構面は白色系のシルト層で、その下は粗砂と粘質土の互層となり、C-3区の遺構面下1m強から出土した樹木の<sup>14</sup>C年代はB.C. 2万年の年代が出ている。沖積地中央での岩盤は確認できていない。以下、時期別の景観についてまとめる。

### 大きな谷の時代（縄文時代海進期以前）

東側の狭い尾根と西側の低台地の間は、一つの深い谷であった。上述の樹木の年代は最終氷期の最寒冷期にあたり前面の海は存在しない。当調査区南端の土層断面（左図）では、標高6mでも地山を確認できておらず、谷の深さは相当深い。遺構面であるシルト層から下は、粘土と粗砂の互層になっている。調査区南端土層断面5層は遺構面下2.5mであるが、ここも同様に互層で、谷部は穏やかな沈殿と水の流れによる堆積を繰り返したことわかる。遺構面のシルト層は、次に述べるように縄文海進期に溜まった層である可能性がある。当遺跡の3km南東にある周船寺遺跡でもほぼ同時期と考えられるシルト層が、弥生時代以降の基盤層となっている。

一方、谷の両サイドについても、SD01・02によつて花崗岩岩盤が開析されており、この時期の東西の斜面は、現在より緩やかだったと考えられる。第42次調査区の北側隣接地である第52次調査区の東側の斜面では、B.C. 12,000年の放射性炭素年代が出た土器・石

器が出土しており、南西に向かって傾斜する穏やかな斜面上で、前面に水が溜まった大きな谷があるという景観になるであろうか。

#### 沖積平地とSD01・02の誕生（縄文海進期から後・晚期海退期）

縄文海進期は、遺跡の前面（南側）150～200m先まで海が入り込んだものと考えられている。当調査区と海までの比高差が最も少ない時代で、谷全体が川のような状況であった可能性もある。シルト層はこの時期にたまつたものであろう。海進ピーク時前後の遺物は元岡桑原遺跡群ではほとんど出土しないが、ピークを少し過ぎた時期の貝塚が、本遺跡の北側（桑原飛櫛貝塚）と南側（元岡瓜尾貝塚）に存在する。

縄文時代中期以降の海退期は、谷に溜まったシルト層が乾燥・陸化したものと思われる。海退により海との比高差ができ、水の流れは狭く急になったため、谷の両側に谷川が出来上がったのが、縄文時代晚期までである。川は丘陵際の花崗岩岩盤と谷に溜まってできたシルト層を削って流れている。

#### SD01・02の埋没と水田化（弥生時代後期後半以後）

弥生時代後期になると、両河川は土砂の堆積によりしだいに浅くなっていく。特に後期後半以降は埋没土が腐葉土していることから、ほぼ河川としての役割を果たさず、淀んだ状態であったものと思われ、古墳時代初頭には、川の部分は窪地状ではあるものの、ほぼ完全に埋まっている。

両河川の埋没後には水田層と考えられる層が形成される。この層には遺物がごくわずかしか含まれていないが、「元岡・桑原遺跡群21」のP35などに記載しているように、両河川間の微高地にあら不定形土坑内や遺構面からは、近世磁器・糸切底の土師器皿、須恵器などが出土する。図39にある3枚の最下層の水田が、これら遺物のもっとも新しい時期以降のものとすれば近世以降の開田ということになるであろう。

### 3 遺物の大量廃棄と祭祀

縄文時代晚期以前にSD01・02が開削した後に両河川で遺物が出土するのは、弥生時代中期になつてである。弥生時代前期・中期初頭の土器は数点出土しているが、本格的に遺物が出土するのは須恵II式の時期である。SB08・09の2棟の掘立柱建物もこの時期と思われるが、土器の投棄が始まった時期との前後関係は不明である。建物群は、SD01の西岸緩斜面を、一部切土とおそらく一部盛土を行うことによって整地した上に建てられ、建物の横には須恵II式の彩色土器を置いており、何らかの祭祀を行つたものと考えられる。建物の柱径は1mに近く、木材で礎板を施したものあり、用途自体は判然としないものの、何らかの重要性を感じる建物である。

弥生時代中期後半から後期始め頃には、原始絵画がある琴板・複合鋸齒文がある有木文製品・人物を象った木製品などの祭的な木製品がSD02で出土する。この種の木製品はSD01ではほとんど出土していない。また中期末から後期には線刻画がある土器も出土する。

後期後半になると、腐葉土層が堆積して川の流れが悪くなっていくが、SD01で小銅鐸2点・土製勾玉・鐸形土製品などの祭祀遺物が出土する。特に小銅鐸2点・土製勾玉群が出土したSD01のB・C-1・2区付近は理まりかけている川の中を平に整地したうえで、祭祀行為を行っている可能性が高い。

弥生時代終末から古墳時代初頭になると、祭祀系遺物と認められるものはほぼ皆無に近い状態となる。一方、E-1区などでは、壺棺に使われるような大型土器が大量に廃棄され、あわせてスサ入り粘土塊や内面が焼けていない粘土塊や土器の破裂による微細土器片などが出土している。近隣で大型土器を焼成し、失敗品を廃棄した可能性が高いのではないかと推察できる。

川の利用が本格的に始まった弥生時代中期後半から、川の利用がほぼ終わりかけた後期後半には、祭祀が頻繁に行われたが、ほぼ川としての機能が終わった弥生時代終末から古墳時代初頭は、祭祀は行わ

れなくなった。祭祀は、ほぼ下流域で行われ、3区以北ではほぼ行われていない。祭祀は「水」にかかわるものと推察できるが、川岸や川の中に大量の土器や木製品が廃棄されていることから、「廃棄」に関わる祭祀的な要素もあったかもしれない。あるいは、土器の廃棄自体が祭祀ととらえられるかもしれない。

#### 4 出土遺物について

第42次調査では1万箱の遺物が出土し、あまりにも量が多く、今後さらなる研究が必要であるが、ここでは3つの遺物群についてふれる。

##### ○焼成粘土塊

SD01 E-1区で、上述のように古墳時代初頭の大型土器群が廃棄されているが、その周辺から焼けた粘土の塊がコンテナ5箱ほど出土した。粘土塊には2種類ある。1つは、スサ入り粘土でほぼ全面焼成を受けている。スサ部分が燃え尽きて細い空洞になっているものもある。このタイプが大半である。E-1区からは土器の破裂痕ではないかと考えられる器表面のみの細片が出土しており、大型土器をこの近くで焼き、焼成に失敗した大型土器・破裂痕破片・窯体片をまとめて廃棄したのではないかと思われる。

もう1つのタイプは、表面は焼成を受けているが、裏面は滑らかで焼けておらず、何かに押さえつけたような印象を受けるもので、スサは入っていない。第52次調査では銅矛の鋲型片が出土しており、鋲型の外側をくるんだ粘土とは考えられないだろうか。

##### ○ 朝鮮半島系土器

当調査では、国内外の外来系土器が多数出土しているが、特に朝鮮半島系の土器が多い。楽浪系土器、陶質土器のほか、該期の国内土器では珍しい格子目タタキを施した土器である。外来系土器については「元岡・桑原遺跡群25」P190で書かれている通りであるが、格子目タタキを施した土器は、SD01で100点前後出土した。器種は甕・壺・鉢・器台・支脚など様々である。特徴的なのは、E-1区で出土した、突帯に格子目タタキを施した大型土器である。古墳時代初頭の福井式甕棺と呼ばれるもので、糸島周辺に点々と出土している。当遺跡のものは、上述のように当地周辺で焼成した失敗品と考えられ、他の器種の土器もその可能性がある。格子目タタキを施した当該期の土器が出土した遺跡は、福岡市板付遺跡や彦岐市山中遺跡など数遺跡にかぎられ、現時点では元岡・桑原遺跡群特有のものと考えざるを得ない。格子目タタキ自体は、当該期の朝鮮半島の土器に用いられているが、SD01ではハケメの入った朝鮮半島系の器形をした土器が出土しており、朝鮮半島との交流を考えるうえで、無くてはならない資料と言える。

##### ○ 船材

SD02で、船材や船に関する部材が数点出土した。アカトリ・櫓の他、「仕切り板（隔壁）」などが出土した。特に数種類の隔壁と思われる部材が出土したことは注目できる。仕切り板状の木製品は、厚さ5cmと薄く、全形は半月形をしており、仕切り板以外の用途が浮かばない。また一見、和船の「棚板」に似た形態の木製品も出土している（元岡・桑原遺跡群23-260・266）。厚さ5cmと薄く、両端が細い。斜めの孔がないなど構造が若干異なっているが、建築材とするにはやや違和感がある。

当遺跡の南約2kmのところにある糸島市潤地頭給遺跡では弥生時代終末期の準構造船の船底や舷側などが出土しているが、同遺跡は古今津湾の奥に位置しており、同湾のすぐ近くにあるという立地で共通している。当遺跡で出土した隔壁状の板材は最大幅1.5mを超える。潤地頭給遺跡で出土した船底は現況幅65cmで、角度を考慮しても幅1mを超えるものでは無いと思われ、当遺跡の船はより大型の船であったと考えられる。上記の木製品は弥生時代後期後半～終末の層から出土したが、隔壁状木器の<sup>14</sup>C年代はB.C.100～200年の値が出ている。

出土石器一覧表

図	No.	区	出土地区	遺構	層位	遺物の種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	登録番号
3	1	C-2	右上	SD01	上部黒色粘	石鏃	1.8	1.5	0.3	0.9	黒曜石	30014
3	2	C-1	土器群 10	SD01		石鏃	2.1	1.4	0.4	1.0	安山岩	30021
3	3	D-3	土器群 9か②2	SD01		石鏃	2.1	1.2	0.3	0.5	黒曜石	30016
3	4	E-1	ベルト壁 包	SD01	上層腐葉土	石鏃	1.6	1.7	0.3	0.8	黒曜石	30153
3	5	C-2	西ベルト	SD01		石鏃	1.4	1.5	0.4	0.7	黒曜石	30152
3	6	D-5	左下	SD01	1層	石鏃	2.1	1.8	0.4	1.6	黒曜石	30149
3	7	E-6	左上と下の間ベルト	SD01	下層	石鏃	2.6	1.7	0.4	1.7	安山岩	30150
3	8	C-7	流土中	SD01		石鏃	2.3	1.4	0.3	0.9	安山岩	30025
3	9	D-3	土器群 9き-3	SD01		石鏃群	2.0	2.1	0.4	1.9	黒曜石	30146
3	10	D-4	か⑥	SD01		石鏃未製品?	3.4	2.6	0.9	6.6	安山岩	30156
3	11	C-6	右上	SD01	1層	石鏃	3.7	2.1	0.4	3.6	黒曜石	30015
3	12	E-1	左上	SD01	砂下層	石鏃	3.4	2.1	0.4	2.7	チャート	30006
3	13	D-1	ベルト	SD01		石鏃	2.7	1.5	0.3	1.4	黒曜石	30030
3	14	C-2	土器群	SD01		磨製石鏃	3.8	1.7	0.3	4.1	凝灰岩質	30092
4	15	D-6	左上	SD01	最下層砂礫	石槍	7.8	1.7	1.0	13.9	安山岩	30148
4	16	D-5・6	東西ベルト	SD01		石刃 (UF)	5.4	1.7	0.6	3.8	黒曜石	30154
4	17	C-6	土器群 9D付④	SD01		UF	4.0	1.6	0.6	2.9	黒曜石	30162
4	18	C-7	土器群 9か①中	SD01	最下層	UF	3.6	1.8	0.5	2.8	黒曜石	30023
4	19	D-6	左上	SD01	腐葉土層	UF	5.0	3.7	1.4	14.6	黒曜石	30161
4	20	D-4	左下	SD01	1層	UF	4.8	2.6	1.0	8.7	黒曜石	30167
4	21	C-1	左	SD01	1層	UF	2.9	3.2	0.7	4.5	黒曜石	30168
4	22	D-3	右上	SD01	砂上層	石鏃	2.8	1.8	0.4	1.6	黒曜石	30147
5	23	E-3	左上	SD01	下層	UF	4.7	2.6	1.3	7.5	黒曜石	30164
5	24	C-2	左下	SD01		UF	4.1	2.6	0.9	6.6	黒曜石	30169
5	25	E-1	土器群 5W	SD01		UF	4.0	2.2	1.2	7.6	黒曜石	30163
5	26	C-4		SD01	肩	石雞	4.2	2.6	0.5	4.3	黒曜石	30099
5	27	E-5	右下	SD01	砂下層	UF	3.3	2.0	0.7	4.2	黒曜石	30175
5	28	D-3	土器群 9か⑤2	SD01		石鏃未製品	3.5	2.8	1.1	6.1	黒曜石	30171
5	29	C-7	流土中	SD01		加工痕	2.6	3.5	1.0	9.3	黒曜石	30026
5	30	B-1	左	SD01	1層	石鏃未製品か	3.4	1.5	0.6	5.5	安山岩	30022
6	31	D-2	流土中	SD01		石核	3.6	5.6	1.9	32.0	黒曜石	30029
6	32	C-1	右	SD01	砂層	石核	5.8	3.3	2.2	37.2	安山岩	30019
6	33	C-1	右上	SD01	腐葉土下層	石核	4.8	6.0	2.7	74.3	安山岩	30178
7	34	D-2	右下	SD01	砂まじり腐葉土層	石核	4.7	6.0	2.8	69.6	黒曜石	30180
7	35	D-6	左下	SD01	2層	石核	4.4	3.4	2.4	25.8	黒曜石	30017
7	36	C-4	右上肩	SD01	下層	石核	3.5	4.1	1.7	18.0	黒曜石	30177
8	37	D-5	左下土器群9	SD01	下層	石核	5.5	4.9	2.3	57.8	黒曜石	30179
8	38	E-6	右下	SD01	縞文刷砂礫	石核	4.7	5.2	4.2	120.7	黒曜石	30028
9	39	C-3	台地部凹凸			石核	4.1	4.8	3.3	71.4	黒曜石	30181
9	40	A-1	凹凸面			石核	3.9	3.2	2.7	29.5	黒曜石	30018
10	41	C-1		SD01	粗砂層	石甃	6.0	3.9	0.7	16.4	安山岩	30008
10	42	D-1	ポンプ	SD01		石甃	4.4	3.7	1.1	15.4	安山岩	30007
10	43	C-6	左上土器群 15 下	SD01		石甃	3.5	4.1	0.6	10.4	安山岩	30151
10	44	D-1	ポンプ	SD01		スクレイバー	4.7	5.3	1.0	22.1	安山岩	30027
10	45	D-5・6	東西ベルト	SD01	下層	スクレイバー?	10.4	5.7	1.4	89.3	安山岩	30160
10	46	D-2	ベルト	SD01		スクレイバー	8.2	5.1	0.8	44.0	黒曜石	30031

図	No.	区	出土地区	遺構	層位	遺物の種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	登録番号
10	47	A-2	凹凸面			スクレイバー	6.4	3.7	1.0	26.5	安山岩	30020
10	48	D-3	右上	SD01	砂上層	スクレイバー	9.9	6.3	1.7	76.6	安山岩	30173
10	49	E-4	左下	SD01	砂下部	スクレイバー	4.8	4.6	1.1	26.1	安山岩	30165
10	50	D-5	右下	SD01	1層	スクレイバー	6.1	3.8	1.0	24.9	安山岩	30172
11	51	E-4	右上	SD01		スクレイバー	5.5	7.9	1.4	46.8	安山岩	30170
11	52	D-6	右下	SD01	最下層砂礫	スクレイバー	4.4	4.0	0.9	11.3	安山岩	30166
11	53	B-2	右下	SD01	黒粘質層	スクレイバー	6.5	6.5	1.0	46.1	安山岩	30176
11	54	D-5	土器群 9C か①1	SD01		スクレイバー	6.9	5.1	1.0	29.5	安山岩	30159
11	55	E-2	2左上	SD01	砂下層	スクレイバー	7.7	6.9	2.0	82.4	安山岩	30155
11	56	E-5	右上	SD01	纏文砂層	スクレイバー	4.2	4.9	1.5	24.5	安山岩	30174
12	57	C-1	土器群 12-1	SD01		石庖丁	15.5	6.4	0.5	91.5		30062
12	58	B-1	右	SD01	黒粘下部	石庖丁	10.7	4.9	0.8	53.6	輝緑凝灰岩	30061
12	59	B-6	右下	SD01	1層	石庖丁	6.3	3.9	0.5	18.0		30048
12	60	B-2	東ベルト	SD01		石庖丁	6.7	4.6	0.7	36.2	輝緑凝灰岩	30064
12	61	C-1	土器群 10-12	SD01		石庖丁	7.5	4.8	0.6	32.5		30063
12	62	E-1	南岸	SD01	3層褐色土	石庖丁	5.2	4.1	0.8	20.6		30065
12	63	E-3	左上	SD01	砂下層	石庖丁	6.8	4.7	0.7	31.0		30044
12	64	C-1・2	土器群 11B-16	SD01		石庖丁	6.1	4.7	0.3	16.0		30067
12	65	D-1	ポンプ	SD01		石庖丁	6.5	5.3	0.3	19.6		30068
12	66	D-4	清掃中	SD01		石庖丁	5.9	6.2	0.9	41.0	輝緑凝灰岩	30049
12	67	B-6	土器群 15 こ⑨	SD01		石庖丁	8.3	5.6	0.7	36.0	輝緑凝灰岩	30043
12	68	C-2	土器群 11-10	SD01		石庖丁	5.7	5.9	0.8	29.1	輝緑凝灰岩	30066
12	69	D-5	左上	SD01	1層	石庖丁	5.9	5.2	0.8	33.0	輝緑凝灰岩	30046
12	70	D-2	右上層	SD01	1層	石庖丁	5.4	5.0	0.5	18.0	輝緑凝灰岩	30121
12	71	C-6	土器群 15 い④	SD01		石庖丁	4.7	3.4	0.5	13.0	輝緑凝灰岩	30045
12	72	C-6	土器群 15 C	SD01		石庖丁	4.7	2.7	0.3	5.0		30144
12	73	B-6	右上	SD01	1層	石鏸	5.4	3.5	0.3	13.0	凝灰岩質	30128
13	74	D-3	土器群 9 け⑤2	SD01		石庖丁	10.4	4.9	0.5	42.0		30042
13	75	D-2	右下	SD01	砂層	石庖丁未成品	6.8	6.2	1.3	66.0	輝緑凝灰岩	30120
13	76	D-5・6	ベルト	SD01		石庖丁	9.5	6.3	0.4	38.0	凝灰岩系	30222
13	77	E-5	左上	SD01	砂下層	石庖丁	7.3	6.2	0.5	30.0		30050
13	78	E-3	ベルト	SD01	砂上層	石庖丁未成品	7.0	6.2	1.3	68.0	輝緑凝灰岩	30047
13	79	C-6	右上層	SD01	1層	石庖丁未成品	8.9	4.0	1.4	69.0		30101
13	80	C-5	右下層	SD01		不明石器	4.5	2.4	0.6	8.0	凝灰岩質	30129
14	81	D-5	土器群 9B か①4	SD01		紡錘車	5.2	5.2	0.4	25.0	滑石	30035
14	82	B-1	左	SD01		紡錘車	5.0	5.0	0.8	39.4		30054
14	83	D-2	左上層	SD01	1層	紡錘車	4.6	4.6	0.6	26.6		30088
14	84	D-5	土器群 9B か①3	SD01		紡錘車	4.7	4.7	0.6	27.0	滑石	30034
14	85	D-2	P4	SD01		紡錘車	4.7	4.7	0.7	27.0	滑石	30119
14	86	C-2	西ベルト	SD01		紡錘車	4.7	4.7	0.5	20.6	滑石	30053
14	87	D-1	ポンプ	SD01		紡錘車	4.9	4.9	0.5	21.2	滑石	30055
14	88	B-2	左上	SD01	1層	紡錘車	4.7	4.7	0.5	19.9	滑石	30052
14	89	D-3	土器群 9B か⑤2	SD01		紡錘車	4.3	4.3	0.8	24.0		30039
14	90	D-4	土器群 9 き⑥5	SD01		紡錘車	4.6	4.6	0.6	19.0	滑石	30036
14	91	D-3	右上	SD01	3層	紡錘車	4.0	4.0	0.7	20.0	滑石	30040
14	92	C-1	左	SD01	2層腐葉土	紡錘車	4.0	4.0	0.6	19.2	滑石	30051

図	No.	区	出土地区	遺構	層位	遺物の種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	登録番号
14	93	D-4	右上	SD01	1層	紡錘車	3.8	3.8	0.4	12.0	滑石	30032
14	94	D-3	ベルト	SD01	上層	紡錘車	4.0	4.0	0.3	8.0		30033
14	95	E-1	ベルト壁	SD01	包含上層(腐葉土)	紡錘車	4.7	2.7	0.5	11.8		30060
14	96	C-2	左下	SD01	腐葉土	紡錘車	3.6	1.7	0.6	6.0		30059
14	97	D-3	右上	SD01	1層	紡錘車	3.9	3.9	0.4	7.0		30041
14	98	B-1	右	SD01	砂混じり層	有孔円盤	4.2	3.9	0.6	18.1		30089
14	99	E-4	左上	SD01	1層	石製円盤	4.8	4.0	0.7	23.0	滑石	30137
14	100	E-1	土器群 5W	SD01		石製円盤	5.5	5.5	0.4	20.1		30056
14	101	D-5	左上	SD01	黒色土上部	石製円盤	5.1	4.9	0.9	41.0	滑石	30038
14	102	C-6	土器群 15 あ⑥	SD01		石製円盤	7.1	7.0	1.7	115.0	滑石	30143
14	103	E-5・6	ベルト	SD01	下層	石製円盤	5.0	4.8	0.5	23.0	滑石	30037
14	104	E-2	左上	SD01	下部腐葉土	石製円盤	4.5	4.4	0.9	27.8	滑石	30058
14	105	C-1	左	SD01	砂層	石製円盤	4.0	3.6	0.5	12.6	滑石	30057
14	106	D-4	土器群 9B か⑨ 2	SD01		石製円盤	3.5	3.0	0.8	17.0		30130
14	107	D-6	土器群 9B い⑩ 1	SD01		石製円盤	7.3	6.3	0.9	62.0	滑石	30142
15	108	C-2	左下土器群 10 の下	SD01		石鍤	9.3	5.4	4.1	294.5	滑石	30080
15	109	D-7	右下	SD01	4層黒灰砂	石鍤	7.4	3.2	2.5	86.0	滑石	30113
15	110	E-1	土器群 5Y -70	SD01		石鍤	7.6	3.9	2.7	104.2	滑石	30076
15	111	C-2	西ベルト 7	SD01		石鍤	6.0	4.3	3.7	130.8	安山岩	30075
15	112	E-1	拝張区土器群 5	SD01		石鍤	4.7	2.0	1.3	17.9		30069
15	113	E-1	No.1 トレント西手払	SD01	1層下部黒色土	石鍤	4.4	2.1	2.0	21.1	滑石	30071
15	114	D-3・4	ベルト土器群 9 か⑨ 8	SD01		石鍤	6.9	2.5	2.0	56.0	滑石	30105
15	115	E-1	南岸肩	SD01	2層	石鍤	8.2	1.7	1.2	23.9		30073
15	116	B-1	溝掃除中	SD01		石鍤	7.4	3.2	2.9	92.8	滑石	30081
15	117	D-3	左上肩	SD01	1層	石鍤	6.5	3.3	3.4	80.0	砂岩系	30108
15	118	D-6	左下	SD01	3層黒灰色	石鍤	7.7	3.5	3.4	124.0	滑石	30115
15	119	B-1	右下	SD01	3層砂混じり	石鍤	5.8	3.3	2.7	63.7		30082
15	120	E-2	上	SD01	砂層	石鍤	6.3	2.5	2.1	39.5		30091
15	121	C-6	右上	SD01	1層	石鍤	6.1	1.5	1.3	16.0	滑石	30104
15	122	D-3	土器群 9 き⑩ 2	SD01		石鍤	6.0	1.8	1.4	18.0	滑石	30102
15	123	C-6	土器群 9 け⑨ 1	SD01		石鍤	5.7	2.1	1.8	22.0	滑石	30103
15	124	D-5	土器群 9 お④ 1	SD01		石鍤	5.5	1.9	1.8	23.0		30106
15	125	C-1	土器群 10 下	SD01		石鍤	5.0	1.7	1.6	14.8	安山岩	30083
15	126	C-2	左上	SD01	1層	石鍤	4.0	2.2	1.8	20.6		30070
15	127	E-1	南岸	SD01	3層褐色土	石鍤	4.6	1.5	1.4	11.7		30072
15	128	C-7	左下	SD01	青黒色砂まじり	石鍤	4.3	2.0	1.7	17.0		30110
15	129	D-5	土器群 9B	SD01		石鍤	4.6	1.6	1.3	13.0	滑石	30127
15	130	D-1	土器群 2-20 の下	SD01		石鍤	4.3	1.9	1.1	12.5		30084
15	131	C-6	左上	SD01	1層	石鍤	3.6	1.2	0.9	6.0	滑石	30107
15	132	B-6	右上土器群 15	SD01		石鍤	3.6	1.1	0.9	5.0	滑石	30109
15	133	D-6	右上	SD01	青の上の黒色層	石鍤	3.0	1.3	1.0	4.0		30111
15	134	B-1		SD01	2層黒灰色土	石鍤	2.7	1.9	0.9	6.0		30085
15	135	D-6	左土器群 9	SD01		石鍤	3.9	2.3	1.6	22.0		30112
16	136	C-1	S1	SD01		石鍤	12.8	5.6	3.1	336	滑石	30079
16	137	E-4	右上	SD01	2層	石鍤	10.5	4.2	4.2	256	滑石	30132
16	138	C-7	右下土器群 9	SD01		石鍤	8.9	4.7	5.3	252	滑石	30114

図	No.	区	出土地区	遺構	層位	遺物の種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	登録番号
16	139	不明				石錐	8.5	5.6	3.8	205	砂岩系	30133
16	140	B-1	右	SD01	1層	石錐	6.6	2.8	3.0	52	玄武岩	30074
16	141	E-1	拡張区	18	SD01	石錐	6.7	4.5	3.1	162	滑石	30078
16	142	A-1	土器群	103	SD01	石錐	6.0	4.3	2.7	95		30117
16	143	A-2	凹凸内			石錐	5.0	4.4	4.1	110	砂岩	30090
16	144	D-1	ポンブ	SD01		石錐	5.2	4.2	2.8	87	滑石	30077
17	145	D-4	左下肩	SD01	最下層	石錐	9.2	7.7	3.0	305	花崗岩	30134
17	146	E-6	ベルト	SD01		石錐	8.6	7.6	4.1	430	花崗岩	30140
17	147	D-4	土器群 9き⑧4	SD01		石錐	9.1	6.4	2.2	241		30202
17	148	D-3・4	ベルト	SD01	上層	石錐	7.7	3.8	2.2	100	花崗岩	30203
17	149	E-3	ベルト	SD01	砂刷	石製円盤	6.9	6.9	1.3	96	滑石	30131
17	150	C-4	右下肩	SD01		?	9.1	4.2	2.7	155		30263
17	151	C-2	左上	SD01	2層	石錐	10.1	6.0	2.6	242	玄武岩	30100
17	152	E-1	土器群 5B	SD01		石錐	13.0		6.5	1,008	滑石	30381
17	153	D-4	土器群 9う⑦2	SD01		石錐	14.0		8.9	1,900	滑石	30383
17	154	C-6	土器群 9C	SD01		石錐	14.7		5.4	846	滑石	30382
17	155	D-2	S 2	SD01	腐葉土	石錐	14.1	12.5	3.4	970	滑石	30086
17	156	C-6	土器群 15あ⑥	SD01		砾石	12.0	8.0	6.9	940		30252
17	157	D-5	土器群 9け⑥5	SD01		石製品	11.8	7.8	5.9	160	軽石	30214
18	158	D-3	土器群 9こ⑤1	SD01		磨製石斧	14.5	7.4	3.8	572		30136
18	159	E-1	土器群 5	SD01		磨製石斧	13.4	7.7	4.2	622	安山岩	30093
18	160	B-1	?	土器群 10	SD01	磨製石斧兼巖石	13.2	5.6	4.9	664	玄武岩	30094
18	161	E-1	南厨	SD01	2層	磨製石斧	9.4	7.3	4.3	417	安山岩系	30097
18	161	E-1	拡張区	SD01		磨製石斧	10.3	6.7	4.0		安山岩系	30122
18	162	D-1	右下	SD01	3層	磨製石斧・巖石	11.1	5.7	3.6	363	玄武岩	30138
18	163	E-5	川底流土内	SD01		磨製石斧	8.2	6.0	2.4	144	玄武岩	30135
18	164	D-1	左肩	SD01	2層	磨製石斧兼巖石	10.3	5.1	3.6	444	片岩系	30096
18	165	B-2	?	土器群 11ーR!	SD01	磨製石斧	7.7	5.1	3.9	286	玄武岩	30098
19	166	D-4	左下	SD01	黒粘下部	扁平片刃石斧	5.1	1.8	0.6	11	凝灰質安山岩	30126
19	167	E-1	土器群 5	SD01		磨製石斧	8.0	4.1	1.5	75	頁岩	30095
19	168	E-2	上	SD01	砂刷	石錐	6.1	3.5	1.5	55	頁岩質	30116
19	169	C-4	右下	SD01	肩下層	打製石斧	7.3	5.7	1.6	84	玄武岩	30010
19	170		廐土中			打製石斧	4.3	4.3	0.8	22	安山岩	30012
20	171	D-3	土器群 9Cか⑦4	SD01		砾石？	21.2	13.4	6.5	2,950	安山岩系	30210
20	172	D-6	土器群 9い⑥3	SD01		磨石系	18.2	15.2	5.6	2,200	玄武岩	30186
20	173	C-1		SD01		磨石系	16.3	10.9	5.9	1,740	安山岩系	30310
20	174	D-4	土器群 9か④2	SD01	下層	磨石系	11.7	10.8	5.9	1,130	花崗岩	30183
20	175	B-3	凹凸面			磨石系	13.3	11.6	5.4	1,650	玄武岩	30182
20	176	D-2	左上土器群 9	SD01		台石？	16.1	13.2	4.6	1,910	玄武岩	30195
20	177	C-2	左下土器群 10の下	SD01		磨石系	11.0	9.3	4.2	676		30318
20	178	D-3	土器群 9Cき⑥8	SD01		磨石系	9.2	7.6	3.6	374		30209
20	179	A-1	右肩	SD01	1層		9.7	6.4	3.6	377		30314
20	180	E-3	左上	SD01	2層	磨石系	9.8	6.4	3.6	337		30254
20	181		出土位置不明			磨石系	10.0	7.4	2.6	327		30378
21	182	E-1	土器群 5-133	SD01		磨石系	13.8	12.2	4.8	1,280		30320

図	No.	区	出土地区	遺構	層位	遺物の種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	登録番号
21	183	D-5	土器群9え①	SD01		磨石系	12.0	10.2	5.2	1,150		30236
21	184	D-4	左下	SD01	黒色粘質土下部	磨石系	11.0	8.9	5.0	876		30208
21	185	D-5	土器群9あ⑥	SD01		磨石系	12.5	8.3	3.1	564		30198
21	186	D-3	右上	SD01	腐葉土+砂屑	磨石系	12.0	10.4	5.1	990		30207
21	187	E-6	右下	SD01	腐葉土屑	磨石系	11.1	8.9	4.4	724	花崗岩	30184
21	188	E-5	左上	SD01	砂屑上半	磨石系	11.2	10.3	4.8	870		30255
21	189	C-6	右上2層	SD01	青黒色	磨石系	12.3	10.5	5.5	1,100	玄武岩	30196
21	190	D-3	土器群9け②	SD01		磨石系	14.0	9.8	5.0	1,125		30243
21	191	D-6	土器群9あ⑤	SD01		磨石系	11.9	7.8	5.0	664		30321
21	192	D-4	土器群9Cか⑧	SD01		磨石系	11.7	7.4	3.5	540		30242
21	193	E-4	右上	SD01	砂上屑	磨石系	8.4	7.6	3.5	342		30296
21	194	E-1	No.1トレント	SD01		磨石系	8.7	7.9	2.7	305	安山岩系	30125
22	195	B-2	右上屑	SD01	1層	磨石系	6.8	8.9	3.4	284		30299
22	196	D-3	右上屑土器群9	SD01		魔石	6.2	6.0	3.1	159	花崗岩	30139
22	197	B-6	土器群15こ④	SD01		磨石系	6.2	5.7	1.1	119	玄武岩	30187
22	198	D-3	右上	SD01	1層	魔石	6.0	4.8	3.3	157	花崗岩	30141
22	199	C-7	土器群9底下部分②	SD01		磨石系	5.3	4.8	2.2	83	花崗岩	30212
22	200	E-1	拡張区	SD01		砾石	11.9	8.0	5.2	788		30375
22	201	C-6	右下	SD01	1層	磨石系	12.2	6.4	3.6	504	玄武岩	30191
22	202	D-6	ベルト	SD01	2層	磨石系	15.6	8.8	5.2	840	花崗岩	30199
22	203	C-4	右上屑	SD01		磨石系	15.2	8.7	7.0	1,450	安山岩系	30190
22	204	C-1	右上	SD01	腐葉土屑下屑		9.5	8.1	5.2	628		30312
22	205	E-1	土器群10-4	SD01		磨石系	8.2	7.5	3.8	393		30324
22	206	C-2	左下1層	SD01		磨石系	7.1	6.5	3.5	199		30289
22	207	D-2	土器群6-13下	SD01		磨石系	9.2	7.0	2.9	311		30379
22	208	E-1	土器群6-13の下	SD01			8.5	7.4	4.9	440		30317
22	209	B-1	右	SD01	腐葉土屑	磨石系	9.7	7.6	6.1	530		30292
22	210	B-1	土器群11B15	SD01		磨石系	10.3	8.2	4.0	548		30301
23	211	B-1	右	SD01	3層砂まじり	磨石系	10.5	10.0	7.7	1,350		30380
23	212	B-1	土器群10-23	SD01		磨石系	10.2	7.8	4.9	680		30377
23	213	D-6	土器群9う⑥	SD01	3	磨石系	7.7	7.4	5.8	368	花崗岩	30189
23	214	D-5	土器群9え⑤	SD01	1	磨石系	6.8	5.2	1.8	123		30265
23	215	D-6	土器群9あ④	SD01	3	磨石系	9.1	5.2	4.6	350	玄武岩	30206
23	216	E-3	ベルト	SD01	砂屑下屑	磨石系	9.5	5.0	3.4	265		30241
23	217	B-1	土器群10-5の下	SD01		鐵石?	9.3	5.2	5.0	404		30302
23	218	C-6	土器群9Cこ④	SD01		磨石系	10.0	6.9	5.3	479		30262
23	219	E-3	ベルト	SD01	砂屑上屑	磨石系	13.6	6.6	4.7	706		30200
23	220	E-1	No.1トレント商半	SD01	①	磨石系	14.9	6.0	4.8	696		30287
23	221	C-6	右下	SD01	1層③	磨石系	13.2	9.3	4.0	798		30238
23	222	E-4	左下	SD01	砂屑下屑	磨石系	6.5	6.5	6.1	428	玄武岩	30204
23	223	D-4	土器群9右下	SD01	砂上屑	鐵石?	14.4	9.2	4.6	1,325		30211
24	224	E-1	土器群10-79	SD01		面取石	9.7	6.9	4.1	244		30325
24	225	B-2	右下	SD01	黒粘土下部	磨石系	7.3	7.2	5.5	265	花崗岩	30124
24	226	B-6	土器群15左上	SD01			7.3	6.4	3.9	242	花崗岩	30193
24	227	C-2	ベルト	SD01		面取石	6.0	5.4	4.7	185		30306
24	228	D-4	右上土器群9下部	SD01		面取石	5.6	5.5	3.6	116		30279

図	No.	区	出土地区	遺構	層位	遺物の種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	登録番号
24	229	C-2	土器群 7	SD01		面取石	5.3	4.9	3.8	124		30307
24	230	E-6	右下	SD01	腐葉土層	磨石系	7.0	6.6	3.1	157	花崗岩	30185
24	231	C-2	土器群 7	SD01		磨石系	5.4	5.1	4.2	123	花崗岩	30123
24	232	D-3	土器群 9 C く⑦ 1	SD01		面取石	4.3	4.0	3.9	73		30221
24	233	C-6	土器群 9 け⑤ 3	SD01		面取石	4.8	4.5	4.2	132		30277
24	234	D-6	右上砂上層	SD01		面取石	5.6	3.6	2.9	64		30278
24	235	D-6	左上	SD01	砂削上部	面取石	4.1	4.0	3.8	80		30220
24	236	D-7	右下	SD01	4 層黒灰砂	面取石	5.7	2.6	2.4	62		30276
25	237	D-6	土器群 9B い⑦ 1	SD01		台石?	28.0	20.9	6.2	5,850		30197
25	238	E-2	土器群 9 あ⑥ 1	SD01		砾石	22.5	17.2	8.9	5,190		30335
25	239	E-2	下	SD01	腐葉土層	砾石	28.0	12.0	5.8	2,400		30348
25	240	C-1	右	SD01	1 層	台石?	24.3	18.1	4.7	3,410		30248
25	241	E-1	南岸	SD01	3 層褐色層	砾石	20.4	10.5	3.3	1,200		30373
26	242	C-1	左	SD01	1 層	砾石	18.6	9.6	11.7	3,150	砂岩	30360
26	243	C-6	土器群 15 お⑨ 13	SD01		台石?	22.5	13.7	6.3	2,640	安山岩系	30194
26	244	D-1	ポンブ	SD01		砾石	24.0	18.3	7.7	3,790	砂岩	30354
26	245	C-6	土器群 15	SD01		砾石	22.0	18.2	4.9	2,380	砂岩質	30358
26	246	D-4	土器群 9 C お③ 1	SD01		砾石	21.6	11.6	6.3	2,430	砂岩	30374
26	247	C-1	右	SD01	2 層	砾石	21.2	15.5	3.7	1,650	泥岩系	30349
26	248	E-1	土器群 5 C -23	SD01		砾石	16.3	12.6	5.6	1,500		30336
26	249	D-1	ポンブ	SD01		砾石	16.3	12.9	2.0	908	泥岩系	30346
27	250	E-1	北半	SD01	腐葉土層	砾石	23.8	8.2	8.8	2,900	泥岩系	30367
27	251	C-4	土器群 9 C か⑦ 1	SD01		砾石	29.0	6.8	7.0	1,230	砂岩質	30249
27	252	D-1	左上	SD01	3 層砂混じり	砾石	24.0	6.3	2.9	469	頁岩	30359
27	253	B-1	左	SD01	2 層	砾石	23.0	6.5	6.0	1,200	砂岩	30376
27	254	C-1	右	SD01	1 層	砾石	27.6	9.8	7.3	3,110		30355
28	255	C-1	ポンブ南壁	SD01		砾石	15.0	10.6	3.4	666		30365
28	256	C-6	土器群 9 C こ⑤ 5	SD01		砾石	13.7	9.8	6.6	1,250		30224
28	257		遺構検出時			砾石	17.0	7.8	5.6	1,050	砂岩	30347
28	258	C-1	左	SD01	1 層	砾石	20.6	10.3	5.2	1,710		30328
28	259	D-1	ポンブ	SD01		砾石	15.8	6.9	5.5	692		30338
28	260	B-2	土器群 11 C 8	SD01		砾石	15.8	8.3	4.3	726		30341
28	261	C-6	土器群 9 け④ 1	SD01		磨石系	9.8	6.4	4.3	340		30192
28	262	D-4	土器群 7 お⑧ 4	SD01		砾石	14.1	13.6	5.6	1,600		30368
28	263	C-6	土器群 9C き⑨ 3	SD01		砾石	11.8	7.7	3.8	566		30329
28	264	C-2	土器群 10 の下	SD01		砾石	12.2	12.2	8.4	1,110		30225
29	265	D-4	土器群 9 え⑦ 9	SD01		砾石	16.6	12.0	7.1	1,850	花崗岩	30253
29	266	D-4	土器群 9C か⑦ 6	SD01		砾石	14.8	10.2	5.6	1,160		30217
29	267	C-1	右上	SD01	1 層	砾石	18.2	11.7	5.7	1,150		30337
29	268	C-2	右下	SD01	黒粘	砾石	13.7	8.6	4.7	736		30334
29	269	C-7	土器群 9D こ⑤ 6	SD01		砾石	13.3	10.4	6.0	744		30230
29	270	D-7	左下	SD01		砾石	15.8	12.8	3.8	888		30229
29	271	D-2	右下	SD01	1 層	砾石	10.3	9.2	4.5	383		30333
29	272	C-1	右	SD01	3 層砂混じり	砾石	8.3	7.0	4.2	449		30342
29	273	C-6	左上肩	SD01	1 層②	砾石	9.2	5.4	4.9	305		30231
29	274	C-6	左下	SD01	1 層②	砾石	8.3	4.4	4.8	244		30268

図	No.	区	出土地区	遺構	層位	遺物の種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	登録番号
30	275	D-5・6	ベルト	SD01	下層	砾石	19.0	6.8	3.9	580		30250
30	276	C-2	西ベルト	SD01		砾石	17.6	8.5	3.6	978		30327
30	277	E-1	土器群6B7	SD01		砾石	18.1	8.0	3.0	710		30340
30	278	D-1		SD01	2層	砾石	13.5	6.1	2.3	252	泥岩系	30361
30	279	D-2	左下	SD01	砂上部	砾石	12.0	7.8	3.5	351		30331
30	280	D-4	土器群9き②1	SD01		砾石	11.3	6.8	2.8	222		30228
30	281	C-6	左下	SD01	1層②	砾石	8.5	6.7	3.2	184		30267
30	282	C-1	左下	SD01	粗砂層	砾石	5.8	6.7	4.3	248	砂岩	30343
30	283	D-2	土器群9け⑨4	SD01		砾石	8.4	6.1	2.6	160		30332
30	284	B-3	凹凸面			砾石	10.2	8.8	2.2	239		30269
30	285	C-1	右	SD01	2層	砾石	13.5	8.3	3.0	502		30345
30	286	B-1	土器群11B58	SD01		砾石	8.4	8.0	3.0	232	砂岩	30351
30	287	D-1	土器群2の下	SD01		砾石	6.9	6.2	2.1	144		30352
31	288	D-3	土器群9か⑥4	SD01		砾石	11.5	11.3	2.0	408		30370
31	289	E-1	南岸	SD01	3層褐色層	砾石	12.6	9.1	2.4	341		30372
31	290	A-2	凹凸面			砾石	17.0	7.0	1.6	242	砂岩	30364
31	291	B-1	右	SD01	3層砂混じり	砾石	16.3	5.9	3.8	520	泥岩系	30339
31	292	B-1	右	SD01	砂まじり層	砾石	18.5	3.7	2.9	284	泥岩系	30353
31	293	D-3	土器群9か⑥1	SD01		砾石	14.7	4.7	3.5	255		30369
31	294	C-6	左下	SD01	1層	砾石	10.5	3.9	3.3	148		30270
31	295	E-4		SD21		砾石	10.9	2.2	1.6	56		30271
31	296	B-1	右	SD01		砾石	10.7	2.0	0.9	22	泥岩系	30363
31	297	D-4	右上	SD01	1層	砾石	9.2	1.8	0.9	19		30235
31	298	C-5		SD04		砾石	7.8	1.9	1.6	35		30272
31	299	B-1	土器群11B129の下	SD01		砾石	8.0	3.0	1.8	55	泥岩系	30350
31	300	D-5・6	ベルト	SD01		砾石	8.3	4.1	1.9	88		30232
31	301	E-1	南端	SD01	1層	砾石	7.7	2.5	2.0	65		30118
38	J77	D-3	土器群9C	SD01		石鏃	2.2	1.0	0.4	0.5	黒曜石	30157
38	J78	E-6	右下	SD01	縹文刷砂礫	石鏃	1.8	1.1	0.4	0.7	黒曜石	30065
38	J79	D-5	β区J73	SD01		石鏃	1.7	1.9	0.5	1.5	黒曜石	30158
38	J80	E-6	右下	SD01	縹文刷砂礫	石鏃	2.7	1.0	0.4	1.9	黒曜石	30002
38	J81	E-6	右下	SD01	縹文刷砂礫	石鏃	2.9	2.0	0.3	1.2	黒曜石	30003
38	J82	E-6	右下	SD01	縹文刷砂礫	石鏃	4.0	2.3	0.3	2.9	黒曜石	30004
38	J83	E-6	右下	SD01	縹文刷砂礫	スクレイバー	5.0	5.8	1.1	33.1	安山岩	30011
38	J84	D-6	左下右半	SD01	最下層	加工痕	5.1	3.6	1.3	26.4	安山岩	30013
38	J85	D-6	左下右半	SD01	最下層	石匙	6.5	2.8	1.8	9.0	黒曜石	30001

石器の計測地はすべて現状の数値である。



元岡・桑原遺跡群第42次調査遠景 上：西から 下：南から



元岡・桑原遺跡群第42次調査全景 上：南東から 下：北から



B-1・2 区東壁土層断面  
白線から下が縄文時代晚期層



D-6 区南壁土層断面  
SD01 弥生時代以降堆積状況



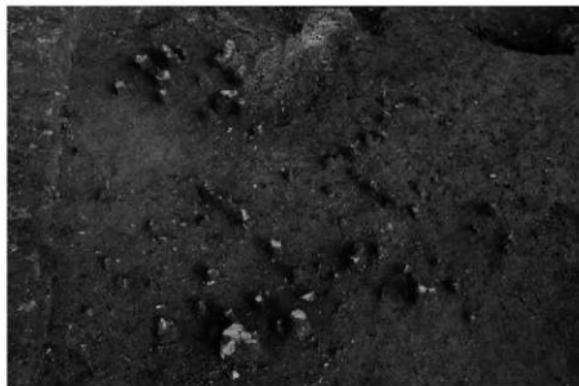
E-6 区南壁土層断面  
白線から下が縄文時代堆積層



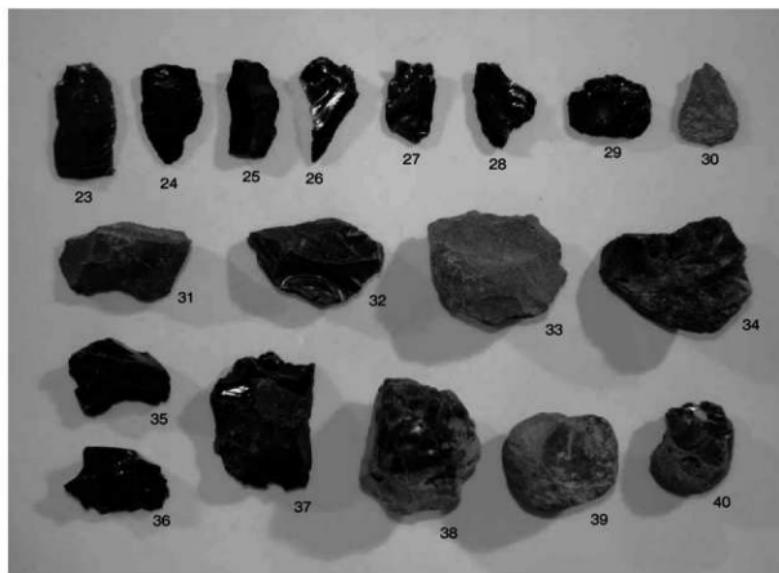
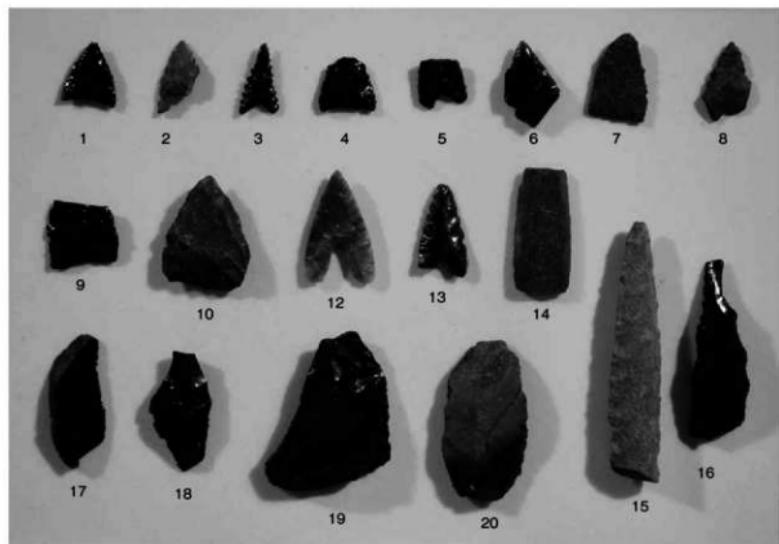
B-2 区溝



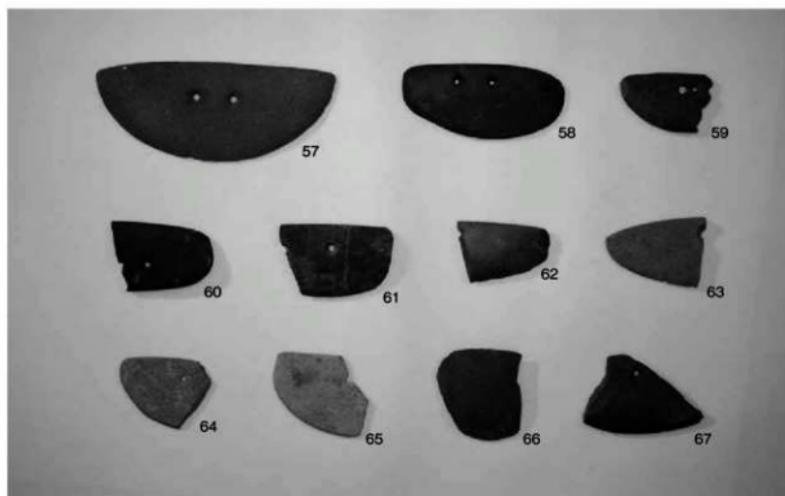
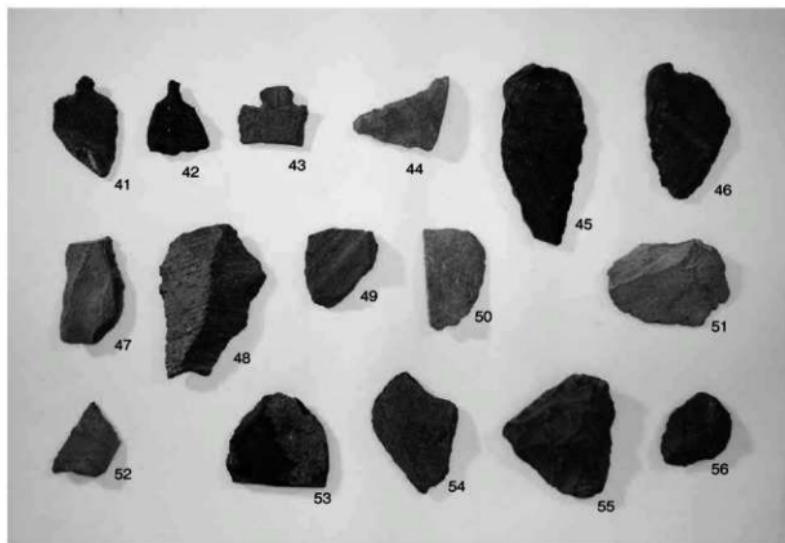
D-4 区縄文土器出土状況



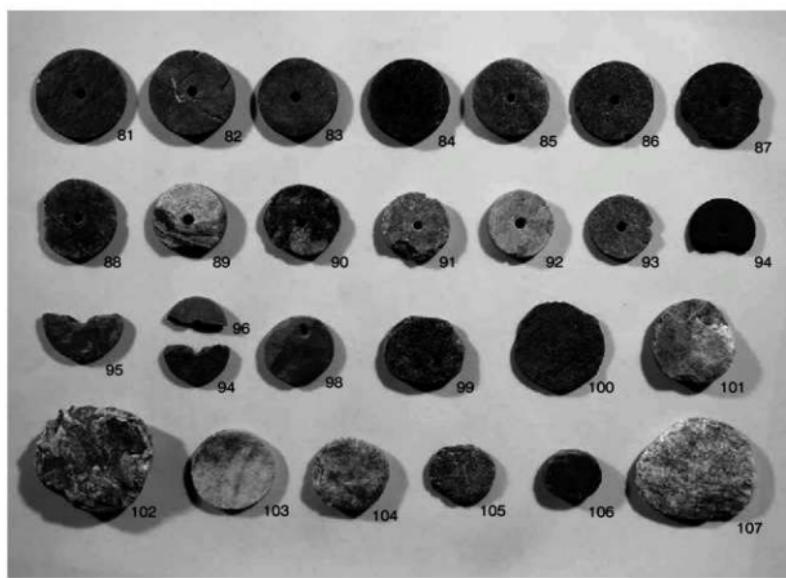
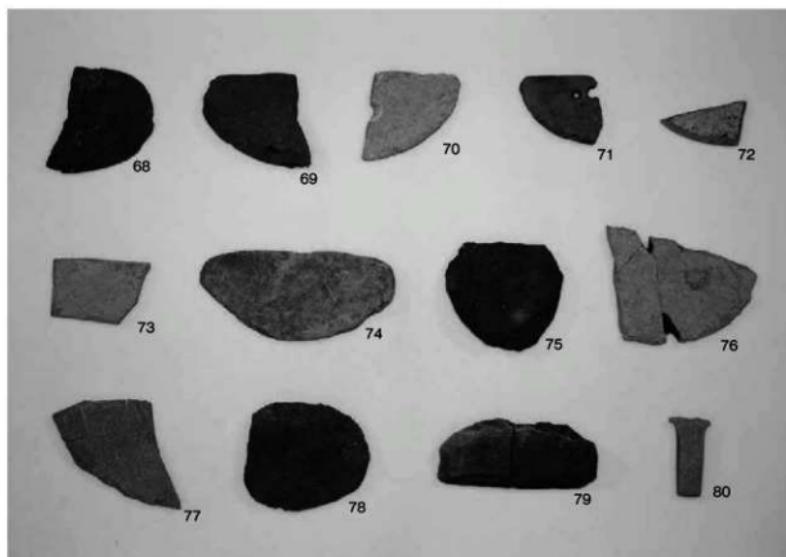
縄文β 区縄文土器出土状況



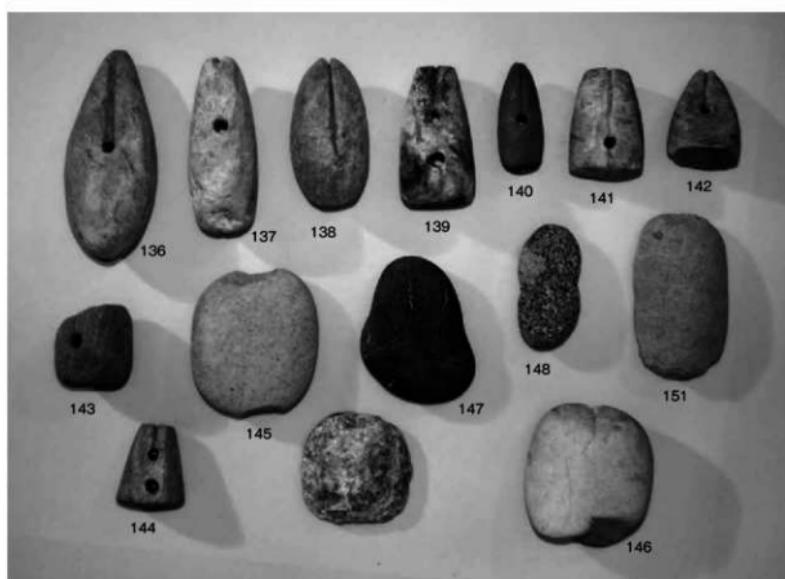
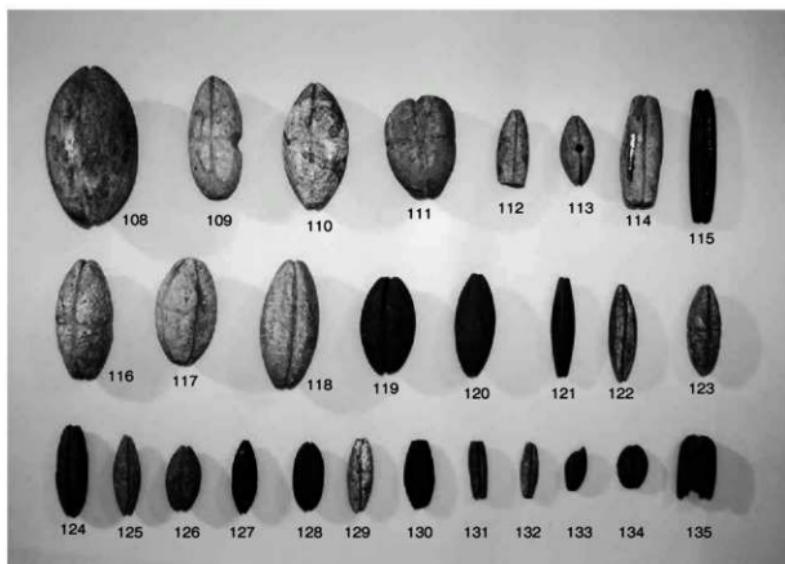
弥生時代・古墳時代包含層出土石器（石鏃・石槍・U F・R F・石核）



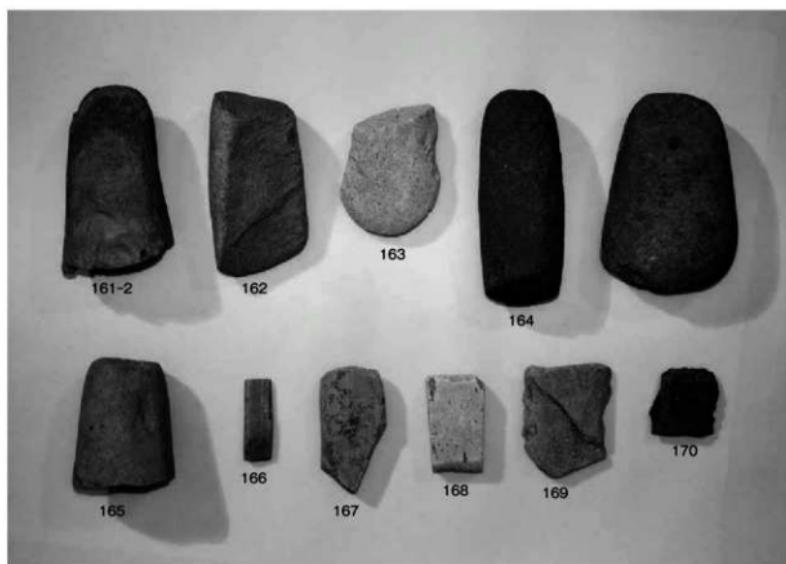
弥生時代・古墳時代包含層出土石器（石匙・スクレイバー・石庖丁）



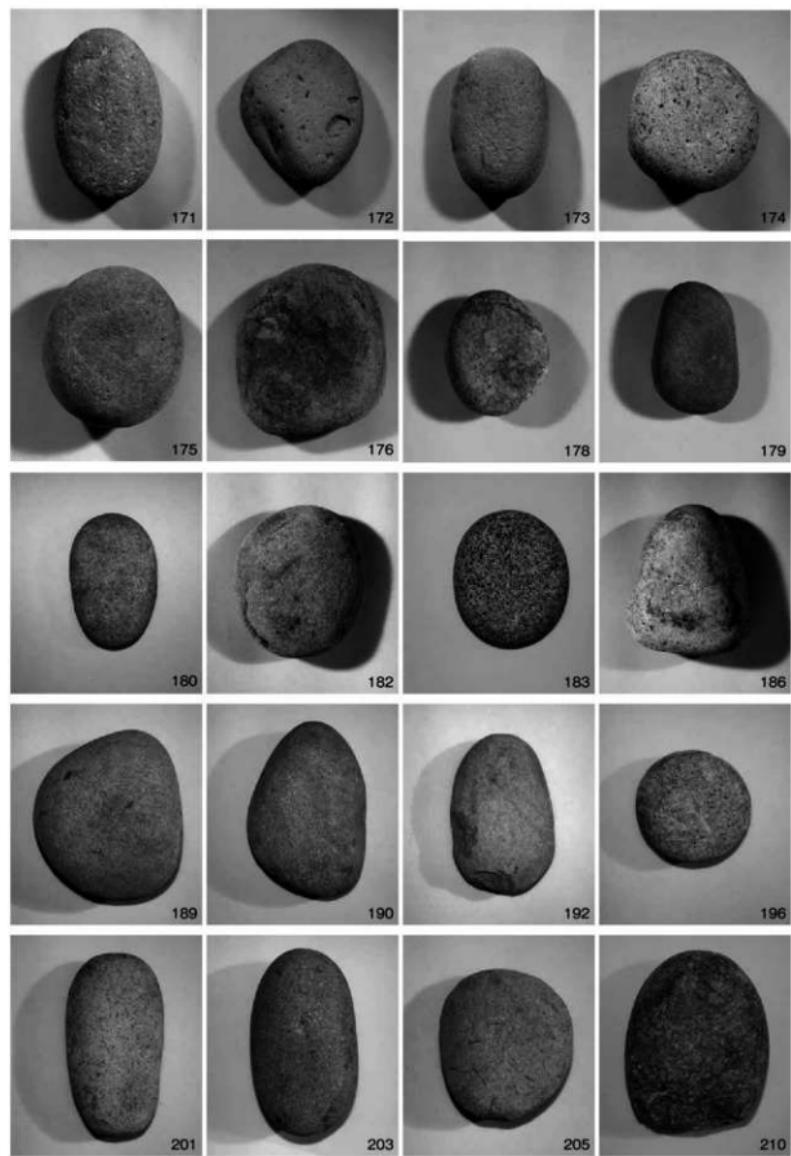
弥生時代・古墳時代包含層出土石器（石庖丁・不明石器・紡錘車・石製円盤）



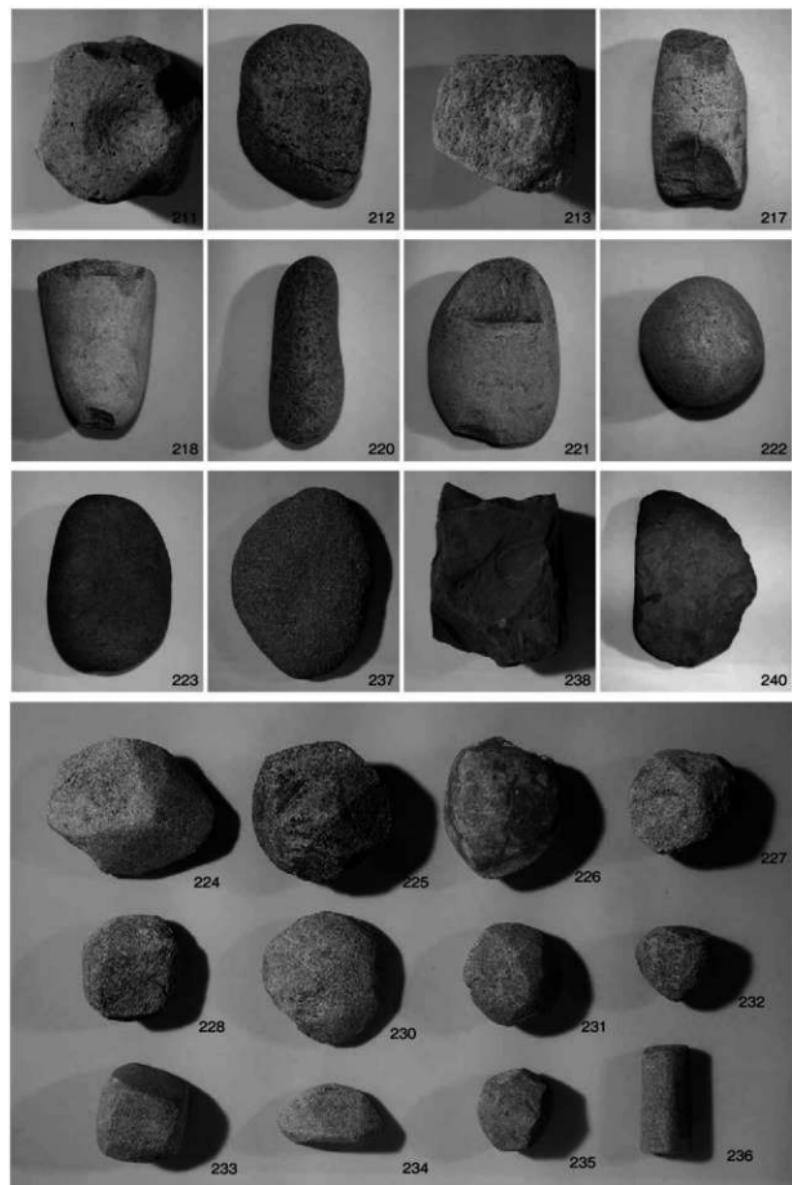
弥生時代・古墳時代包含層出土石器（石錘・軽石製品）



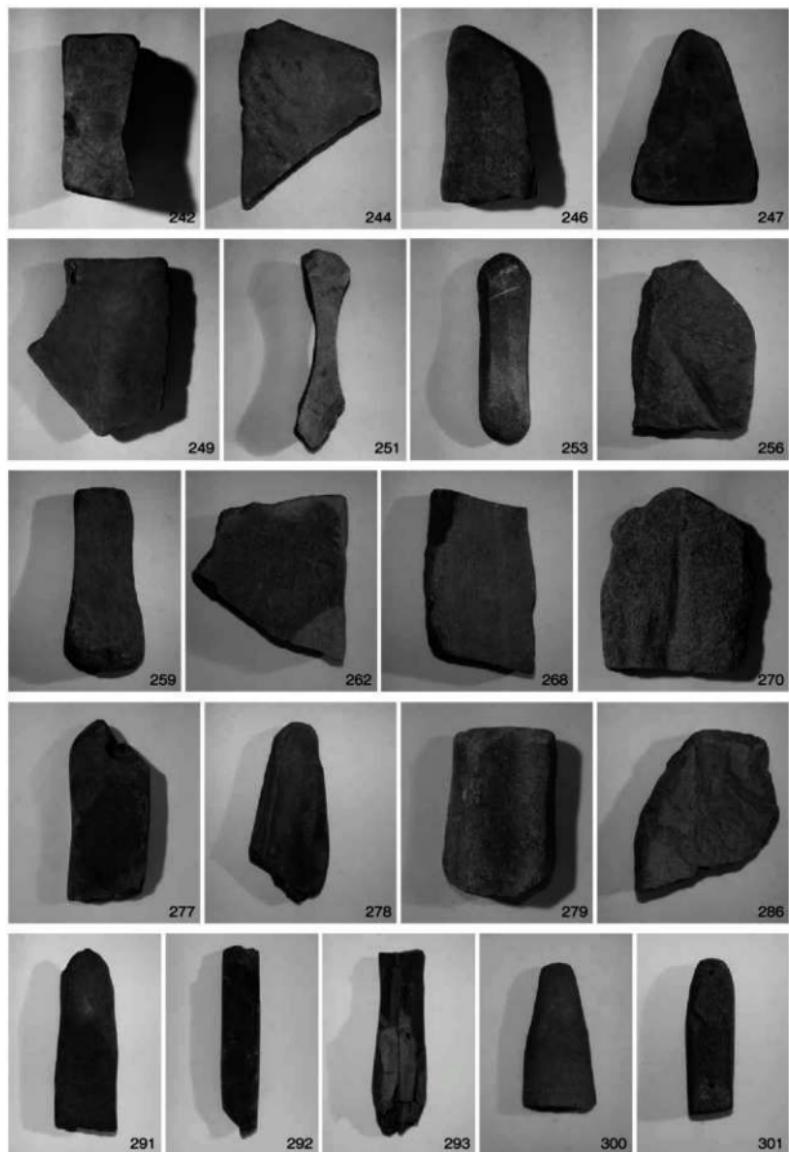
弥生時代・古墳時代包含層出土石器（石錘・磨製石斧・打製石斧）



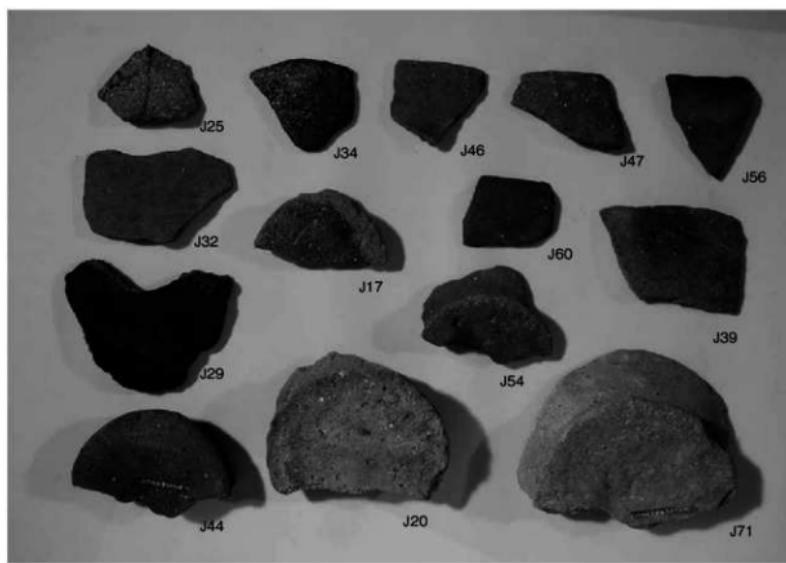
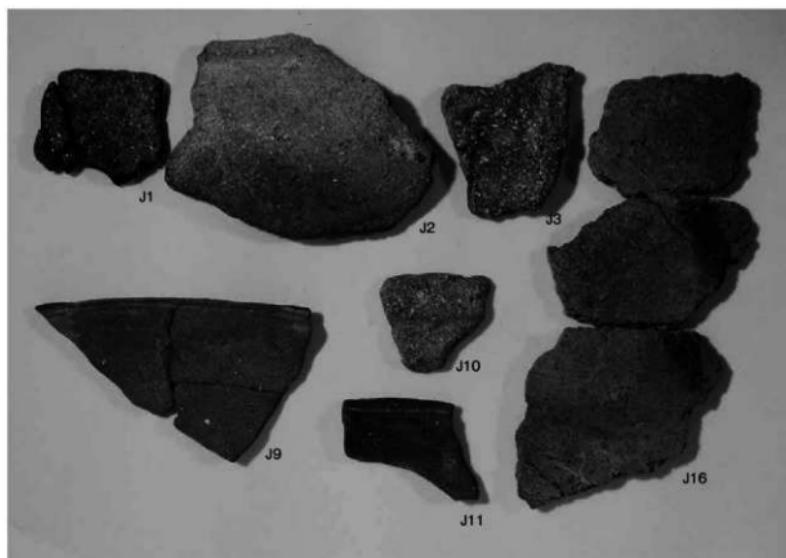
弥生時代・古墳時代包含層出土石器（磨石類）



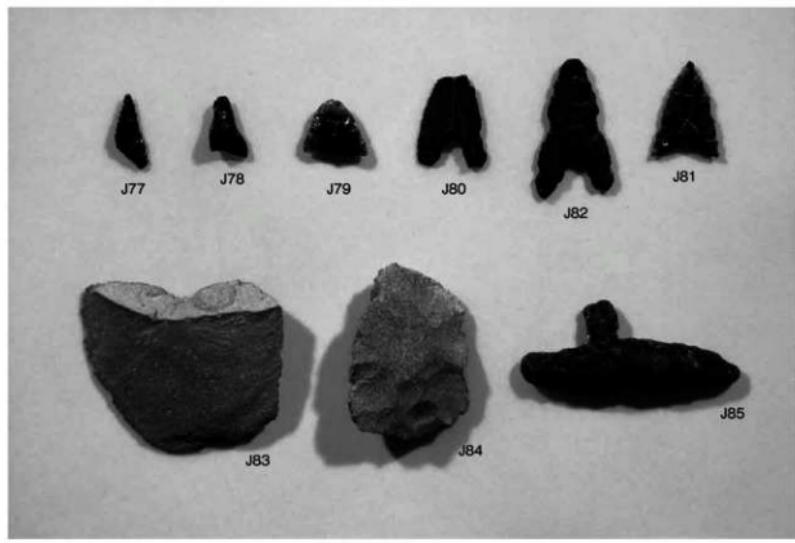
弥生時代・古墳時代包含層出土石器（磨石類）



弥生時代・古墳時代包含層出土石器（砥石）



出土縄文土器



出土縄文土器・縄文時代包含層出土石器

#### IV 第53次調査の報告

## 1. 調査の経緯と経過

経緯 事業地北東端の金保池が位置する谷部では、平成18年度から第49次・51次調査を実施し、古墳時代から古代を中心とした遺構・遺物を多数検出している。この調査地点の道路を挟んで北東側では、平成16年に北側の丘陵末端部で40次調査を実施し、東側への谷の落ちを確認している。その後この一帯は九州大学による土地取得が行われたが、谷の南側の36次調査地点に接する部分については未試掘のままであり、第49次調査の成果から遺構の広がりが予想された。この個所も造成工事範囲に計画されているため、平成20年8月2日～7日に試掘を行い、ピットを中心とした遺構と北西側に落ちる谷部に包含層を確認した。この結果を受けて九州大学と教育委員会文化財部は協議を行い、造成計画を避けることができないことから、第53次として発掘調査を行うことになった。調査は第51次調査と並行して平成20年2月19日～20年4月9日に実施した。調査面積は770m<sup>2</sup>、出土遺物量はコンテナケース11箱ほどである。

立地 調査地点は水崎山（標高95m）から北東に派生した丘陵に挟まれた谷の開口部に位置する。谷の南側丘陵の末端頂部は標高13～15mを測り、第36次調査を実施し5世紀代の円墳である経塚古墳、近世～近代墓などを確認している。調査地点はその北西に接する田面で標高5.9mを測る。調査地点の北東側に接する田面とは50cmほどの段差があり、この田面では平成7年度の試掘トレンチ



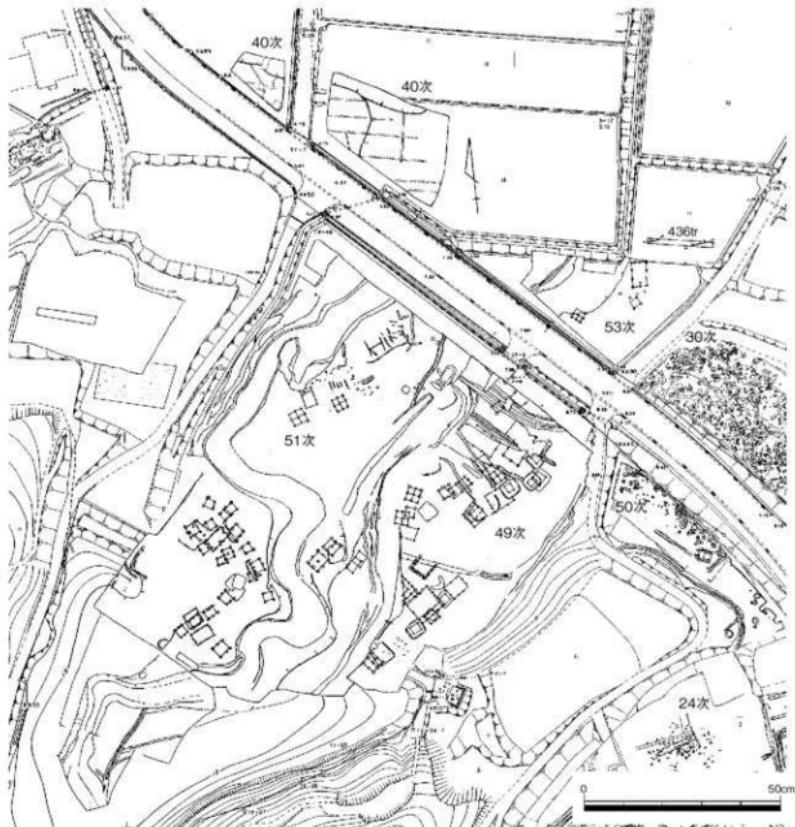
第1図 調査地点位置図（1/2500：昭和50年）

436で緩やかな丘陵の落ちを検出し、遺構が北側には伸びないことを確認している。谷の北西側の丘陵末端部で実施した第40次調査では、北側への急激な落ちと東側、西側への緩やかな斜面を確認し、遺構は確認できず少量の遺物が出土したのみである。

## 2. 調査の記録

### (1) 調査概要

対象地は北側の田面と南東、南西側の道路に挟まれた平面三角形、標高6.2mの田面である。南東端に接する道路面は標高8.2mで、対象地とは比高差が2mほどある。調査は調査区南東半では現況より約60cm掘削した灰茶色砂質土または明黄茶色土砂質土の面で遺構を検出したが、調査区中ほどに段差があり北西に1mほど下がる。この段差は昭和50年代の地図（図1）に見られ、水田造成に



第2図 周辺の調査 (1/1200)



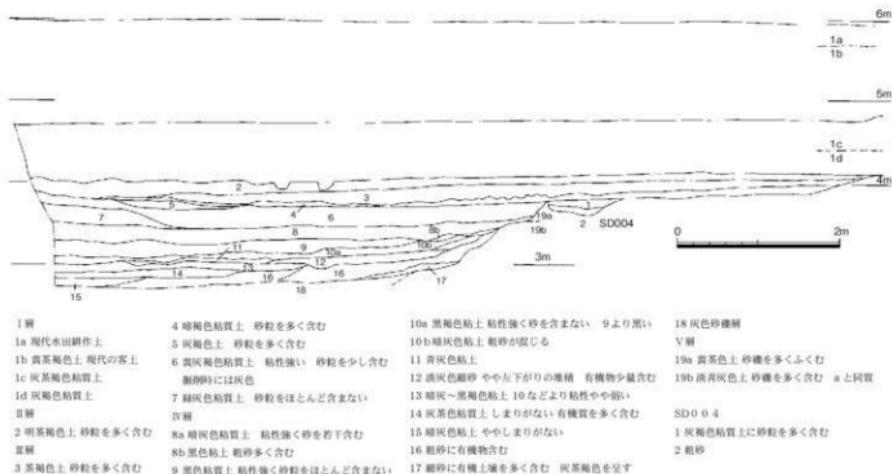
第3図 第53次調査全体図 (1/300)

より削平されたものと考えられる。この段差より南東の丘陵上を1区、西側を2区と呼称する。

2区の遺構面は緩やかに北西へ下がり、北西端部では谷部への落ちを確認し、堆積した粘質土からは8~10世紀を中心とする遺物が出土した。調査区全体の旧地形は南東側の丘陵斜面であったことが想定され、建物群は斜面の傾斜が緩やかな範囲、または造成した平坦地に形成されたものと考えられる。

遺構は東側の1区でピット群を検出し7棟の掘立柱建物を復元した。この掘立柱建物群は調査区南東側には広がらない。斜面の削平によって消失した遺構もあろうが、南側が急な斜面となり建物の広がりがなかったとも考えられる。北西側の2区南半では遺構は見られないが、段造成で遺構を削平されている。北側の谷の落ち際では溝と井戸状の遺構を検出した。

調査は後述の1層から4層までを重機で除去し、検出した遺構の掘削、記録を行った。その後、2区北西部の谷部について北側に拡張し、包含層の調査を行った。



第4図 谷部北壁土層(1/60)

## (2) 層序

1区は、厚さ20cm弱の水田耕作土と、40cmほどの灰茶褐色土を除去した標高5.4mが遺構面となり平坦に近い。遺構面は、西側は灰茶色砂質土で、東側はその下層の明黄茶色土となり北半では礫が露出する。(図版1-1・2)

2区東半は、水田耕作土(1a)、現代の客土(1b)、灰茶褐色粘質土(1c)、灰褐色粘質土(1d)を除去した面を遺構面ととらえたが遺構は確認できなかった。遺構面は小砂礫を多く含む黄茶色土(19a)または同じく淡青灰色土(19b)で北西へ緩やかに下がる。段落ち際の1d層に相当する位置では近世の染付が出土しており、この部分の造成は近世以降と考えられる。

2区の谷部については第4図に北壁土層を示した。8層以下は調査区拡張後に設けたトレンチ部分の土層を合成している。以下、IからV層の4つの層群に分けて記載する。

I層 近世以降の水田層、客土と考えられる。a～d層に分けて示したが、詳細な検討・作図は行っていない。1a層は現代の水田耕作土で1b層は昭和50年代以降の造成時の客土と考えられる。1c、1d層は縦方向の筋状鉄分が多くみられ、床土状の黄茶色土層を挟む部分もあり、旧水田層と考えられる。さらに数層に分層可能である。

II層 灰褐色粘質土 砂粒を少量含み全体に黄色かかり、旧水田の床土と想定している。

III層 谷部の主たる遺物包含層で、第4図の3～7層に古代を中心とした遺物が出土した。3、4層は茶色が強く砂粒を多く含む。6層は黄灰褐色を呈し、粘質が強く砂粒は少ない。検出時は灰色であるが、時間が経過すると変色し黄色かかる。

IV層 上部の8、9、10層は暗灰色、黒褐色の細かな粘土で締りがつよく、砂粒が少ない。下部は粘土、有機物、粗砂が混じる層が細かに入る。掘削を行ったのは拡張区とトレンチ部のみで、8、9層に少量の古代の遺物と古式土師器が出土した。10層以下では遺物を確認していない。

V層 本調査区の遺構面とした19層で砂粒、小礫を含む。

### (3) 遺構と遺物

1区で掘立柱建物を構成するピット群などが集中して分布し、2区の谷部落ち際で井戸状の遺構を検出した。1区のピット群は49次調査で検出した掘立建物群と同じ丘陵西側の緩斜面に展開する。

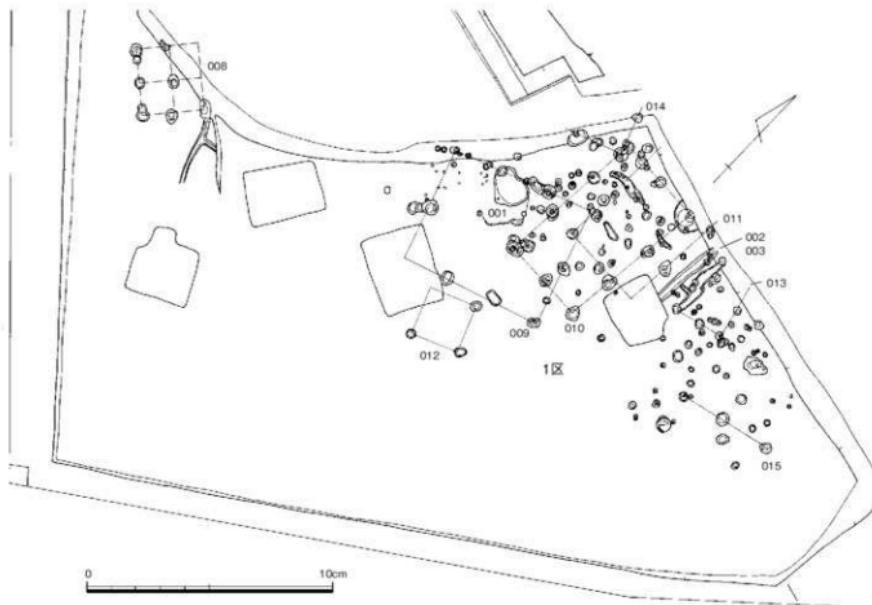
#### 1) 掘立柱建物

190基ほどのピットを検出し、7棟の掘立柱建物、1つの柱列を復元した。遺物が出土したピットに遺構番号を付している。

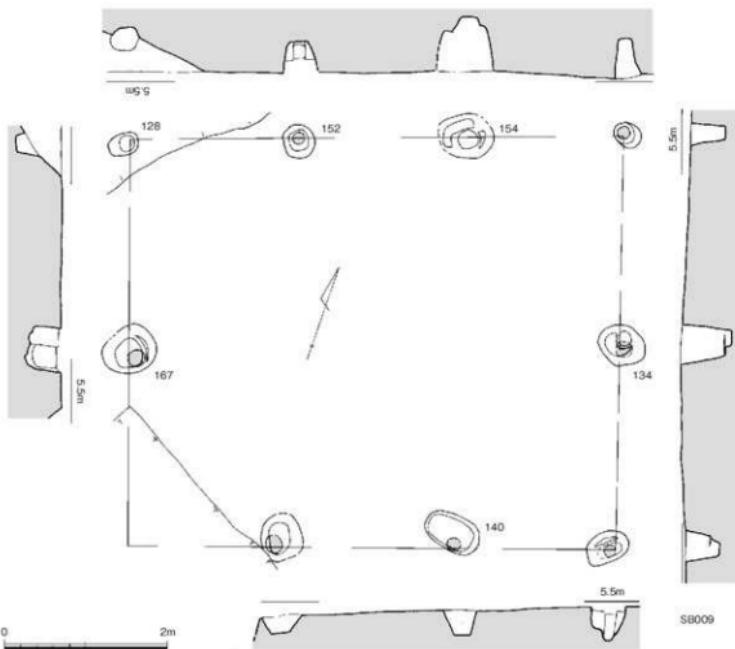
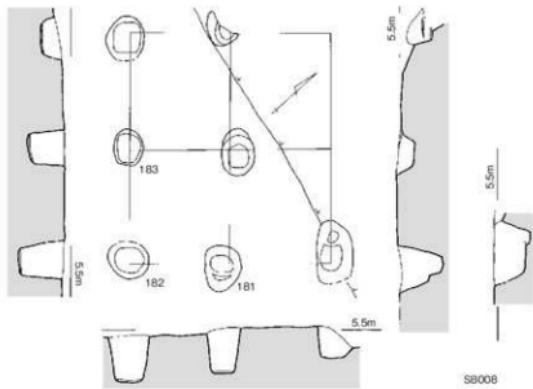
**SB008** (第6図) 2間2間の総柱建物で、長軸はN-48°-Eをとる。北側の柱穴2基は段造成で失われている。建物規模は長軸2.8m、短軸2.5mで、柱間は長軸1.4m、短軸は1.2mである。柱穴は不正円形または円形で、径45cm前後、深さ0.4~0.5mである。東柱は20cmと浅く、長軸方向の位置がやや北東へずれる。遺物は微量で外面刷毛目の甕片小片が出土している。

**SB009** (第6図) 3間2間の掘立柱建物で、長軸はN-71°-Eをとる。南西隅の柱穴は搅乱で失われている。建物規模は桁行6.0m、梁行5.0mである。柱間は桁行1.9~2.0mと揃っており、梁行は2.5mである。柱穴は不正円形または円形で、径30~70cm、深さ0.3~0.65mとばらつきがあり、南側の丘陵側の柱穴が浅く、旧地形が高かったことが想定される。7基の柱穴で柱痕跡を確認し、径15cmほどである。

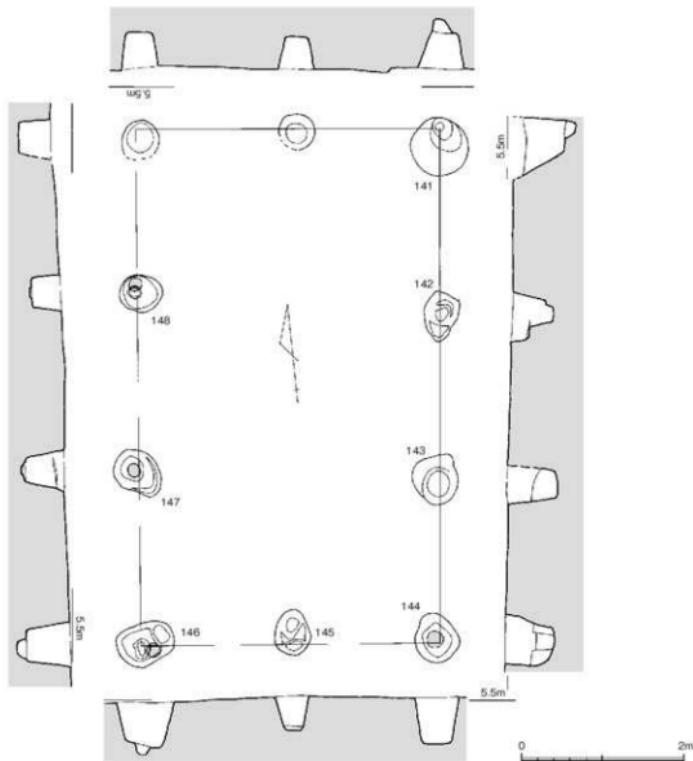
出土遺物(第10図) 遺物は7基の柱穴から出土したが少量で、須恵器、土師皿の小片が見られる。1はSP154出土の土師器の壺で底は丸みを帯びる。2、3、4はSP167出土。2は須恵器の壺、3は



第5図 1区遺構配置 (1/200)



第6図 掘立柱建物SB008, 009 (1/60)

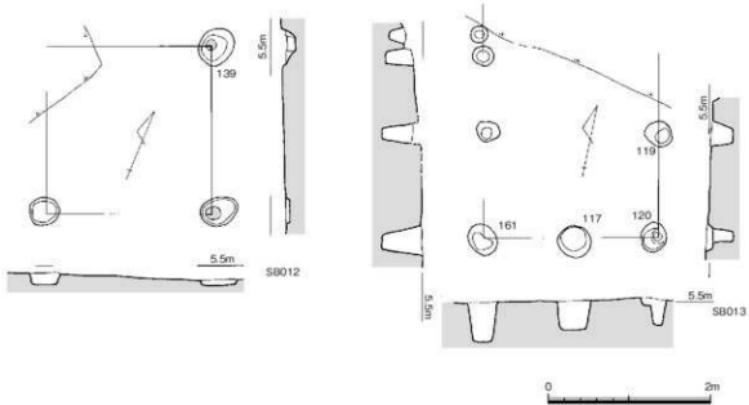
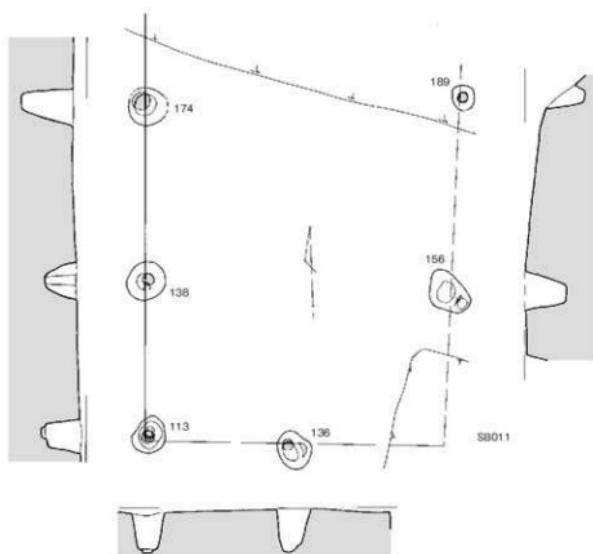


第7図 掘立柱建物SB010 (1/60)

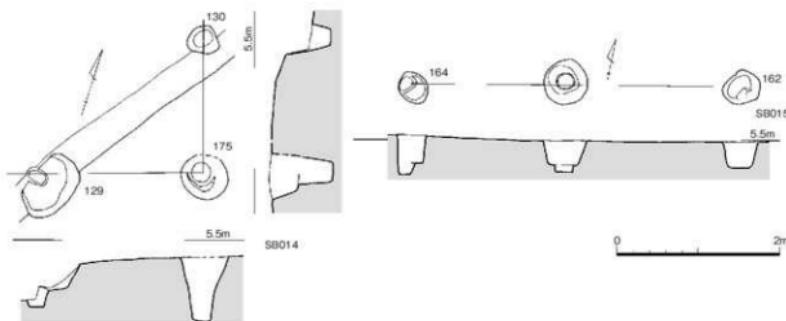
土師器の移動式カマドで外面に平行叩きが残る。4は羽口で先端は薄くガラス化している。他に土師器の甕等が出土しているが小片である。

**SB010 (第7図)** 3間2間の掘立柱建物で、長軸はN-5°-Eにとる。建物規模は桁行6.2m、梁行3.6mである。柱間は桁行2.0~2.2m、梁行は1.8mである。柱穴は不正円形または円形で、径45~60cmと揃い、深さ0.5~0.85mとややばらつきがある。梁の間の柱は両側とも径40cm、深さ40cmと小さい。

**出土遺物 (第10図)** 8基の柱穴から少量の遺物が出土している。5はSP142出土の土師器椀の小片。6から9はSP144出土で、6は土師器椀高台部片、7は蓋で土師質、8、9は土師器坏で、8は器面があれ暗褐色を呈す。10はSP145出土の土師器坏。11から14はSP146出土で11、13は土師器の坏と甕、12、14は須恵器の蓋と底部。15、16はSP147出土で15は黒色土器Aの椀で高台が欠ける。16は土師器の坏で胎土は細かい。17、18はSP148出土で17は土師器の坏、18は須恵器の底部である。他は土師器小片が主体だが、黒色土器片が少量ながら出土している。



第8図 挖立柱建物SB011、012、013 (1/60)



第9図 挖立柱建物SB014, 015 (1/60)

**SB011 (第8図)** 北側が調査区外となる2間2間の掘立柱建物を確認し、桁行3間以上を想定している。長軸はN-2°E-にとる。南東隅の柱穴は搅乱で失われている。建物規模は桁行4.2m以上、梁行3.7mである。柱間は桁行1.9~2.3mとやや不揃いで東西でずれる。梁行は1.7mである。柱穴は不正円形または円形で、径45cm前後、深さ0.5m前後と揃う。5基の柱穴で柱痕跡を確認し、径15cmほどである。

**出土遺物 (第10図)** 6基の柱穴から遺物が出土している。19、20はSP113出土で19は土師器楕、20は黒色土器A楕の高台部。21はSP174出土の壺高台部で土師質である。22は須恵器の返り部で器壁が薄い。他に甕、壺など主に土師器片が出土している。

**SB012 (第8図)** 1間1間の掘立柱建物で、長軸はN-23°W-にとる。北西隅の柱穴は搅乱で失われている。建物規模は2mほどである。柱穴は不正円形または円形で径35~45cm前後、深さは0.1m前後と浅い。SB009の南側の柱穴と同様に旧地形が高く、比較的大きな削平を受けているものと考えられる。SP139で柱痕跡を確認し、径17cmほどである。遺物は検出できなかった。

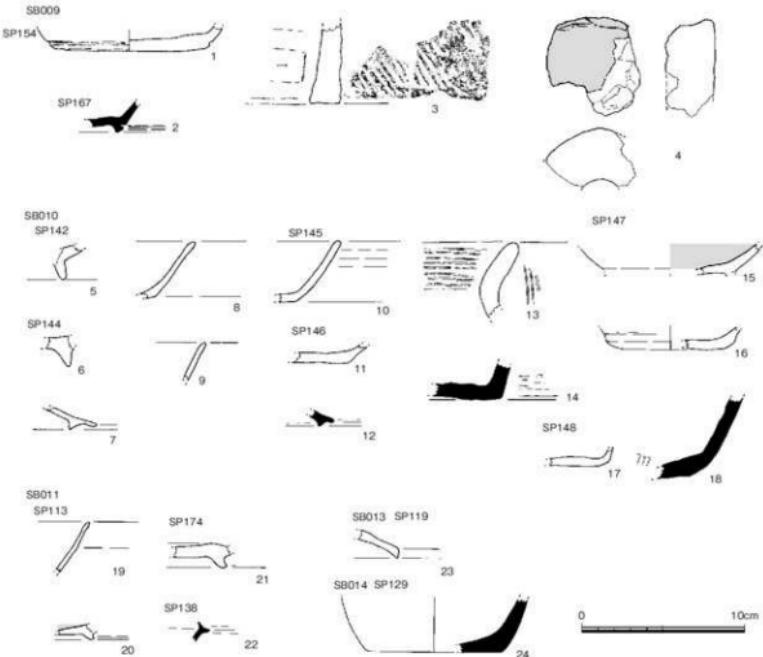
**SB013 (第8図)** 北側が調査区外となる2間2間の掘立柱建物を確認し、桁行3間以上を想定している。長軸はN-11°W-をとる。建物規模は桁行2.2m以上、梁行2.1mである。柱間は桁行1.0~1.25mとやや不揃いで、梁行は1.1mである。柱穴は不正円形または円形で、径25~45cmと小さく、深さは東側が30cmと浅めで他は0.5m前後である。

**出土遺物 (第10図)** 4基の柱穴から少量の遺物が出土している。23はSP119出土の蓋で土師質である。他に少量の土師器の甕、壺片が出土している。

**SB014 (第97図)** 調査区北端に深い同規模の柱穴3基からなる1間1間の掘立柱建物を確認し、さらに西側に展開するものと考えられる。長軸はN-23°Wをとる。北西隅の柱穴は搅乱で失われている。柱間は長軸で2m、短軸で1.7m。柱穴は不正円形または円形で径50~80cm前後、深さは0.6~0.8mと深く、比較的削平が小さかったものと考えられる。

**出土遺物 (第10図)** 3基の柱穴から少量の遺物が出土している。24はSP129出土の壺底部で須恵器と考えられるが焼成不良で瓦質に近い。他に少量の土師器甕、壺、須恵器の小片がみられる。

**SB015 (第9図)** 調査区東端で3基のビットがならび、2基は柱痕跡がみられる。建物として確認できていないが、南側が削平されている可能性もあり取り上げた。間隔は2.0mで、径40~55cm、深さ30~50cmである。遺物は土師器甕、壺、須恵器甕の小片が出土している。



第10図 挖立柱建物出土遺物（1/3）

## 2) 土坑

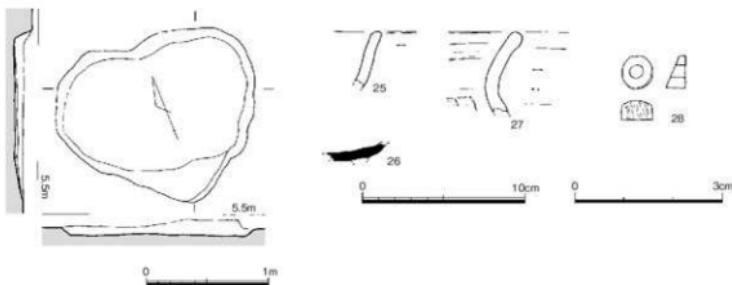
**SK001**（第11図） 1区の掘立建物群中に位置する平面形不整形の浅い土坑で、長軸の長さ160cm、深さは13cmほどである。SB009に切られる。

出土遺物（第10図） 土師器甕の片が多めで壊、須恵器はわずかである。25は土師器の口縁部で傾き不確実。26は須恵器の壊で高台が剥げる。27は土師質の甕で頭部に強い横ナデがみられ、胸部内面に横方向の擦過痕がみられる。28は滑石製の玉片で外面に縦方向の擦痕が全面に見られる。外径6.8mm、孔径2.5mmを測る。

**SK006**（第3図） 2区西側の谷への落ち際に位置する。平面楕円形の遺構で長さ100cm、幅60cm、深さは35cmほどの規模である。黒色土器、須恵器壊、土師器碗片が出土している。

## 3) 井戸

**SK005**（第12図） 2区の谷への落ち際に位置する円形の土坑で、下部に三方を矢板で棒状に囲む構造があり井戸とした。暗褐色粘質土の包含層上で円形の掘り方を検出し、SD004を切る。北側土層（第4図）のⅢ層に対応するがⅢ層内の位置は不明である。この付近の包含層はやや薄い。掘方は $1.8 \times 2.0$ mほどの不正円形で、壁は鐘鉢状の傾斜で中位において段を成し底に至る。底の径45cmを測る。西側を除いて中位の段にテラスがあり、南北は幅20cmほどであるが、東側は2段に

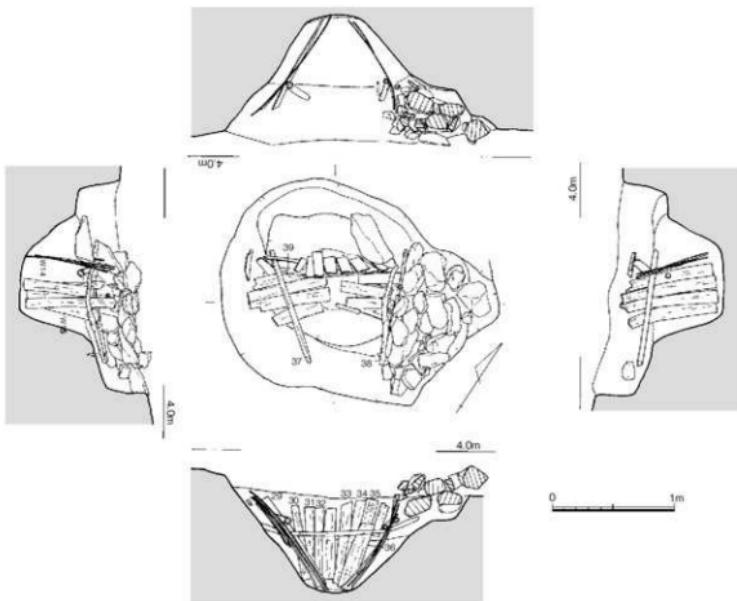


第11図 SK 001、出土遺物 (1/40、1/3、1/1)

分かれ60cmほどの幅がある。井戸枠は南側を除く3方に板材を立てて囲い、それぞれの内側中位には横木を渡している。東側には板材の外側にも横木を配する。枠の規模は東西方向北側で80cm、南側では65cmほどで方形を成す。北側の板材は上部をやや内側に傾けて立つが、東西の板材は掘方の壁から10~20cm離れるものの、掘方の傾斜に沿って斜めに配されている。板材は幅9から11cmほどで、底に達するもので長さ90から60cmである。底側は直に成形された状態が残っているが、上部は腐食し原形を留めていない。厚さは0.4から1.3cmほどで、取り上げ時にはしなる状態であった。この板材を北側には9枚並べ一部重なり、東端には底に至らないや幅狭で短い板材3枚が外側に配される。東側は4枚がならび、その背後に1枚が斜め方向に見られる。東側は5枚がやや不揃いに並ぶ。横木は北側のものが東西のものより下で、横木については北側から構築されたと考えられる。東側の横木の南端は径3cmほどの杭で内側から固定されている。

井戸枠東側には掘方のテラスより上に20から10cm大の礫が裏込め状に配される。特に丁寧ではないが、投げ込んだ状態ではない。この影響か、東側の板材は上部が直に立った状態であった。造構覆土は上部の検出面は青みを帯びた灰色粘土で、井戸枠内は粘質の強い暗灰色~黒褐色粘土で、底20~30cmはややシルト質であった。枠の裏側は粘質の暗灰色粘土で大きな違いはない。枠内中位には小骨片がやまとまって散乱していたが腐食し取り上げることはできなかった。小枝などの有機物、土器片が出土している。

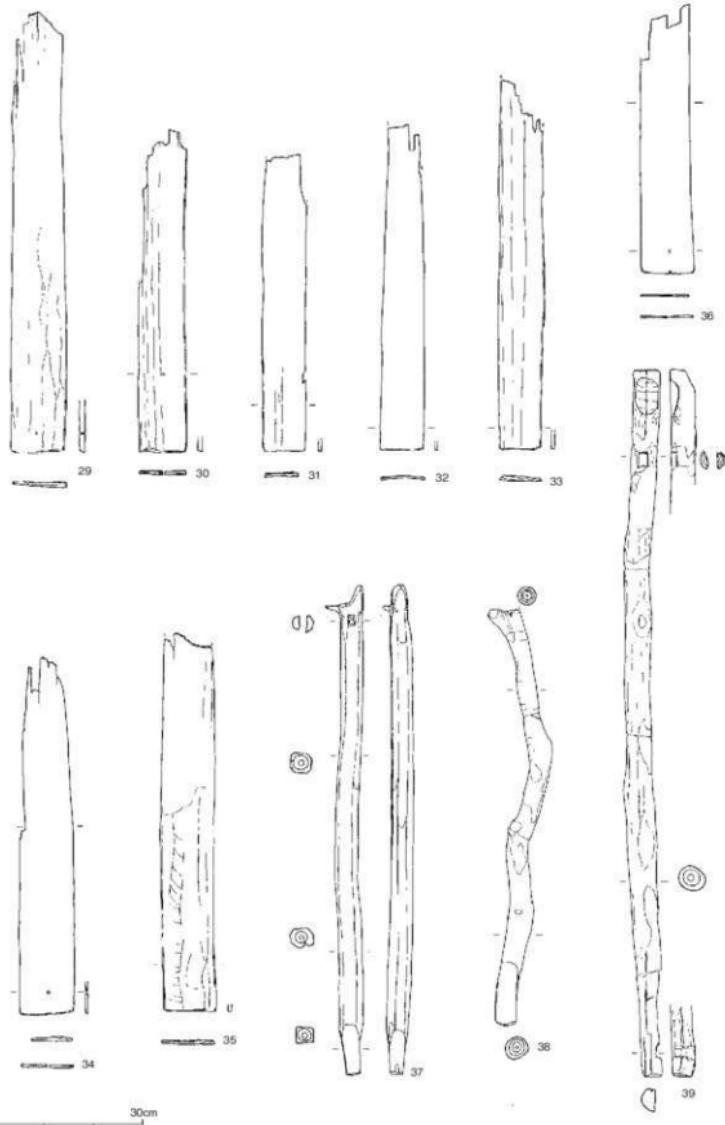
出土遺物（第13、14図） 29から39は井戸枠を構成する部材である。29から36は北側に並べた板目材で幅9から11cmと一定に成形されている。下端は直に成形され、上端は腐食により元の形を留めておらず、長さは不明である。29は90cmと他と比較して長いが、斜めに設置されて出土し、埋没状態の違いで遺存したものである。器面には29、35のように工具痕が見られるものと、割ったままの表面が観察できるものがある。厚さは1.3から0.6cmほどとやや差がみられる。上下左右の厚さに大きな差はないが、29などは片側1.3cmに対し反対側0.4cmと差がある。また、29、30、34、36には下部寄りに径3、4mmほどの穿孔がみられる。37から39は横木に使われた丸材で順に東側、西側、北側のものである。37、38は図の上を北側に配されていた。37は建築材の転用品で北端部に2.2×1.5cmほどの貫通孔がみられる。側面はヤリガンナで加工し面を成すが、未加工部もある。樹皮は残っていない。長さ100cm、幅4.7cmを測る。38は端部以外に加工は見られず樹皮が残る。長さ85.2cm、径5cmを測る。39は垂木の転用品で図の上を西に設置されていた。両端



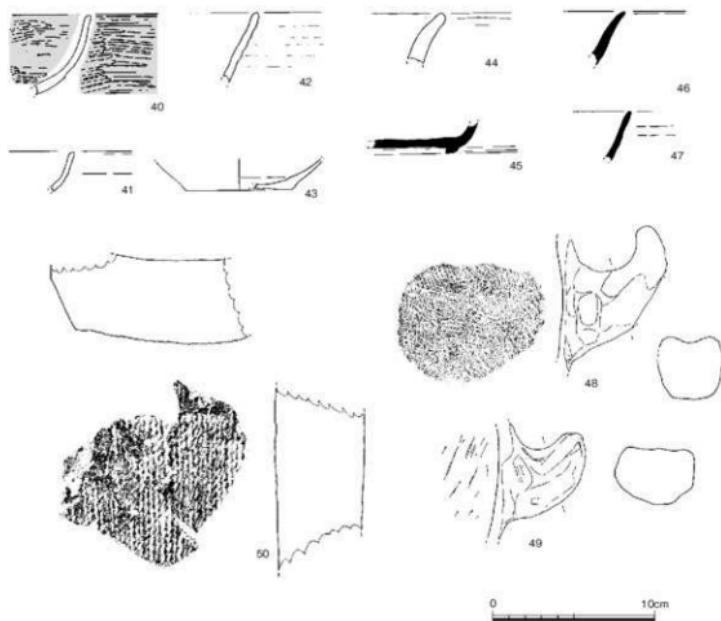
第12図 SK005 (1/40)

部に書き込みが面を違えてみられ、西側には貫通孔がみられる。他に端部以外に加工は見られず樹皮が残る。長さ144.7cm、径6cm、貫通孔は4×2cmほどの長方形で、東側の欠きこみの幅2.5cm、深さ1cmを測る。37と西側の2つの板材W14、W15について樹種同定を行った。37はマキ属、板材はクスノキとモミ属という結果がでているが、目視ではいずれも針葉樹であり、試料採取時に混乱している可能性がある。

土器類は黒色土器、須恵器、土師器が覆土から出土しているが、祭祀等をうかがわせるまとまり等は見られなかった。40は柵内下部で出土した黒色土器の楕で内外面に丁寧な研磨調整を施す。内面は黒光りし、外面上部は黒色、下部黄茶色を呈す。40から42は土師器の楕または壺。41は灰白色を呈し丸みを帯び、42は淡橙色を呈し外面に成形時の凹凸がみられる。43は薄手で焼きが固い。44は土師器の甕の口縁部で小片のため傾きは不確実である。45から47は須恵器の壺。48、49は土師器の取手で48の内面には当て具痕が、49には削りがみられる。50はいわゆる怡土城瓦で外面黒色、内面灰茶色を呈し、外面に叩き具の綱目痕が深く明瞭に残る。厚さ5cmを測り、胎土には5mm大までの砂粒を多く含む。この他に礫石器（図19-141、146）が出土している。



第13図 SK005出土木器 (1/10)



第14図 SK005出土遺物 (1/3)

#### 4) 溝

SD002 (第15図) 1区北東部に南北に走る幅40cm、深さ11cmほどの溝で、南側は搅乱、北側は段落ちで切られ3mを確認した。すべてのピットから切られる。土師器甕と壺の小片が出土した。

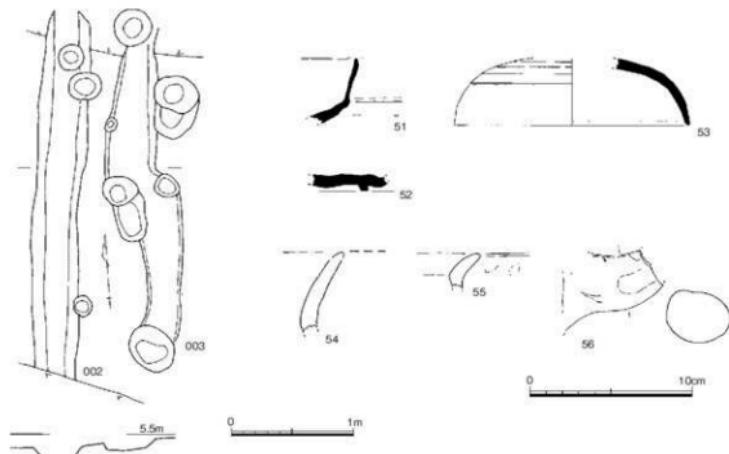
SD003 (第15図) SD002の東側に併行する。幅43cm、深さ13cmほどでクランク状に曲がり、ピットから切られる。須恵器甕、壺小片が出土している。

SD004 (第3図) 2区の谷の落ち際に沿って走る溝で幅90cm、深さ20cmと浅く底は粗砂が堆積する(第4図)。S E 005に切られる。

出土遺物 (第15図) 須恵器高台付壺、甕片、土師器甕、取手などが出土している。51から53は須恵器で51は高壺で外面に自然釉がかかる。52は1/4からの復元口径14.3cmを測る。54、55は土師器の甕で器面は荒れる。55胴部内面に削り痕が見える。56は土師器の取手で胎土は砂粒を含むが細かい。

#### 5) 包含層

2区谷部に堆積した包含層出土遺物について触れる。層序で記載した第4図のⅢ層が主たる遺物包含層であるが、掘削時に3から7層を明確に確認できておらず、遺物は包含層中の上中下層に分けて取り上げている。以下ではそれに沿って遺物を示したい。上層は3層から6層上部、中層は6、7層、下層は6層下部におおよそ相当しようが明確ではない。また遺物量は、上層がコンテナケース (小)



第15図 SD002・003, SD004出土遺物 (1/40, 1/3)

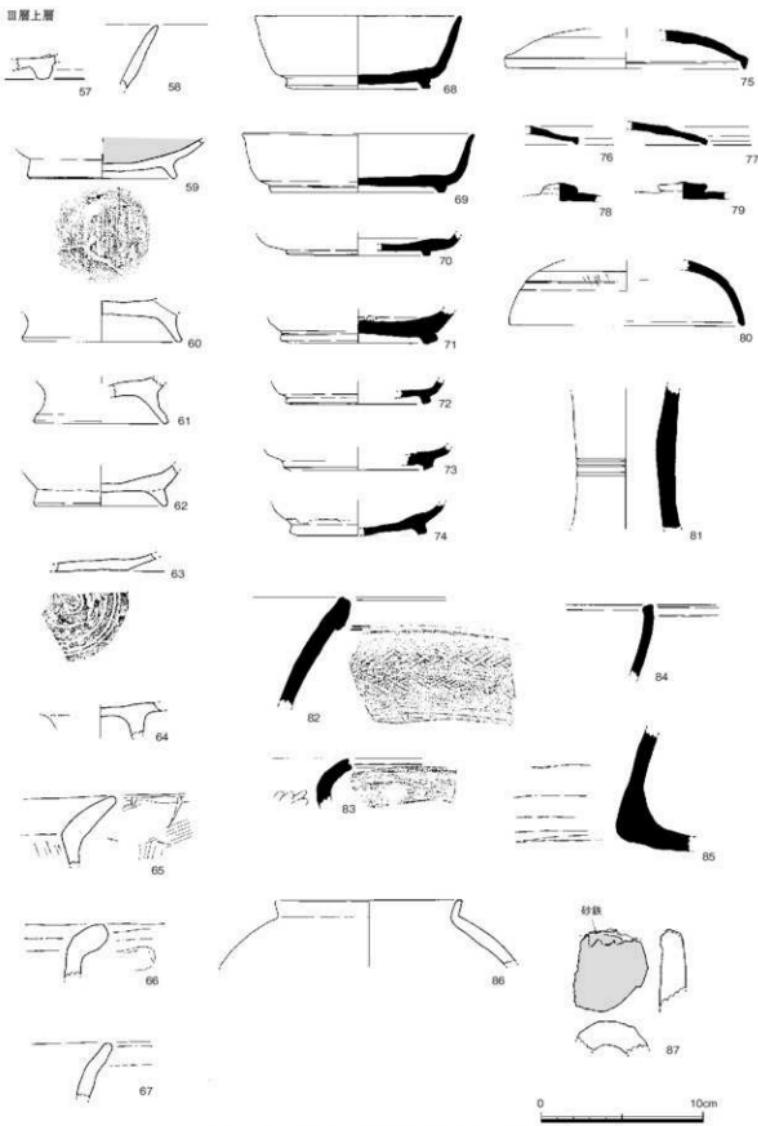
2箱、中層3箱、下層1箱、不明1箱ほどである。8層以下は幅1m、長さ7mのトレーンチ部と拡張区の掘削を行い、8、9層で十数点の遺物が出土しIV層出土とした。

#### 土器類（第16～18図）

全体に須恵器が最も多く、高台付須恵器を中心に各層に見られる。土師器、黒色土器も各層でみられる。黒色土器は焼きが瓦質に近いものがあるが、高台の形態から黒色土器とした。IV層は古式土師器と須恵器片で土師器の壺と考えられる小片が1点出土している。白磁碗が中層で3点出土している。以下層ごとに示すが、一括して取り上げたものは上層にふくめた。

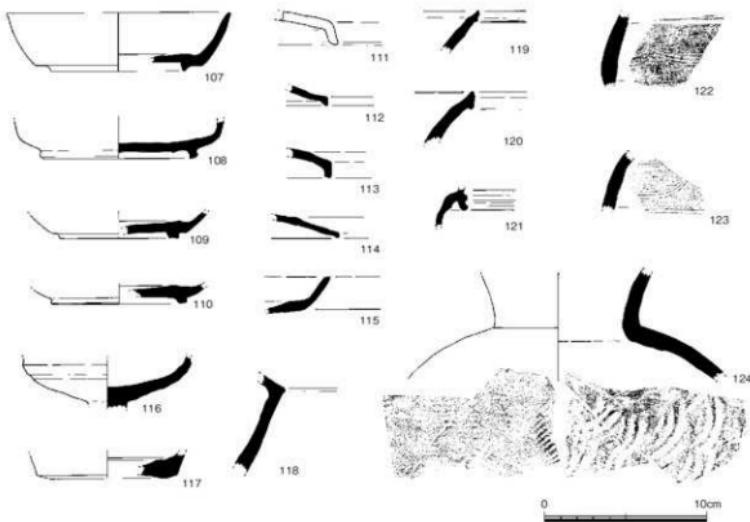
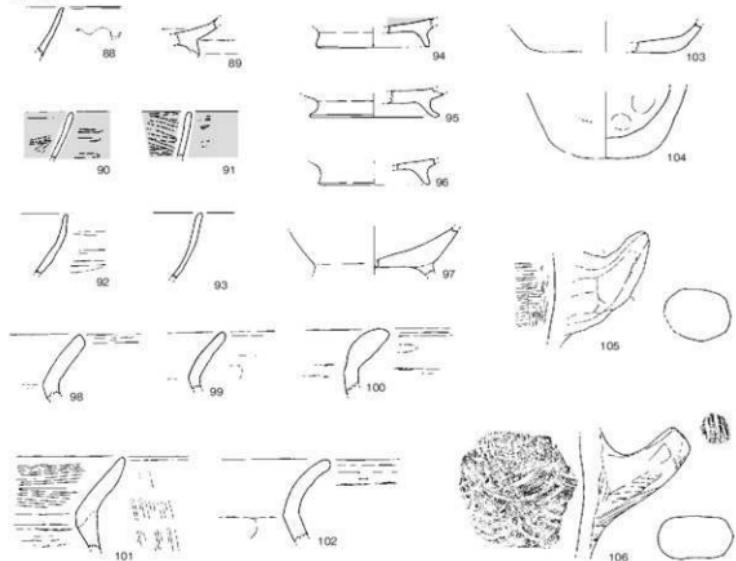
Ⅲ層上層 57は青磁の底部で高台と見込みに粘土目が残る。混じり込みか。58、60から63は土師器の壺、壺である。いずれも淡橙色を呈し胎土は細かく焼きも固い。61、62は1/4からの反転である。63はヘラ切痕が明瞭に残る。59は黒色土器A類の壺で底部外面に板目がみられる。65から67は土師器の甕または甕の口縁部で、65は外面に刷毛目、内面胴部に削り痕が見られる。68から85は須恵器である。68から74は高台付壺で71以外は1/8から1/4からの反転である。75から80は蓋、81は長頸壺の頸部で1/4からの復元である。82、83は甕の口縁部で82外面には小口押圧による紋様、83には叩き痕と考えらえる圧痕がみられる。84は鉢でナデ調整、85は甕の頸部屈曲部でナデ調整である。86は短頸壺で胎土が細かく砂粒を含まない。器形は須恵器であるが焼きは土師質で淡橙色を呈す。87は羽口で外面は薄くガラス化し、端部には砂鉄が付着する。

Ⅲ層中層 88は白磁碗で外面に白濁した釉が重れる。89は磁器の底部で外面は露胎で、内面は薄く灰白色の釉がかかるが見込みは搔取る。90、91は黒色土器で内外面とも灰黒色を呈し研磨調整を施す。92、93は土師器の壺で92の外面には炭化物が付着し黒色を呈す。94は黒色土器の壺で内面黒色を呈す。95から97は土師器の壺で、95は胎土が細かく灰白色を呈し瓦質である。97は砂粒を多く含む。98から102は土師器の甕の口縁部で101の外面は刷毛目、内面は口縁部に刷毛目、胴部に削りがみられる。103は土師器の底でやや厚手である。104の胎土は細かく砂粒は少ない。105、

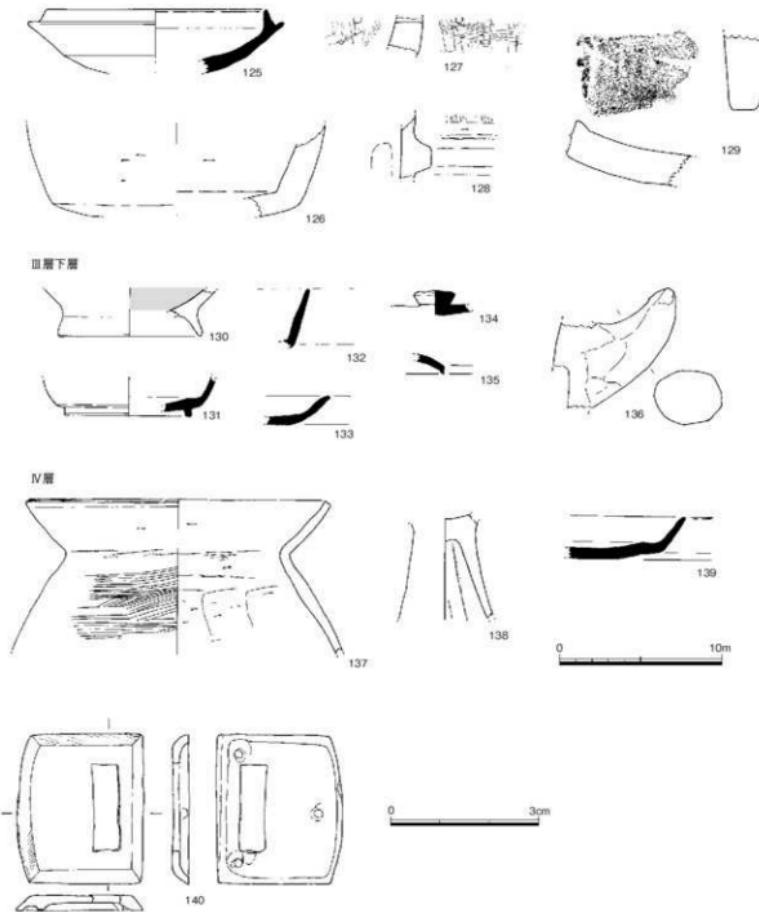


第16図 2区谷部包含層出土遺物1 (1/3)

Ⅲ層中層



第17図 2区谷部包含層出土遺物2 (1/3)



第18図 2区谷部包含層出土遺物3 (1/3, 1/1)

106は土師器の取手で内面には當て具痕が残る。107から110は須恵器の高台付壺で反転復元した。111から114は蓋で、111が土師質で淡橙色を呈し、他は須恵器で焼きもよい。115は須恵器の壺である。116は須恵器の高壺、117壺の底部、118は長頸壺の体部である。長頸壺は別個体の破片も出土している。119から121は須恵器の甕等の口縁部、122、123は頸部で沈線による紋様を施す。124は須恵器の甕で外面疑似格子目叩き、内面で當て具痕が残る。焼きが甘く淡橙色を呈す。125はIV期の須恵器壺身で、少ないが各層に見られる。126は土師質で砂粒を多く含み外面淡灰色、内面淡橙



第19図 出土石器1 (1/2)

色を呈し、内面に回転ナデ調整がみられる。127は滑石製石鍋片と考えられ、外面に成形痕、内面には線状の傷が多くみられ、径5mmほどの穿孔がある。石製品であるがここで取り上げた。128は弥生土器で突帶を横ナデ、胴部に刷毛目が見られる。129は瓦で胎土は細かい砂粒を含み、器面は淡灰色を呈す。内面に布目がみられる。

Ⅲ層下層 130は黒色土器の椀で器面は荒れ、内面灰色、外面橙色を呈す。131から135は須恵器で131、132は壺、133は皿、134、135は蓋である。136は土師器の取手で、接合部で外れている。

IV層 137は古式土師器の甕で口縁部横ナデ、外面胴部は横方向の刷毛目、内面胴部は削りを施す。138は高壺で内面に工具痕が見られる。139は須恵器の皿である。

#### 金属器（第18図）

140は遙方の表金具で裏側には鉄足の基部が3か所見られる。3.05×2.06cmの長方形を呈する。細かな出土層位は確認できていない。

#### 6) 石器（第19～21図）

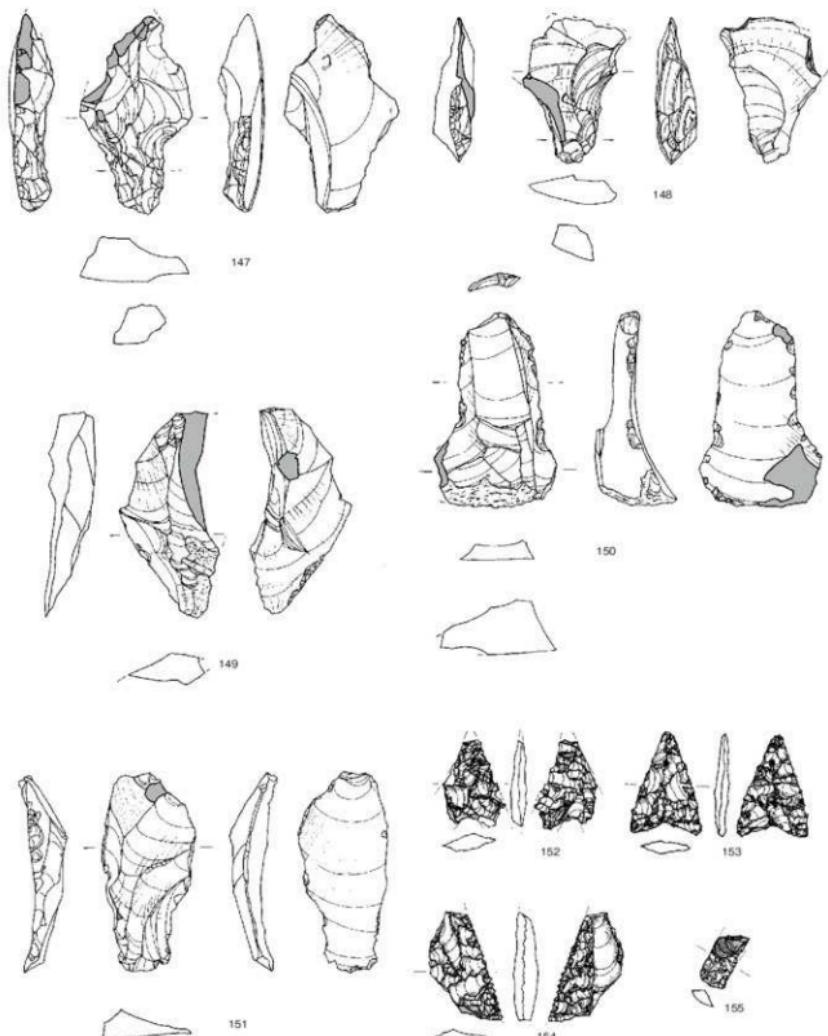
遺構、包含層ほかから出土した石器をまとめて示す。黒曜石は1区の遺構覆土出土が主体で、旧石器時代の遺物を含む。出土位置、法量等は表に示した。表には図示した遺物の後に未図化資料を加えた。141から146は礫石器で、時期は不確実だがそれぞれの遺構、包含層の時期と考えても矛盾はない。141は安山岩の扁平な礫の表面に1ヶ所、背面は3方の側面から剥離を施す。側面のほとんどは自然面である。石核状ではあるが、剥離した剥片は小さく、むしろ図の下端がつぶれており叩き具として使用したものと考えられる。側辺からの剥離は握りやすくするためのものであろう。142は器面が滑らかな花崗岩の小礫で片側が荒れており叩き具とした。風化による荒れの可能性もある。143は平滑な礫の両頂部と片側辺部に敲打痕跡がみられる。144は両側部と腹部に敲打痕が見られる。145は丁度握りやすい形状の玄武岩の礫で器面は風化する。一部側辺に敲打痕が見られる。146は長端部、側辺中央部に敲打痕が見られる。

147から157は剥片石器で、主に1区の遺構から出土した。147から155は黒曜石製の石器である。147は剥片尖頭器で先端と片側側辺を欠く。暗灰色の黒曜石で風化が強い。横剥ぎの剥片を素材とし、基部の二側辺にプランティングを施す。先端部を欠いている。148はガジリが多く不明瞭ながら原の辻型台形石器と推定できる。黒色の弱透明黒曜石で風化が強い。149は一部自然面を残す剥片で一側辺に微細剥離がみられ使用が認められる。黒色不透明の黒曜石で、風化が強く被然を受けヒビが多く認められる。150は作業面調整剥片を2次利用し、二側辺に刃こぼれ状の使用痕が見られる。先端部にはアバタ状の自然面が残る。漆黒不透明の良質黒曜石で風化が強い。151は縦長剥片の二側辺に刃こぼれ状微細剥離がみられる。漆黒不透明の黒曜石で平坦な自然面が残る。風化が強い。152から155は石鎌で、いずれも細かな剥離を施す。154の側辺は細かな鋸状を呈す。155は鍔形鎌と考えられる。156、157は古銅輝石安山岩製の横長剥片である。156はスクレーバーで刃部は両面からの剥離で作出され、それ以外はほぼ素材のままである。157は先端部に片面から、一側辺には両面からの微性剥離がみられる。

#### (4) 終わりに

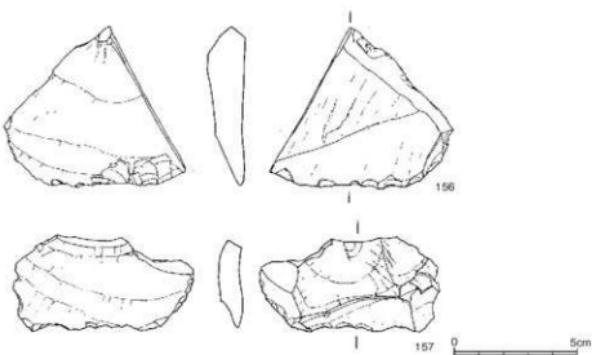
旧石器時代から中世の遺構・遺物を検出した。時期等を確認しておきたい。

旧石器時代では、147から151の黒曜石製の剥片尖頭器、台形石器、剥片が丘陵上のピット群などから出土し、丘陵先端の緩斜面に包含層等の広がりがあったことが想定される。つづく石鎌は縄文時代のものと考えられる。これら旧石器時代から縄文時代の遺物は近接する48・51次調査でも出土し



0 3cm

第20図 出土石器2 (1/1)



第21図 出土石器3 (1/2)

ている。また弥生、古墳時代の遺物も谷部の包含層中より少量出土しているが、谷の上流からの流れ込みであろう。

古代から中世の時期が本調査区の遺構、遺物の大部分を占める。丘陵先端の北側緩斜地で、柱穴を中心とした遺構群を確認し、谷部において井戸1基と谷に堆積する包含層を検出した。丘陵上の柱穴群からは掘立柱建物7棟を復元した。掘立柱建物は、主軸の方位を比較すると総柱建物のSB008(第1群)、磁北から $19\sim23^{\circ}$ 西に軸を取るSB009、014、012(第2群)、磁北に近いSB010、011、(013)(第3群)の3者が見られる。出土遺物は須恵器、土師器甕、壺、椀、黒色土器を含むが、いずれも小片で少ない。遺構の時期は決め難いが8世紀代から10世紀初めが想定されよう。その中で第3群のSB010、011で土師器椀、黒色土器が出土しているのに対し、第2群のSB009、013、014からはそれらの出土がない。遺物が少なく、方位も丘陵斜面の狭い土地で地形に影響を受けていることを考慮すると不確かではあるが、第2群と第3群に時期差を認めることが可能であろう。その場合、第2群を8世紀から9世紀前半の範囲、第3群を9世紀後半から10世紀代を想定しておきたい。SB008は遺物が甕の小片のみで少なく、方位は地形に沿ったものであろう。49次調査で7、8世紀代の建物群が谷に沿って出土しており、それらに連なるものと考えておきたい。概要でもふれたが、調査区北側には丘陵の落ちがあり、削平を受けた遺構はあるものの建物群の広がりは小さいと考えられる。また南、東側は、第36次調査地点と2m以上の高低差があり、背後に急斜面が迫る地形が想定され、こちらも遺構の広がりは小さいと考えられる。

谷部で検出した井戸は遺物から9世紀から10世紀初めと考える。包含層遺物は、Ⅲ層は上中下に分けて示したものの8世紀から10世紀代を主とし、差はみられない。Ⅳ層は遺物が少なく不確かだが8世紀代に収まる可能性があろう。

遺物では、包含層で出土した巡方が注目される。49、51、53次調査地点の建物群も、元岡・桑原遺跡の他の谷部の建物群と同様に、一般集落とは異なる性格を考慮する必要がある。

表 出土石器

	造構	器種	石材	最大長	細大幅	細大厚 (cm)	重量 (g)	備考
141	SE005	敲石	安山岩	8.3	6.8	3.1	183.3	3／5
142		敲石	花崗岩	4.9	4.4	4.1	147.5	
143	Ⅲ層	敲石	火成岩	9.2	5.4	3.4	235.7	
144	Ⅲ中層	敲石	火成岩	5.7	6.2	3.2	197.9	
145	SD004	敲石	玄武岩	6.3	4.8	4.9	237.7	
146	SE005	敲石	變成岩	11.3	6	4.1	317.4	
147	SP179	剥片尖頭器	黑曜石	4.05	2.25	0.95	6.71	
148	SP104	台形石器	黑曜石	2.92	2.1	0.65	3.06	原の辻型
149	SP168	使用剥片	黑曜石	4.15	1.7	1	4.7	
150	SP179	使用剥片	黑曜石	4.1	2.6	1.15	9	石核調整剥片
151	SP187	使用剥片	黑曜石	4.05	1.9	0.7	4.2	
152	SP145	石鏟	黑曜石	1.8	1.3	0.4	0.74	
153	SP146	石鏟	黑曜石	2.1	1.5	0.25	0.63	
154	SP180	石鏟	黑曜石	2.2	1.5	0.5	1.05	
155	SP146	石鏟	黑曜石	1.02	1	0.28	0.2	
156	1-2区間段落ち	使用剥片	安山岩	5.65	4.9	1.25	24.11	
157	1-2区間段落ち	使用剥片	安山岩	5.5	3	0.75	13.56	
158	SD004	石核	黑曜石	2.9	2.1	1	7.61	アバタ状自然面 4/10
159	SP104	剥片	黑曜石	2.5	2.3	1.05	4.89	平坦自然面 5/10
160	SP104	碎片	黑曜石	0.95	0.6	0.1	0.04	
161	SP104	碎片	黑曜石	0.65	0.4	0.15	0.01	
162	SP125	碎片	黑曜石	1.48	0.96	0.17	0.26	風化強い繕々
163	SP133		黑曜石	1.83	1.4	0.65	1.51	平坦自然面 3/10 風化強い
164	SP138	剥片	黑曜石	2	1.86	0.43	1.36	
165	SP147	剥片	黑曜石	2.33	2.3	0.98	5.56	自然面 2/10 風化強い繕々
166	SP147	剥片	黑曜石	2.85	1.32	0.55	1.59	平坦自然面 1/10
167	SP154	碎片	黑曜石	0.88	0.55	0.11	0.08	
168	SP154	剥片	黑曜石	1.1	1.6	0.22	0.38	
169	SP155		黑曜石	1.33	1.42	0.27	0.37	自然面 1/10
170	SP190	碎片	黑曜石	0.7	1	0.13	0.15	
171	SP190	剥片	黑曜石	1.54	1.72	0.34	0.77	自然面わずか
172	SP190	碎片	黑曜石	1.86	1.33	0.36	0.81	自然面わずか
173	SP191	碎片	黑曜石	1.3	1.4	0.23	0.32	自然面わずか
174	2区包含層	石核	黑曜石	3.3	2.35	0.53	4.05	自然面 1/10
175	2区包含層	碎片	黑曜石	0.63	0.5	0.11	0.05	
176	2区包含層下層	剥片	黑曜石	3.52	2.22	0.84	4.57	自然面 6/10
177	2区包含層下層	碎片	黑曜石	1.5	2.2	0.48	1.05	自然面 3/10
178	2区包含層下層	碎片	黑曜石	0.82	0.47	0.14	0.06	
179	2区包含層下層	碎片	黑曜石	1.97	1.12	0.19	0.36	
180	2区包含層下層	碎片	黑曜石	1.7	1.1	0.22	0.26	
181	2区包含層下層	碎片	古銅輝石安山岩	2.27	1.44	0.33	0.97	
182	SD004	剥片	古銅輝石安山岩	2.32	5	0.82	10.72	
183	1-2区間段落ち	剥片	古銅輝石安山岩	3.82	5.89	1.24	31.69	自然面 4/10 背面
184	SP122	剥片	古銅輝石安山岩	4.27	6.56	1.08	32.2	打点のみ自然面
185	1区	剥片	古銅輝石安山岩	4.3	4.62	0.86	22.15	
186	2区包含層下層	碎片	古銅輝石安山岩	2.73	3	0.73	3.48	
187	2区包含層下層	碎片	古銅輝石安山岩	2.7	2.1	0.23	1.21	

# 元岡・桑原遺跡53次調査の自然科学分析業務報告

株式会社古環境研究所

## 1. はじめに

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、元岡・桑原遺跡53次調査より出土した木製品について、木材組織の特徴から樹種同定を行う。

## 2. 試料と方法

試料は、元岡・桑原遺跡53次調査より出土した平安時代の井戸枠資料のNo.48～No.50の木製品3点である。

試料の詳細は、結果とともに表1に記す。

樹種同定の方法は、次のとおりである。まず、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製した。同定は、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察し、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## 3. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表1 元岡・桑原遺跡53次調査における樹種同定結果 ※注

No.	図	遺構名	器種	結果（学名／和名）
48	SE005 W14	井戸枠（板材）	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クスノキ
49	37	SE005	<i>Podocarpus</i>	マキ属
50	SE005 W15	井戸枠（板材）	<i>Abies</i>	モミ属

### 1) マキ属 *Podocarpus* マキ科 No.49

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかで、樹脂細胞が散在し多くみられる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に1～2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布し、暖地に分布する針葉樹である。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。材は、耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

### 2) モミ属 *Abies* マツ科 No.50

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では、早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。接線断面では、放射組織は単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴よりモミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、そのうちウラジロモミ、トド

マツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

### 3) クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科 №48

中型から大型の道管が、単独および2~数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。道管の穿孔は單穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。放射組織は異性放射組織型で1~2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きくなっているのがみられる。

以上の特徴よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は、堅硬で耐朽性が強く保存性が高い。また芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

## 4. 所見

同定の結果、元岡・桑原遺跡53次調査より出土した井戸枠試料は、マキ属1点、モミ属1点、クスノキ1点であった。

マキ属は、耐朽性・保存性が高く、水湿に強く、やや重硬で強靭な材で、柱材などの建築部材によく利用される。井戸の用材としての利用例は少ないが、木材の性質から非常に適材である。周囲に多く生育していたことから選定されたと考えられる。マキ属は暖地の山林内や緩傾斜の適潤な場所を好み、温帯下部の暖温帯から亜熱帯に分布する。極めて温暖な気候下の常緑針葉樹で、温暖な九州ないし東海に多い樹木と言える。モミ属は、温帯性のモミと考えられる。材は、耐朽性・保存性は低いが、軽軟な事から加工が容易な木材である。井戸枠材には比較的利用される材である。なお、九州地方におけるモミ属の利用は弥生時代中期以降から見られるようになる。モミ属は谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好む。クスノキは、堅硬で耐朽性が高い材である。クスノキは井戸の用材としては比較的少ない材であるが、西南日本の沿岸平野に多く、九州や瀬戸内の沿岸の遺跡に特に多い選材であるため、本遺跡でも特有に選定されたと考えられる。

同定された樹種はいずれも温帯から暖温帯に分布する樹木ばかりであった。全国的に見るといずれの樹種も井戸の用材として比較的少ない樹種であるが、九州地方に多く生育し利用されてきた樹木であった。これらの樹木は遺跡周辺にも生育し、遺跡周辺からかあるいは地域的な用材としてもたらされたと推定される。

## 参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学、雄山閣、p.449.  
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.  
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.  
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296.  
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242.

※注 表1の図、出土遺構、器種の項目について編者が追加・修正を行った。

元岡・桑原遺跡53次調査の木材



1. マキ属 遺構名SE005 井戸桿  
横断面 放射断面 接線断面



2. モミ属 遺構名W15 井戸桿(板材)  
横断面 放射断面 接線断面



3. クスノキ科 遺構名W14  
横断面 放射断面 接線断面



1. 調査区前景（南西から）



2. 調査区前景（東から）



1. 2区谷部土層（南西から）



2. SK005（東から）



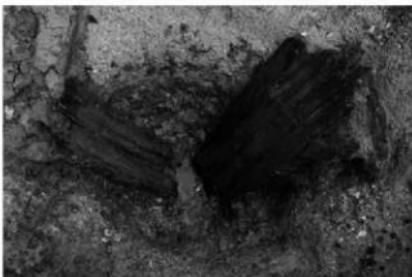
1. 2区包含層トレーン (東から)



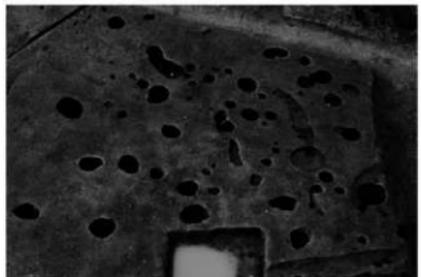
2. SK005 (南西から)



3. SK005 西側板列 (西から)



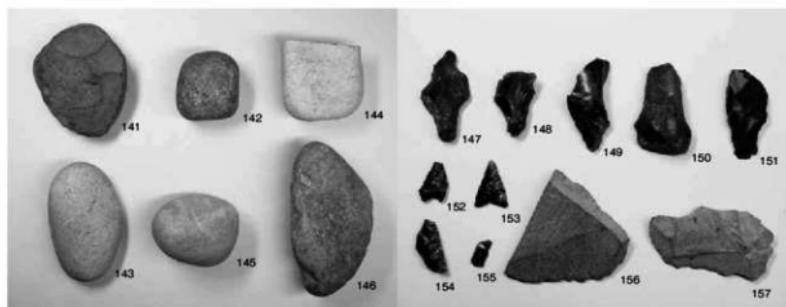
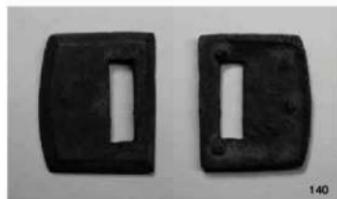
4. SK005 南・北側板列 (東から)



5. SB010 周辺ピット群 (東から)



6. 1区、段落ち (北から)



出土遺物

## V 第57次調査の報告

### 1. 57次調査の概要

#### (1) 調査の経緯

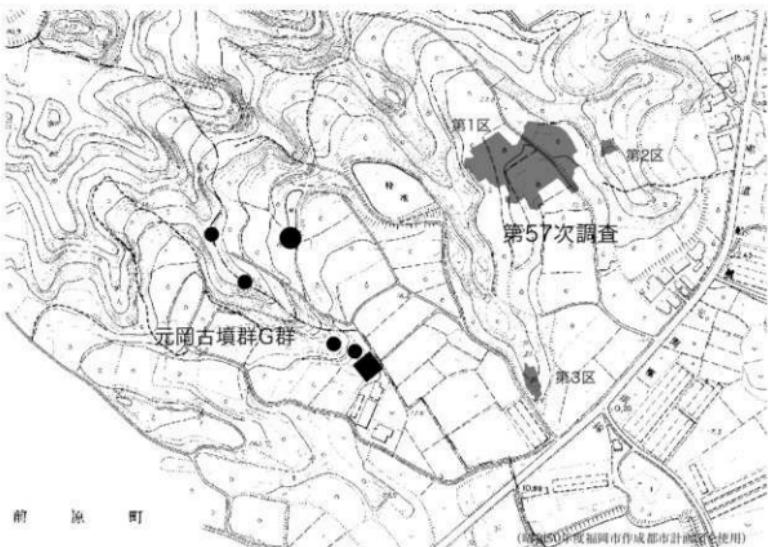
57次調査地点がある地区は、平成8（1996）年の試掘調査で遺跡の存在が明らかとなっており、開発時には発掘調査が必要であることは事業当初より認識されていた。その後、当該地を含む移転用地南側部分については九州大学が福岡市土地開発公社より再取得した後に福岡市教育委員会と九州大学で協定書を締結し、平成15（2003）年から平成23（2011）年にかけて発掘調査を実施した。

57次調査地点については、平成15年1月から3月にかけて再度全面的な試掘調査を実施している（32次調査）。その後、32次調査区の南西の谷部西斜面の一部において、遺構が確認されたことから平成17年度に調査を実施している（44次）。

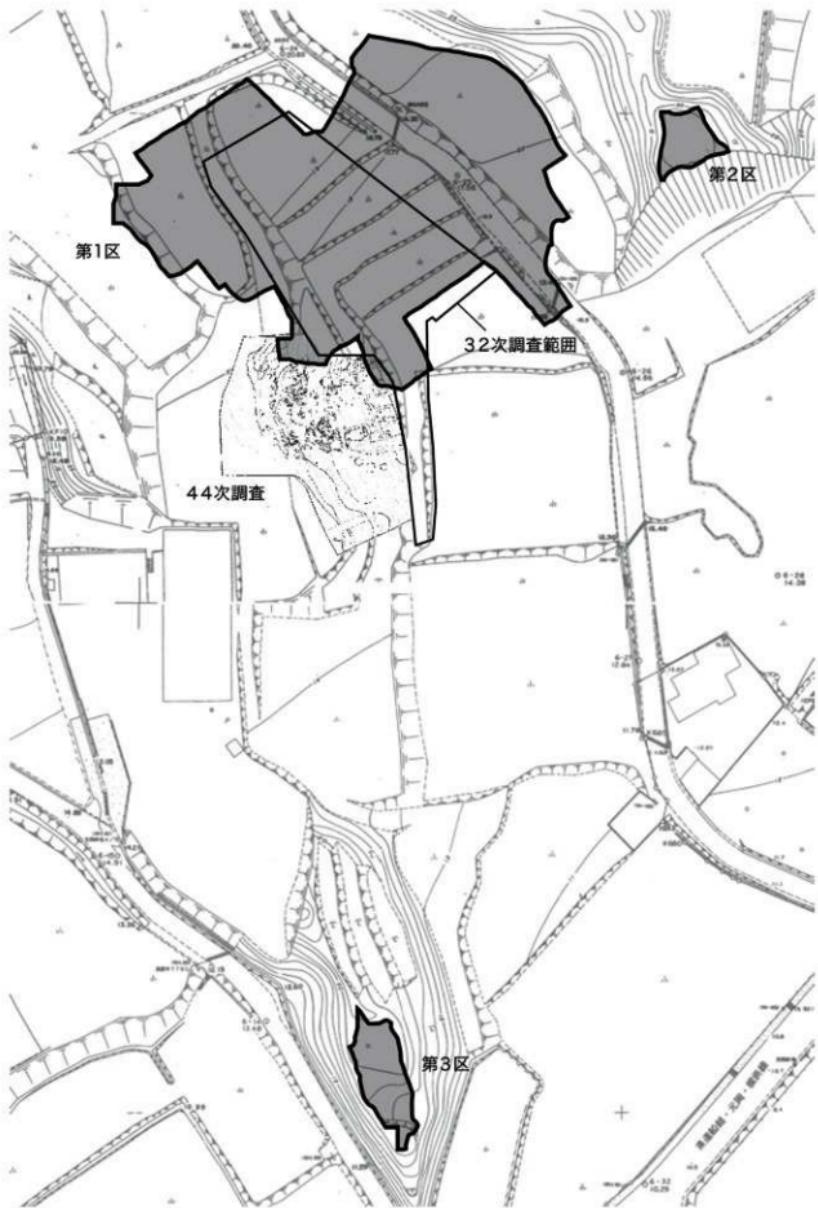
32次調査：平成15年1月20日～3月31日 調査面積1,700m<sup>2</sup>

同地区の製鉄造構の確認を主眼として実施される。包含層と一部の遺構の掘削、測量を行う。調査区南半部で古墳時代の溝・柱穴・堅穴住居等を確認している。

32次調査はこれまで正式な報告はなされていないため、当時作成された実績報告書『九州大学移転用地内埋蔵文化財調査報告書（九州大学）平成14年度』中の、調査担当者による記述を以下に転記する。（報告では32次調査区をG-2-1工区として報告している。）



第1図 調査地点位置図 (1/4,000)



第2図 調査区位置図 (1/1,000)

### 遺跡の立地

G-2-1はG-2の49,900m<sup>2</sup>の内、一番東側に位置する。平成7・8年度の試掘調査の結果は、「3本の谷からなる遺跡群で面積も広い。一部道路造成に破壊を受けている。いずれの谷も東側傾斜面を中心に弥生時代甕棺、奈良時代の土師器、須恵器、中世陶磁器をはじめ多量の鉄滓が出土している。また柱穴も多く検出されており、弥生時代から中世にかけて継続した集落であるといえる。ここでは谷底部に堆積した青灰色シルト層にも多くの遺物が包含されており、遺跡の密度はきわめて高い」としている。特にG-2-1が鉄滓が多く包含していることから、製鉄遺跡確認調査をこの地点に絞って調査することとした。

### 調査概要

調査区はG-2の東側谷部の中央部を対象とし、一番鉄滓が多く出土すると思われる部分を中心によく約1,700m<sup>2</sup>を対象とした。調査区は標高18m、X65050 Y-72250を測る。

調査区の大部分が丘陵の落ち際にあたり、すぐに青灰色シルトに達している。調査区の南側でからうじて遺構を検出できたが、大部分は青灰色シルト層で覆われている。

青灰色シルト層からは確かに土師器、須恵器、鉄滓等は出土するが、G-1-2で見られたごとく鉄滓の量も少なく、製鉄炉を彷彿とさせる量ではない。標高18mを測り、シルト部分までは約4mの深さがあり、さらにシルト部分が約2mほど堆積している。今回はシルト層の上部の調査とし、次回の調査で明らかにしたいと考えている。今回は製鉄遺構の確認を主眼においているので、広く周辺部を調査したが、製鉄遺構の確認はできなかった。

南側には古墳時代の溝、柱穴、竪穴住居址等を検出しているが、詳細な調査には至っていない。

### まとめ

製鉄遺構の確認調査はできなかった。また鉄滓の量も少量であることから、鍛冶炉が南側か西側に存在する可能性があると思われる。

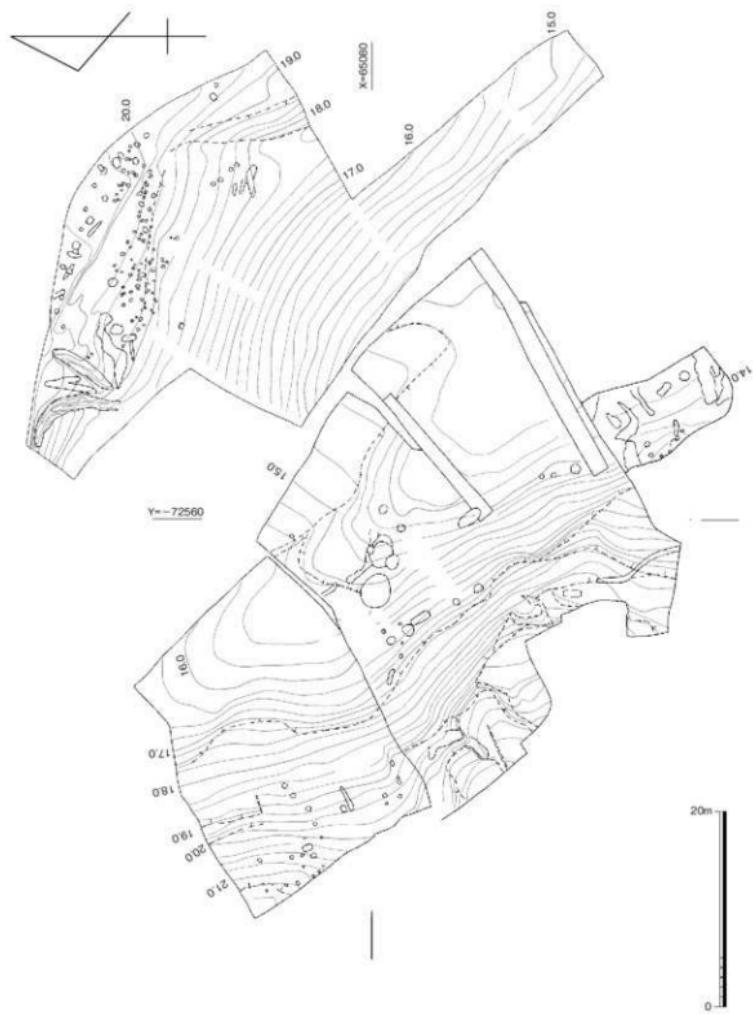
### 39次調査：平成16年4月5日～4月16日 調査面積880m<sup>2</sup>

57次調査区が位置する谷の開口部に位置する。調査の結果、弥生時代中期の土器溜りを検出しておらず、調査地点北側で廃棄された土器が流れで堆積したとみられる。

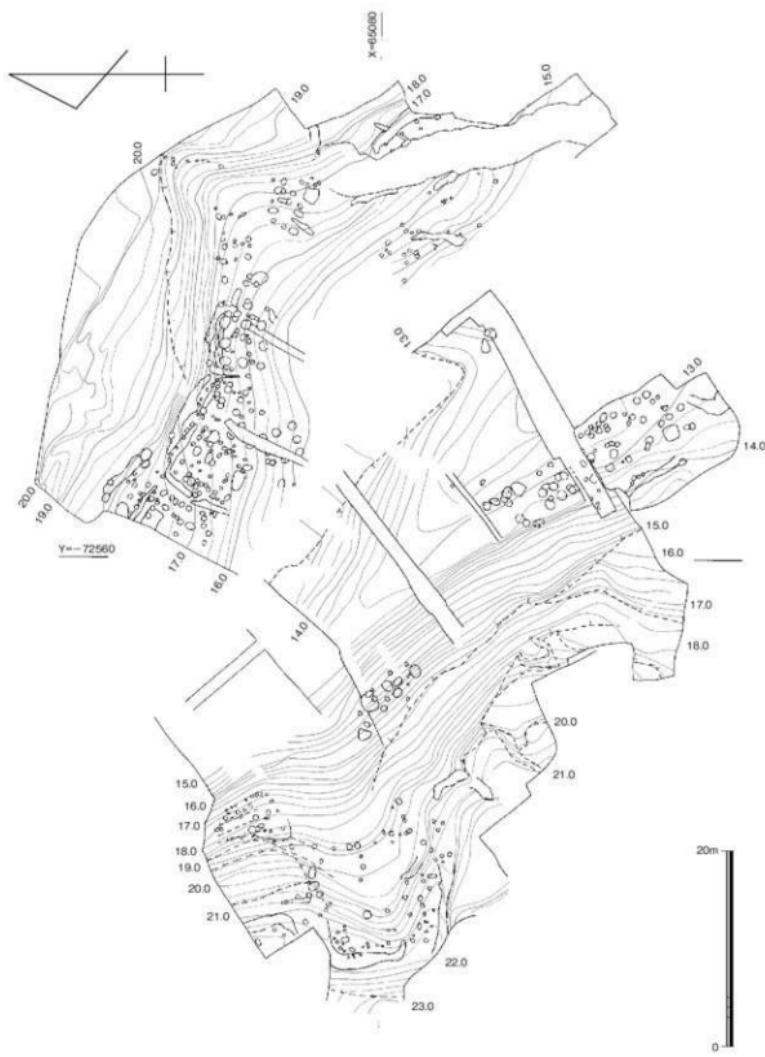
### 44次調査：平成17年6月1日～10月20日 調査面積1,189m<sup>2</sup>

32次南半部の遺構残存部分の調査として、製鉄遺構確認を目的に実施される。調査対象地は谷部西側斜面（57次調査V区の西側付近）で、2面の遺構面を確認し、古墳時代後期の竪穴住居1・土坑1、古墳時代終末期の方形区画溝・柵列、古代の焼土坑1、土坑3、溝、埋没谷、ピットを確認した。遺物包含層からは弥生時代中期から古墳時代後期、古代前期、中世前期の各時期の遺物が出土した。

57次調査は上記の32次、39次、44次調査の結果や試掘調査の結果を踏まえ、谷部全体にわたって遺構、遺物が濃密に遺存すると予想されたことから、道路建設予定地の範囲及び造成工事による切り土により遺跡に影響を与える範囲について、発掘調査を実施する目的で行われた。なお、調査は遺跡に影響が及ぶ部分に限定して実施されており、57次調査区の北側および調査区の南側においては造成高が遺構面に影響が及ばないため、調査範囲から外している。また、57次調査区内においても、造成高以下に堆積している遺物包含層は今回の調査対象から外して現地保存する方針で進めており、調査終了後もこれらの遺構・遺物は遺存していることを明記しておく。



第3図 57次調査区全体図（第1面）(1/500)



第4図 57次調査区全体図(第2面) (1/500)

調査は平成23（2011）年4月12日より開始し、平成24年3月までに第1区Ⅰ・Ⅱ区、2区の調査を実施した。平成24年度は第1区Ⅲ・Ⅳ区、第3区の調査を進め、平成25年度に第1区Ⅳ・Ⅴ区の調査を実施して、平成25（2013）年9月6日に調査を終了した。

## （2）調査区の立地と各区の概要

57次調査区が位置する谷は、前述の32次調査の概要報告のように、丘陵南側に八つ手状に広がる尾根の間の谷の一つである。谷の両側の尾根は調査区北側約200mの丘陵頂部から延びており、標高80mの丘陵頂部には前方後円墳である峰古墳が立地している。両側の尾根は南東方向に延び、先端部の標高は谷東側の尾根で標高32m、西側の尾根で標高20mで、調査以前の時点で東側尾根部の頂部と谷の底部との比高差は約15m、西側尾根部の頂部と谷底部との比高差は約10mを測る。東西両側の尾根は果樹園造成などの後世の造成により大きく削られており、もともと幅の狭い尾根だったものがさらに幅狭になり、鞍部の一部が段状に削平されてしまっている。

谷底部も調査以前は水田として利用するために段状に造成されていた。谷の最奥部の標高は約35m、南側谷開口部の道路際の標高が約10mで、谷奥から谷口までかなり傾斜の強い谷である。谷底部の水田の幅は谷口部分で約50m、谷奥部分で20mを測る。谷全体が奥に向かって西に緩くカーブしており、谷口部はほぼ南北方向に向いているが、44次調査区付近で屈曲し、谷奥部は北西－南東に向く。57次1区調査区は谷が北西－南東方向に向く部分に位置している。

57次調査は第1～3区の調査区に分かれている。

第1区は谷部分に設定された調査区で、前述の32次調査の結果を後継し、32次調査の確認と、さらに下層の確認を目的として実施された。

第1区はⅠ～Ⅴ区に分けられ、Ⅰ・Ⅱ区では古墳時代～中世の包含層を検出し、2面の遺構面を確認している。調査区西側の斜面部分では製鉄炉、鍛冶炉が位置し、大量の鉄滓が谷に流れ込んで包含層から出土している。鍛冶炉は製鉄炉に先行する7世紀後半～8世紀以降に築造され、製鉄炉は8世紀後半に築造されている。中世の遺構は土壙墓が斜面上部で検出されている。谷部包含層からは土器・鉄滓の他、木器が出土している。

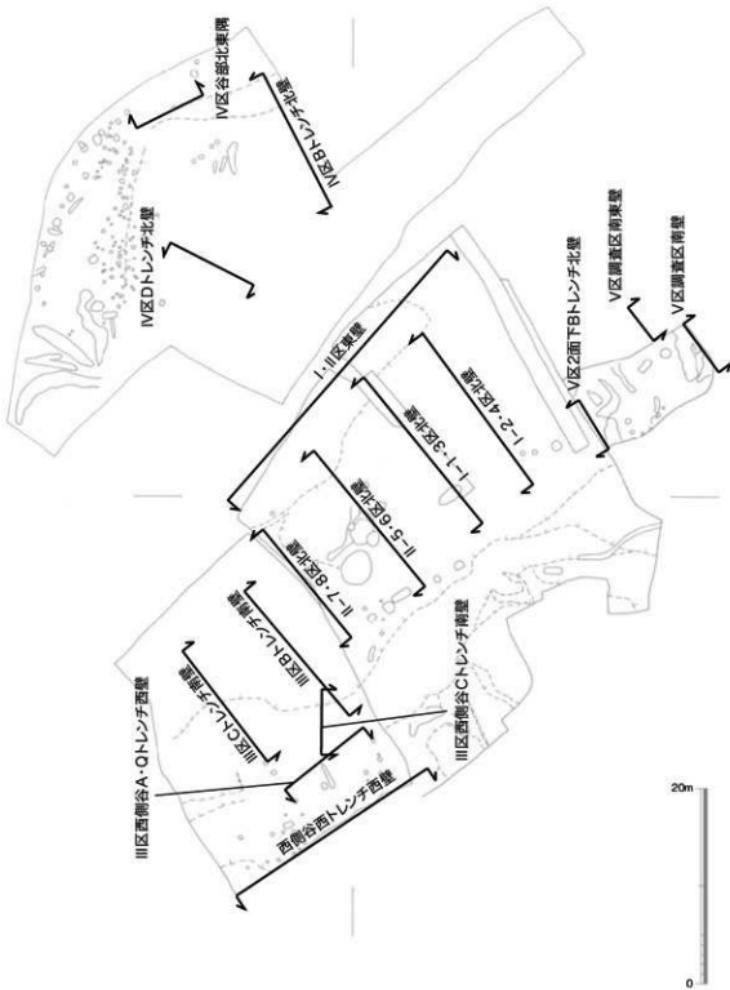
Ⅲ区では4面の遺構面を想定して調査を実施し、結果的に3面の遺構面を確認した。第1面では中世の建物、柵列などが西側谷部の最奥部で確認できた。第2・3面では古代の鍛冶炉や柱穴等の遺構を検出した。最下面では古墳後期の遺物が出土したが、明確な遺構は検出できなかった。

IV区は谷東側斜面部分にあたり、Ⅰ～Ⅲ区での調査結果を踏まえ、東側斜面での遺構・包含層の確認を目的に拡張した調査区である。IV区では調査の結果、小規模な谷が形成されているのを確認した。谷に堆積した包含層からは古墳時代中期から古代までの土器が出土しており、斜面中段に古墳時代の竪穴住居と、古代の大型建物を検出した。中世の土壙墓と焼土坑も出土している。

V区はⅠ区の南側に設定し、Ⅰ区で検出した遺構群の延長を確認する目的で調査を行ったところ、古墳時代から古代にかけての遺構群を確認した。調査区の一部は44次調査区と重複する。

第1区のこれらの調査の詳細については、来年度刊行を予定している別稿で報告する。今回の報告では、谷部包含層について詳細に検討することにしたい。

第2区は1区東側の丘陵尾根部の頂部の標高32mの地点に位置する。第1区調査中に尾根頂部付近を人力で試掘した所、遺構を確認したため、調査区を設定し、調査を実施した。第2区では中世墓とみられる土坑やピットを確認した。全体に削平が進み、また出土遺物が少ないとあり、遺跡の性



第5図 57次1区I区～V区分図・トレンチ位置図 (1/1,000)

格を判断することは難しい。

第3区は谷の西側の尾根の先端部頂部を調査し、中世の堀切と柱穴を検出した。堀切は幅10mで尾根を横断しており、断面は2段掘り状で、下段の堀は上面幅2.5mのV字形を呈する。堀切北側でピットや小規模の溝を検出した。

第2区と第3区の報告は、次回刊行の報告で予定している。

なお、調査は第1区I・II区と第2区を長家伸が担当し、第1区III～V区と第3区を大塚紀宣が担当した。

## 2. 谷部包含層の調査

### (1) 概要

調査の過程で、包含層の層位を確認するために随時トレンチを設定した。I・II区は調査区内をさらに8区画に分割し、各小区の境界で層位を確認している。

III区では、中央の谷を横断する方向でトレンチを設定し、さらに西側谷部分にトレンチを設定して谷の埋没層と中央谷の堆積層との関係を確認することを意図した。

IV区は、東側の包含層をある程度面的に下げたところで谷の存在を確認したために谷部分の認識が遅れたため、東側谷部分の堆積状況を確認できるトレンチは設定できず、中央の谷方向へのトレンチ設定にとどまる。

V区は調査区が狭いこともあり、調査区壁面の土層で堆積状況を確認した。またI区との境界にトレンチを設定し、遺構面下層の状況を確認している。

各トレンチの位置は図3のようになる。

### (2) 堆積土層の調査

#### 1) I区

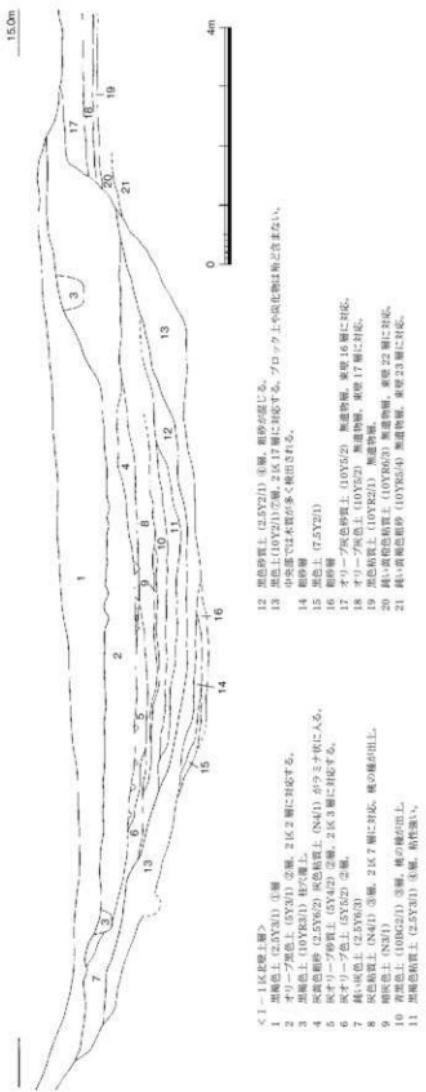
I区は調査区内をさらに4区画に分けて調査を行った。

第6図はI-1区と3区の調査区北側で、I区調査区の北壁の土層図である。1層は古代後半以後の堆積層である黒色土で、①層とする。①層上面は32次調査の遺構面で、32次調査は中世の包含層までしか掘り下げていなかったことを確認できた。

2・5・6層は灰オリーブ色土で、上下の層群とは色調が大きく異なり、②層とする。②層上面では製鍊炉を確認し、②層内で鍛冶津などが確認できる。②層上面を第1面の遺構面とし、検出遺構や出土遺物から8世紀後半の奈良時代の遺構面と考える。②層上面は平坦面で、人為的に造成して平坦面を造った可能性がある。8～10層は灰色～青灰色土で、③層とし、粘質シルト層で水成堆積の様相を強く示す。11・12層は黒色粘土と砂質土がラミナ状に入り、自然流木も含まれ、これを④層とする。③層と④層は湧水が著しく、特に東部での湧水が顕著で、明瞭には区分できない。③層下面を第2面とする。13～16層は黒色土で、木質を多く含み徐々に堆積した水成層で、他の土層断面との関係から⑦層とする。出土遺物から5世紀から6世紀前半の堆積とみられる。

16層以下は緑灰色砂質土～シルトに黒色土が混合する層が堆積する。

第7図はI-1・3区北壁土層よりも7mほど下流の地点の土層断面で、I-2・4区北壁土層とする。1層は黒褐色土で①層にあたり、古代後半以後の堆積層である。1層下面を第1面遺構面とする。この地点でも第1面は平坦面を呈し、人為的に造成された様相を呈する。2・3層は灰オリーブ～暗オ



第6図 I - 1・3 区北壁土層断面図 (1/80)

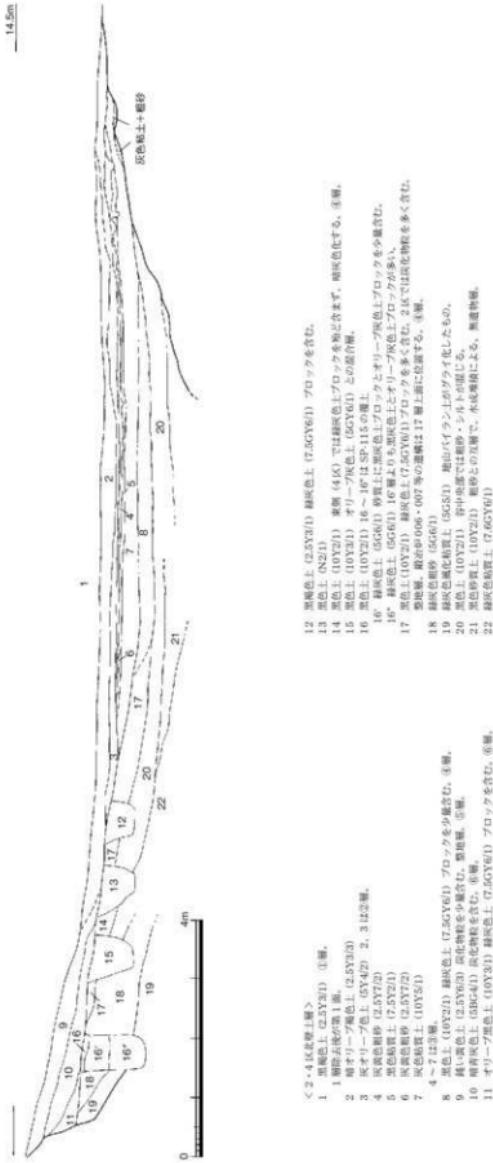
リープ褐色土で、②層に対応する。4～6はラミナ状の薄い互層で、水成堆積層である。7層も灰色シルト層で水性堆積の様相を示し、4～7層は③層とされる。③層は以下の第2面造構面が流水で削られた後に堆積した層とみられる。

9層は2層西側に堆積する層で、⑤層、その下層の10・11層を⑥層とする。⑥層は黒色土で炭化物を含むことから、上層の鍛冶炉・製鉄炉からの流出土、⑤はその上層に堆積した地山土の二次堆積層とみられ、④層堆積後、②層堆積前の自然堆積層とみられ、8世紀前半～半ばの堆積とみられる。

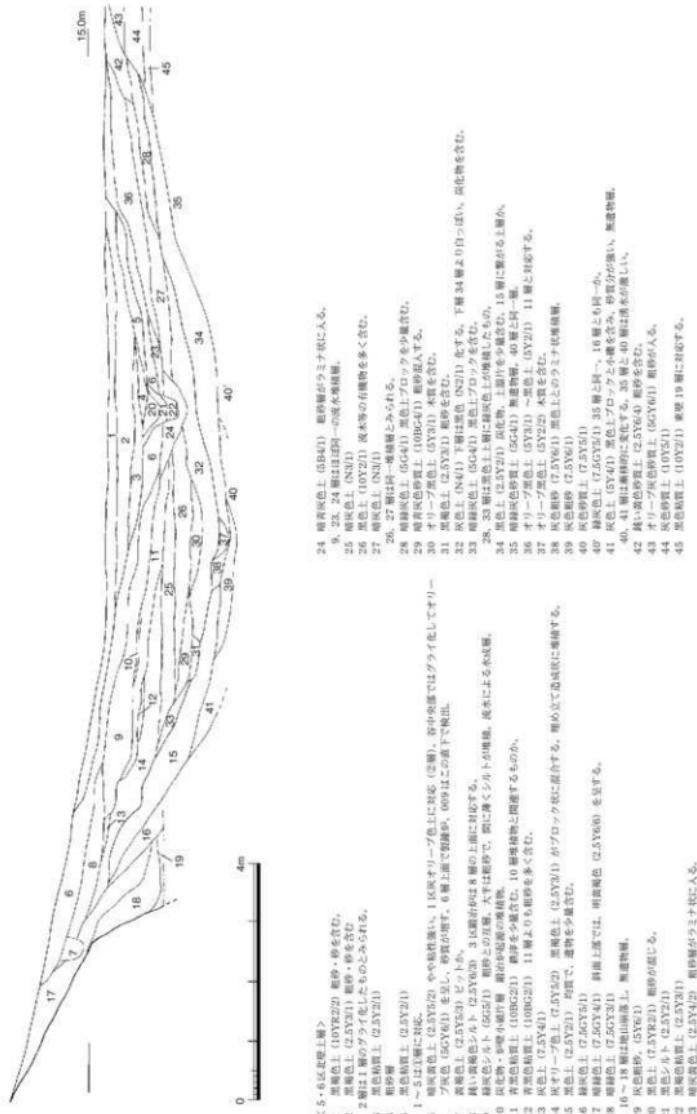
8・17層は黒色土で、緑灰色土ブロックを多く含み、人為的な造成盛土の様相を示し、④層とする。17層上面で大型の柱穴が掘削されていることも、この層の上面が人為的に平坦に造成されている理由とみられ、21層の斜面部分を掘削して東側に押し出して埋め上げ、17層が形成されたと考えられる。この17層上面を第2面とする。21層は黒色土。水成堆積層で⑦層に対応する。18～22層以下は粗砂と黒色砂質土混合層の互層で、遺物はわずかである。

## 2) II区

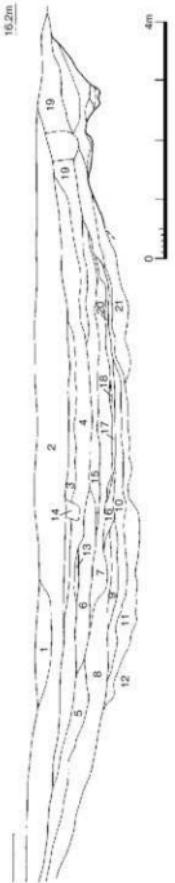
第8図はII区5・6区の調査区北壁の土層断面である。1～5層は黒褐色土で、①層にあたり、古代後半以後の堆積で、第1面としている。この面から溝状の掘り込み(20～22層)と、レンズ状の堆積(6・24層)が見られるが、これは旧道路の痕跡であろう。6層は①層下層にあたり、②層に対応するとみられるが、上面は平坦ではなく、造成の痕跡はない。これは第1面の造成がこの地点までは及んでいないことと考えられる。この6層の下面、8層の上面で鍛冶炉(SK-009)が検出されている。



第7図 I-2・4区北壁土層断面図 (1/80)

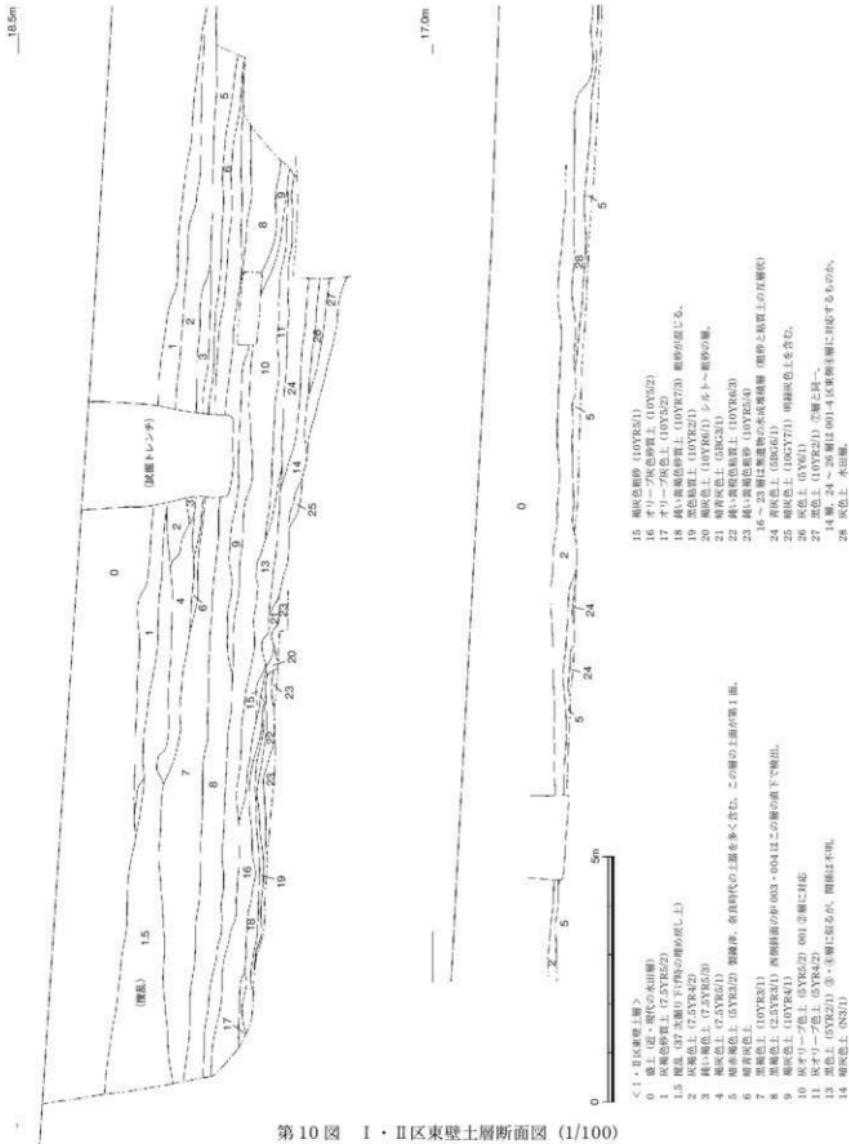


第8図 II-5・6区北壁土層断面図 (1/80)

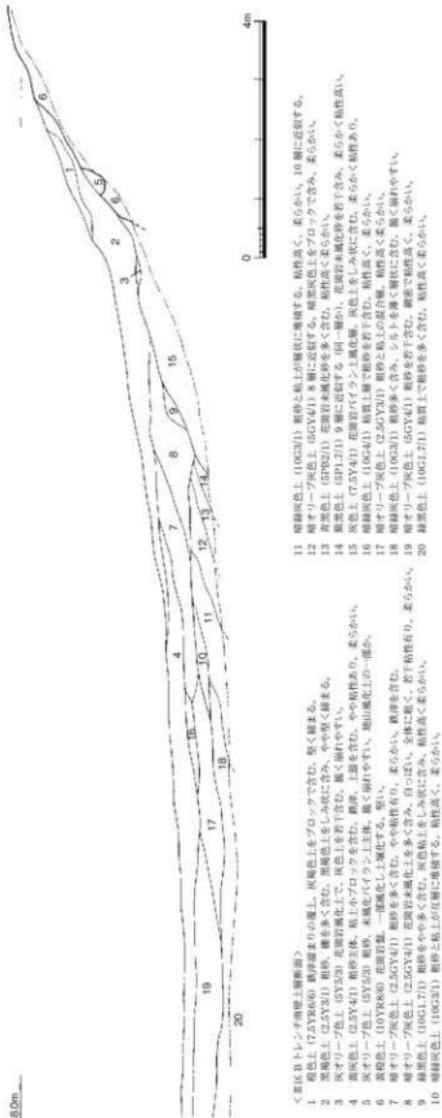


第9図 II-7・8区北壁土層断面図 (1/80)

- 1 黄褐色 (STYR41) 形態多く、鱗片の変色なし。一部グライ化する。表面滑く、鱗片多く、鱗片は重複しない。大部分グライ化する。相手多く、  
2 黄褐色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、鱗片は重複しない。  
3 黄褐色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、鱗片は重複しない。  
4 黄褐色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、鱗片は重複しない。  
5 黄褐色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、鱗片は重複しない。  
6 黄褐色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、鱗片は重複しない。  
7 黄褐色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、鱗片は重複しない。  
8 黄褐色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、鱗片は重複しない。  
9 黄褐色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、鱗片は重複しない。  
10 黄褐色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、鱗片は重複しない。  
11 黄褐色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、鱗片は重複しない。  
12 オリーブ色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。鱗片多く、  
13 オリーブ色 (STYR41) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。  
14 黑褐色 (STYR42) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。  
15 黑褐色 (STYR42) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。  
16 黑褐色 (STYR42) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。  
17 黑褐色 (STYR42) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。  
18 黑褐色 (STYR42) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。  
19 黑褐色 (STYR42) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。  
20 黑褐色 (STYR42) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。  
21 黑褐色 (STYR42) 頭部高く、鰓孔近くに肛門がある。頭部は重複しない。



第10図 I・II区東壁土層断面図(1/100)



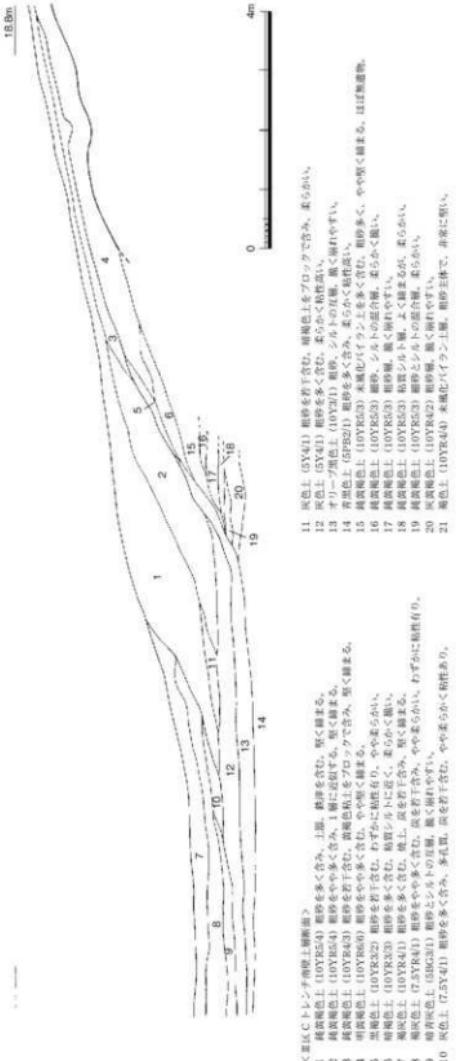
第11図 Ⅲ区Bトレーニング壁南壁土層断面図(1/80)

その下層14層までは主に西側斜面上方からの流れ込みによる堆積、25～38層は谷上方からの水平堆積の様相を示し、いずれも自然堆積で、人為的な造成の痕跡はほとんどみられない。10・11層から鉄滓が出土しており、堆積時期の参考となる。この土層からは、下流でみられた水成堆積の灰色土層である③層、水成堆積の黒色粘質土層である④層は明確に示すことはできず、下流とは第1面以下の堆積状況や造成の状態が異なっていることが想定される。

第9図はⅡ区7・8区北壁の土層。1・2層は中世以前の堆積層である①層に対応する。3・4層褐灰色～黄灰色土で、②層にあたり、この層の上面を第1面とする。8～21層は黒色土と灰色土の互層を呈し、谷上方からの流れ込みによる水成堆積の様相を呈し、③層に対応するとみられる。12層上面を第2面とする。この地点では第1面、第2面とも平坦ではなく、堆積層はレンズ状を呈する。

Ⅱ区7・8区北壁の土層断面の堆積状況はⅡ区5・6区の堆積状況に近く、I区の堆積状況とは異なる。I区とⅡ区の間で、土地の造成の状況や利用の状況、さらには埋没過程が異なっていた可能性が高い。特にⅡ区では谷底部を平坦に造成した痕跡はなく、I区で見られるような谷底部の平坦面の造成と建物の建築が行われなかつたとみられる。

第10図はI・II区の調査区東壁の土層断面図。調査区東側の既設市道の築造と、それに伴う水田の造成にあたって相当の盛土造成を行っていることが分かる。5・6層に鉄滓が含まれ、ここに文化面があった可能

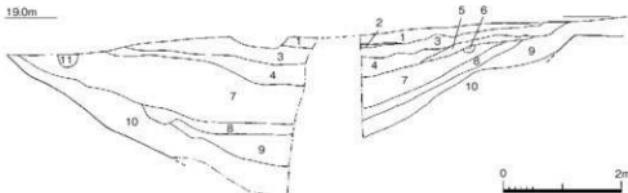


性がある。7・8層は黒褐色土で、①層に対応する。西側斜面の炉SK-003とSK-004は8層の上面に作られており、第1面の時代よりも後で築造されたものとみられる。9・10層は褐灰～灰オリーブ色土で、②層にあたり、この上面が第1面になる。2区では第1面は緩く下方に傾斜する(10mで30cm低くなる)が、第1区の範囲では造構面を捉えていない。②層以下は粗砂や黒色土が薄く堆積する水成層で、特に16～23層は無遺物層である。

### 3) Ⅲ区

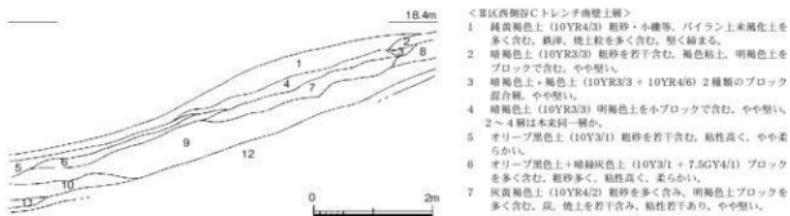
第11図はBトレンチ南壁の土層断面。谷底部では谷奥部からの流れ込みによる灰色土と黒色土が互層になりながら水平に堆積する。斜面部分では斜面上方からの流れ込みによる堆積状況がみられるが、斜面からの流れ込みは斜面落ち際にまでとどまつておらず、谷底部に広く流れ込んでいる状況は確認できない。4・7・8層が下方の土層で見られる②層に対応するとみられ、2層が①層に対応するとみられる。4・7・8層上面を第1面としたが、この地点では第1面は谷底部で平坦面を呈する。これが人為的なものか自然堆積によるものかは不明だが、この地点のすぐ下流のⅡ区の土層とは異なる。谷底部下層は湧水が著しく、図示した深さで掘削を止めざるを得なかった。

第12図はCトレンチ南壁の土層断面。この地点では谷底部の幅がさらに狭くなっている。谷底部の7・8層は褐灰色で焼土・炭を含み、②層に対応するとみられ、この上面を第1面とする。その下層は粗



- く第Ⅲ区西側谷 A・Q トレンチ西壁土層図
- 1 黄褐色土上+褐灰色土 (10YR6/4 + 10YR4/1) ブロック土混合層。粗砂を多く含む。堅く締まる。
  - 2 黒色土 (2.5Y2/1) 粗砂を多く含む。やや柔らかく粘性有り。
  - 3 褐色土 (7.5YR4/3) 粗砂多い。明褐色土ブロックを若干含む。やや堅い。遺物包含層（古代）。
  - 4 黑褐色土 (5YR3/1) 粘性高く。粗砂を多く含む。明褐色土ブロックを若干含む。やや堅い。鋼治洋、須恵器片を含む。5 層とは堆積の変化。
  - 5 黑褐色土 (5YR3/1) 明褐色土上+ブロックを若干含む。やや柔らかい。
  - 6 暗オーリー色土 (7.5Y4/2) 粗砂を多く含む。やや堅い。
  - 7 黄褐色土 (10YR5/6) きめ細かい粘土で砂を多く含む。黒色土をしみ込まし含む。粘性高く柔らかい。無遺物層。8 層上面が削平された後で7層が堆積した感あり。
  - 8 黑褐色土 (5YR3/1) 粘性非常に高く。保水性有り。砂を若干含む。柔らかい。
  - 9 黄褐色土 (2.5Y5/3) 粗砂若干含み。粘性高く。柔らかい。保水性あり。10 層がグライ化したものか。
  - 10 明褐色土 地山風化土の二次堆積層。混入物少ない。砂質分多く。やや粘性有り。
  - 11 褐灰色土 風化物若干混入する。上面の遺構。

第13図 Ⅲ区西側谷A・Q トレンチ西壁土層断面図 (1/80)

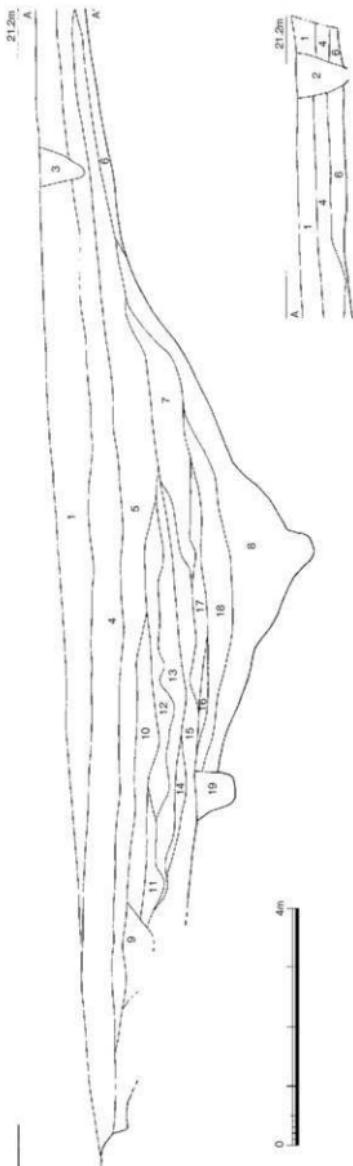


- く第Ⅲ区西側谷 C トレンチ南壁土層図
- 1 黄褐色土上 (10YR4/3) 粗砂・小礫等、パイラン土未風化土を多く含む。鉄錆、鐵土粒を多く含む。堅く締まる。
  - 2 褐褐色土 (10YR3/3) 粗砂を若干含む。褐色土上、明褐色土をブロックで含む。やや堅い。
  - 3 褐褐色土+褐色土 (10YR3/3 + 10YR4/6) 2種類のブロック混合層。やや堅い。
  - 4 褐褐色土 (10YR3/3) 明褐色土を小ブロックで含む。やや堅い。2~4層は本実例一例。
  - 5 オリーブ黒色土 (10Y3/1) 粗砂を若干含む。粘性高く。やや柔らかい。
  - 6 オリーブ黒色土+暗緑灰色土 (10Y3/1 + 7.5GY4/6) ブロックを多く含む。粗砂多く。粘性高く。柔らかい。
  - 7 黄褐色土 (10YR4/2) 粗砂を多く含み、明褐色土ブロックを多く含む。風、鐵土を若干含み、粘性若干あり。やや堅い。

第14図 Ⅲ区西側谷C トレンチ南壁土層断面図 (1/80)

砂・シルトの互層で、湧水が著しく、堆積層も非常に軟弱で掘削が困難だったため、図示した範囲で掘削を止めている。斜面部分は、1~3層の鈍い黄褐色土層が斜面上方から流れ込んでいる状況が見られる。いずれも地山土の二次堆積層だが、1層に鉄錆を含んでいることから、②層直前の時期に堆積した可能性が高い。土色からみて、漸次的に堆積したものではなく、短時間で堆積したものとみられ、また人為的な造成土でもないことから、小規模な地すべり等の原因が考えられる。その場合、もともと西側斜面にあった鍛冶炉などの遺構が崩落したとみられ、調査で把握できた密度以上の遺構分布だった可能性がある。

第13~15図は西側谷部の確認のために設定したトレンチの土層断面。第13図では谷の中位に設定した西側谷AトレンチとQトレンチの土層断面。褐色土と黒色土の互層で構成されており、緩慢な埋没と急速な埋没を繰り返した結果と見られる。4層から鍛冶滓・須恵器破片が出土しており、この層の堆積時に谷の両側で鍛冶活動が行われたとみられる。褐色土層からの遺物の出土量は少なく、地山が雨水で削られて二次堆積した層とみられる。第8層の下面を第2面の遺構面として設定している。



第15図 Ⅲ区西側谷西トレーニング壁土層断面図(1/80)

- < 西側谷西トレーニング壁土層断面図 >
1. 棕褐色褐色土, (10YR5/6) 砂分多く、堅く結ぶる。泥炭質を含み、柔らかい。
  2. 棕褐色褐色土, (10YR5/6) 砂分多く、やや堅く結ぶる。時代の焼物が混入。
  3. 棕褐色褐色土, (10YR5/6) 砂分多く、やや堅く結ぶる。時代の焼物が混入。
  4. 棕褐色褐色土, (10YR5/6) 砂分多く、やや堅く結ぶる。
  5. 棕褐色褐色土, (10YR5/6) 砂分多く、やや堅く結ぶる。
  6. 棕褐色褐色土, (10YR5/6) 砂分多く、やや堅く結ぶる。
  7. 棕褐色褐色土, (10YR5/6) 砂分多く、やや堅く結ぶる。
  8. 棕褐色褐色土, (10YR5/6) バイウム土と混じて、泥炭質を含み、やや堅く結ぶる。
  9. 棕褐色褐色土, (10YR4/2) 砂分多く含む。泥・砂を含む谷口、やや堅く結ぶる。

第14図は西側谷Aトレーニングから谷に沿って設定した西側谷Cトレーニングの土層断面。西側谷Aトレーニングの土層との関連は、西側谷Cトレーニング2~4層が西側谷Aトレーニング3層に、西側谷Cトレーニング7~10層が西側谷Aトレーニング7層にそれぞれ対応する。西側谷Aトレーニング8層と対応する西側谷Cトレーニング12層は上面で須恵器、土師器破片等を確認しており、この層は古墳時代中期以降に堆積したとみられる。西側谷Cトレーニング5・6層の黒色土は、間隔は開くが西側谷Aトレーニング4・5層の黒色土に対応し、西側谷Cトレーニング12層の黒色土は西側谷Aトレーニング8層の黒色土に対応する。

さらに、西側谷Cトレーニング12層の黒色土はBトレーニング9・14層黒色土とCトレーニング5層黒色土に対応するとみられ、古墳時代後半に西側谷の北側斜面を起点として黒色土が斜面下方に流出していたことが考えられる。調査では検出されていないが、西側谷の北側斜面に鍛冶炉等の木炭を使用する操業が行われていたことも想定できるだろう。

第15図は西側谷の西トレーニングの土層断面。基本層序は西側谷A・Qトレーニングとほぼ同一で、3枚の黒色土層と褐色土層が互層をなしている。黒色土の堆積層の間隔は、西側谷Aトレーニングと比較すると狭く、褐色土層の間層が見られない部分もある。このことから、谷奥部では



第16図 IV区Bトレンチ北壁土層断面図 (1/80)

西側谷Aトレンチで見られたような地山が一時的に多量に流入した様相がなく、地山土の崩落が斜面の中位付近で発生したことが考えられる。

西側谷の埋没過程については、上記の3本のトレンチから以下のように想定できる。

・谷の下部は、古墳時代前期までに暗褐色土で継続的に埋没が進んでいる。遺物をほとんど含まず、谷の両側に人間の活動痕跡はない。

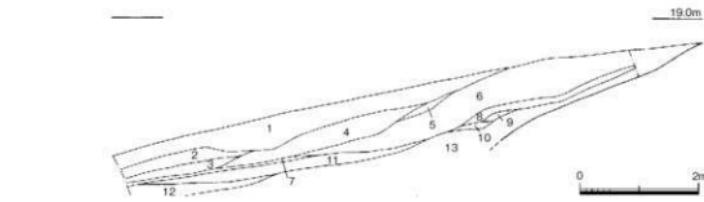
・古墳時代後期に最初の黒色土が堆積する。斜面上方で鍛冶炉等の木炭を使用する活動が行われたと推定される。その後、活動痕跡が一端途絶える。

・黒色土層のうち、上層の2枚は古代前期の段階で堆積したことがほぼ確実で、この時期に再度製錬や鍛冶等の活動が実施されたとみられる。この時点では、谷はほとんど埋没している。

第17図は谷の南側斜面に設定したIV区Bトレンチ下層の土層断面。1・2層は黒褐色土で、この層の上面を第2面と設定した。1・2層は土器・鉄滓・炭を多く含む。3~5層は灰オリーブ~オリーブ色土、6層は黒褐色粘土で、いずれも斜面上方からの流れ込みによる堆積層である。6層下面の地山層上面を第3面としている。

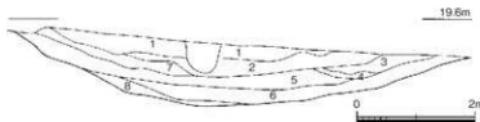
第17図は谷の北側斜面に設定したDトレンチの土層断面。5・7・8層が焼土・炭を含むことが目立つ。また、最下層の13層が炭を含むことから、谷底からの堆積がこの地点まで及んだ段階では既に周辺に炉等が存在した可能性が高い。各層位の時期については、出土遺物からの判断になる。

第18図は谷部の北東隅に設定したトレンチの土層。全体に黒色粘土が主体で、谷奥部で炭化物を多く排出する作業が行われていたとみられる。いずれの層も、古代以降の堆積とみられ、古墳時代から古代前期にかけてはIV区部分は谷状の地形



- <IV-D Trench北壁土層断面図>
- 褐色灰土上 (7.5YR4/1) 明褐色土ブロック、炭化物を若干含む。粘性あり。砂を若干含む。
  - 褐色土 (7.5YR4/2) 明褐色土ブロック、炭化物を少く含む。砂礫を多く含む。
  - 灰褐色土 (7.5YR4/2) 2層に近似する。明褐色土ブロック、炭化物を少く含む。砂粒をやや多く含み、粘性あり。
  - 褐色土 (10YR4/4) 黒色土ブロック、明褐色土ブロックを若干含む。砂粒多く、やや柔らかい。
  - 暗褐色土上 (GYR3/3) 樹上、根を少し含む。
  - 褐色土 (7.5YR4/4) 粘土、小塊を多く含む。炭化物を若干含む。堅い。
  - 黑褐色土 (7.5YR3/2) 地、燒土を若干含む。粘性高い。
  - 純赤褐色土 (GYR4/3) 黑色土上ブロックで含む。砂をやや多く含み、堅い。
  - 明褐色土 (7.5YR5/6) 砂をやや多く含む。堅い。
  - 灰褐色土 (7.5YR4/2) 粘土を非常に多く含む。明褐色土ブロックが多く混入する。柔らかい。
  - 灰褐色土上 (10YR4/2) 粘土主体。粗砂を若干含む。褐色土ブロックを多く含み、粘性高く柔らかい。
  - 純黃褐色土上 (10YR4/2) 粘土上分多く、砂粒を多く含む。細密で堅い。炭化物を少量含む。

第17図 IV-D Trench北壁土層断面図 (1/80)



- <IV-E谷部北東隅土層断面図>
- 黒褐色土上 (10YR2/1) 明褐色土ブロックを若干含む。粘性ややあり。粗砂多い。
  - 褐色土 (7.5YR4/4) 明褐色土ブロックを多く含む。粘性少しあり。粗砂多い。
  - 灰褐色土 (7.5YR4/2) 明褐色土ブロックをざわざわに含む。粗砂多い。
  - 褐色土 (7.5YR4/2) 砂質分多い。明褐色土上、黒褐色土の各ブロックを多く含む。粘性なし。
  - 暗褐色土 (GYR3/4) 粗砂を若干含む。きめ細かく。緻密。
  - 暗褐色土 (SPB3/1) 粘性高く。粗砂を若干含む。
  - 灰褐色土 (7.5YR4/2) 明褐色土ブロックを多く含む。黒色土ブロックを若干含み、2層から連続する。
  - 青褐色土 (SPB5/1) 砂を若干含み。粗砂質で重い。

第18図 IV-E谷部北東隅土層断面図 (1/80)

が遺存していた可能性が高い。

## 5) V区

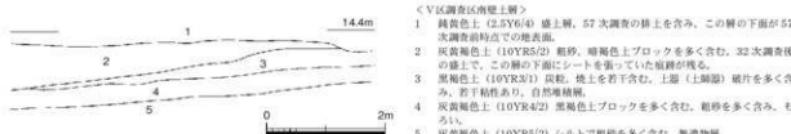
V区は44次調査の東側に隣接し、堆積土にも32次調査や44次調査の痕跡が残る。第19図は西側斜面の傾斜に沿った方向の土層図面。2層は32次調査時以降の盛土層で、2層下面に以前の調査時のブルーシートが残されている。3層は黒褐色土で、①層に対応し、この下面が第1面である。4層は灰黄褐色土で、②層に対応する。第2面を5層の灰色シルト上面に設定したが、これはI区の第2面南端の造構面標高に合わせた結果である。

第2面以下の土層を第21図に示している。いずれも無遺物層で、⑦層に対応する。

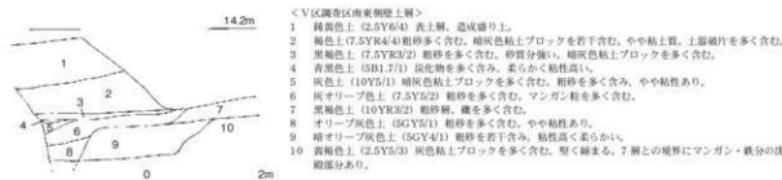
## 6) 谷部分の埋没過程と土層

以上の土層図の検討結果から、特に主谷部分の埋没について、以下のような状況が想定できる。

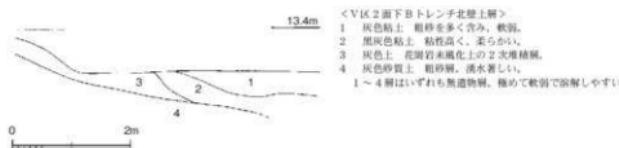
・古墳時代前期以前の状況は不明であるが、57次調査区内では弥生時代以前の遺構・遺物は確認され



第19図 V区調査区南壁上層断面図 (1/80)



第20図 V区調査区南東側壁上層断面図 (1/80)



第21図 V区 2面下 B トレンチ北壁上層断面図 (1/80)

ておらず、同時期の遺構はさらに南側の谷開口部付近にあったとみられる。

- ・古墳時代中期（5世紀）頃に黒色粘質土が堆積し（⑦層）、その後に黒色粘土・シルトによる水成層が堆積し（④層）、さらに灰色砂・シルトによる水成層が堆積する（③層）。7世紀～8世紀前半には、この層の上面に遺構が作られる。
- ・黄灰色～オリーブ灰色シルトが堆積し（②層）、8世紀後半に製鍊炉等の遺構が築かれる。
- ・②層の上層に古代の土器や鉄滓が混じる層が堆積する。32次はこの層の上面を調査し、古墳時代～古代の遺構面と誤認したことが、結果として判明した。

### 3. 各区の出土遺物

I 区の谷部包含層からは、上層、下層から多くの遺物が出土した。以下の報告では、I 区の各小区と層位をもとに区分して、図示することに努めた。

#### (1) I 区の出土遺物

##### 1) 須恵器

1～16はI～2区の西斜面に設定した3トレンチからの出土。1～6は①～④層出土。1は壺。高台は低く、体部はハの字に広がる。全体に浅め。内面に墨書き細い線がある。2は皿。内面見込みに墨書きものが付着する。外面とも回転横ナデ。3は壺身。古墳時代のもので、受け部の立ち上がりは高く直立する。4は壺身。丸底で、外面に沈線が1条入る。5は壺蓋の天井部で、\*形のヘラ記号が外面に入る。6は壺。口縁は短く開き、頸部に波状文が2条入る。体部外面にカキ目があり、下部はナデ消す。底部付近に他の個体の破片が付着する。

7～13は壺蓋。7は摘みが宝珠形で、体部は浅いドーム形を呈する。端部は短く垂下する。8は摘みは低いボタン形で、体部は低く膨らむ。外面は回転横ナデの上からヘラ状工具で表面を平滑にしている。器形が若干歪んでいる。10は体部が扁平で、摘みはボタン形。端部は短く垂下する。内外面とも端部のみ黒く変色している。11は、摘みがボタン形でやや大きめ。体部はやや膨らみ、端部は垂下する。

12は体部が高く、天井部にX字のヘラ記号が付く。天井部は粗い回転ヘラケズリ、側面と内面は回転横ナデ。13も天井部は平坦で、回転ヘラケズリで仕上げる。外面側面と内面は回転横ナデ。口縁部に段が付き、側面に太い沈線が入る。13・14は⑦層出土。

14は古墳時代の壺身で受け部立ち上がりが内傾し、端部は丸く仕上げる。体部は丸みを持ち、底部は回転ヘラケズリ。15は古代の壺身で、底部は平底で、回転ヘラケズリ後ナデで仕上げている。体部はハの字に開き、体部と内面は回転横ナデ。

16は小壺で、頸部はわずかに内湾して直立し、体部は丸く仕上げる。体部上部に3本の沈線が入る。外面上部に自然釉がかかる。底部は平底で、粗くヘラケズリを施す。内面にも自然釉がかかる。

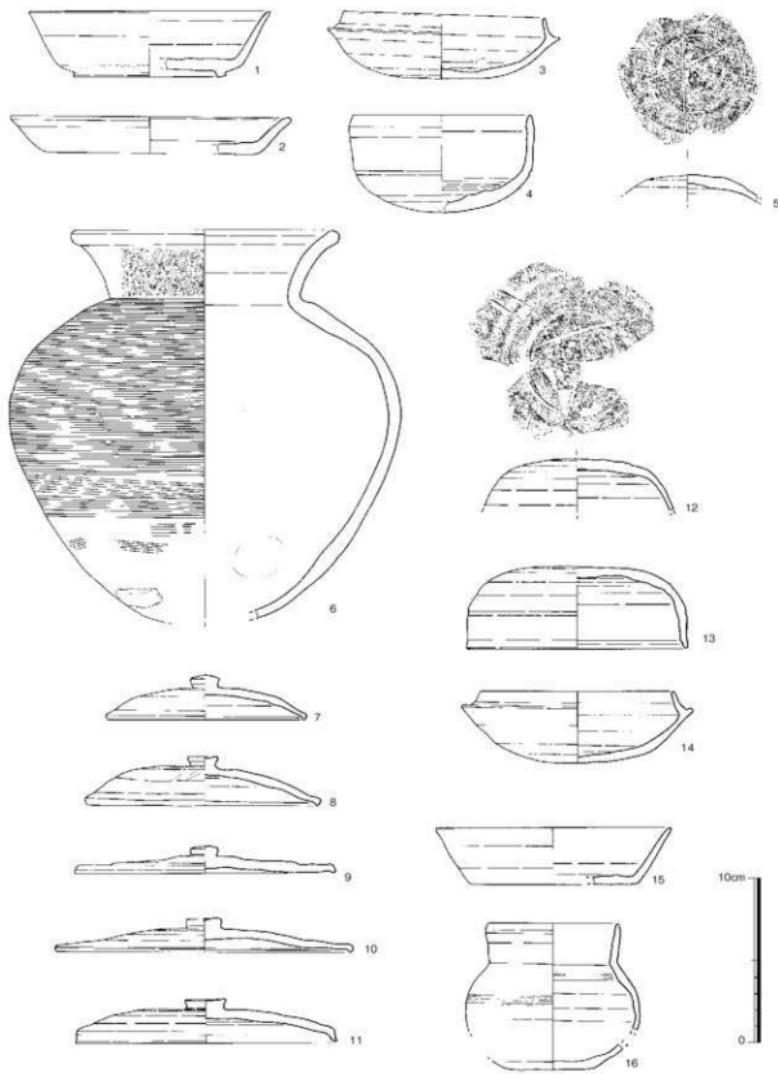
17～24はI区調査区内から出土した須恵器。17は受け部立ち上がりが外湾しながら直立する。体部は扁平気味である。18は受け部の立ち上がりが短く、内傾する。受け部も浅い。体部は扁平で、外面底部から側面中位まで回転ヘラケズリ。内面底部に指圧痕が多く見られるなど、他の壺と様相が異なる。19は全体に比して受け部の立ち上がりが長く、やや内径しながら立ち上がる。体部は浅く丸くなる。受け部のほぼ全周に重ね焼の痕跡が残る。20も受け部の立ち上がりが長く、内傾して細く立ち上がる。体部は浅く丸くなり、外面底部付近に2×2cmほどの粘土片が付着する。

21は体部が丸く、天井部は回転ヘラケズリ、外面側面と内面は回転横ナデ。外側面に浅い段が付き、また端部内側にも段がつく。内面にX字のヘラ記号が書かれる。22は受け部立ち上がりが直立し、端部に段がつく。体部は扁平で、底部は回転ヘラケズリ、側面と内面は回転横ナデ。

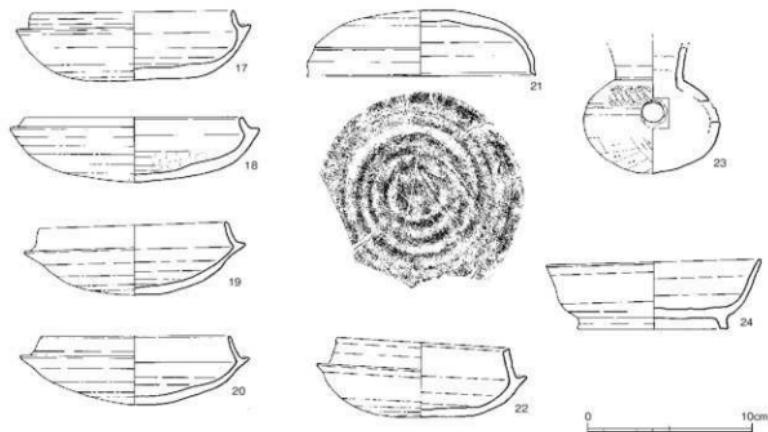
23は腹で、口縁部を欠く。体部は丸く、上部に刻目を施す。底部は丸底で、わずかに尖る。外面底部は不定方向の手持ちヘラケズリ、他は回転横ナデ。

24は古代の壺身。高台は短く直立し、体部はやや膨らみ気味に開き、上部でわずかに外湾する。外底に茶～黒色の付着物がある。

25～26はI～4区⑦層出土の大型壺。25は口縁端部はわずかに屈曲し、頸部外面に5段の波状文を施す。頸部と体部の屈曲部は丸く、体部は丸みを持ち、肩が張らない。体部外面は縦方向の平行



第22図 1-2区斜面3トレンチ出土須恵器実測図 (1/3)



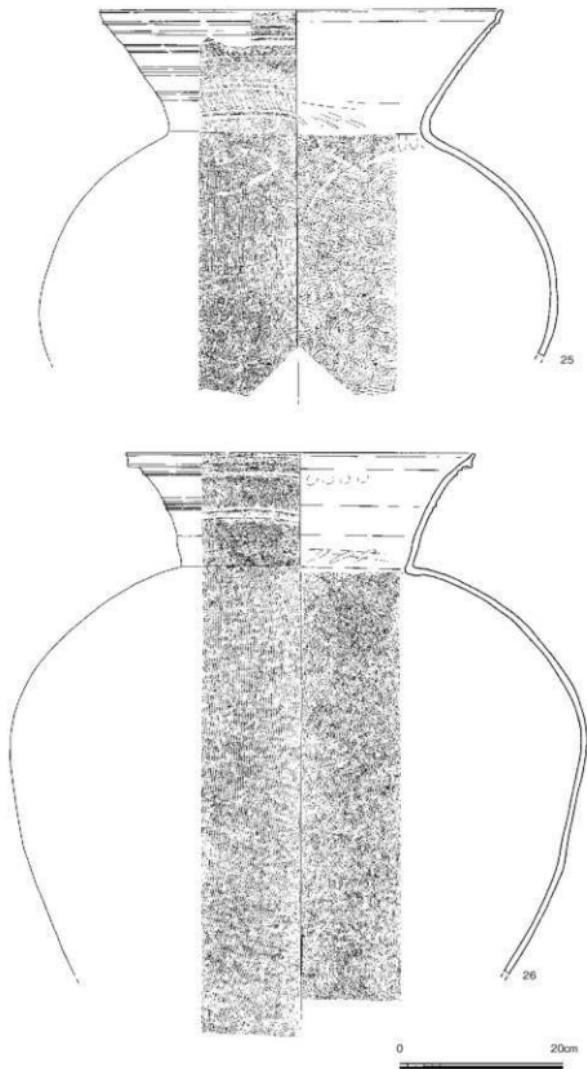
第23図 I区調査区内出土須恵器実測図 (1/3)

タタキを施し、体部内面は同心円文の當て具痕が残る。内面下部には平行文の當て具痕跡が確認できる。頭部内面の下部にヘラ状工具の痕跡が残る。26は口縁部が屈曲して直立し、頸部は外湾しながら開く。外面に3段の櫛描波状文を施す。上段の2段は大きく深い波状文を施し、下段は浅く小さい波状文である。体部は大きく膨らみ、やや肩が張る。体部外は平行タタキで、木目を利用した格子文様を呈する。体部内面は同心円文の當て具痕が残る。

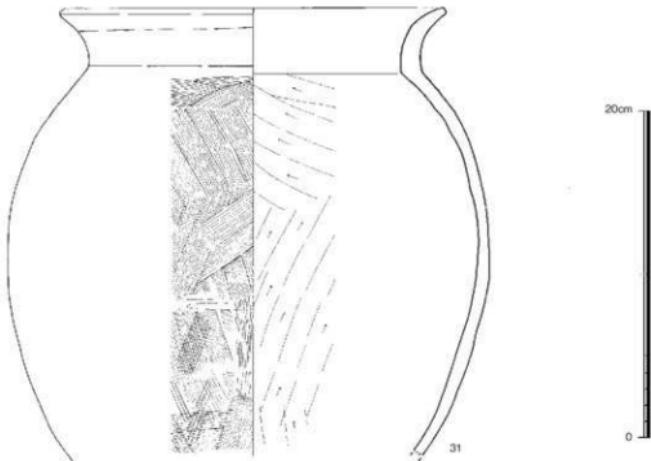
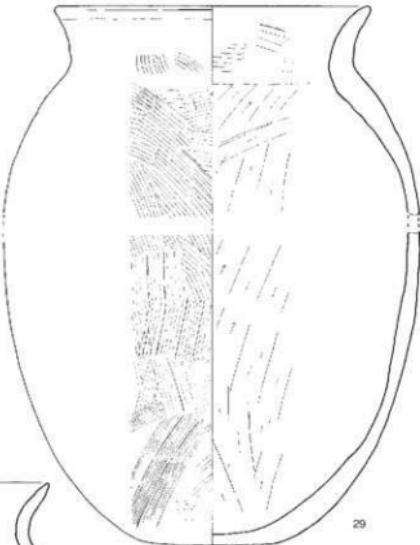
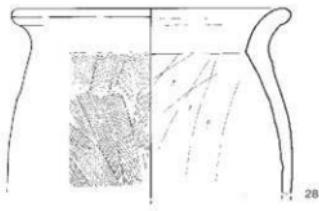
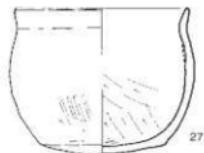
## 2) 土師器

27～36は③～④層出土の土師器。27は土師器小型鉢。底部はレンズ状で、体部は樽形に膨らむ。口縁は体部から緩く屈曲して外反し、端部は丸く仕上げる。全体に摩滅が進み、外面下部にタタキまたは粗いハケの痕跡が残り、内面下部にケズリ痕が残る。28は甕の上部破片で、口縁部は短く太く外湾し、端部は膨らみ気味に丸くなる。体部は細長いものとみられ、肩は張らない。外面に縦方向のハケ目、内面に縦方向のケズリ痕が残る。29は甕で、上部と底部が直接接合せず、図上で復元した。底部は平底で、体部は底部から丸く立ち上がり、全体に砲弾形に近い。頭部は短く開き、口縁部は細く丸く仕上げる。外面に縦方向の粗いハケ目、内面は縦方向のケズリで仕上げる。30の甕は頭部が体部から丸く屈曲して開き、端部は細く仕上げる。頭部外面に縦方向のハケ目がわずかに残り、体部内面に指掌痕が残る他は、摩滅により器面調整は不明である。31の甕は口縁部が大きく湾曲して広がり、端部は緩く面取りされる。胴部は丸く膨らんで肩が張らない。外面はハケ目、内面はケズリで仕上げる。外面にスヌが付着する。

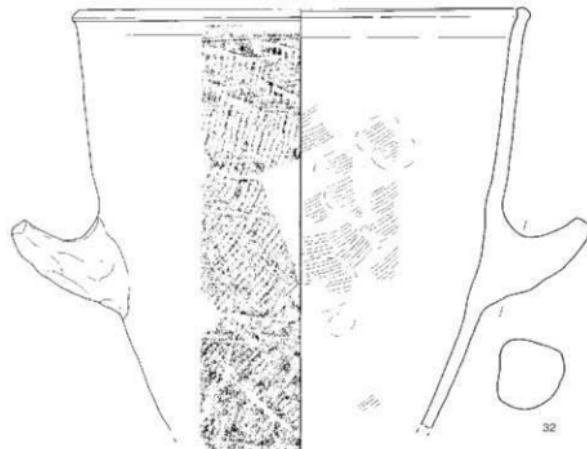
32は瓶で底部を欠く。体部は砲弾形で、口縁端部は短く屈曲して内傾する。把手は牛角形で、不整形である。胴部外面は縦方向のタタキ目で、ところどころに横線が入る。内面はハケ目状の當て具痕が残る。33は甕で、口縁部は外湾しながら開き、口縁直下に突帯が付く。体部は縦長で、底部は丸底である。体部は平行タタキ後ナデ消し、内面は同心円文當て具痕が残る。外面に丹塗り状の赤色顔料痕が残る。



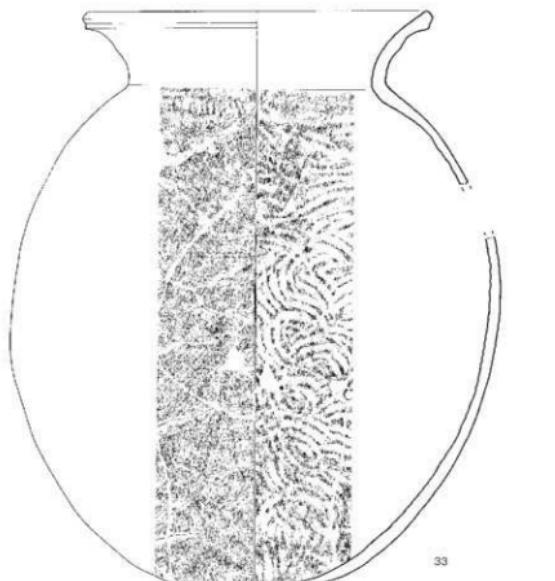
第24図 I区⑦層出土須恵器大甕実測図 (1/6)



第25図 I-1区③~④層出土土器実測図1 (1/3)



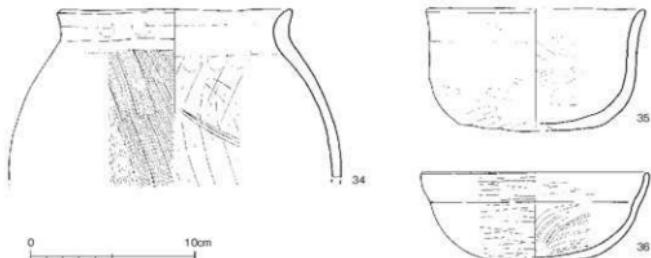
32



33



第26図 I-1区③~④層出土土器実測図2 (1/3)



第27図 I-2区③~④層出土土師器実測図3 (1/3)

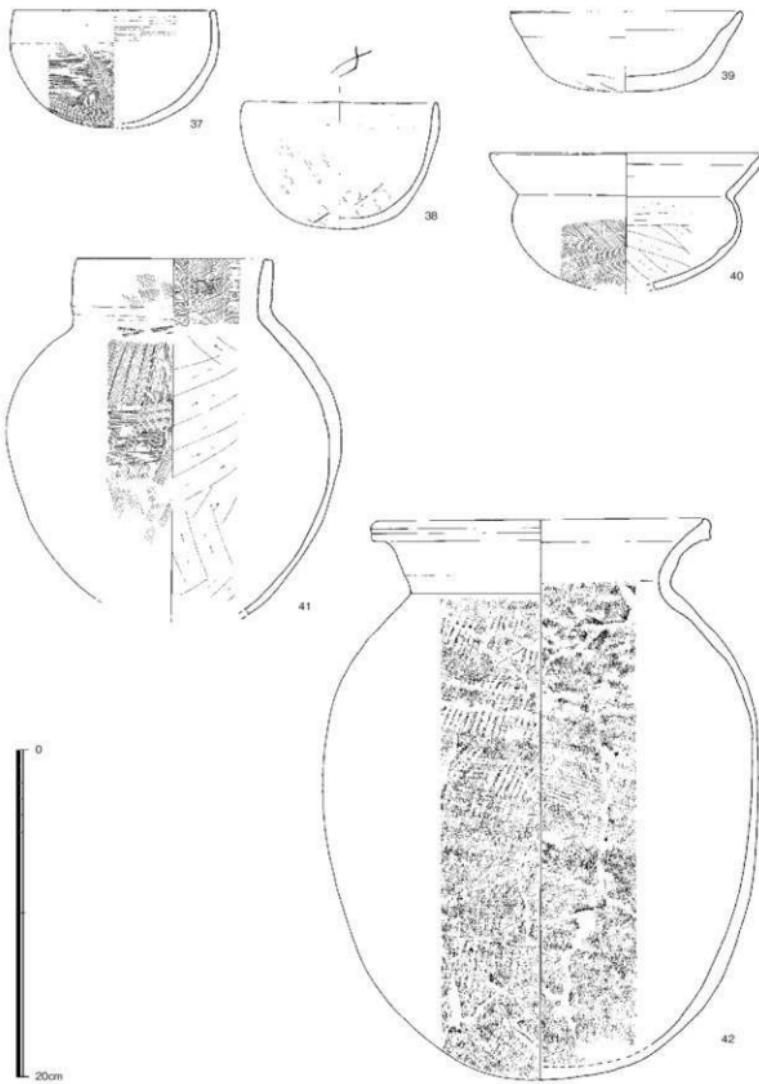
34は小型甕の上部破片。頸部は短く直立し、わずかに外湾する。体部は肩が張らずに膨らむ。外面は縦方向のハケ目、内面はケズリで、内面のケズリは方向が不定で粗い。頸部外面は指圧痕が残る。35は鉢。丸底で、体部が膨らみ、口縁部はやや外湾する。口縁部は丸く仕上げる。外面はナデ、内面は板状工具でケズリ状に整形する。36は丸底鉢で、口縁部は体部からわずかに屈曲して内湾しながら開く。体部はやや扁平で、丸く作る。外面はヘラミガキ、体部内面には暗文を施す。

37~42はI区⑥・⑦層出土の土師器。37は鉢で、全体に丸く作る。口縁部は内湾し、端部は丸く仕上げる。体部から底部にかけて連続的に丸く作る。外面はハケ目、内面上部は横方向のハケ目で、下部はナデ。38は壺で、やや綾型に作られる。口縁部は直立し、体部から底部にかけて丸く作る。内外面はナデで、外面底部と内面見込みに板状工具痕が残り、工具による器面調整を行ったとみられる。39は鉢で器壁が分厚く、口縁部は体部から屈曲して外に開き、体部は扁平で丸く作る。胎土は精緻だが焼成は軟質で内外面とも摩滅が著しく、器面調整はほとんど不明。本来はヘラミガキを施していたとみられる。40は小型丸底壺で、口縁部は体部から明瞭に屈曲して開く。体部は丸く扁平に作り、器壁を薄く作る。体部外面はハケ目、内面はケズリで、頸部は内外面とも横ナデ。

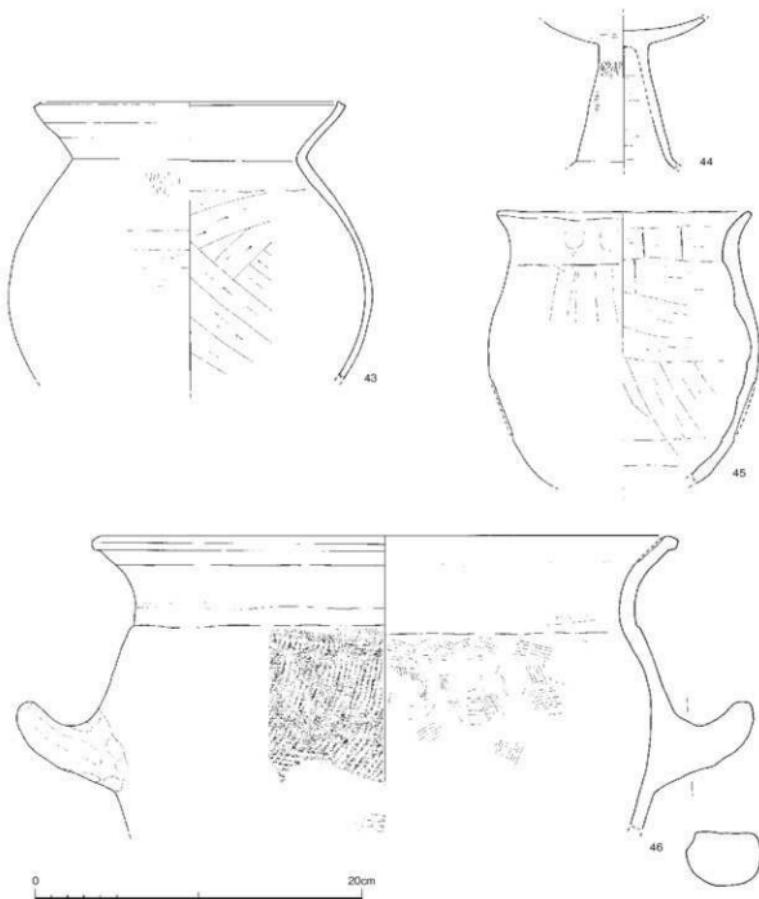
41は壺で、口縁部が直立し、端部は面取りされる。体部はやや肩が張り、底部は丸底だったと見られるが欠損している。42は甕で33と器形が近似する。頸部は外反し、口縁直下に突帯が付く。口縁端部は上方に短く立ち上がる。胴部は綾長形で、やや肩が張り気味である。底部は丸底である。外面は平行タタキにカキ目が粗く入り、内面は当て具痕を消すようにハケ目が不定方向に入る。外面全体にススが付着する。

43~46はI-2区⑦層出土土師器。43は甕で、古墳時代前期のもの。胴部は肩が張らず、頸部はわずかに内湾しながら開き、端部はごくわずかに内側に跳ね上げる。内外面とも摩滅が進むが、内面に削り痕が確認できる。

44は高环脚部。環部は丸底で、外面に丹塗り痕がわずかに確認できる。脚部は細く立ち上がり、脚端部は広く開いていたとみられる。45は壺。全体に不整形で、手捏ね感がある。口縁部は短く外反し、胴部の膨らみは小さい。外面は板ナデ、内面は削りで、外面に剥落が目立つ。外面全体にススが付着する。46は甕で、体部が丸いもの。口縁部は外湾し、端部は外側に短く折り返す。把手は外側にやや長めに延びる。体部外面は縦方向のタタキ目、内面には当て具痕を消すためのハケ目が残る。

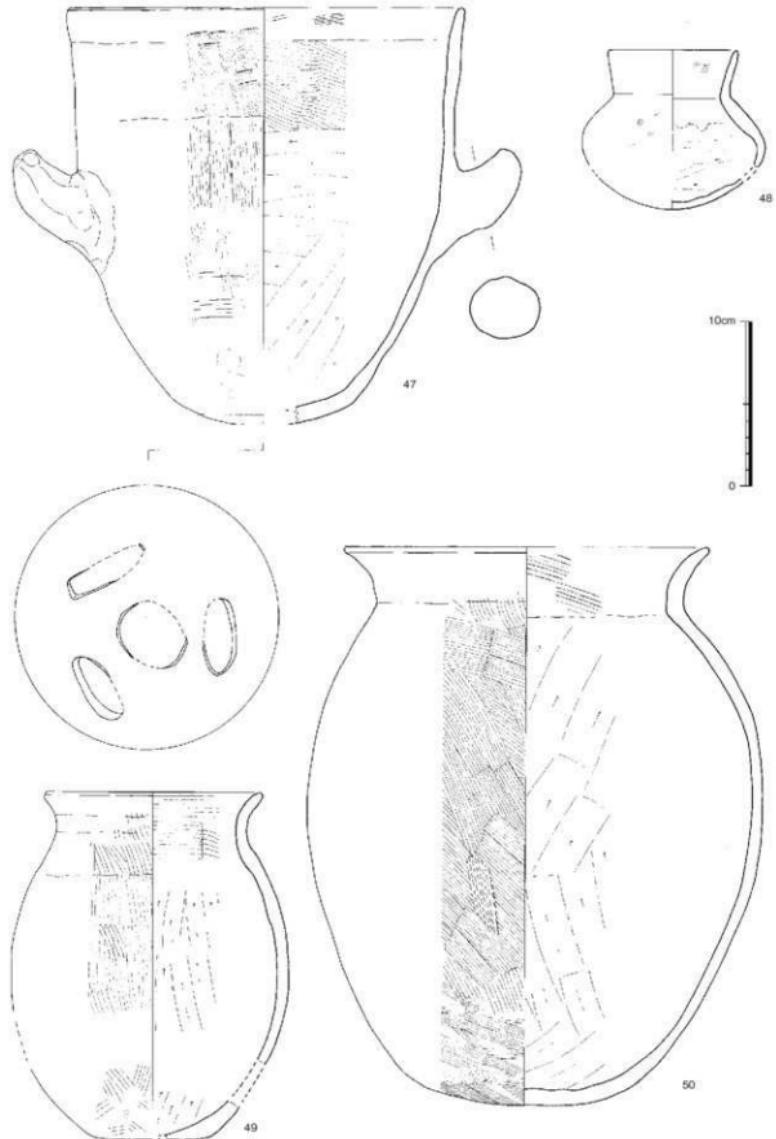


第28図 I区⑥～⑦層出土土師器実測図 (1/3)

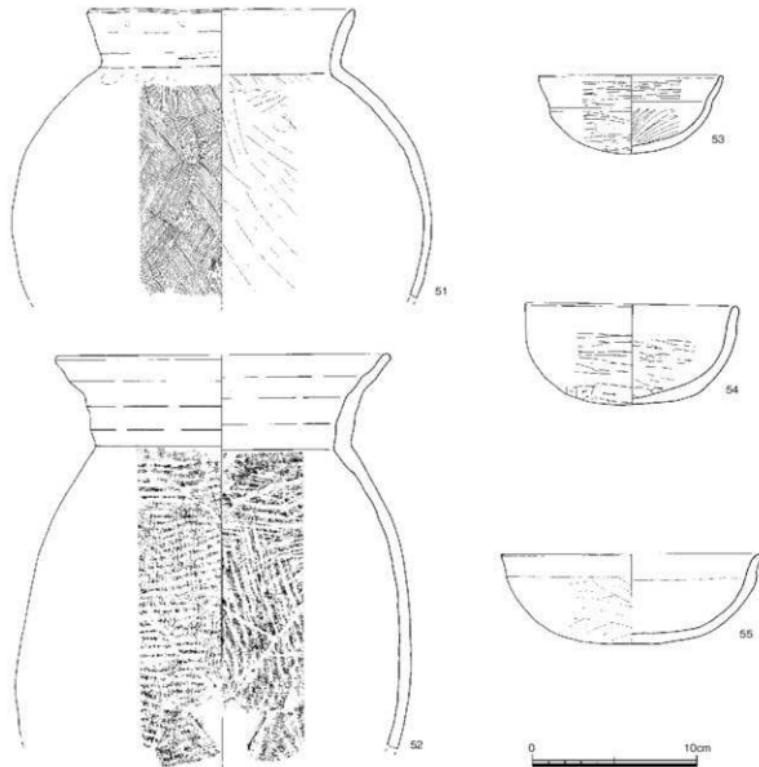


第29図 I-2区⑦層出土土師器実測図 (1/3)

47~49はI-3区④層出土土師器。47は瓶で、体部は砲弾形を呈する。把手は上方に太く伸びる。底部は体部から丸く続き、底部には中央に円形の孔を開け、その周間に梢円形の孔を3つ開けている。体部外面は縦方向ハケ目、内面上部は横方向のハケ目、内面中位から下部にかけてケズリで仕上げる。48は小型瓶で、口縁部はほぼ直立する。体部は中位が張るそろばん玉形で、底部は丸底である。内外面ともハケ目が見られるが、摩耗が著しく、詳細は不明である。外面に赤色顔料の痕跡があり、本来は丹塗りだったとみられる。49は小型の甕で、口縁部は太く外湾し、体部は長胴形を呈し、底部は平底である。外面は縦方向ハケ目、内面はケズリで、底部外面にもハケ目がみられる。外面に部分



第30図 I-3区④層・⑦層出土土師器実測図 (1/3)



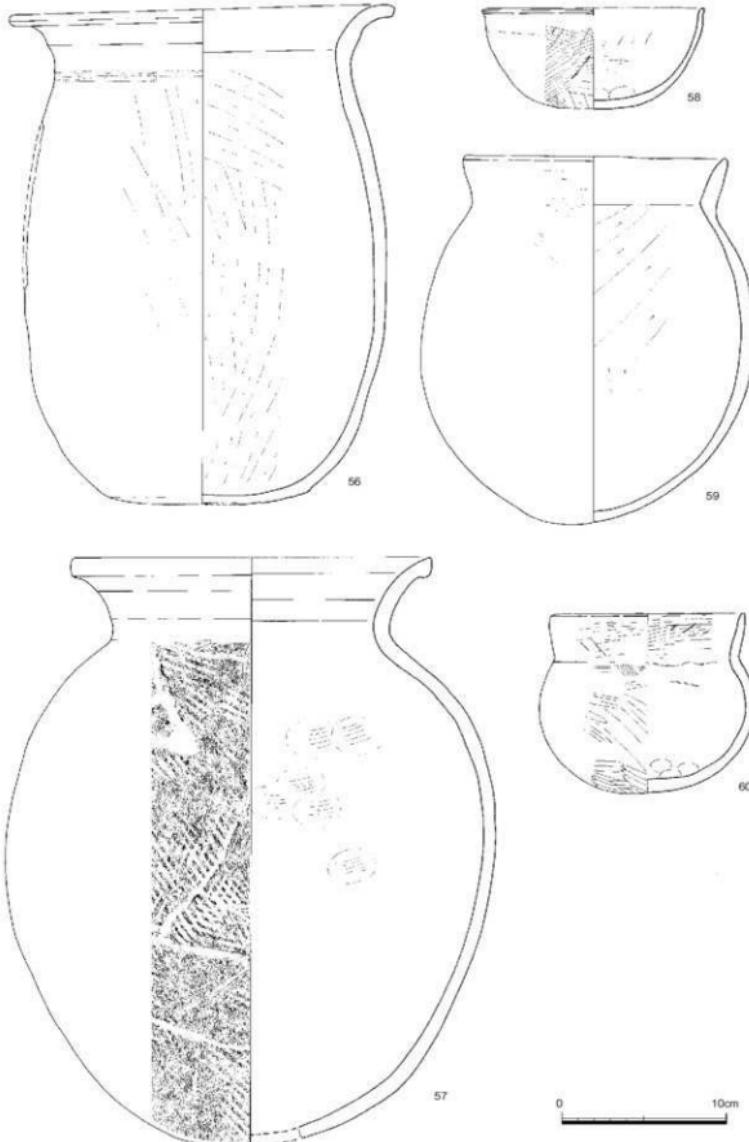
第31図 I-4区⑦層出土土師器実測図 (1/3)

的に赤色顔料が残る。

50はI-3区⑦層出土の甕で、口縁部は短く外湾し、体部はやや長胴形で、底部はレンズ状になる。外面は上部が粗いハケ目、底部付近は細かいハケ目、内面はケズリで仕上げる。外面上部にスヌが付着する。

51～55はI-4区⑦層出土の土師器。51は甕の上部で、頸部は直線的に開き、体部は丸く作る。体部外面は不定方向の短いハケ目、内面はケズリで、頸部境界部付近に工具痕が残る。頸部は内外面とも横ナデ。52は甕で全体に細長い器形で、頸部は外湾しながら長く開き、横ナデによるゆるい屈曲がみられる。胴部は長胴で寸胴形である。外面はタタキ、内面は線状の当て具痕が残る。胎土には微細な白色粒を含み、鈍い黄橙色を呈する。形状、胎土とともに外来系の土器の様相を示す。

53は丸底鉢で、口縁部は体部から浅く屈曲して開く。体部は浅く、丸く作られる。外面はヘラミガキで、体部の一部にケズリ痕が残る。内面には暗文が施文される。54は鉢で、体部は直立し、口縁端部でわずかに外湾する。外面はヘラミガキを施す。底部は丸底で、外面は板状の工具でケズリで整



第32図 I区出土土師器実測図 (1/3)

形する。内面はヘラミガキと横ナデで調整する。55は鉢で、全体に浅めに作る。口縁端部は短く緩く外反する。底部は丸底で、体部は丸く作る。外面はケズリ、内面はナデで仕上げる。

56～60はI区出土のその他の土師器。56は甕で、長胴形のもの。24の須恵器坏を入れ子状に内部に入れた状態で出土した。口縁部は強く外湾し、口縁端部上面はほぼ水平になる。頸部と胴部の境界には沈線を手持ちで回している。胴部はほとんど張らず、底部は胴部から丸く続いて、ごくわずかにレンズ状を呈する。外面は板ナデ、内面はケズリ。底部から胴部にかけて部分的に淡い赤橙色～橙色の部分があり、二次焼成の痕跡がある。ススも付着する。57は甕で、頸部は外湾し、端部は面取りして端部下部は垂下する。体部は丸く張り、底部は丸底である。外面は不定方向の平行タタキ、内面にはごく浅い当て具痕跡が確認できるが、拓本で確認できるレベルではない。外面下半部にススが付着する。

58は鉢。口縁端部は外側にわずかに外反する。体部から底部にかけては丸く作り、外面は粗いハケ目、内面はナデで仕上げ、内面に板状工具痕が残る。59は甕で、全体に歪んでいる。頸部は短く太く開き、端部は丸く仕上げる。胴部は丸く張り、底部は尖り気味に丸く作る。内面にケズリ痕跡が残るが、内外面とも摩滅が進む。60は丸底甕で、口縁部はわずかに内湾し、開きは小さい。体部は丸く作る。外面と頸部内面は粗いハケとケズリで、底部付近はヘラミガキを施す。体部内面はナデで、見込みに指圧痕が残る。外面にススのような黒色付着物がある。

## (2) II区の出土遺物

### 1) 須恵器

61～77はII～5区出土の須恵器。61～64は5区北壁34層の黒色土から出土。61・62は須恵器坏身で、61は受け部の立ち上がりは長く直線的に内傾し、端部は面取りする。体部は丸く深い。内面見込みに指圧痕が残る。外面底部に三角形のヘラ記号が残る。62は受け部の立ち上がりがやや内湾しながら長く延びる。端部は丸く仕上げる。体部は丸く、深めに作られる。底部外面にヘラ記号がある。63は坏蓋で、丸くやや扁平な形である。口縁部は内湾し、端部は丸める。外面天井部に3本平行線のヘラ記号をつける。64は鉢で、台付鉢または高杯の鉢部の可能性もある。全体に丸く、口縁部付近は外側に開く。体部側面に突堤状の凹凸が見られる。外面中位に櫛描波状文が1段施文される。65・66は皿で、③④層から出土し、全体に非常に浅い作りである。65は底部が平底で、体部は底部から丸く立ち上がり、口縁部は軽く外反する。66は平底の底部から、体部が明瞭に屈曲して開き気味に立ち上がる。

67～76は⑦層出土。67は坏蓋で、全体に丸く作る。口縁端部に四線状の段を付け、体部中位に沈線状の段を作る。68は坏蓋で体部に屈曲部があり、口縁部は外反し、端部は斜めに面取りされる。外面の大部分に自然軸が掛かる。69は受け部の立ち上がりが長く、端部は太く作り、面取りする。体部は深く下膨れになる。70は立ち上がりが長く、内傾して直線的に延びる。端部には段がつけられる。体部は丸く、やや扁平に作られる。71は受け部立ち上がりが長く、わずかに内傾する。体部はやや扁平に作られる。受け部に重ね燒の痕跡が残る。

72は古代の坏身で、高台はごく低く、体部は直線的に八の字にひらく。外底部は回転ヘラケズリで、工具により表面を整えている。

73・74は坏身で、73は受け部が浅く、立ち上がりは外湾して長く延びる。体部は扁平に作る。74は受け部が外湾して高く直立し、体部は扁平に作る。外面に自然軸が少し掛かる。

75は坏蓋。全体に丸く高く作られる。口縁部付近は直立し、口縁端部に段を作る。外面体部中位にごく浅い段を作る。内面にX字のヘラ記号が付く。

76は高坏の坏部から脚部上部の破片。坏部は立ち上がりがわずかに内傾し、受け部は浅く、体部はやや浅めに作られる。坏部は全面回転横ナデ。脚部は太めに作られ、外面はカキ目、内面は回転横ナデ。77は甕の口縁部で③④層出土。頸部は外側に開き、口縁部は丸く粘土帯を貼り付けて作る。体部は頸部から屈曲して大きく開く。体部外面はタタキ、内面には同心円文の当て具痕が残る。

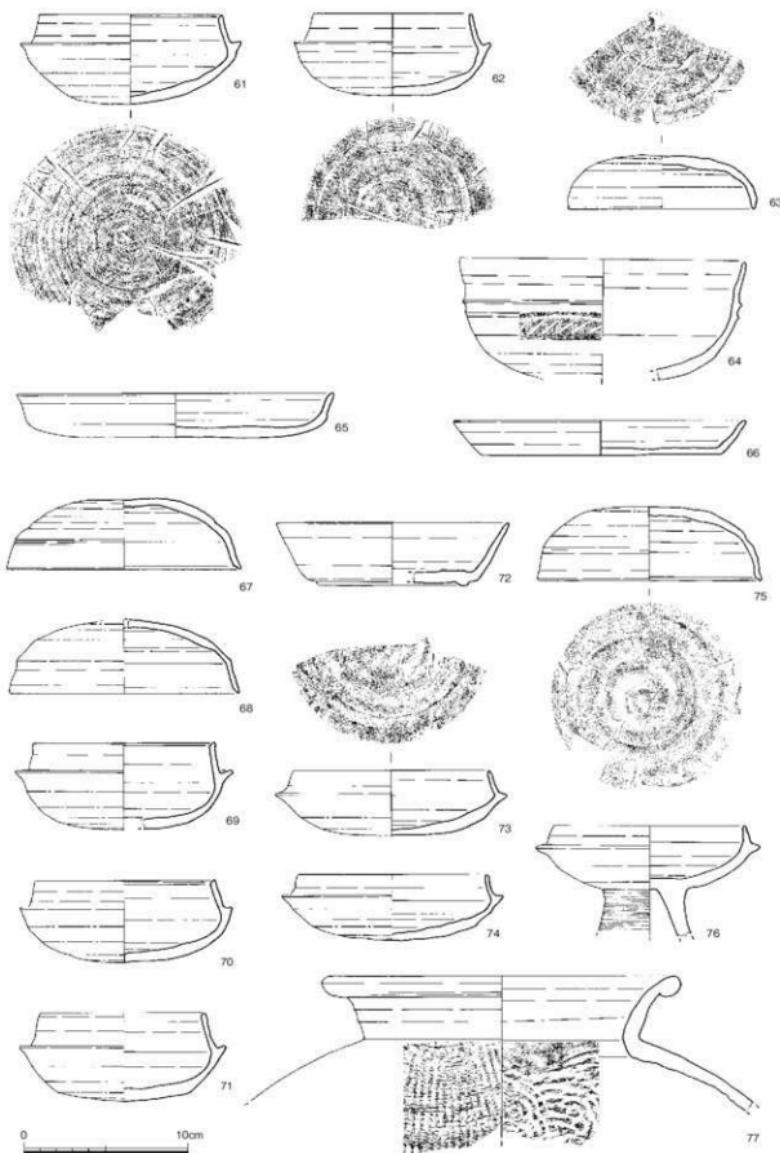
78～93はⅡ-7区出土須恵器のうち、古墳時代に属するもので、5・6区北壁32層に相当する層から出土。78～81は坏蓋で78は全体に高く作られ、天井部はやや平坦で、天井部と体部の境界はやや屈曲気味である。体部に段が作られている。口縁部は直立し、内側に段を作る。外面天井部に大きなX字のヘラ記号を記入する。79は全体に丸く作られ、体部中位に段がつく。口縁部は直立し、内側に凹線状の段がつく。80は全体にやや扁平に作られ、口縁部は開き気味で、口縁端部は内側を面取りする。体部にごく浅い段が付く。81はやや扁平で丸く作られる。口縁部は短く直立し、端部は丸く作られる。天井部は粗い回転ヘラケズリで、粘土の返りが残る。

82～88は坏身で、82は受け部の立ち上がりが直立し、端部に段を付ける。体部は丸く作る。83は立ち上がりが直線的に長く延びて内傾し、体部は扁平に作る。外面全体に自然軸がかかっている。84は受け部の立ち上がりが短く、外湾して立ち上がる。体部は丸く作られ、底部付近は平底気味である。外面には自然軸が厚くかかり、凹凸が顕著で、調整は不明である。85は全体に扁平に作られ、立ち上がりは短く直立し、体部は浅い。これも外面全体に自然軸がかかっている。86は受け部の立ち上がりが直線的に内傾し、体部はやや浅めに丸く作られる。受け部は浅い。内面に大きなX字のヘラ記号が書かれる。87は全体に少し歪んでいる。受け部が直線的に内傾し、受け部は浅く、重ね焼きの痕跡が残る。体部は丸く作られる。内面に大きなX字のヘラ記号が付く。88は受け部の立ち上がりが全体に比して低くなり、直線的に内傾する。体部は深めに作られる。内面にヘラ記号が確認できる。

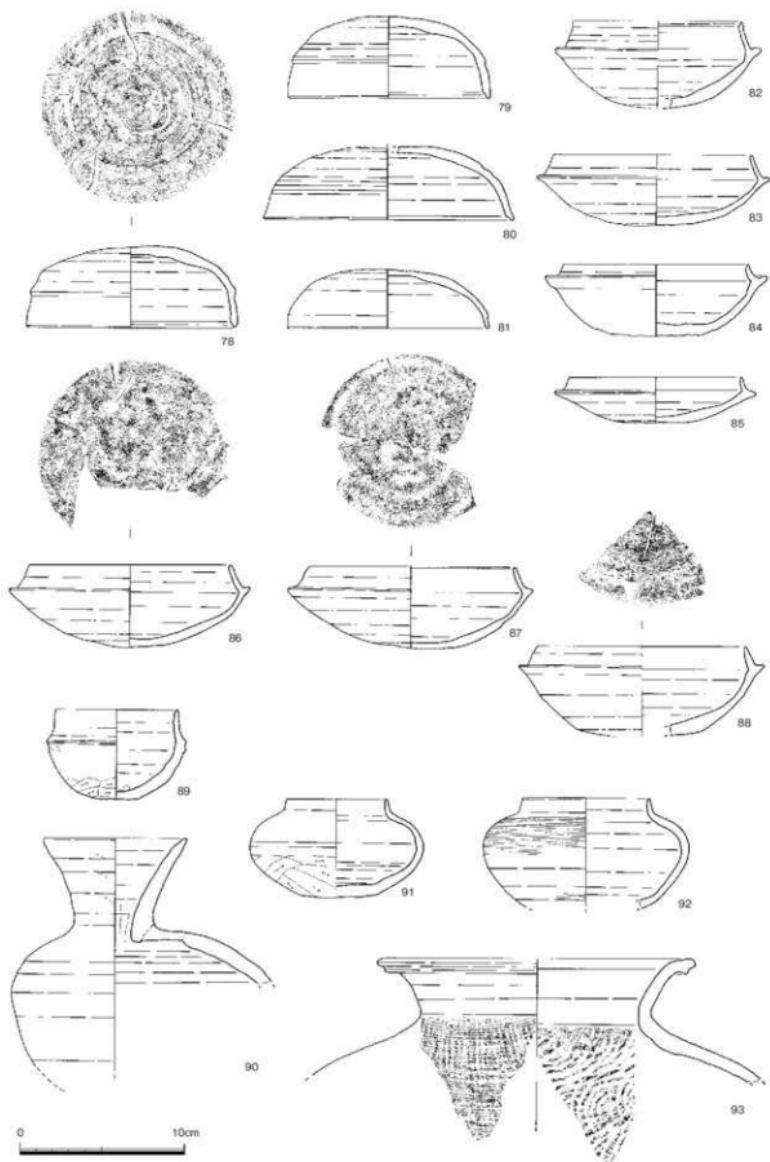
89は小型壺。頸部は胴部から屈曲して直立し、体部は丸く作られ、坏身を横に縮めたような形である。体部に櫛描波状文が1段施文される。底部は手持ちヘラケズリ、体部から内面は回転横ナデ。内面に自然軸が掛かり、見込み部分に厚く溜まる。90は平瓶。部分的な破片の接合により復元されている。頸部は大きく開く。頸部から外面下部までは回転横ナデで、下部に回転ヘラケズリの痕跡が確認できる。91は小型短頸壺。頸部は短く直立する。体部は胴が張り、底部は平底状である。体部下部は手持ちヘラケズリ、外面上部と内面は回転横ナデ。92は短頸壺で、頸部は直立し、外面は肩が張る。肩部付近にカキ目を施しており、外面下部までカキ目があった可能性が高い。頸部から内面は回転横ナデ。93は甕口縁部破片で、頸部は大きく開き、口縁部は外湾し、口縁直下に突帶が付く。体部は大きく開くようである。外面は格子目タタキ、内面は同心円文當て具痕跡が残る。

94～98はⅡ-6区出土の須恵器。94は皿。底部は平底で、凹凸がみられる。体部は大きく開き、全体に浅い作りである。底部は静止ヘラケズリで、粘土の寄りや塊が見られ、粗い。底部周囲は回転ヘラケズリ、体部から内面は回転横ナデ。95は坏蓋で、摘みはボタン形。天井部は低く、端部は短く垂下する。96は坏身で、高台は低い。体部は内湾気味に開く。97は古墳時代の小型の坏で、受け部立ち上がりは直立し、体部はやや丸く作られる。内面にヘラ記号が残る。98は甕口縁部。口縁端部は面取りして整え、頸部は緩く外湾する。

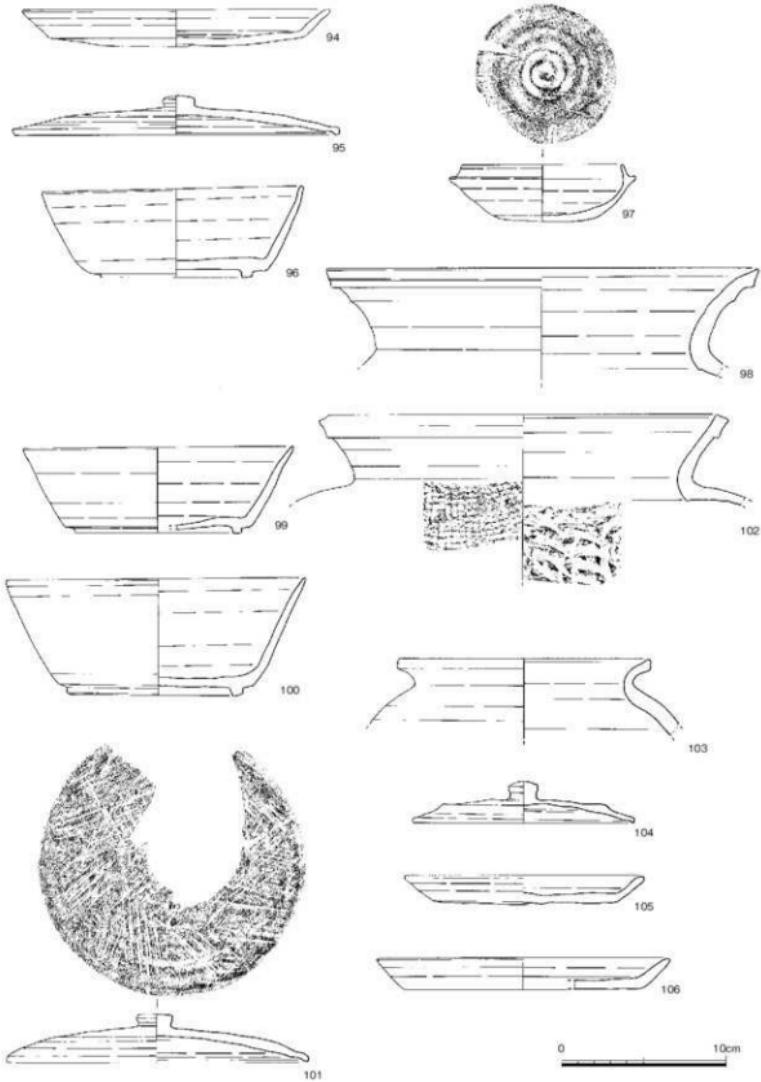
99～106はⅡ-7区出土の須恵器。99は高台は低く、体部は直線的に開く。内面見込みにナデではない擦痕がみられ、使用痕の可能性がある。100は低いコ字形の高台が付き、体部は直線的に開く。101はボタン形の摘みが付き、天井部は低く丸く作られる。口縁端部は面取りされ、ごく短く垂下す



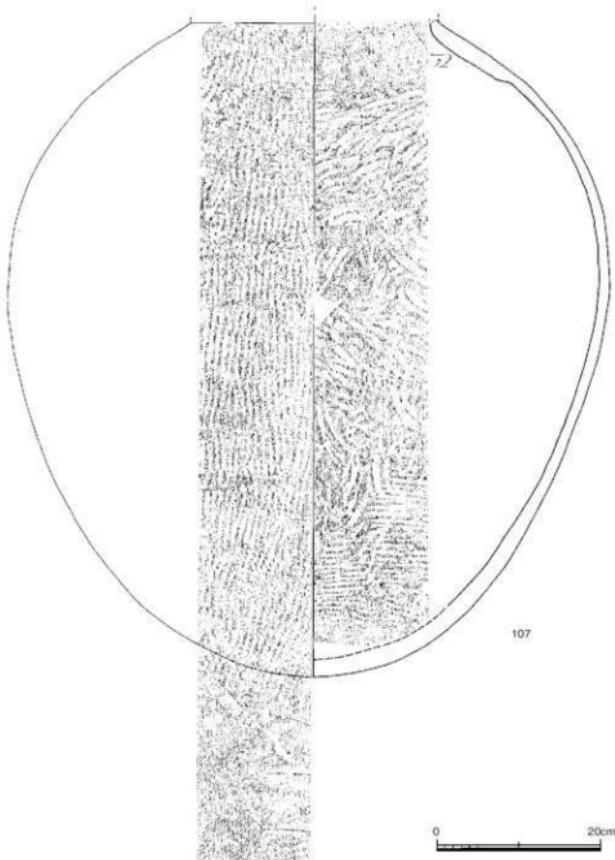
第33図 II-5区出土須恵器実測図 (1/3)



第34図 II-7区出土古墳時代須恵器実測図 (1/3)



第35図 II-6・7区出土須恵器実測図1 (1/3)



第36図 II-6・7区出土須恵器実測図2 (1/6)

る。天井部は回転ヘラケズリ、天井部周囲と下面は回転横ナデで、天井部に粗いハケ状の工具で不定方向に調整される。また、下面には黒色に変色している部分があり、墨痕の可能性がある。

102は甕の口縁部で、口縁部外側に粘土を貼り付け、肥厚させる。頸部は直線的に開く。体部外面は格子目タタキ、内面には同心円文の當て具痕が残る。103は小型甕の口縁部で、口縁部は胴部から外湾して開く。体部は丸く張るようである。内外面とも回転横ナデ。

104は坏蓋。摘みは宝珠形で、天井部は直線的で、屈曲して開く。端部はわずかに垂下する。105は皿で、底部は平底で凹凸が目立つ。体部は直線的に開く。底部は回転ヘラケズリで、板状圧痕が見られる。体部から内面は回転横ナデで、内側全体に墨痕が残る。106は皿で、底部は平底で、体部は

短く開く。

107はII-6区から7区にかけて散布していた破片を接合して復元した甕の胴部。体部は肩が張る。頸部から体部上位にかけて自然釉が掛かっている。外面は平行タタキの上からカキ目を施し、底部付近は回転カキ目で仕上げる。内面は同心円文タタキ当て具で、底部付近は平行タタキの当て具痕が残る。

108~115はII-8区出土の須恵器で、1面下包含層から出土。108は古代の坏身。高台はコ字形で低く、体部は直線的に開く。外底部は回転ヘラケズリ後不定方向のナデと工具により平らに仕上げている。109は高台下面が斜めに面取りされている。体部は直線的に開く。外底部にハケ目がわずかに残る。110は高台が低く、体部は直線的に開く。111は高台のない坏。底部は平底で、わずかにレンズ状を呈する。体部はわずかに外反して開く。全体に器壁が厚い。底部は回転ヘラケズリで、粗いハケ目が残る。体部から内面は回転横ナデで、内面見込みに指圧痕が残る。112は皿で、底部は平底、体部は外湾気味に開き、体部と底部の境界の屈曲は甘い。113は坏蓋で、摘み部分を欠く。天井部は平坦で、回転ヘラケズリ後一定方向の粗いハケ状工具で整えている。体部は直線的に開き、端部は面取りされる。体部から内面は回転横ナデで、内側に黒色の部分があり、墨痕の可能性がある。114は天井部が平坦に作られ、体部はわずかに屈曲して開く。摘みはボタン形。端部は下方に垂下する。

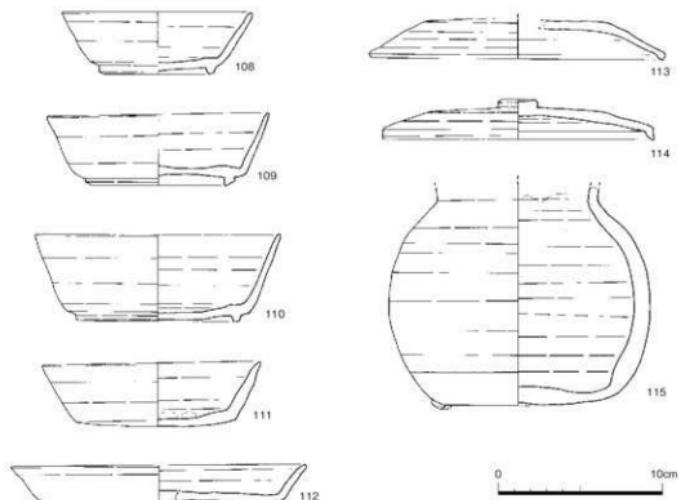
115は瓶で、頸部以上を欠く。体部は胴が丸く張り、底部は平底を呈し、底部と体部の境界は丸く作る。底部外周に砂目のような痕跡が付着している。胎土は灰色で、内外面ともに自然釉が掛かり、外面は暗オリーブ色~褐色の光沢を持つ。6世紀後半から7世紀の朝鮮半島系の瓶とみられる。

116~131はII・III区の包含層やトレチ等から出土した須恵器。116・117は坏蓋で、116は天井部は丸く、口縁部は直立し、端部は丸める。口縁上に沈線が1条廻る。117は扁平な形状で、体部から口縁部にかけて直立する。体部に太めの沈線が1本廻る。体部外面に自然釉が掛かる。118は坏身で立ち上がりが内傾し、端部を細く作る。体部はやや扁平に作る。119は坏蓋で、やや小型。天井は回転ヘラケズリで、ヘラ記号が付く。口縁部は直立し、端部はやや太めに作られる。120は坏身で受け部の立ち上がりが直立し、体部が扁平に作られ、底部は平底状を呈する。121は小型の坏蓋。全体に丸く、天井部は平坦に作られる。口縁部は屈曲して直立し、端部はやや膨らむ。天井部は粗いヘラ切り、体部は粗雑な回転横ナデで、見込みに強い指圧痕が残る。外面にヘラ記号が付く。

122は短頸壺で、口縁端部を細かく打ち欠いている。頸部は直立し、胴部は肩が強く張る。底部は平底を呈し、底部と胴部の境界は不明瞭である。体部外面にカキ目を施し、体部下部は回転横ナデ、底部は回転ヘラケズリで仕上げる。

123・124は坏蓋で、摘みはボタン形で太めに作る。123は天井部が丸みをもち、端部は下方に垂下する。124は平たく作られ、天井部と体部の間に浅い屈曲がつく。端部は短く垂下する。125~127は古代の坏身で、125は低くやや開き気味の高台が付く。体部は底部から丸く立ち上がり、外湾しながら開く。外底部は回転ヘラケズリで凹凸が残り、雑な仕上げである。126はごく低い高台が付き、体部は直線的に開き、口縁部で軽く外反する。127は底部端部に低い高台がつく。体部は外側に直線的に開く。128は皿。底部は平底で、体部は底部から湾曲して開く。底部は精緻な回転ヘラケズリで仕上げる。129は高坏底部。坏部は皿形で、端部は直立し、体部は浅い。焼成は軟質で、全体に摩滅が進み、調整は不明。

130は甕とみられ、口縁部と胴部の2破片に分かれ、接合しないが、胎土が白色で特徴的なため、同一個体とみなす。頸部から口縁部にかけて大きく開き、胴部は肩が張る。底部付近はヘラケズリ、



第37図 II-8区出土須恵器実測図 (1/3)

体部外面はカキ目を施し、頸部は回転横ナデ。注孔付近に小口による斜線が入る。131は壺で、口縁部が短く開き、体部は丸く張るとみられる。口縁端部は下方に垂下する。体部外面は縦方向の平行タタキ、内面は同心円文の當て具痕が残る。

## 2) 土師器

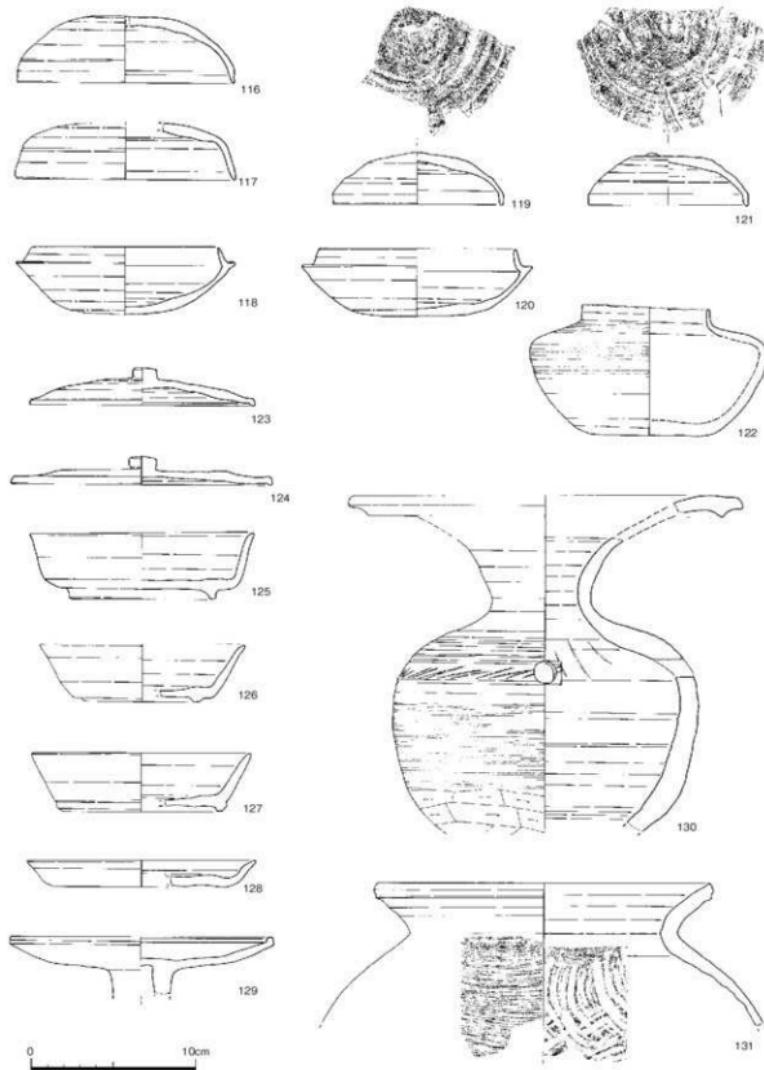
132はII-5区①層出土の土師器壺。底部は丸底で、体部は開き、全体に浅く作る。底部はヘラケズリ、体部から内面はナデ。

133はII-5区⑥層出土の高壺で、鈍い赤褐色を呈し、赤焼け須恵器に属するものである。壺部は体部が直線的に開き、底部が平坦になる。体部に3条の沈線を廻す。脚部は短く、外湾して開き、端部付近の下面に高台状の突帯を付ける。脚部にも3条の沈線を廻す。全体に回転横ナデで、壺部見込みは一定方向のナデ。

134～135はII-5区⑦層出土の土師器。134、135は高壺。134は壺部が特徴的な形状で、口縁部は外側に短く屈曲し、体部と底部の間に段が付き、底部は丸みを帯びる。脚部は太く、残存部下端で外側に屈曲する。胎土は精緻で橙色を呈する。135は壺部は丸く、脚部は直立て下部で屈曲して開く。壺部下部と脚部内面下部は細かいハケ目が残る。

136・137はII-5区④層出土。136は壺で、鉢形を呈し、把手はない。口縁部は面取りし、体部中央に2条の沈線が入る。底部は平底で、大きく2孔を開ける。下部の内外面はケズリで、他はナデ。137は小型壺で、口縁部は外湾して開き、体部は胴が張る。体部外面と頸部内面は横方向ハケ目、体部内面は横方向のケズリ。外面にススが付着する。

138～144はII-7区出土土師器。138～140は⑦層出土。138は壺で、頸部は外反し、胴部は球形に張る。139は赤焼須恵器の壺で、受け部はごく浅く、立ち上がりは直線的に内傾する。体部は



第38図 II区包含層出土須恵器実測図 (1/3)

浅く作られる。全体に摩滅が進む。140は高坏脚部で、太く短い。脚部はほぼ直立し、下部で短く屈曲して開く。外面は赤黒色の光沢があり、胎土は精緻である。

141・142はII-7区25・26層出土の土師器。141は坏で、丸底を呈し、体部は開く。外面上部はヘラミガキ、下部はヘラケグリで、内面には暗文が施される。142は大型の鉢。口縁は外湾し、体部は底部から湾曲して直線的に開く。底部は平底で、わずかに上げ底気味である。外面は体部から底部にかけてハケ目を施し、内面はケグリで仕上げる。全体にススが付着しており、鍋として使用されたとみられる。

143・144はII-7区32層出土の土師器。143は壺で、上部を欠く。把手は牛角形に湾曲し、体部下部はやや丸みを持つ。底部は筒状になる。外面はハケ目、内面はケグリ。144は小型壺。頸部と胴部の境界は不明瞭で、頸部は胴部から緩く湾曲して開き、端部は丸く仕上げる。体部はやや下膨れ気味で、底部は丸底だったとみられる。外面は粗いハケ目、内面はナデの痕跡が残るが、全体に摩耗が著しい。

145はII区調査区壁面から出土した壺。頸部は外湾し、口縁端部は面取りし、口縁直下に突帯を付ける。体部は丸く胴が張る。外面はタタキ後粗いカキ目のような横方向のハケ目を施し、内面はハケ目が残る。外面頸部付近にススが付着する。

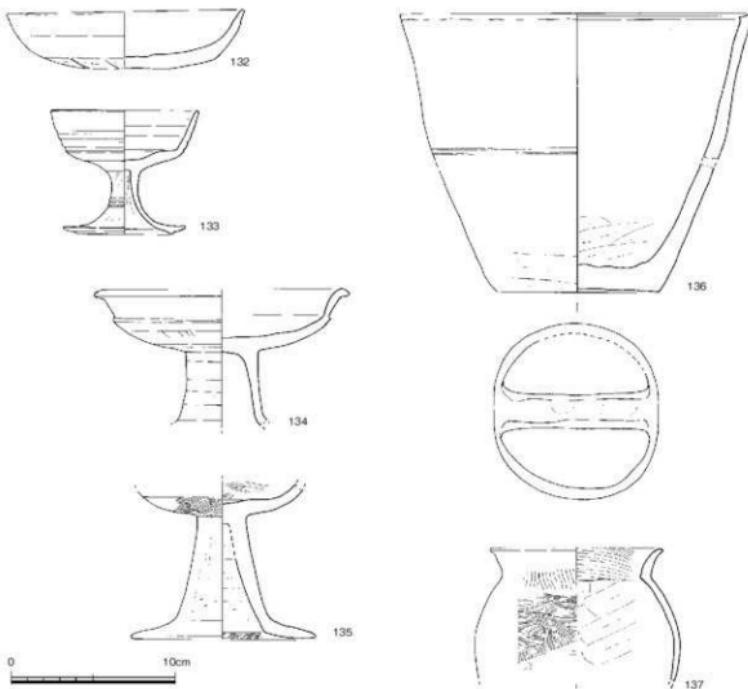
### (3) III区出土の土器

#### 1) 須恵器

146～151はIII区Aトレンチ出土の須恵器。146～148は古代の坏身。146は高台が外側に短く開き、体部は底部から湾曲して直線的に開く。外底部はヘラ切り、高台から内面は回転横ナデ。147は高台は低く直立し、体部は底部から屈曲して開く。全体に回転横ナデで、内面見込みは一定方向のナデ。148は低い高台が付き、体部は底部から屈曲して直線的に開き、口縁部で緩く外反する。全体に回転横ナデ調整。149は古墳時代の坏壺。天井部は平坦で、体部は丸く、口縁部は直立する。内面に鳥足状のヘラ記号が付く。150は坏身で、受け部の立ち上がりはわずかに内傾し、体部は浅く作られる。底部付近は平坦に作られる。

151は高坏で、脚部は高く、下方に緩く開き、端部は外反して、斜めに面取りされる。上段と下段の2ヶ所に長方形透かしが入る。脚部外面に2条の横線が入る。

152～162は坏身。152は低く開く高台が付き、体部は底部から湾曲して直線的に開く。内外面とも回転横ナデで調整する。153は浅い小型の坏で、高台は短く開く。体部は底部から湾曲して開き、口縁部付近でわずかに外反する。154はわずかに開く高台が付き、体部は底部から湾曲して直線的に開く。全体に浅めに作られる。155は底部縁部に低く直立する高台が付く。体部は直線的に開き、口縁部でわずかに外反する。156は低く直立する高台が付くが、仕上げが粗雑である。体部は底部から湾曲して直線的に開く。外底部はヘラ切り離して粗雑な仕上げである。157は古墳時代の坏身。立ち上がりは短く内傾し、体部は丸い。焼成が軟質で、灰黄色を呈する。158は浅めの坏で、高台は低く作り、疊付は斜めに面取りされる。体部は底部から屈曲して直線的に開く。外底部はヘラ切りで、難な仕上げで凹凸が残る。159は低く直立する高台で、疊付は丸く仕上げる。体部は底部から湾曲して開き、口縁部付近で外反する。160は直立する低い高台が付き、体部は底部から屈曲して開き、口縁部は外反する。内面見込みに指圧痕が残る。161は低い高台が付き、疊付はやや外傾する。体部は底部から屈曲して開き、器壁が厚い。焼成は軟質で、摩耗が著しい。162は全体に扁平な形で、受け部から立ち上がりにかけて「く」の字に屈曲し、受け部はごく浅い。底部は平坦に作り、回転ヘラケズ



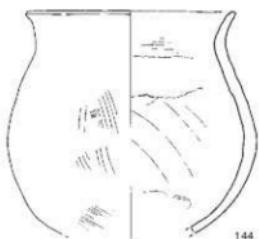
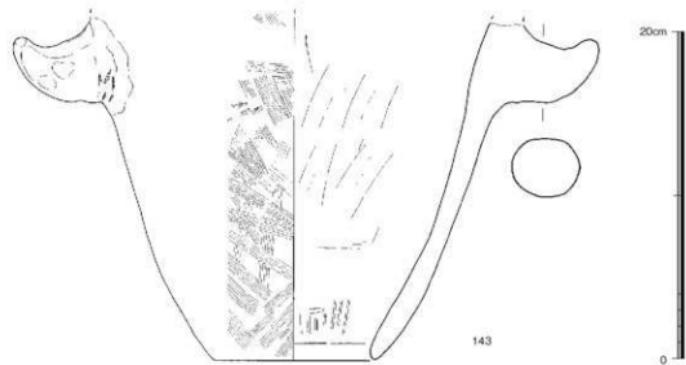
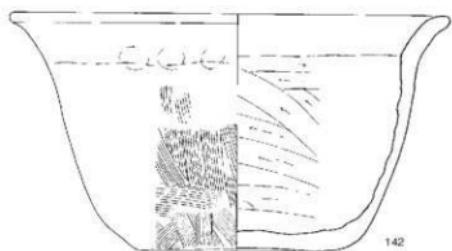
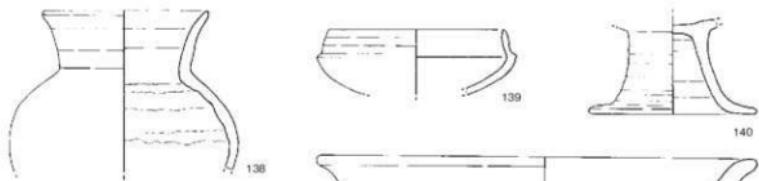
第39図 II-5区出土土師器実測図 (1/3)

りで整形する。焼成は硬質で、胎土は2mm大の砂粒を含み、やや粗い。163は壺蓋で、摘みはない。

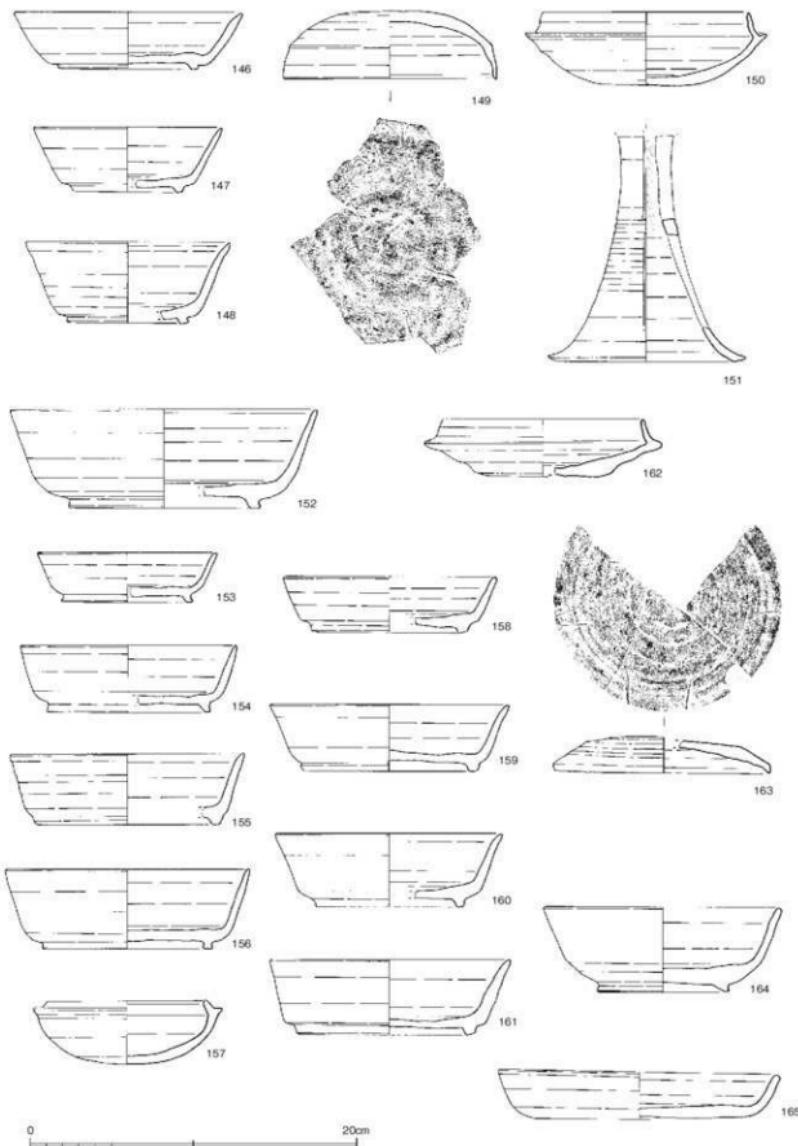
164は塊で、全体に摩耗が著しい。高台は断面三角形で、低く歪んでいる。体部は底部から湾曲して立ち上がる。焼成は軟質で、黄灰色を呈する。時代的に他の壺より下るものとみられる。165は皿で、底部は平底でヘラ切り後不定方向のナデで粗く仕上げる。体部は底部から湾曲して立ち上がる。焼成は軟質で、淡黄色を呈する。

166～175はⅢ区Bトレンチ下層（19層以下）から出土した土器。166～169は壺。166は小型で、高台は低く直立し、体部は底部から明瞭に屈曲して開く。全体に回転横ナデ仕上げ。167はわずかに開く低い高台が付き、体部は底部から湾曲して開き、上部で外反する。外面に自然釉が掛かる。全体に回転横ナデ。168は低く幅広の高台が付き、体部は底部から屈曲して大きく開く。内面は墨が付着して光沢を帯びる。169は小型の壺で、体部は直立し、底部は平底を呈する。外面底部は回転ヘラケズりで、工具で削った痕跡が残る。170は高壺の壺部。体部に2条の幅広の沈線が廻る。内面見込みに自然釉がかかっている。体部と底部の境界部分のみ回転ヘラケズりで、他は回転横ナデ。

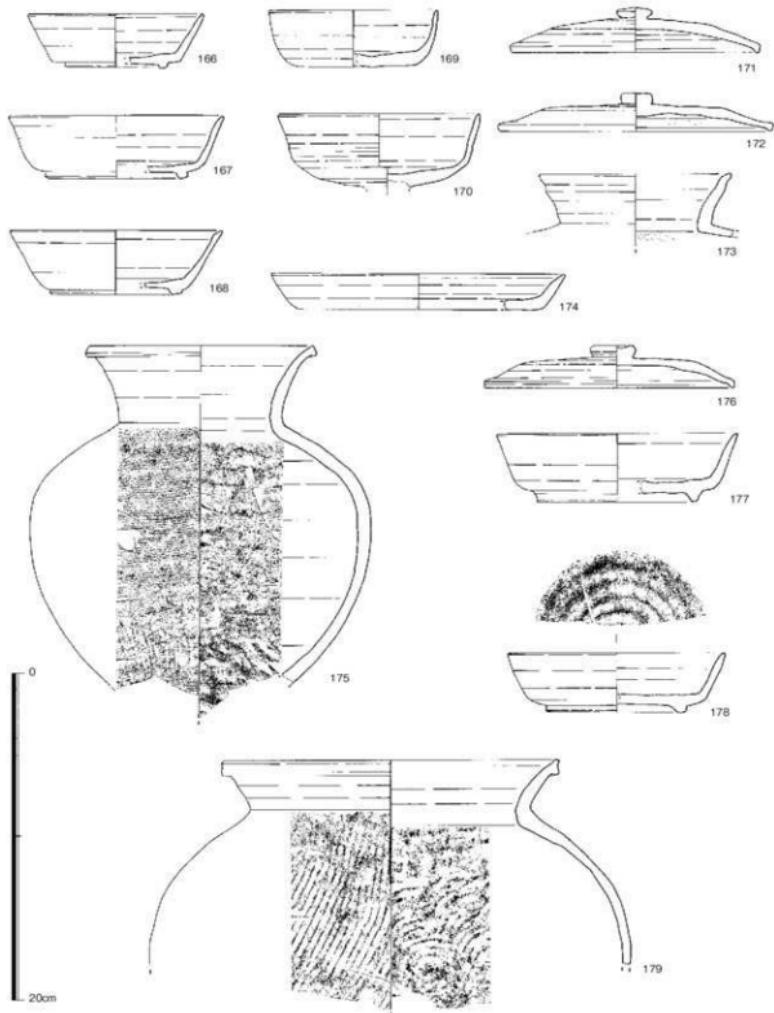
171・172は壺蓋で、171は摘みは低い宝珠形を呈する。天井部は丸く、端部はやや太めで、面取



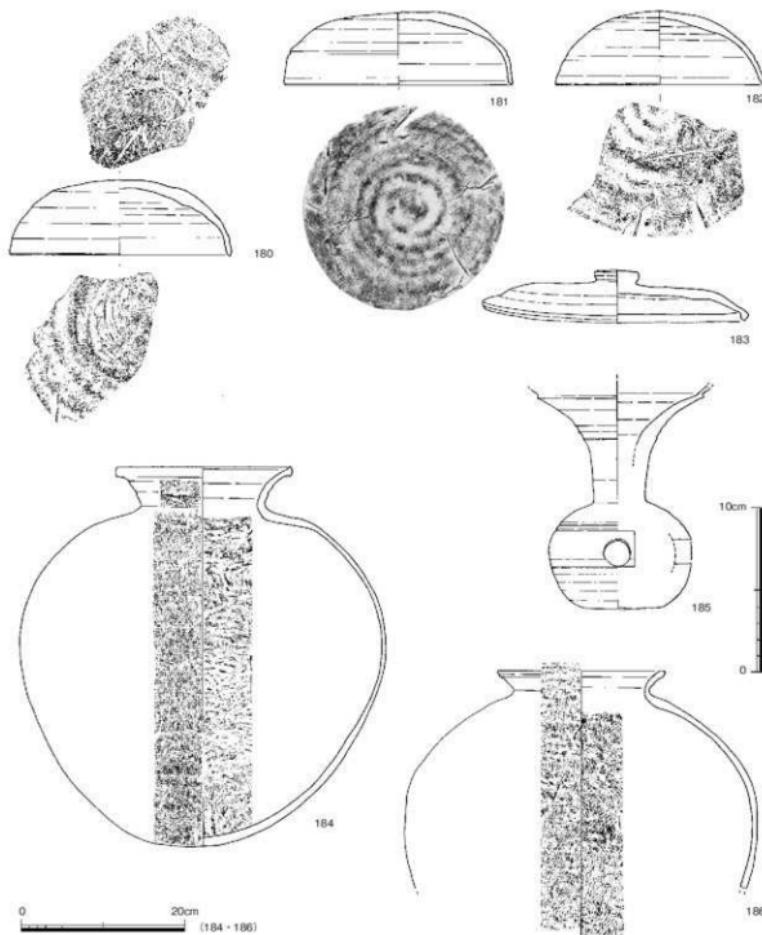
第40図 II-7区出土土師器実測図 (1/3)



第41図 III区Aトレンチ・Bトレンチ出土須恵器実測図(1/3)



第42図 III区B トレンチ下層 (19層)・C トレンチ出土須器実測図 (1/3)



第43図 Ⅲ区西側谷出土須恵器実測図 (1/3・1/6)

りして下部をわずかに垂下させる。内面見込みが円形に黒変しており、墨痕とみられる。172はボタン形の摘みが付き、天井部は平坦につくり、体部は屈曲して開く。内面全面に墨が付着しており、硯として使用された可能性が高い。

173は壺の口縁部破片で、外面に自然釉が掛かる。174は皿で、体部は底部から屈曲して低く立ち上がり、器壁が厚い。底部は回転ヘラケズリ後ナデ、体部と内面は回転横ナデ。

175は小型壺。口縁部は外側に短く屈曲し、頸部は緩く外反する。体部上半はカキ目を施し、下部

は縦方向の平行タタキの上から粗いカキ目を施す。内面には当て具痕跡が残る。頸部は内外面とも回転横ナデ。

176～179はⅢ区Cトレーナーから出土した須恵器。176は壺蓋で、摘みは低いボタン状を呈する。天井部は平坦で、体部は緩く屈曲して開き、端部はわずかに垂下する。177・178は壺身で、177は逆台形の低く直立する高台が付き、体部は底部から湾曲して開く。外底部は粗いヘラ切りで仕上げる。178は低い高台が付き、体部は底部から湾曲して開く。高台の貼付けは粗雑で、外底部のヘラ切りも雑に仕上げている。内面にヘラ記号と見られる線が入る。

179は壺の上半部で、口縁端部は下方に垂下して幅広く面取りし、頸部は直線的に開く。体部は丸く張るとみられ、外面は縦方向の平行タタキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。

180～186はⅢ区の西側谷部分に堆積した包含層から出土した須恵器。180～183は壺蓋で、180は半球形を呈し、天井部から体部にかけて丸みを帯びる。口縁部は細く仕上げる。内面見込みにタタキの当て具痕跡が残る。外面天井部に小さくヘラ記号が書かれる。181はやや扁平な形で、天井部は平坦に作る。体部は丸く、1条の沈線が廻る。口縁部付近は直立し、口縁内側に段が付く。内面にX字のヘラ記号が付く。182は全体に半球形を呈する。体部側面に浅い沈線が1条廻る。内面にX字のヘラ記号が書かれる。183は全体に歪みが大きい。摘みは低い宝珠形で、天井部は平坦面をなし、体部は丸みをもっていたものとみられる。端部は屈曲して垂下する。焼成は軟質で、灰白色を呈する。

184は甕で、頸部は外湾し、口縁部は上下に張り出して幅広く面取りする。体部は胴が強く張る。体部外面は縦方向の平行タタキ後、横方向にカキ目を施す。内面には当て具痕が残る。頸部外面に線状の工具痕が残り、ヘラ記号の可能性もある。

185は甕。Ⅲ区西側谷西トレーナーの上層で出土しており、中世以降、西側尾根部にあった古墳から転落して埋没したものとみられる。口縁部を欠くが、大きく開くものとみられる。体部は球形で、底部は平たい。外面の大部分に自然釉がかかること。

186は甕で、頸部は短く外湾し、口縁端部は上面と側面の2面で面取りする。体部は丸く張り、外面は縦方向の平行タタキ後、横方向カキ目を施す。体部内面は同心円文の当て具痕が残る。頸部外面にもタタキの痕跡が残る。

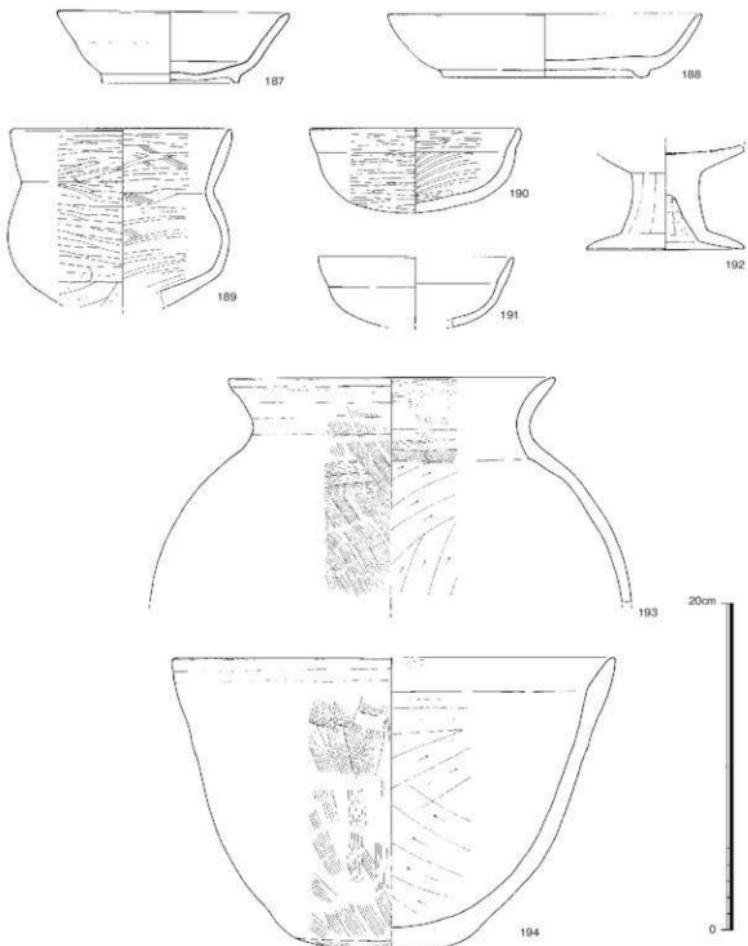
## 2) 土師器

187～194はAトレーナー出土。187は壺。低い高台が付き、体部は底部から湾曲して開く。全体に摩滅しており、器面調整は不明。188は皿状の壺部に低い高台が付く。高台はコの字で低く作られ、体部は底部から湾曲して膨らむ。内外面とも摩滅しており、調整は不明。

189は壺で、頸部は体部から屈曲して直線的に開く。体部は胴が張り、底部を欠くが本来は丸底だったとみられる。外面は粗いヘラミガキで所々に粗い縦ハケが残る。内面も横方向のヘラミガキを施す。190は鉢で、頸部は体部からわずかに屈曲して内湾気味に開く。体部は扁平で、全体に扁平な形状に作られる。胎土は精緻で、内外面ともにヘラミガキで仕上げ、内面に暗文を施す。191も鉢で、頸部は体部からわずかに屈曲して開く。体部は扁平で、浅い。内外面とも摩滅しており、調整は不明。

192は高杯の脚部で、下層の黒色粘土中から出土。脚部はやや太めに短く立ち上がり、下部で屈曲して大きく開く。脚部内面にケズリの痕跡が残る他は、内外面とも摩滅が進み、調整は不明。

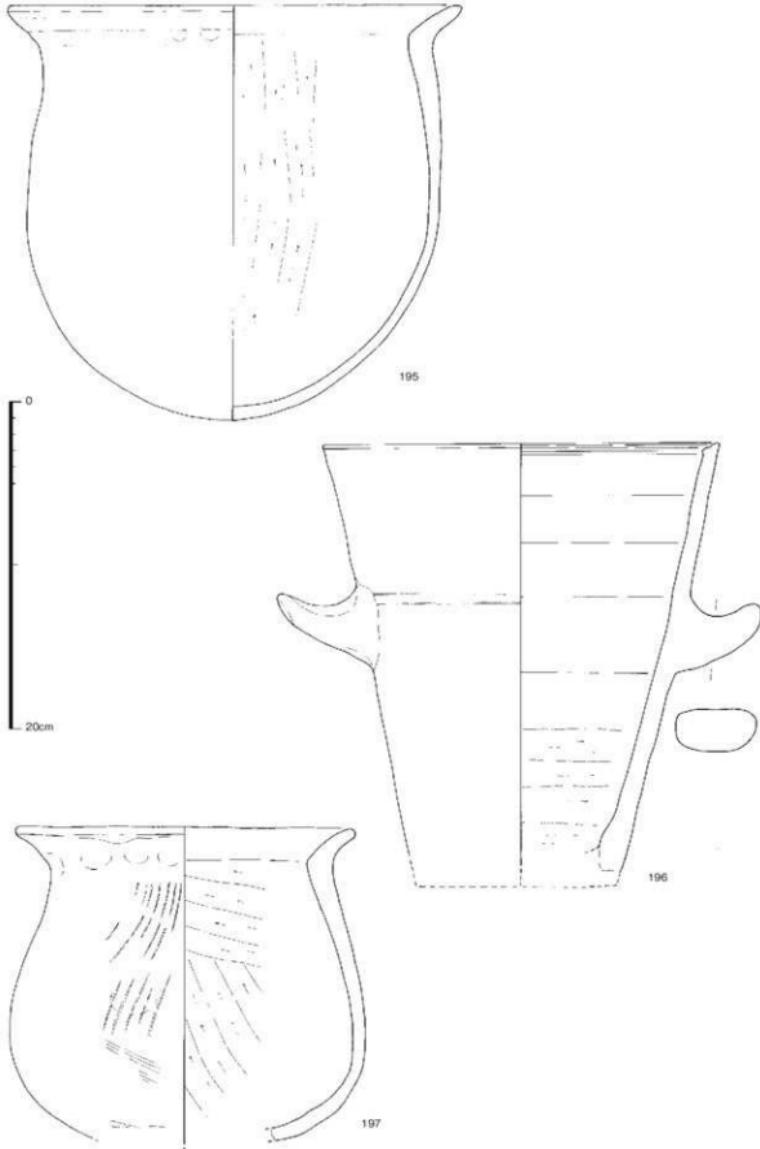
193は壺。頸部は強く外湾して開く。胴部は丸く張る。胴部外面はハケ目、頸部はハケ目後、ナデ消し、頸部内面は横方向のハケ目、体部内面はケズリで調整する。194は鉢。底部はレンズ状を呈し、



第44図 III区出土土器実測図1 (1/3)

体部はやや丸みを持ちながら開く。口縁部は細く整えている。外面はハケ目、内面はケズリで、口縁部付近は横ナデで整える。二次焼成を受けており、剥離した部分が多い。

195～197はBトレーンチ出土。195は甕で、1面上層から出土。口縁部はくの字に屈曲して外反し、胴部はやや張りを持って膨らみ、底部は丸底を呈する。内外面ともに摩滅が進み、さらに外面にはススが付着して外面調整は不明。内面は縦方向のケズリを施す。196は瓶。体部は直線的に開き、胴部



第45図 III区出土土器実測図2 (1/3)

中位に牛角形の把手が付く。口縁部は内傾するように面取りされる。底部は欠損するが、P.187の136のような2孔が開くタイプの瓶とみられる。外面に2条の沈線が廻る。外面は摩滅が進み、調整不明。内面は下部が横方向のケズリ、上部が横ナデで仕上げられる。197は壺。体部は下膨れで、頸部は体部から連続して外湾し、口縁部は太く外反する。頸部外面に成形時の指圧痕が残り、体部外面は板状の工具で調整されている。内面はケズリにより調整される。

### 3) 陶磁器

198と199は、重機での表土除去作業中に、表土の暗褐色耕作土中から2枚が口縁を合わせて重なった状態で出土したものである。出土直後に周辺を精査したがこれらの皿が埋置されていた遺構を確認することはできず、同時期の遺物も確認することができなかった。出土地点の層位からみて、中世後半から近世にかけて埋置されたものとみられ、完形の状態で出土したことから、人為的な埋置、または墳墓の副葬品であったと考えられる。

198は青花染付皿。内面は円形の内区と、その外側の外区に文様帯が分かれ、いずれも菊と牡丹を主題としたモチーフが描かれている。内区の菊花は上から見た形状を描いており、4本の花が描かれている。その花で囲まれた見込みの中央の部分に略三角形の寿石が描かれている。外区の花は5本がほぼ等間隔で描かれ、いずれも横から見た形になっている。内区、外区ともに他に小さな花が描かれているが、これらも菊または牡丹の花とみるとることができよう。

外面は、内面外区と同様に5本の花が描かれており、間に草葉と靈芝雲が描かれている。内面と外面の花の位置関係は一致せず、少しずれているが、外側の花のモチーフが、裏から花を描いたものと見れば、内面内区、外区、外面の花の見え方を1つの器で表現したものとみられ、製作者の粋が見える作品である。16世紀前半の景德鎮の製作と考えられる。

疊付以外の部分には透明の釉が掛かっているが、内面では釉の表面が荒れて白っぽくなり、特に内側縁辺部では文様が不鮮明になっており、残念である。

199は白磁皿。口縁部は外反し、体部は丸みを帯びている。高台は低く細い。底部はやや丸底状を呈する。胎土色は灰白色で、1~2mm大の黒色砂粒を含む。釉は灰白色で厚く施釉され、不透明で、水裂は見られないが、内外面全体に気泡が目立つ。疊付のみ露胎で、一部に砂目の痕跡が付着している。

内面見込み部分に、薄褐色の付着物がこびりついているが、これが何が付着したものかは判らない。同じ付着物は198の内面にも見られる。

## (4) IV区出土の土器

### 1) 須恵器

200~206はA・Bトレーナチ出土の須恵器。200は須恵器壺蓋。摘みは低い宝珠形で、天井部から体部にかけて緩く膨らみ、端部は下方に垂下する。天井部は回転ヘラケズリとみられるが摩耗して判別困難。201は壺身で、高台は低く、やや開き気味。体部は底部から湾曲して直線的に開く。外底部はヘラ切り、高台から内面は回転横ナデ。202は甕口縁部。頸部は体部から湾曲し大きく開き、頸部外面にハケ目状の工具痕が残る。口縁端部は上方にわずかに跳ね上がる。体部は丸く張り、外面は横方向のタタキ目、内面には当て具痕が残る。203は小型壺。頸部は湾曲して外反し、端部直下に突帯を貼り付ける。体部はやや肩が張る球形で、外面は横または斜め方向の平行タタキ、内面には円弧状の当て具痕が残る。204は甕口縁部で、頸部は緩く湾曲して開き、口縁部は上方と下方に張り出し、丸みを持つ。体部は大きく張るものとみられる。頸部から体部にかけて外面に格子目タタキの痕跡が残り、体部にはタタキの上からカキ目を施す。内面には円弧状の当て具痕が残る。



第46図 III区北側表土（黄褐色土）出土陶磁器実測図（1/3）

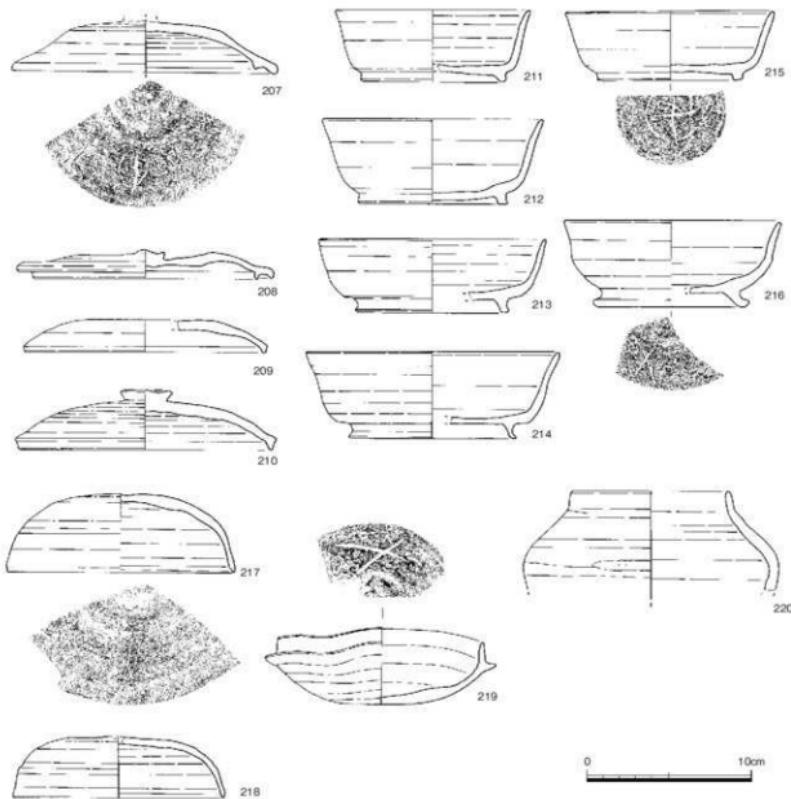


第47図 IV区Aトレンチ・Bトレンチ出土須恵器実測図(1/3)

205は壺蓋で、おそらく摘みがついていたものとみられる。体部は低く膨らみ、端部は太めに垂下する。206も壺蓋で摘みがついていたと見られる。天井部には自然釉が掛かり、調整は不明。口縁端部は側面を面取りし、下方に垂下する。天井部にヘラ記号が書かれる。

207～220はDトレンチ出土須恵器。207～210は壺蓋で207は摘みが欠損し、剥離痕のみ確認できる。天井部から体部にかけて膨らみ、端部は丸く收め、口縁内面側に低い受け部の突帯が貼り付けられる。内面に文字状のヘラ記号が書かれる。208は宝珠形の低い摘みがつき、天井部から体部にかけては低く湾曲して作られる。受け部の立ち上がりは低く、直立する。209も摘みを欠損する。体部は低く丸く膨らみ、端部は側面を面取りしてわずかに下方に垂下する。210は宝珠形の低い摘みが付き、天井部から体部にかけて低く丸く膨らむ。端部は側面を面取りして下方に垂下する。

211～216は壺身で、211は高台は低く、外側に開く。体部は底部から湾曲し開き、口縁部はわずかに外反する。212は高台が低く、わずかに外側に開く。体部は底部から湾曲して開き、全体にわずかに外反する。213は全体に器高が低くつくられる。高台は外側に開く。体部は緩く湾曲して開く。外面に傷がつくなど、粗雑なつくりで、内外面とも回転横ナデ。214は高台が外側に湾曲して開き、体部は全体に外湾しながら開く。215は低い高台が付き、疊付は外傾する。体部は底部から湾曲して直線的に開く。外底部は回転ヘラ切りで、十字のヘラ記号が書かれる。216は、高台が大きく開き、



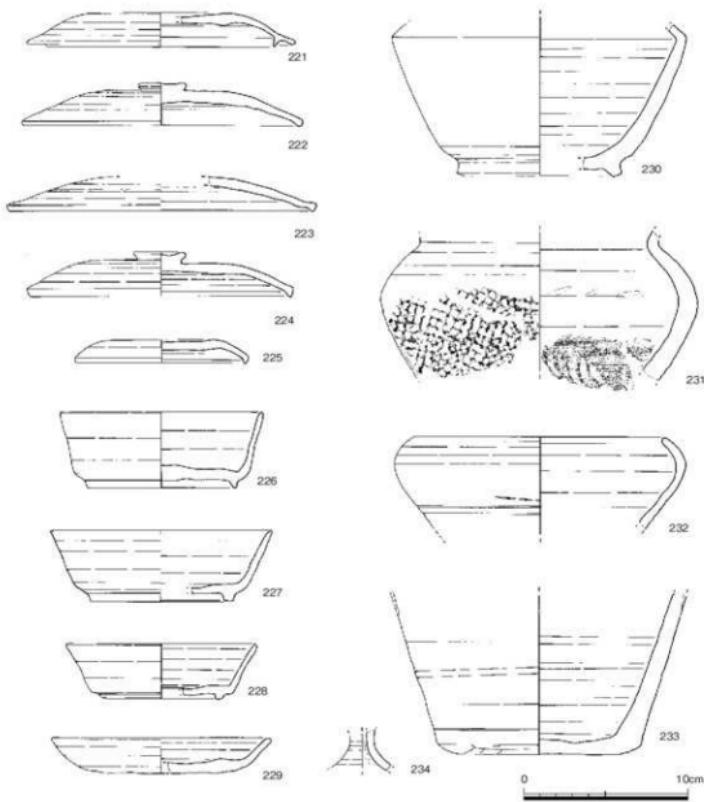
第48図 IV区Dトレンチ出土須恵器実測図 (1/3)

高台端部を丸める。体部は丸く膨らみ、外湾しながら開く。内面にX字のヘラ記号が書かれる。

217・218は古墳時代の壺蓋。217は、天井部から体部にかけて丸く膨らむ。体部中位に沈線が1条廻る。内面に平行線のヘラ記号が書かれる。218は全体に扁平な形で天井部は平坦を呈する。体部は湾曲し、側面に太めの沈線が引かれる。端部は細く、内側に浅い段が付く。天井は回転横ナデ、体部と内面は回転横ナデ。219は壺身で全体に歪む。受け部の立ち上がりは長く直立し、体部はやや浅めに作られる。内面にX字のヘラ記号が書かれる。

220は短頸壺の上部破片。頸部はわずかに内傾し、体部は肩が張る。内外面とも回転横ナデで、体部中位にケズリ状の工具痕が残る。

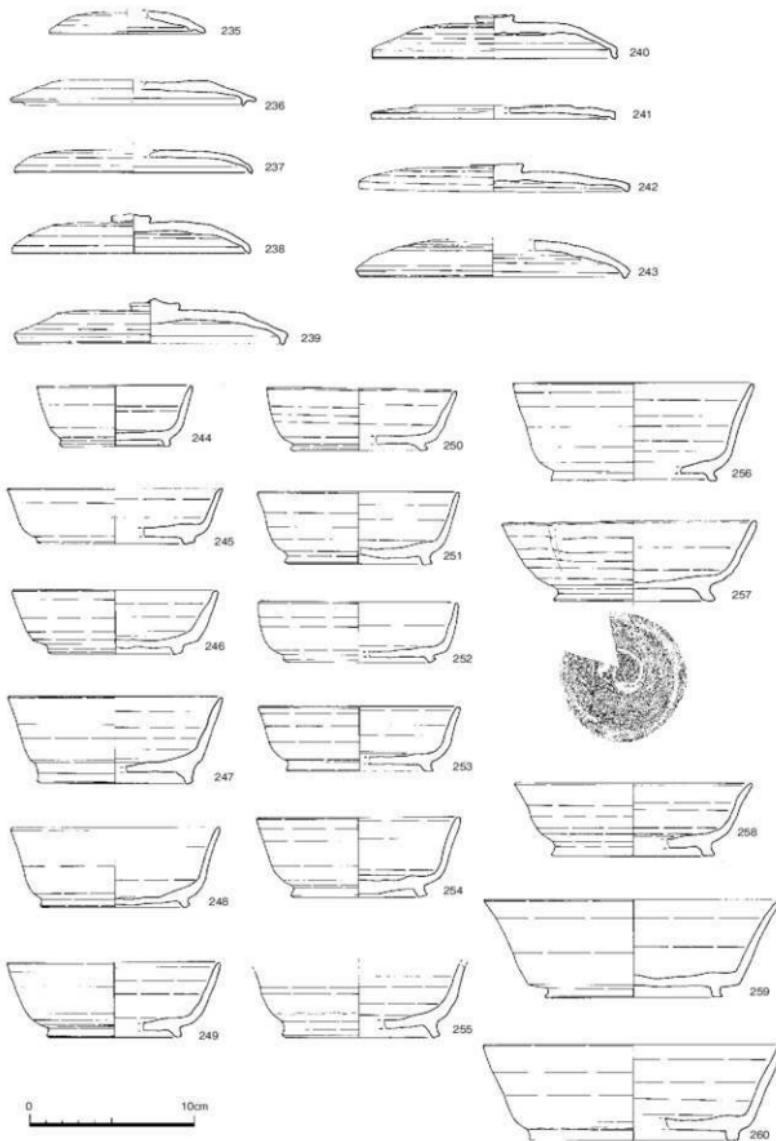
221～233は第1面下包含層から出土した須恵器。221は摘みの痕跡が確認でき、天井部から体部にかけて湾曲して膨らみ、端部は丸く仕上げる。受け部の立ち上がりは低く、わずかに内傾する。



第49図 IV区1面下包含層出土須恵器実測図(1/3)

222は低いボタン形の摘みが付き、体部は天井部から屈曲して開き、端部は面取りされる。223は全体に低く、端部は面取りされる。224は大きめのボタン状の摘みが付く。天井部は平坦で、体部は天井部から屈曲して大きく開き、端部は面取りされ、口縁下部がわずかに肥厚する。内面見込みは幅の狭い工具による不定方向のナデを施す。225は小型の蓋で、摘みはなく、体部は低く丸く膨らみ、端部は下方に重下する。

226～228は坏身、226は低い高台が付き、疊付は面取りされていない。体部は底部から屈曲して開く。外底部のヘラケズリは粗雑である。227は幅広のしっかりした高台が貼り付け、体部は底部から湾曲して大きく直線的に開く。228は低い高台が付き、体部は底部から屈曲して外湾気味に大きく開く。外底部は丁寧にナデて仕上げられ、高台から体部、内面にかけて回転横ナデで、内面見込みは不定方向のナデ。229は皿で、底部は平底で、体部は底部からゆるく湾曲して開く。底部はナデて仕上げる。



第50図 IV区2面下(Dトレンチ北)出土須恵器実測図1 (1/3)

230は長頸壺の体部。肩部は明瞭に屈曲し、大きく外側に開く低い高台が付く。体部は内外面とも回転横ナデで整形され、やや雑な作りである。231は壺の胴部破片。胴が張り、やや厚めの器壁である。外面は格子目タタキ、内面には当て具痕が付く。胎土は灰白色で、焼成は堅緻である。232は鉢の口縁とみられ、袋状を呈し、大きく内湾する。口縁端部は面取りされ、体部外面に沈線が螺旋状に施文される。内外面ともに回転横ナデ。233は鉢。底部は平底で、体部は直線的に開く。体部は内外面とも回転横ナデで、底面は手持ちケズリ。

234は高杯の脚部。小型の高杯で、脚部は大きく湾曲して開く。外面は回転横ナデ、内面はヘラケズリ。

235～282は第2面下包含層のうち、Dトレンチの北側で出土した須恵器。235～243は壺蓋。235は小型で、摘みの有無は不明。体部は低く丸く膨らみ、口縁端部は丸める。内側に受け部の立ち上がりが突帶状に貼り付く。236は摘みを欠く。天井部は平坦で、体部は天井部から屈曲して開き、受け部の立ち上がりは低い。237も摘みを欠き、体部は平坦で、端部は湾曲し、丸く仕上げる。238は低い宝珠形摘みが付き、天井部は平坦で、体部は低く湾曲し、端部はやや垂下する。外側の大部分に墨が付着し、内面にも墨痕が確認できる。239は宝珠形の摘みが付き、天井部は平坦で、体部は屈曲して直線的に開き、端部は垂下する。240は低いボタン形の摘みが付き、天井部はやや丸く、体部にかけて丸みを持って膨らむ。端部は下方に垂下する。内面に部分的に墨痕らしき黒変が認められる。241は中央部を欠く。全体に平坦で、端部は側面を面取りし、下方にわずかに垂下する。中心部付近は回転ヘラ切り後、ハケ目状の工具で調整する。242は低いボタン形の摘みが付く。全体に平坦で、天井部と体部の境界がはっきりしない。243は中央部を欠く。天井部から体部にかけて低く丸く膨らみ、端部は斜めに面取りして下方にわずかに垂下する。天井部にカキ目を施す。

244～260は壺身。244は低くハの字に広がる高台が付く。体部は底部から湾曲して直線的に開く。245は全体に浅い作りで、高台は低く幅広で直立し、体部は直線的に開く。外面はひび割れや器壁の荒れが目立つ。246は低い高台が付き、体部は底部から屈曲して開く。全体に器壁が厚い。247はやや高めの高台が付き、体部は外湾気味に開く。外底部はヘラ切り後未調整で粗い。248は薄手の作りで、高台は低く外側に開き、体部は外反して開く。全体に摩滅が進む。249は体部がやや丸みをもち、高台は低く外側に開く。250は高台が外側に大きく開き、体部は底部から湾曲して開く。全体に歪んでいる。251は高台が外側に短く開き、体部は底部から湾曲して直線的に開く。252は体部が内湾して丸みを帯びる。高台は短く外側に開き、疊付きも外傾する。253は高台が外側にやや開き、体部は底部から湾曲して外反気味に開く。254は高台がやや太く、外側に開く。体部は底部から緩く湾曲して開く。255は胎土が赤褐色を呈し、体部が丸みを持ち、口縁部を欠く。高台は長く、外側に大きく開く。256は高台が外側に短く開き、体部は底部から湾曲して外湾気味に開く。257は壠形に近く、体部は外側に大きく開き、高台は外側に開く。外底部に平行線のヘラ記号が付く。外底部や体部に自然釉がかかっており、焼成時には伏せられていたとみられる。258は高台が高く開き、体部は底部から大きく湾曲して外反する。259は低く直立する高台が付き、体部は底部から屈曲して外反して開く。内面は黒変し、墨が付着している。260は低く太い高台が付き、体部は底部から屈曲して直線的に開く。

261～268は古墳時代の壺蓋、壺身。261はやや平坦な天井部から体部が屈曲して直線的に開く。天井中央部は回転ヘラケズリ、他は回転横ナデで、内面見込みに指圧痕が残る。天井部外面に長い直線状のヘラ記号が付く。天井部外面の大部分に自然釉が厚く掛かり、外面のその他の部分も自然釉で黒色を帯びる。262はドーム形を呈し、天井部にヘラ記号が書かれる。263は天井部が1段厚くなる

もので、外側面にヘラ記号が書かれる。天井部外面は回転ヘラ切り、その他の部分は回転横ナデ。264はやや扁平で、天井部は平坦をなし、体部は丸みをもつ。天井部は回転ヘラケズリで、やや雑な仕上げである。側面から内面は回転横ナデで、内面見込みに指圧による凹凸が残る。

265は受け部の立ち上がりが高く、やや内傾する。体部は浅くつくられる。内面縁辺に平行線のヘラ記号が書かれる。266は受け部が直立し、体部はやや浅めに作られる。外面には自然釉が掛かり、円弧文のヘラ記号が付けられる。267は受け部が短く外傾し、体部は丸みを帯びる。外面には2本の直線的なヘラ記号が付く。268は立ち上がりが外湾して内傾し、体部はやや丸みを持ち深め。269はほぼ平底で、体部は外反しながら開く。底部は手持ちヘラケズリで仕上げている。270は平底の底部に、やや外反気味の体部が付く。271は体部が底部から屈曲して外側に直線的に大きく聞く。

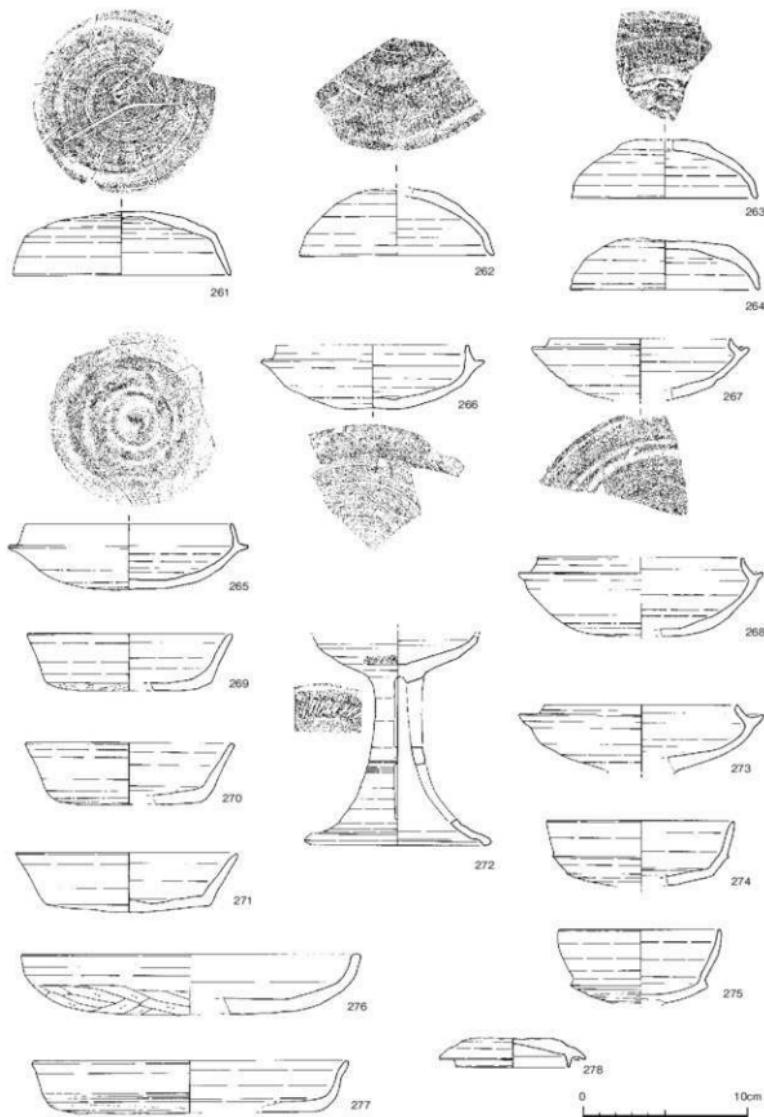
272は高杯脚部。杯部は蓋受け部のない器形とみられる。杯底部には木口による平行線文が描かれる。脚部は長く立ち上がってラッパ状に広がり、端部は屈曲する。上下2段の長方形透かしが3ヶ所開けられている。脚部は回転横ナデ、273は高杯杯部。立ち上がりは低く内傾し、体部は比較的浅めに作る。杯部底部は回転ヘラケズリ、体部から内面は回転横ナデ。外面に自然釉が掛かる。274は高杯杯部で、蓋受け部はない。体部は底部から屈曲して立ち上がり、体部中位に突帯状の段が付く。内外面とも回転横ナデ。275は底部と体部の境界に段が付く。底部はカキ目を施し、体部外面から内面は回転横ナデ、内面見込みは不定方向のナデ。

276は皿で、底部は平底で、体部は底部から緩く湾曲して立ち上がる。底部は静止ヘラケズリ、体部～内面は回転横ナデ。277は平底の底部で、体部は底部から強く湾曲して外反気味に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリ、体部から内面は回転横ナデ。外面に細い線状の黒斑が付着し、焼成時の薬の痕跡とみられる。278は小型の蓋。体部は低く、受け部は直に立ち上がる。内面にヘラ記号の痕跡がわずかに残る。

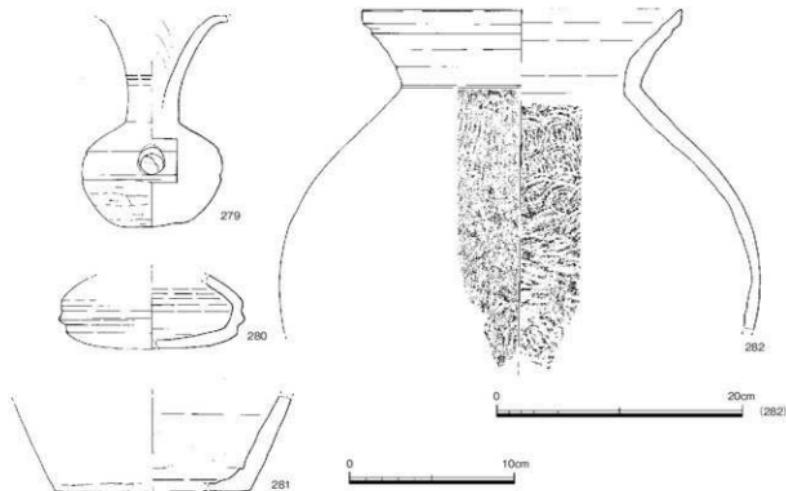
279は甕。口縁部を欠くが、おそらく外側に大きく聞く器形だったとみられる。頸部はラッパ状に開き、2条の沈線が廻る。体部は球形で胴部と肩がやや張る。肩部と胴部中位に沈線が廻る。胴部下部から底部は横方向ヘラケズリで、他は回転横ナデ。孔の内側付近に、外側から孔を開けた際の粘土返りが付着したままになっている。280は水滴形の小型甕または甕とみられる。体部側面に段がつく。内外面とも回転横ナデ。281は鉢の底部。平底で、体部は底部から屈曲して直線的に聞く。外面はナデ、内面は回転横ナデ。

282は甕。頸部は直線的に開き、端部は外側面を面取りして、口縁直下に段を付ける。体部はなで肩で、外面は格子目タタキ後ハケ目、内面には同心円文の當て具痕跡が残る。胎土は軟質で、淡黄色を呈する。

283～358は第2面の下層から出土した須恵器。283～294は杯蓋のうち受け部をもつもの。283は小型で、天井部は平坦面を呈する。体部は天井部から屈曲して開き、受け部は低く内傾する。天井部は不定方向のヘラケズリで、円弧文のヘラ記号が付く。胎土は軟質で灰白色を呈する。284も小型で、天井部は平坦で体部は天井から屈曲して聞く。受け部の立ち上がりはごく低く、内傾する。天井部はヘラケズリで粗い。焼成は堅緻。285は宝珠形の摘みが付き、天井部から体部にかけて緩く湾曲する。受け部の立ち上がりはごく小さく、突帯状を呈する。内面にX字のヘラ記号が付く。286は低い宝珠形の摘みが付き、天井部から体部にかけて緩く湾曲し、端部で外側に屈曲して受け部を作る。受け部の立ち上がりはごく低い。287は摘み部を欠く。天井部から体部にかけて緩く湾曲し、端部で外側に緩く外反する。受け部は太く低い突帯状を呈する。288も天井部から体部にかけて緩く湾曲する。端部の外反は弱い。受け部の立ち上がりは低い。289は宝珠形の摘みが付く。天井部は平坦で、



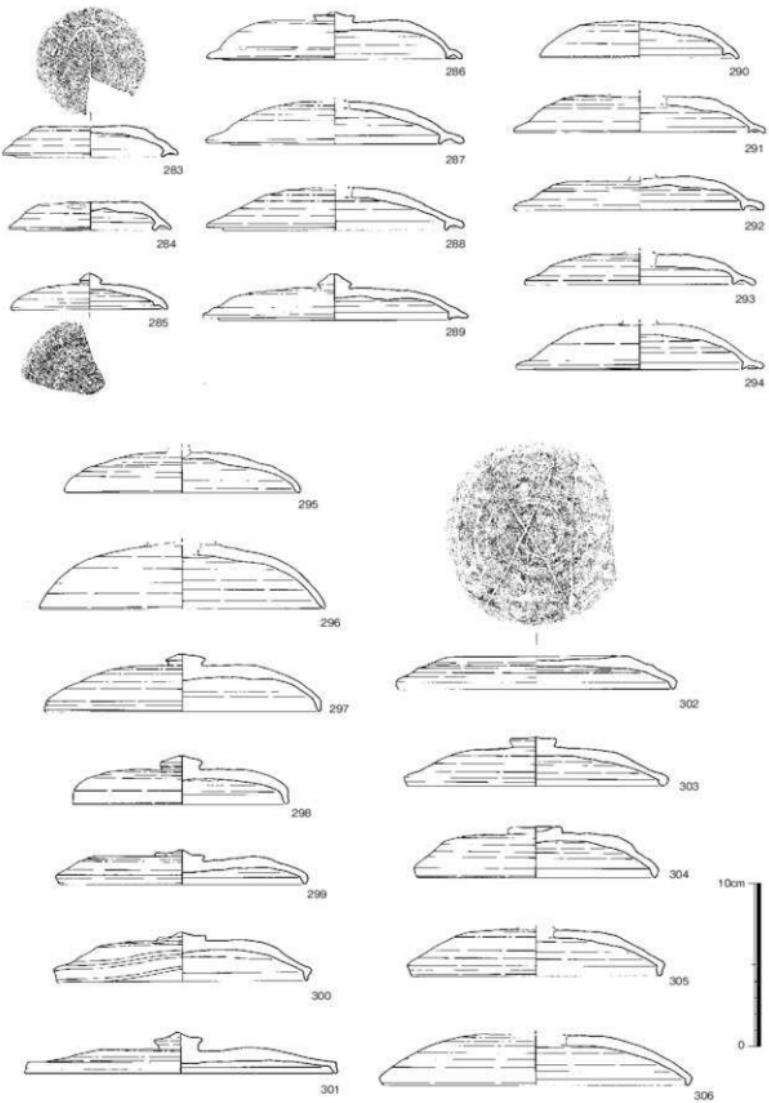
第51図 IV区2面下(Dトレンチ北)出土須恵器実測図2 (1/3)



第52図 IV区2面下(Dトレンチ北)出土須恵器実測図3 (1/3・1/4)

体部は天井部から緩く湾曲して開く。受け部の立ち上がりは太く低い突帶状になる。290は摘みがないうもので、天井から体部にかけて緩く外反する。受け部は低い突帶状を呈する。291は摘み部を欠く。天井部は平坦で、体部は天井から屈曲して緩く湾曲し、端部は外反して受け部を作る。受け部の立ち上がりは小さく低い。292は摘みが剥落し、痕跡のみ残る。天井部は平坦でやや凹み、体部は天井部から屈曲して湾曲し、端部は外反して受け部を作る。受け部の立ち上がりは低い突帶状になる。293は摘みの痕跡がわずかに残る。天井から胴部にかけて緩く湾曲し、端部は外反して受け部となる。受け部の立ち上がりは突帶状になる。294は摘みが脱落し、痕跡だけが残る。天井部から体部にかけて丸く湾曲し、端部が外反して受け部を作る。受け部の立ち上がりは低い。胎土は軟質で、灰黄色を呈する。

295～306は、受け部を持たない壺蓋。296は摘みの痕跡が残る。体部は全体に緩く湾曲し、端部は丸く收める。296は全体に半球形を呈し、やや幅広の摘みの痕跡が残っている。端部は丸く仕上げる。297は低い宝珠形の摘みが付く。体部は天井部が平坦で、体部は緩く湾曲し、端部は直立する。298は、大きめの低い宝珠形摘みが付き、体部は平坦で、端部は屈曲して直立する。胎土には粗い白色砂粒を多く含み、粗い。299は低く大きな宝珠形摘みがつく。天井は平坦で、体部は天井部から屈曲して開き、端部は短く屈曲して垂下する。内面に黒変がみられ、墨痕の可能性がある。300は全体に歪みが大きい。天井部は平坦で、体部は天井部から緩く湾曲して開き、端部は短く屈曲して垂下し、側面を面取りする。301は大きめの宝珠形摘みが付く。全体に低い作りで、天井部は平坦で、体部は天井部からわずかに屈曲して開き、端部は強く屈曲して垂下し、側面を面取りする。302は摘みがないもので、天井部は平坦でわずかに凹む。体部は天井部から屈曲して開き、端部は垂下する。天井部に大きなX字のヘラ記号を記入する。303は板状の宝珠形摘みが付き、天井部から体部にかけて緩く



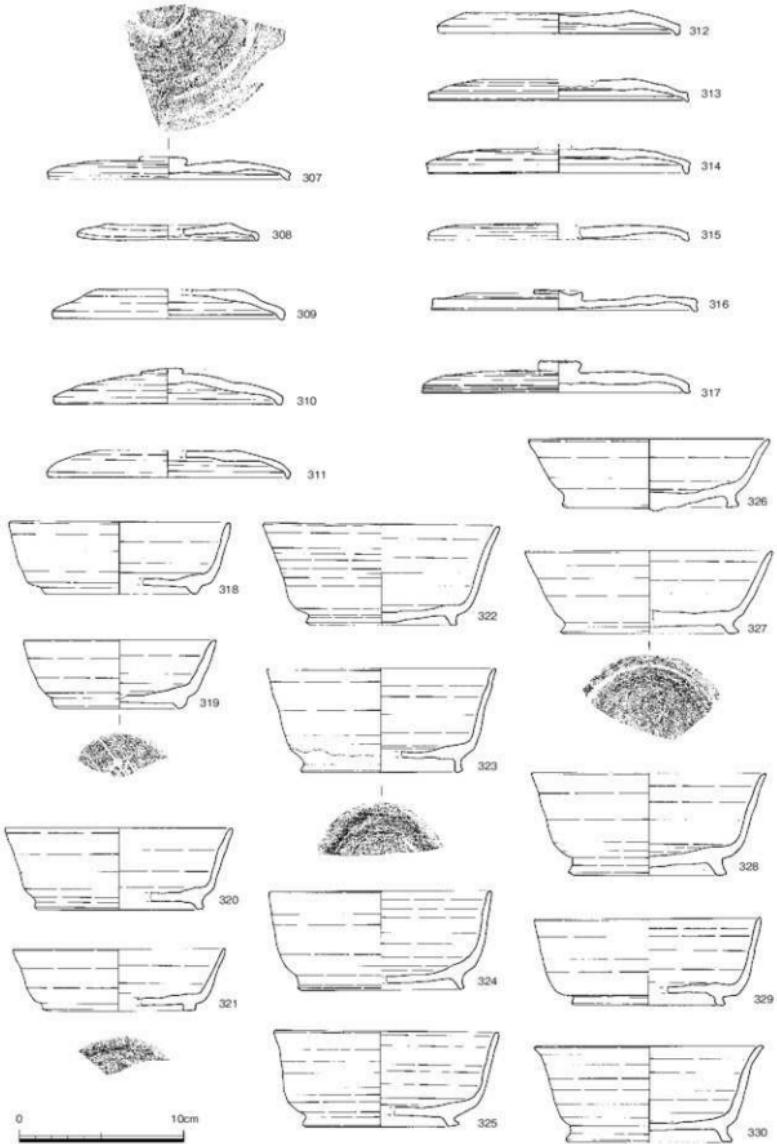
第53図 IV区2面下出土須恵器実測図1 (1/3)

湾曲し、端部はわずかに外反して垂下する。胎土は軟質で、灰白色を呈する。304はボタン形の摘みが貼り付けられ、天井は平坦で、体部は天井から湾曲して外反気味に開き、端部は緩く垂下する。胎土はやや軟質で、灰白色を呈する。天井部は回転ヘラケズリ、他は回転横ナデで、内面見込みは不定方向のナデ。305は摘み部の痕跡が残る。天井部は平坦で、体部は天井部から屈曲し、端部は長く垂下し側面を面取りする。天井部は回転ヘラケズリ、他は回転横ナデで、内面見込みは不定方向のナデ。306は天井部から体部にかけて緩く湾曲し、端部は短く垂下する。

307からは平坦な器形の杯蓋。307は薄いボタン形の摘みが貼り付く。天井部は平坦で、体部はわずかに屈曲して開き、端部は軽く垂下し、側面を面取りする。308は中央部を欠き、全体に歪む。天井部は平坦で、体部は天井部から屈曲して開き、端部は短く垂下する。309は中央部を欠き、摘みの有無は不明。天井部は平坦で、体部は外反気味に開き、端部はわずかに垂下し、側面を面取りする。310は低いボタン形の摘みで、天井から体部にかけて緩く湾曲し、端部はわずかに垂下し、側面を面取りする。311は摘み部を欠く。天井部は平坦で、体部は天井部から屈曲して緩く湾曲し、端部は短く内湾する。外面全体に自然釉が掛かる。312は摘みが脱落し、接合痕のみ確認できる。天井部は平坦でやや凹み、体部は天井部から屈曲して開き、端部は短く垂下し側面を面取りする。313は摘み付近が削られたように欠損している。天井部は平坦で、体部は屈曲して開き、端部は垂下して側面を面取りする。314は摘みが剥落し、痕跡のみ遺存する。天井部から体部にかけてごく緩く湾曲し、端部は短く屈曲して垂下する。315は全体に板状で、天井部と体部の境界が不明瞭である。端部側面を面取りしている。外面中央部に回転横ナデ痕を確認でき、摘みがあったと考えられる。316はボタン形の摘みが付く。全体に円盤状を呈し、端部は短く屈曲する。317はやや高めのボタン形摘みが付く。天井部は平坦で、端部は短く垂下し、外面を面取りする。

318～330は高台が付く坏身。318は低い高台が付き、豊付は面取りしていない。体部は底部から屈曲して開く。319は低く太い高台が開き気味に付けられる。体部は内湾気味に開き、器壁が厚い。胎土は灰白色を呈する。外底部は回転ヘラ切り後、カキ目状の調整痕が残る。320は高台が開き気味に付けられ、体部は底部から屈曲して外反気味に立ち上がる。321は太く短い高台が直立し、体部は底部から屈曲して直線的に開く。外底部にヘラ記号らしき直線文が残る。322は低く開き気味の高台が付き、体部は底部から湾曲して外反気味に開く。底部には自然釉が掛かる。323は直立する細い高台が付けられ、付着時の粘土接合痕跡が底部付近に明瞭に残る。体部は底部から屈曲して開き、底部、体部とともに器壁が薄手である。外底部には平行線の浅いヘラ記号が書かれる。324は底部から体部にかけて緩く湾曲し、やや開き気味の薄手の高台が貼り付く。325は高台が外側に開き、体部は底部から湾曲してわずかに外反して開く。内面見込みに板状工具による不定方向のナデが残る。326は底部が分厚く、高台は外側に開き気味に付けられる。体部は外側に大きく開く。外底部は回転切り離し後未調整。327は高台が外側に大きく開く。体部は底部から湾曲して直線的に開く。外底部には回転ヘラケズリ後、爪痕のような小さな傷が付けられる。328は高台が外側に開き、体部は底部から湾曲して開く。329は短く外反気味の高台が付く。体部は底部から湾曲して立ち上がる。外面は底部から口縁部まで全体に自然釉が掛かる。330は高台が大きく開き、体部は底部から湾曲して開き、口縁部は外反する。

331～335は高台のない坏・皿。331は底部はヘラ切りで平底とし、体部は外湾して開く。体部から内面は回転横ナデ。332は浅い皿状を呈し、底部は平底で、体部は底部から湾曲して外湾気味に開く。底部は自然釉が掛かり、調整不明。体部から内面にかけては回転横ナデ。333は底部が平底で、体部は底部から屈曲して外湾して開く。底面は回転ヘラ切り後、ハケ目を施す。334は小皿で、底部



第54図 IV区2面下出土須恵器実測図2 (1/3)

には板状圧痕が残る。体部は緩く湾曲して開く。焼成は軟質で灰白色を呈する。335は大型の皿。底部は平底で、体部は大きく開く。内外面ともに回転横ナデ。

336は壺の底部。胴が球形に張り、外側に開く高台が付く。337も壺底部とみられ、高台は大きく開く。外面は回転横ナデで、粗く調整される。外底部の回転ヘラ切りも粗い。338は壺底部とみられる破片で、焼成はやや軟質で胎土は灰黄色を呈する。高台は外溝しながら開き、胴部の胎土とは異なった浅黄橙色の色調を呈する。内面見込みの中心部に指圧痕が多く見られる。339は底部破片で、鉢、壺、瓶などが想定される。底部は厚く、体部は底部から屈曲して球形に開く。340は何かの把手。全体に台形を呈し、紐を通す6mm径の孔が残る。焼成は堅く、胎土は灰黄褐色を呈する。

341～346は古墳時代の壺。341は扁平な半球形を呈し、側面に沈線が1条廻る。口縁部は体部よりも一段薄く、端部は面取りされる。天井部に短線状のヘラ記号が残る。342は全体にドーム形を呈し、口縁端部は内側に内傾する面を取る。内面に直線状のヘラ記号が残る。343は平坦な天井部に、直立する体部が付く。上面にはV字のヘラ記号が残る。344も天井部は平坦で、体部は湾曲して口縁部は直立する。内面にごく浅いヘラ記号のような傷がある。345はやや扁平な半球形を呈し、小型で、壺身の可能性もある。346は壺身で、受け部の立ち上がりは直線的に内傾する。体部はやや浅めである。底部外面に大きな鳥足状のヘラ記号が残る。内面見込み中心部に指圧痕が残る。

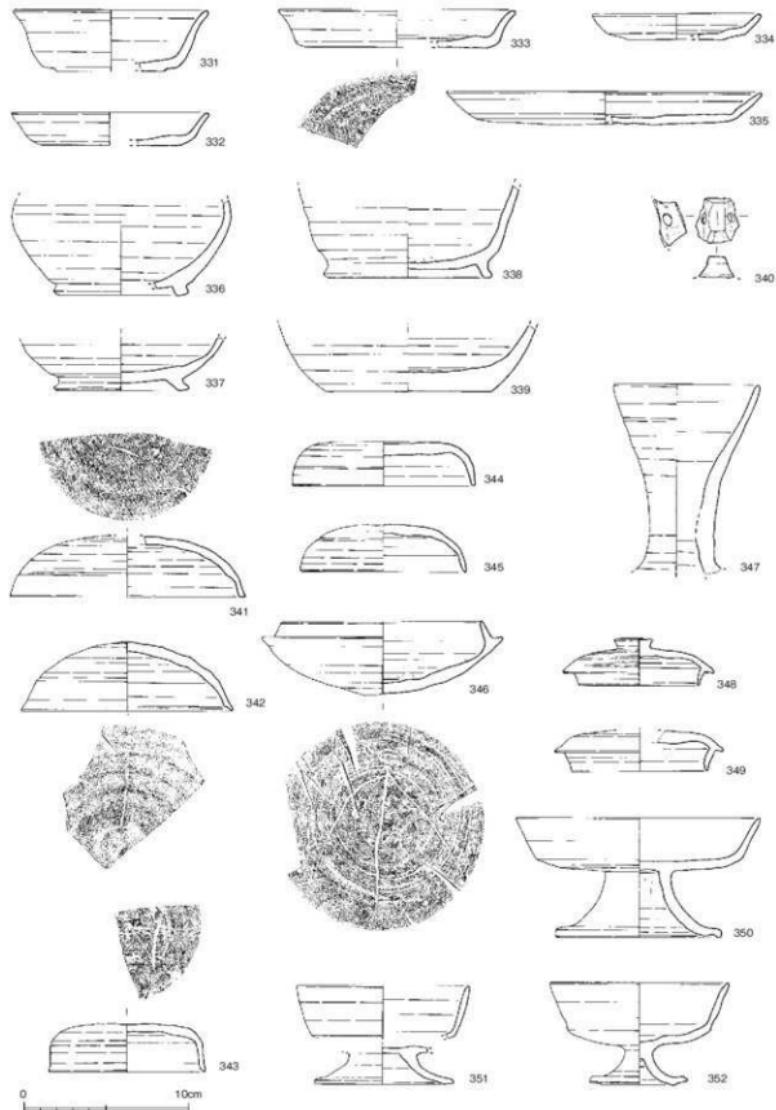
347は長頸壺の頸部。頸部はラッパ上に開く。内外面とも回転横ナデで、内面下部に横方向のケズリ痕が残る。

348は壺の蓋とみられる。摘みは平たく、体部は低く湾曲する。受け部の立ち上がりは長く直立する。外面にはカキ目を施す。349も蓋で、受け部の立ち上がりは長く、わずかに内傾する。胎土は鈍い褐色を呈し、赤焼け須恵器の様相を示す。

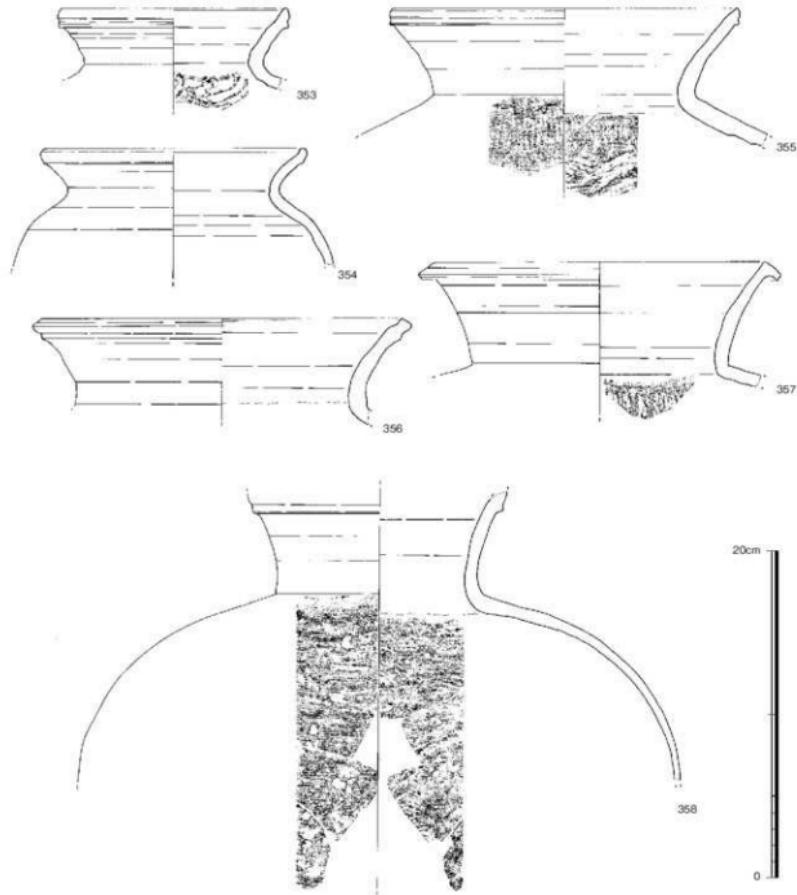
350は高壺で、壺部が浅く、壺体部は大きく開く。脚部は大きくハの字に開き、端部はくの字に屈曲して端部は垂下する。焼成が軟質で、全体に摩滅が著しい。351は壺部と脚部は直接接合しない。壺部は体部が直線的に開く。脚部は湾曲して大きく開く。内外面とも回転横ナデ。352は壺部に比して脚部が小さい。壺部は体部が底部から屈曲して開き、体部と底部の境界に段が付く。脚部は大きく開き、端部はS字に屈曲する。内外面とも回転横ナデ。

353～358は壺。353は口縁部で、口縁端部は丸めて、直下に小さな突帯を廻す。体部外面は継方向のタタキ痕がわずかに残り、内面に当て具痕跡がみられる。354は胎土が明褐色を呈する。口縁端部は内溝し、外面直下に段がつく。体部は球形を呈するとみられる。内外面ともに回転横ナデ調整。355は頸部が直線的に開き、端部は丸め、外面直下に細い突帯を廻す。体部は外面が継方向タタキ後横ナデ、内面には当て具痕が残る。356は頸部が外溝して開き、口縁端部を面取りして口縁直下の外面を横ナデで凹ませて段を作る。内外面とも回転横ナデ。357は頸部が体部から屈曲してやや外溝して開き、端部を外側に折り返す。体部内面に当て具痕が残るが、外面は自然釉が掛かり、調整は不明。継方向のタタキ目が微かに残る。358は頸部が外溝気味に開き、体部は大きく張る。口縁端部は欠くが、おそらく端部を丸めて外側直下に小さな突帯を廻る形状であろう。体部外面は横方向のハケ目、内面には当て具痕が残る。焼成は軟質で、胎土は明オリーブ灰色を呈する。

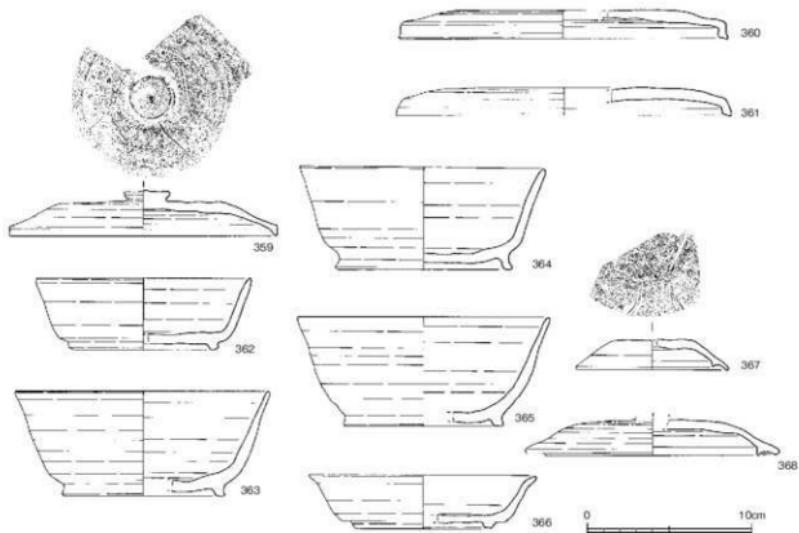
359～366は第2面下の包含層のうち、灰褐色土から出土した須恵器。359～361は壺蓋。359は低く大きな宝珠形の摘みがつく。天井部は平坦で、体部は天井部から屈曲して開き、端部は垂下し、外側面を面取りする。天井部に直線状のヘラ記号が付く。360は全体に平坦な形状で、体部は天井部からわずかに屈曲して大きく開き、端部は長く垂下して外側面と下面を面取りする。361は天井部から体部にかけて緩く湾曲し、端部は垂下し下面を面取りする。



第55図 IV区2面下出土須恵器実測図3 (1/3)



第56図 IV区2面下出土須恵器実測図4(1/3)



第57図 IV区2面下出土須恵器実測図5 (1/3)

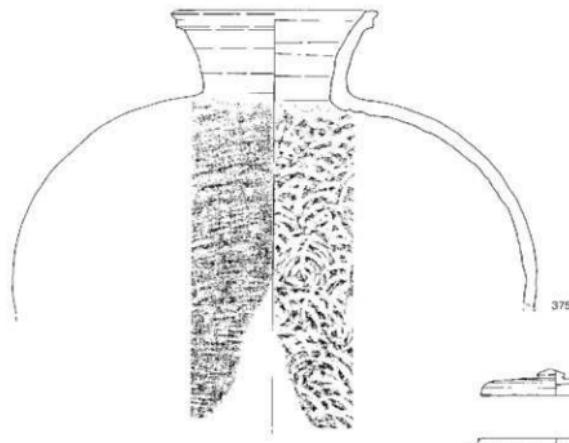
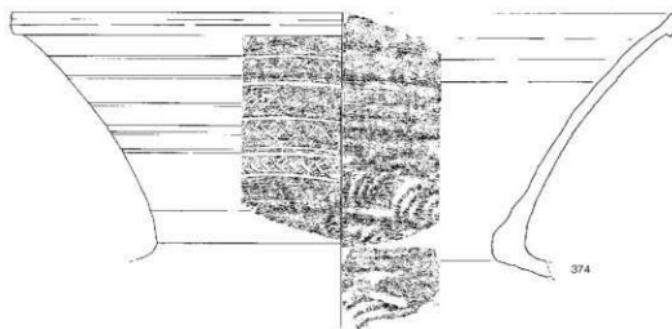
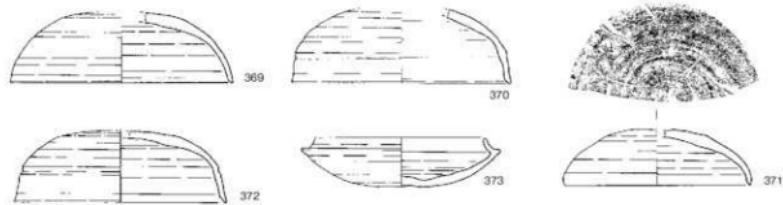
362～366は坏身。362は低く直立する高台を貼り付け、体部は底部から湾曲して立ち上がる。363は底部から体部にかけてゆるく湾曲して開く。高台は短く、わずかに外側に開く。364は高台が外側に開き、体部は底部から屈曲して緩く開く。外底部は回転ヘラ切り、高台から体部、内面は回転横ナデで、内面見込みは不定方向のナデ。365は底部と体部が連続して湾曲しながら開き、高台は短く外に開く。366は全体に浅く、体部は底部から屈曲して大きく外側に開き、口縁部は短く外反する。

367～368は坏蓋。367は天井部が平坦で、体部は天井部から屈曲して直線的に開く。受け部の立ち上がりは低い突帶状を呈する。天井部に平行線のヘラ記号が書かれる。368は摘み部分を欠くが、天井部は平坦で、体部は天井部から屈曲して開き、端部は外反して受け部をつくる。受け部の立ち上がりは突帶状を呈する。

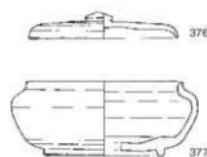
369～377は第3面遺構面の下層から出土した須恵器。369～372は坏蓋。369はドーム形を呈し、体部側面に浅い凹線が廻る。370は体部側面に沈線が廻り、口縁端部は内側に段が付く。371は天井部から体部が直線的に開き、端部は内湾して直立する。天井部外面に円弧文のヘラ記号が書かれる。372は扁平な半球形で、体部側面に明瞭な段が付く。口縁端部は直立し、内面に浅い段が付く。

373は坏身で、立ち上がりが内傾し、体部は浅い。底部は粗雑な回転ヘラケズリ、他は回転横ナデ。

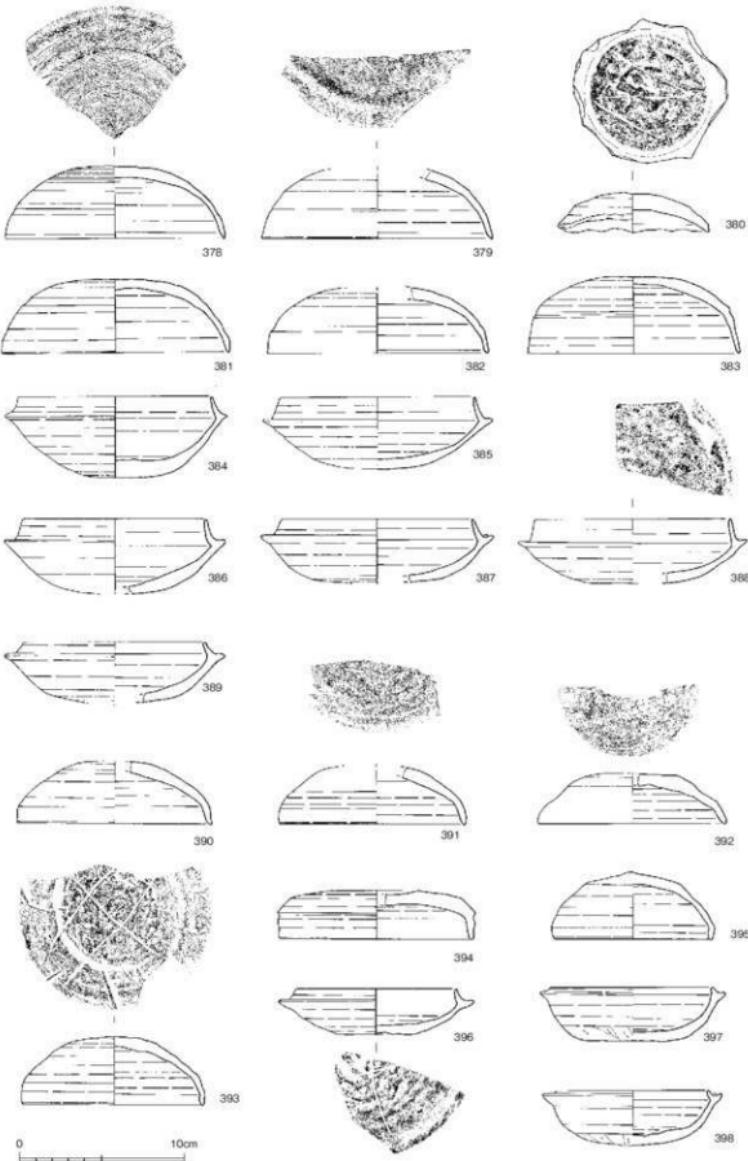
374は甕口縁部。頭部は緩く外湾しながら開き、6条の沈線が廻し、沈線間に4段の格子文・斜線文を施す。口縁端部は上下に張り出して外側面を面取りする。頭部内面下部にタタキ当て具痕がみられる。外面に自然軸が一部残る。375は横瓶。頭部は細く外湾しながら開き、口縁部は上面を面取りし、口縁直下に突帶を付ける。体部は大きく張り、外面にはタタキ後ハケ目を施し、内面には同心円文の當て具痕跡が残る。



0 20cm



第58図 IV区3面下出土須恵器実測図 (1/3)



第59図 IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図1 (1/3)

376と377は対になる可能性がある有蓋壺。376は蓋で、宝珠形の摘みが付き、天井部が平たく、端部は屈曲して垂下する。377は頸部が体部から湾曲して短く立ち上がり、体部は肩が張り扁平である。高台は短く外側に開く。外底部に自然釉が掛かる。

378～454は第3面下層の堆積層のうち、黒色粘質土から出土した須恵器。378は杯蓋。378はドーム形を呈し、天井部にカキ目を施す。頂部にX字のヘラ記号が付く。379は頂部に短線と直線の平行線のヘラ記号が付く。体部側面に浅い横線が1条廻る。380は坏蓋の周囲を打ち欠き、天井部のみにしたもの。天井部は粗いヘラ切り後、Z字のヘラ記号が書かれる。381は天井部がやや平坦で、天井部と体部の境界がやや凹む。382は扁平な球形で、体部側面に段が付く。口縁端部は内側を面取りしている。外側に自然釉が若干掛かる。383は天井部と体部の境界に凹線が入り、体部は直立する。

384～389は坏身。384は立ち上がりが内傾し、体部はやや深めである。385は立ち上がりが長く内傾し、体部は浅めである。386は立ち上がりが高く、わずかに内傾する。体部は浅めである。外面底部全体に自然釉が厚く掛かる。387は立ち上がりが直線的に内傾し、体部は浅めに作る。388は受け部の立ち上がりが高く直立し、体部は浅く作る。内面に鳥足形のヘラ記号が書かれる。389は立ち上がりが短く内傾する。体部は浅く作る。

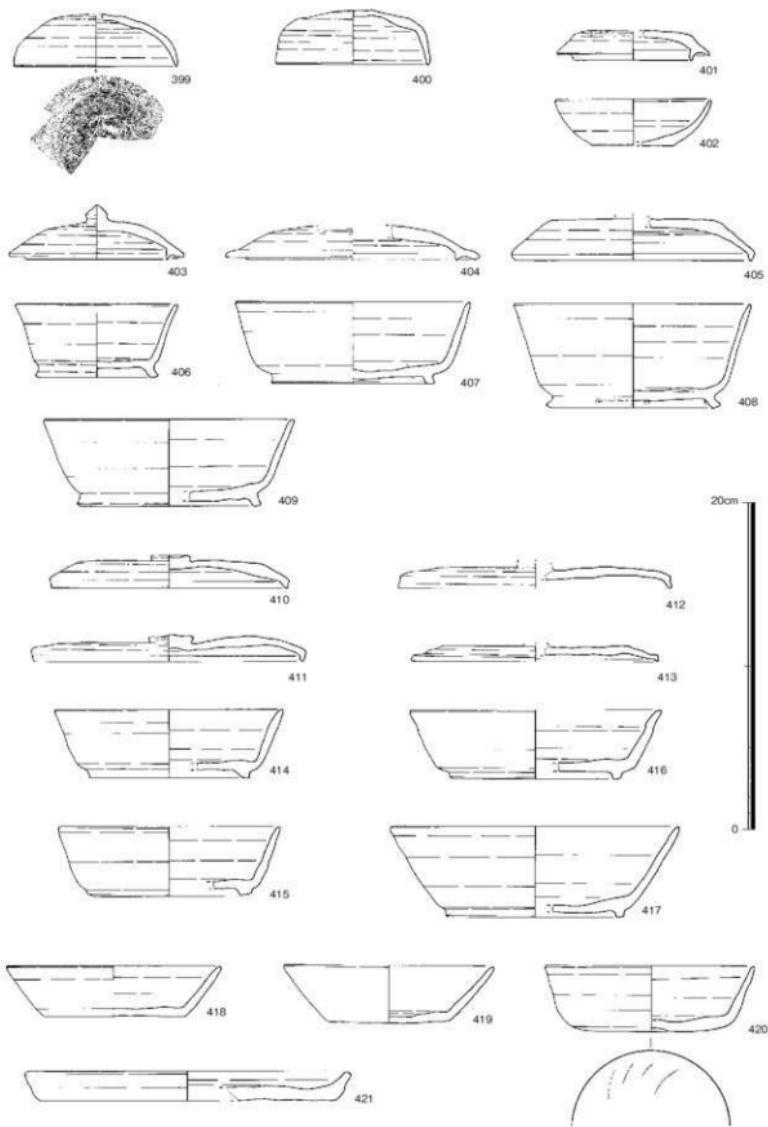
390～395は坏蓋。390は天井部が厚く、体部は天井から屈曲して直線的に開き、口縁部は体部から屈曲して直立する。外面天井部と体部との境界に指圧痕が残る。391は天井付近が厚く、体部は直線的に開き、口縁部は内湾して直立する。天井部は雑な回転ヘラ切りで仕上げ、平行線のヘラ記号が書かれる。392は天井部が平坦で、体部は天井部から屈曲して外湾しながら開き、口縁部は体部から屈曲して開く。外面天井部は回転ヘラケズリで、平行線のヘラ記号が付けられる。焼成はやや軟質で、灰黄色を呈する。393は天井が平たく、体部は直線的に開く。天井部の切り離しは雑で、大きな「キ」字形のヘラ記号を記入する。394は扁平な作りで、天井は平たく、天井部と側面の境界に段を付ける。395は天井部がやや尖り、体部は直線的に開き、口縁部はやや内湾して直立する。

396～398は坏身。396は受け部の立ち上がりが短く内傾し、坏部は浅い。底部外面に十字のヘラ記号が書かれる。底部のヘラ切りは雑で凹凸が目立つ。397は受け部がごく小さく作られ、体部は扁平で底部の平坦面が広い。底部付近は手持ちヘラケズリで調整する。焼成は良好で、灰色を呈する。398は受け部の立ち上がりが短く内傾し、体部は球形を呈する。焼成は良好で、灰黄色を呈する。

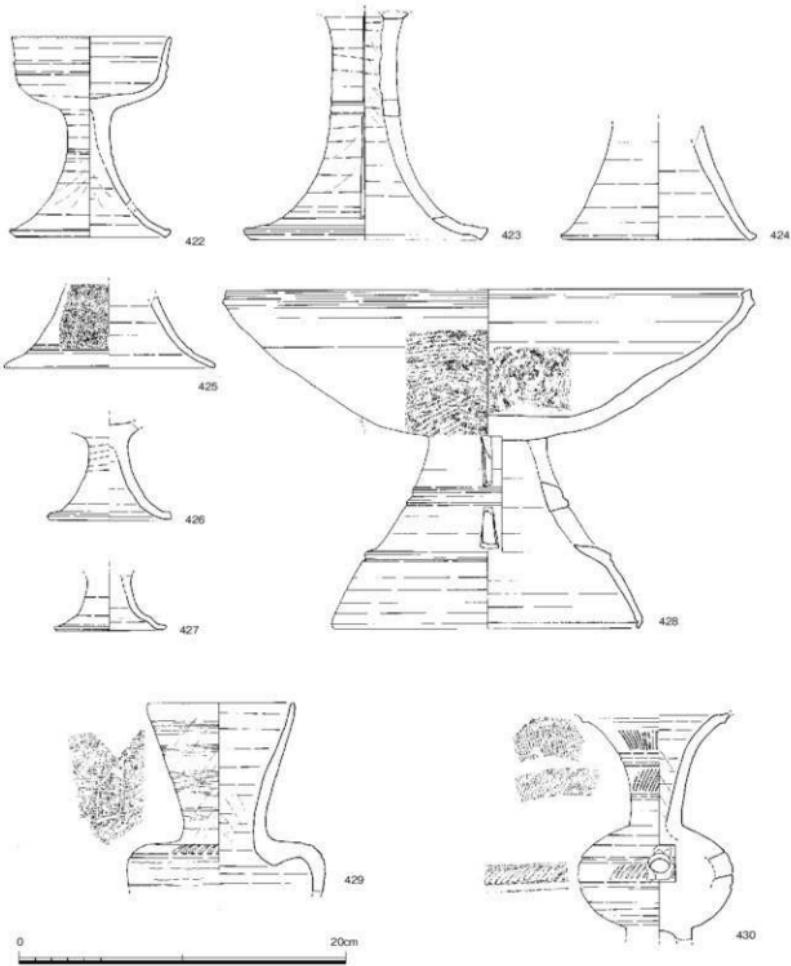
399～401は坏蓋。399は天井部が小さく平坦で、体部は直線的に開き、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内面に「キ」字形とみられるヘラ記号が書かれる。400は扁平な形状で天井部が平坦になり、体部は天井部から屈曲して直立する。天井部は粗い回転ヘラ切り後、指圧整形を行っている。401は中心部を欠くが、摘みがあった可能性がある。天井部は平坦で、体部は天井部から屈曲して開き、受け部の立ち上がりは短く直立する。402は坏身で、底部が平底で、体部は内湾して立ち上がる。

403は宝珠形の摘みが付き、天井部は狭く平坦で、体部は天井部から屈曲して直線的に開く。受け部の立ち上がりは低い。外面には自然釉が厚く掛かる。404は摘み部から天井部を欠き、天井部の境界付近にカキ目状の痕跡が残る。体部は直線的に開き、端部は外反して受け部を作る。受け部の立ち上がりは突堤状を呈する。405は天井部が広く、体部は直線的に開き、端部は垂下する。摘みは痕跡のみ遺存する。

406～409は坏身で、406は大きく開く高台が付き、体部は底部から屈曲してやや外反する。外面には自然釉が掛かっている。疊付には他の個体の胎土が一部付着している。407は低い高台が付き、



第60図 IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図2(1/3)



第61図 IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図3(1/3)

体部は底部から湾曲して開く。内面見込みは回転横ナデ後、ナデによる指圧痕が残る。408は高台が外側に大きく開き、体部は底部から湾曲して開く。外底部に砂粒が付着し、体部外面に自然釉が付着する。409はやや開き気味の高い高台が付き、体部は底部から湾曲して直線的に開く。外底部に墨が付着しており、墨書があった可能性がある。

410～413は坏蓋。410は低いボタン形の摘みが付き、天井部は平坦で広く、体部は天井部から屈曲して直線的に広がり、端部は垂下して外側面を面取りする。411は低い宝珠形の摘みが付き、全体に平坦な作りである。天井部から体部にかけてわずかに湾曲し、端部は垂下する。412は全体に平坦な作りで、摘みの痕跡が確認できる。体部は天井部からわずかに屈曲し、端部は短く垂下して外側面を取りする。413は摘みの剥離痕が残る。天井部は広く、体部は天井部からわずかに屈曲して開き、端部は面取りしてわずかに垂下する。

414～417は高台付の坏身。414は低い高台が付き、体部は底部から屈曲して開く。415は低く太い高台が付き、体部は底部から屈曲して開く。416は全体に器壁が厚く、高台は低く直立し、体部は底部から屈曲して開き、口縁部はわずかに外反する。417は鉢形を呈し、高台は低く、体部は直線的に大きく開く。胎土は軟質で、灰白色を呈し、内外面とも摩滅が進んでいる。

418～421は高台のない坏・皿。418は底部が平底で、体部は底部から屈曲して大きく開く。胎土はやや軟質で、灰白色を呈する。419は平底の底部から、体部が屈曲して直線的に大きく開く。体部上部の胎土は内外面とも灰色、他の部分は灰白色を呈しており、焼きムラがみられ、全体に軟質で摩耗が進む。底部は回転ヘラ切りで仕上げる。420は底部は平底で、体部は底部から湾曲して開く。外底面に放射状の工具痕らしき線がみられ、底部はヘラ切りによるとみられる。体部から内面は回転横ナデ。

421は皿で、高坏の坏部の可能性もある。体部は底部から屈曲して短く開く。

422～428は高坏。422は坏部が受け部を持たない形で、体部側面に段が2段付く。脚部はラッパ状に広がり、端部は面取りされ、上方にわずかに跳ね上がる。脚部側面に2条の横線が廻る。内外面とも回転横ナデ。423は大型の高坏脚部で、器壁が厚く、全体にラッパ形を呈して下部が大きく開き、端部は面取りされて下部にわずかに垂下する。上下2段の長方形透かしが3方にあり、側面中位に凹線が2条と沈線が3条、下部に2条の沈線が廻る。424は高坏脚部で、全体に直線的に開き、下部の外溝度は小さい。端部は面取りされる。内外面とも回転横ナデ。425は外側に大きく開き、端部は屈曲して開き、面取りして整える。側面に櫛描波状文が施文される。脚部の屈曲部付近に沈線が2条廻される。426は脚部がラッパ状に開き、端部は面取りされて下部にわずかに垂下する。側面下部に沈線が1条廻る。427は小型の脚部で、ラッパ状に開き、端部はS字状に屈曲する。内外面ともに回転横ナデ整形。

428は大型の高坏で、坏部は鉢形を呈し、体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して直立する。口縁端部は面取りされ、端部外側面は沈線の段が付く。坏部下半部には外面に平行タタキ、内面に当て具痕が残る。脚部は直線状に開き、外面は突帯により3段に分かれ、上段と中段に長方形透かしが3方に開けられる。下部はやや内湾気味に開き、端部は内側に短く屈曲する。

429は鰯の上部。頸部は直線的に開き、側面にカキ目を施し、図形状のヘラ記号を施文する。肩部は強く張り、刻目文が施文される。430は脚付きの鰯で、口縁端部と脚部を欠損する。頸部はラッパ状に開き、口縁下に突帯が付く。頸部側面は沈線で3段に分かれ、上中2段に縱方向の櫛描文が施文される。体部は扁平な球形で、中位に櫛描文が施文される。

431は短頸壺。頸部は上方に直立し、頸部と体部の境界は緩く湾曲する。体部は肩が張り、底部は

丸底で、底面に竹管文のような円文が2ヶ所施文されている。新羅土器の印花文を模倣したものか。底部は回転ヘラケズリ、体部中位から内面にかけて回転横ナデ。肩の部分に自然釉が掛かる。432は短頸壺の上半部で、頸部は内湾気味に直立する。体部は頸部から屈曲して開く。外面には自然釉が掛かる。433は鉢で、頸部は直線的に内傾する。体部は半球形を呈する。底部は一定方向のナデ、体部はヘラケズリで、頸部から内面は回転横ナデ。外面上部に自然釉が掛かる。

434は壺または瓶の頸部、端部は面取りし、直線的に開く。口縁上面から外面にかけて自然釉が厚く掛かっている。435は提瓶の体部。把手は鉤状に簡略化される。外面はタタキ後回転ハケ目、内面は回転横ナデで當て具痕を消している。

436は平瓶。頸部は中心からわずかに外れて付けられ、外反しながら開き、端部は外側に開き、面取りされる。体部は肩が張らない楕円球形を呈する。外面はハケ目後カキ目を施し、内面は回転横ナデ。

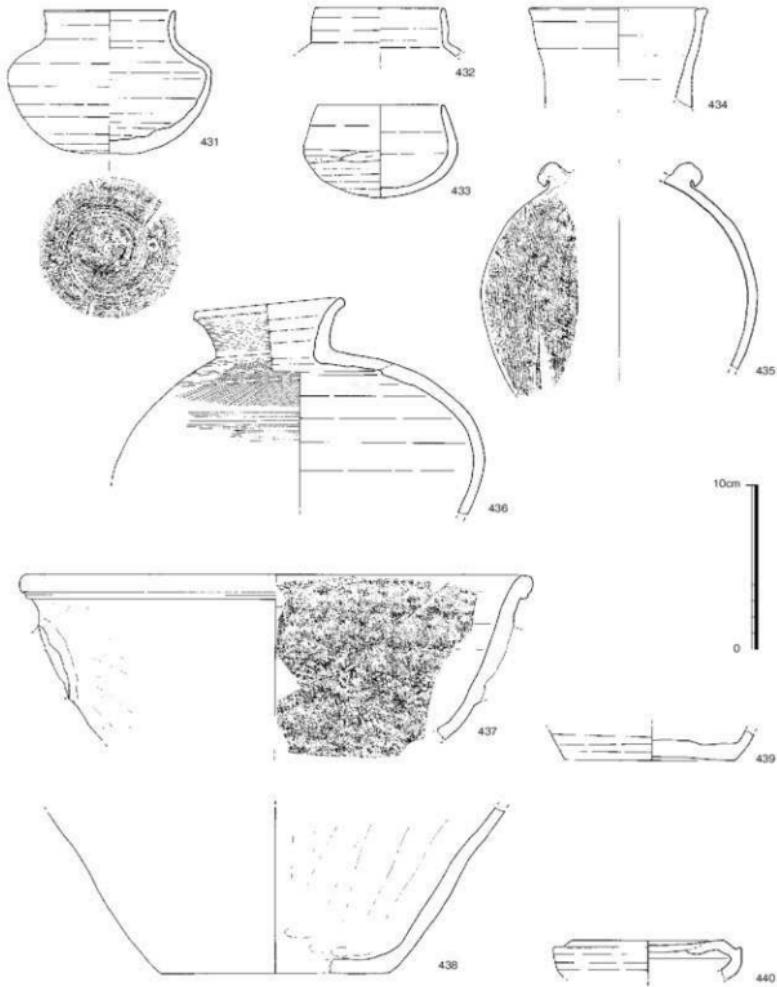
437は瓶とみられ、底部と把手を欠く。口縁は外側に肥厚させ、口縁直下に突帯を付ける。体部は鉢形に開き、外面中位に径5cmの把手の接合痕が残る。外面は回転横ナデ、内面にはタタキの當て具痕が残る。438は鉢。底部は平底で、体部は直線的に開く。外面は回転ヘラケズリで、部分的に剥離している。内面は縦方向の強いナデで整形する。439は鉢の底部。底部は平底で、ヘラ切り、体部外面は回転横ナデで、自然釉が掛かる。440は水滴状の器形で、硯として使用された可能性が高い。上面は凹み、墨痕により薄黒く変色している。天井部周囲は坏の受け部のように凹み、体部は扁平になる。体部外面に薄く自然釉が掛かる。

441～445は壺で、441は口縁部が直線的に開き、端部は面取りされ、外側にわずかに張り出す。体部は胴が張る。胴部中位はカキ目、体部下部は格子目タタキ。内面下部には円弧状の當て具痕が残り、上部は回転横ナデ。442は頸部が内湾しながら開き、端部は丸める。胴部は肩が張る。体部外面は縦方向のタタキ目後、カキ目を施す。頸部外面から内面は回転横ナデ。443は壺の口縁部で、頸部は面取りされ、口縁直下に小さな突帯が付く。端部は短く外反して2面を面取りする。体部は頸部から屈曲して開く。体部外面はタタキ後カキ目、内面にはタタキ痕が残る。頸部外面にはカキ目を施す。

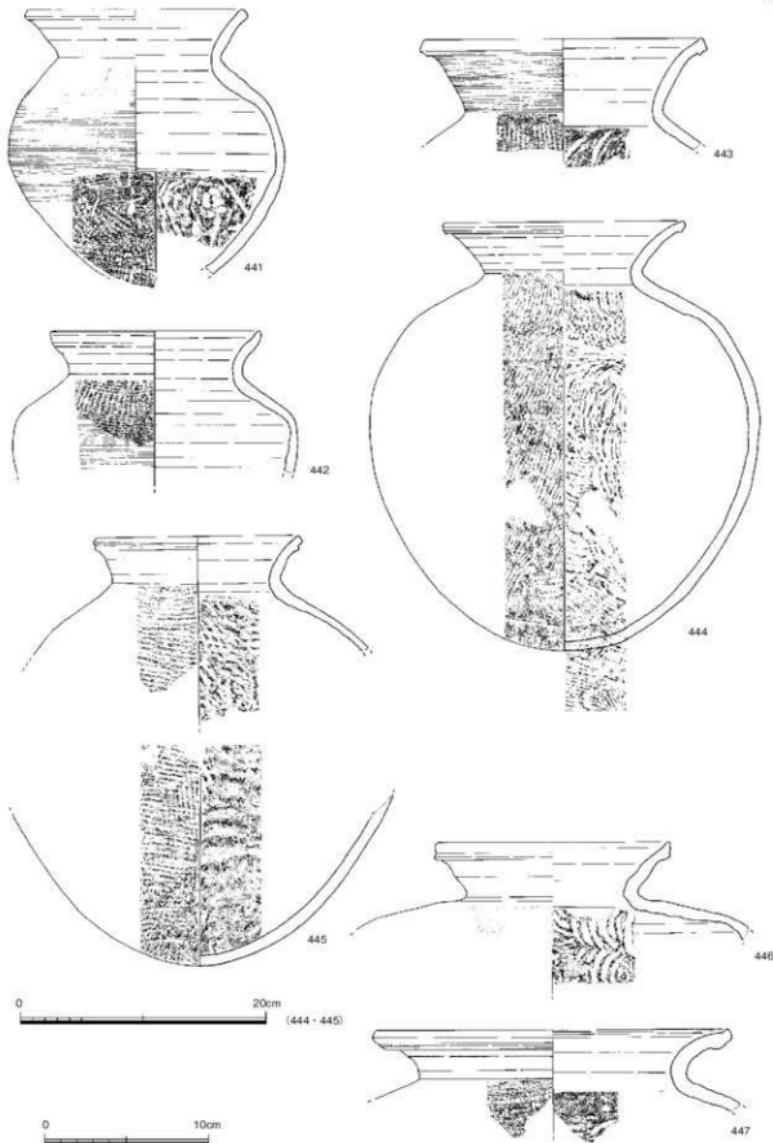
444は壺で、頸部は緩く開き、端部は面取りされて口縁直下に突帯が貼り付く。体部は球形で、外面は縦方向タタキ、内面は同心円文の當て具痕が残る。445は上部と下部が直接接合しないが、胎土より同一個体とみなした。口縁部は外側に開き、端部は面取りされ、口縁直下に突帯が付く。体部外面は平行タタキ後、カキ目を施し、内面は円弧状の當て具痕が残る。胎土は軟質で、灰白色を呈する。446は樽形土器の可能性もある。頸部は短く開き、端部は尖り、口縁直下に突帯を貼り付ける。体部は外面はカキ目とみられ、内面に當て具痕が残る。447は口縁が外側に強く湾曲し、端部はS字形に屈曲し、外面直下は突帯貼り付け状に整形する。体部外面に格子目タタキ、内面に當て具痕が残る。

448は壺で、口縁部は短く外反し、口縁端部は丸め、口縁直下に突帯を付ける。体部は球形で、外面は格子目タタキ、内面には半円形の當て具痕が残り、内面下部は板状工具でナデ消している。449は横瓶で、頸部は細く開き、端部は丸めて外面直下に突帯を廻す。体部は肩が丸く張り、器壁の一部には焼き膨れがみられる。体部外面は縦方向のタタキの上からカキ目を廻す。内面には同心円文の當て具痕跡が残る。450は頸部が外湾して開き、口縁部は外側に肥厚し、端部が内側に突出する。体部外面は格子目タタキ後カキ目、内面には同心円文の當て具痕が残る。

451は甕。口縁部は外反し、端部は外側に突帯をつけて外側面を面取りする。体部は頸部から屈曲して大きく開く。頸部外面にV字のヘラ記号が付く。頸部と胴部の外面にカキ目、内面には円弧文の當て具痕が残る。452は頸部が長く外反し、端部は上方にわずかに跳ね上がり外側面を面取りする。



第62図 IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図4(1/3)



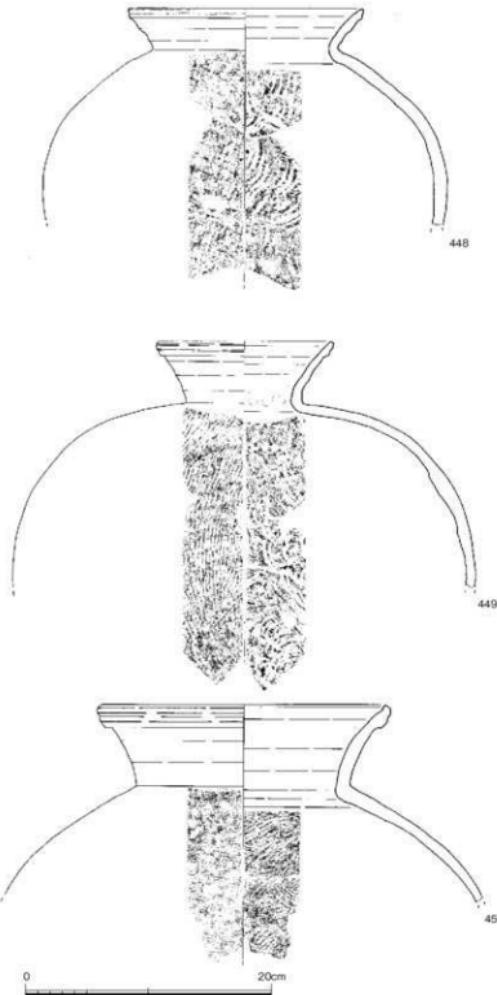
第63図 IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図5 (1/3, 1/4)

外面は縦方向のハケ目が施される。453は頸部が大きく開き、端部は折り曲げて垂下し、外側面を面取りする。頸部は緩く外反し、外面を沈線で3段に分割して各段に柳描波状文を施す。口縁端部は下垂し、外側面を幅広く面取りする。体部と頸部の境界は明瞭に屈曲し、体部外面は縦方向のタタキ、内面は同心円文の當て具痕が残る。この453は壺上部の破片だが、他にこの個体と見られる接合不能の胴部破片が多数出土している。454は壺口縁部破片で、頸部は外湾し、端部直下に3条の突帯を廻し、突帯直下に波状文を施す。体部外面は格子目タタキ、体部内面には円弧文の當て具痕跡が残る。

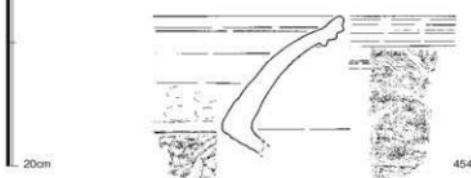
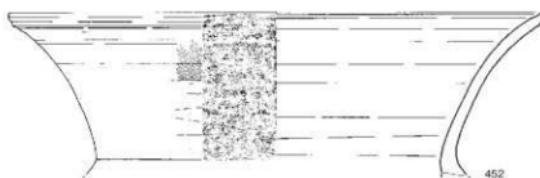
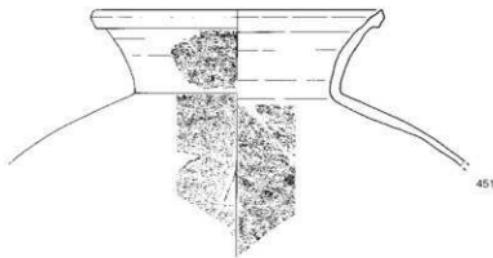
455～461は谷部北東隅の谷頭付近の包含層から出土した須恵器。455～457は壺蓋。455は半球形で、天井部は丸く、口縁部は直線的に開き、口縁端部の内面に段がつく。456は体部がやや直線的に開き、口縁部は内湾して直立し、端部は丸める。457は壺か瓶の蓋で、天井部は緩く弧を描き、受け部の立ち上がりは長く直立する。天井部は雑な一定方向のヘラケズリ、他の部分は回転横ナデ。

458～460は壺身。458はや長めに開く高台が付く。体部は底部から大きく湾曲して開き、口縁端部はわずかに外反する。高台の貼り付けの仕上げがやや雑で、外面に段差が付く。459は体部が鉢形に開く。高台は大きく開く。胎土は軟質で、灰白色を呈する。460は高台のない壺。底部は平底で、粗いヘラ切りで凹凸が目立つ。体部は直線的にハの字に開く。体部から内面は回転横ナデ。

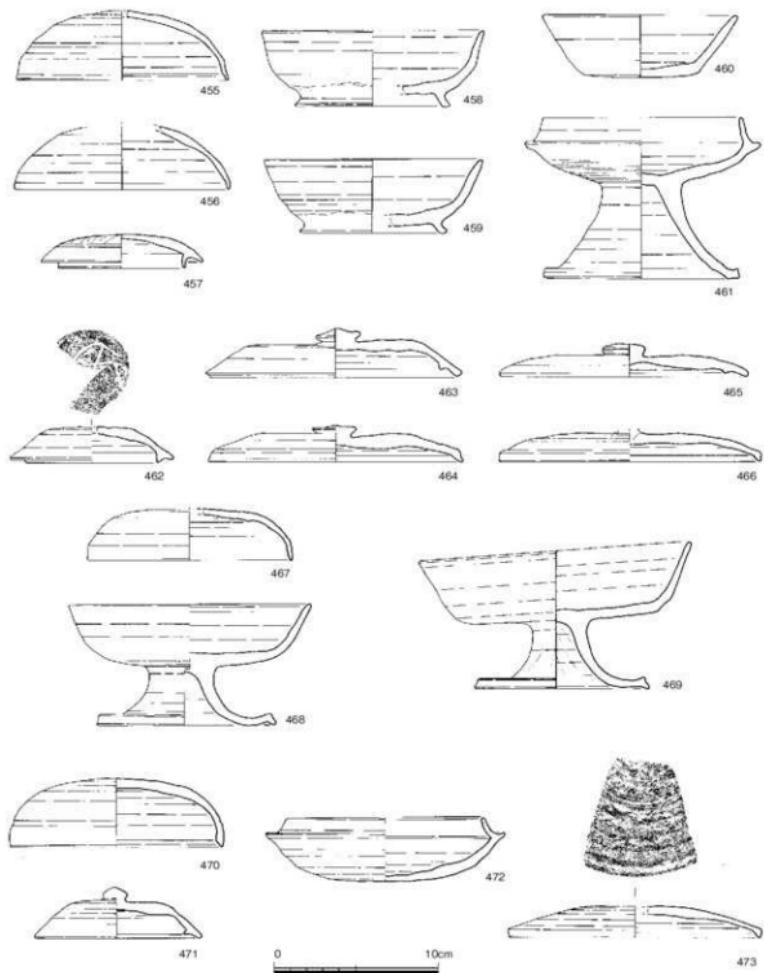
461は高壺で、全体の約50%が遺存する。受け部の立ち上がりは高く直線的に内傾し、壺体部は



第64図 IV区3面下（黒色土）出土須恵器実測図6 (1/4)



第65図 IV区3面下(黒色土)出土須恵器実測図7 (1/4)



第 66 図 IV区出土須恵器実測図 1 (1/3)

浅い。体部外面にカキ目を施す。脚部は大きく開き、端部は屈曲して端面を面取りする。

462～469は谷部の東側の斜面境界付近の落ち際の堆積層から出土した土器で、斜面上方から転落した可能性のある土器が含まれる。462～467は壺蓋。462は壺身の可能性もある。天井部は平坦で、ヘラ切り後記号状のヘラ記号を書く。体部は直線的に開き、受け部の立ち上がりは太く短い。463は

宝珠形の摘みが付く。天井部は平坦で、体部は屈曲して直線的に開き、端面に沈線状の段を付ける。受け部の立ち上がりは突帯状を呈する。464は低い宝珠形の摘みがつく。天井部は平坦で、体部は天井部からわずかに屈曲して開き、端部は下方にやや屈曲する。焼成は軟質で、灰白色を呈する。465は大きめのボタン形摘みがつき、受け部の立ち上がりはごく小さな突帯状を呈する。466は摘みの痕跡が遺存し、464のような形の摘みが付いていたと見られる。天井部から体部にかけて緩く湾曲し、端部は屈曲して垂下し、側面を面取りする。467は扁平な半球形を呈し、天井はやや平坦で、器面はヘラ切り後ナデて調整している。

468・469は高坏。468は坏部は受け部がなく、底部は平底で、体部は直立気味に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリ、体部から内面は回転横ナデ。脚部は大きく開いて下部は外側に大きく湾曲し、端部は短く屈曲して垂下し、側面を面取りする。469は平底の底部から体部が屈曲して直線的に開く。底部は回転ヘラケズリ、体部から内面は回転横ナデ。脚部は大きく外湾し、端部は短く屈曲し、端部外側面を面取りする。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。

470～473はDトレーンチ北側包含層のうち、第3面下層からの出土。470・471・473は坏蓋。470は扁平な半球形を呈し、天井部には自然釉が点状に掛かる。体部は内湾し、口縁端部は内側に段が付く。471は小型の蓋で、宝珠形の摘みが付く。天井は平らで、体部は天井から屈曲して直線的に開く。受け部の立ち上がりは低く、突帯状に貼り付けられる。472は坏身で受け部の立ち上がりが長く内傾し、体部は浅い。底部はやや平たく、回転ヘラケズリで整えられる。473は中央部を欠き、摘みの有無は不明。天井部は平坦で、体部は天井部から浅く屈曲して直線的に開き、端部は垂下して外側面を面取りする。上面に直線状のヘラ記号が書かれる。

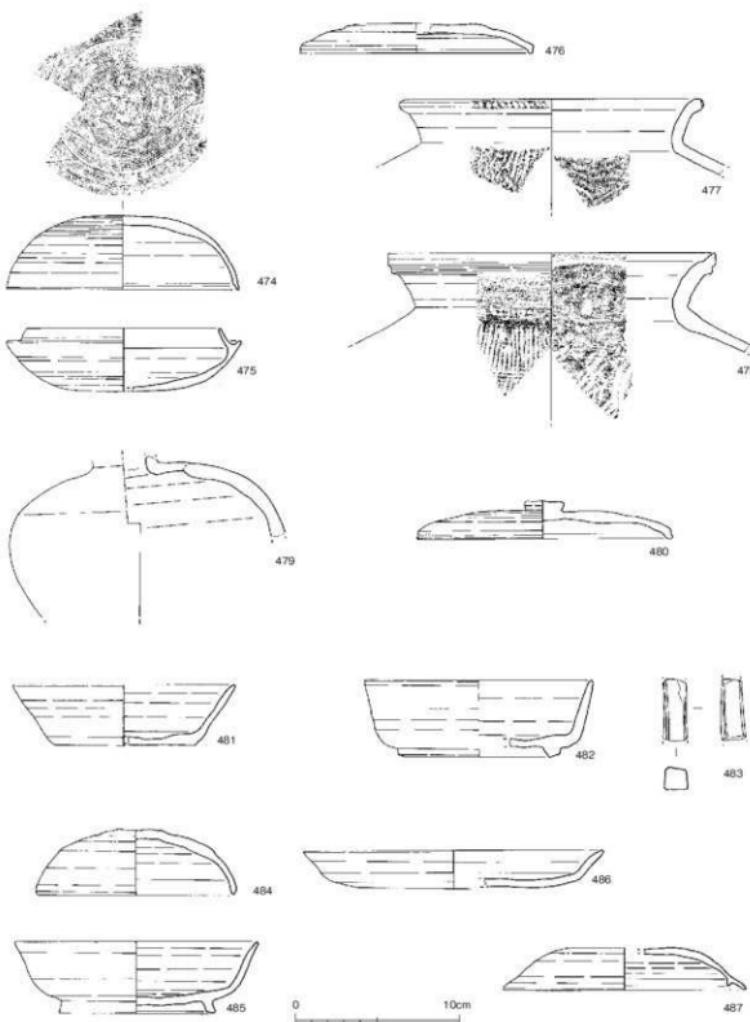
474～478はIV区南側のSD-065の西側の斜面の包含層から出土した須恵器。474は坏蓋で扁平な半球形を呈し、天井部は丸く、外面にカキ目を施す。体部から口縁部にかけて丸く作り、端部は内側に段を付ける。内面見込みは幅の狭い工具でナデて調整している。外面天井部にX字のヘラ記号が付く。475は坏身。受け部の立ち上がりは長く内傾し、体部は浅い。476は坏蓋で中央部を欠くが、摘みの痕跡が残る。天井部は平坦で、自然釉が掛かる。体部は底部から屈曲して直線的に開き、口縁端部はわずかに下垂し、外側面を面取りする。477は壺口縁部の破片。頸部は短く外反し、端部はやや膨らみ、丸みを持つ。口縁端部に刻目を施す。体部は外面に平行タタキ、内面に円弧文の当て具痕が残る。478は壺または甕の口縁部で、頸部は外湾して開き、端部は外側面を面取りし、口縁直下に突帯が付き、内面には段が付けられる。胴部は縱方向のタタキ後カキ目を施し、内面にはタタキ当て具痕が残る。頸部内面にも当て具痕が残る。

479～483はIV区南端部の包含層から出土した須恵器。479は横瓶の体部。外面全体に自然釉が掛かる。胴部は肩が張る。頸部は体部中心軸からわずかに外れて開けられ、径は細めである。480は坏蓋で、ボタン形の摘みが付き、体部は天井部から端部にかけて丸く、端部はわずかに垂下して側面を面取りする。

481～483はIV区包含層のうち、灰黒色土から出土した須恵器。481は高台のない坏で、底部は平底で、体部は直線的に開く。焼成は軟質で、灰白色を呈する。482は短い高台が付き、体部は底部から湾曲して直線的に開く。外底部はヘラ切りで、雑な仕上がりである。

483は用途不明の須恵器破片。甕の底部の一部か、硯脚部の破片の可能性が考えられる。焼成は堅く、灰色を呈する。

484は坏蓋で、天井部がヘラ切りにより一段高く仕上げられる。体部は丸く、口縁部は内湾する。485は高台のつく坏でIV区とV区の包含層の破片が接合したもの。やや浅めで、体部は底部から湾曲

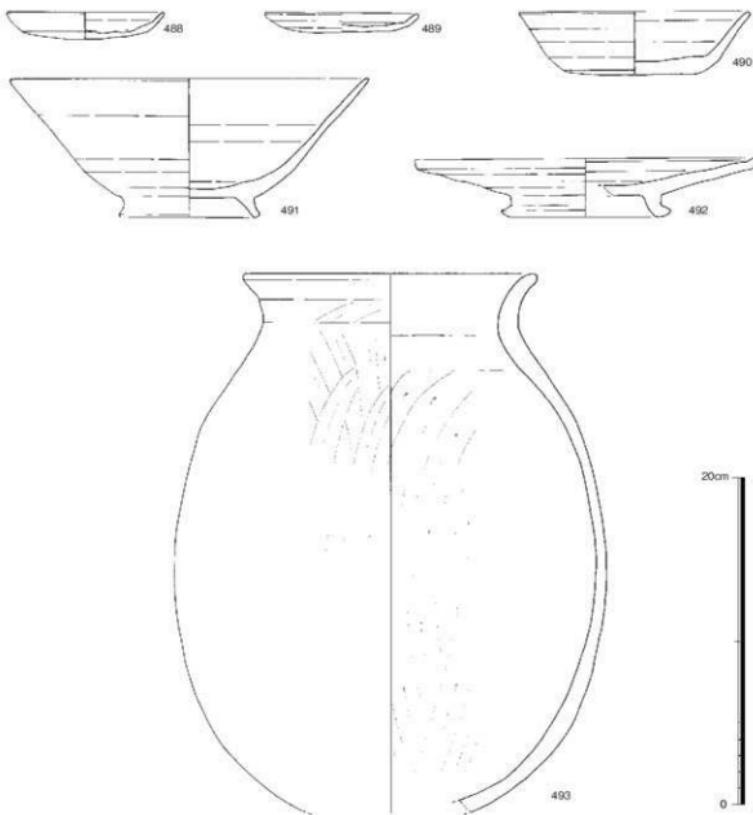


第67図 IV区出土須恵器実測図2 (1/3)

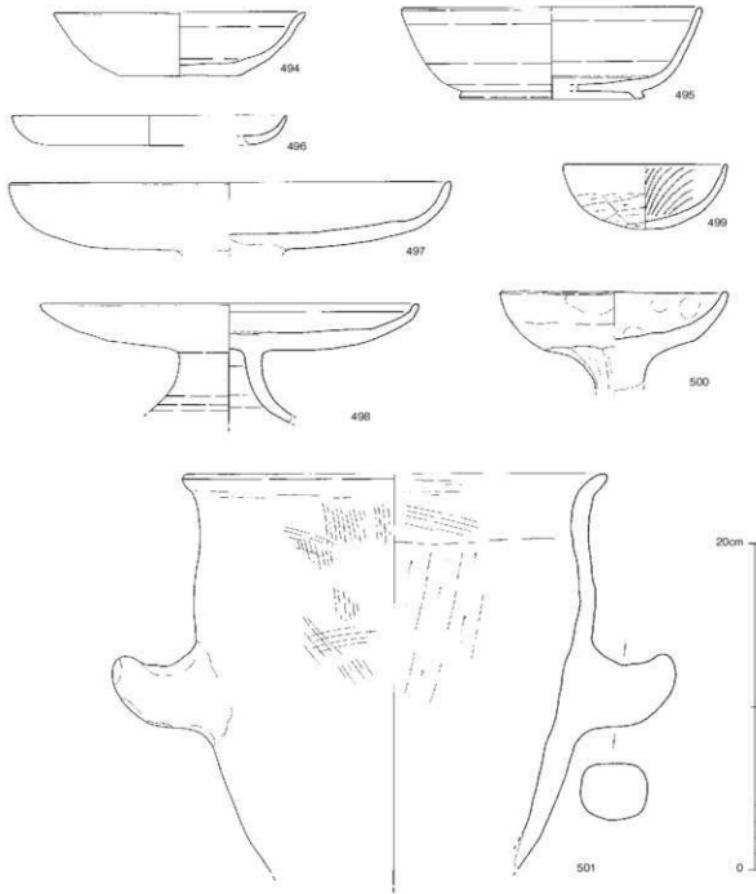
して外反氣味に開く。高台はやや外反する。底部のヘラ切りは粗く、凹凸が残る。486は皿で、底部は平底で、体部は底部から湾曲して外反氣味に開く。487は壺蓋で中央部を欠き、摘みの有無は不明。天井部は平たく、体部は天井部から湾曲して開く。受け部は低く小さな突帯状に作る。外面の色ムラが大きく、焼成時に他の器が重なっていた可能性がある。

## 2) 土師器

488~493は第1面の下層の黒色土層から出土した土師器。488・489は中世の土師器皿。488は底部が回転ヘラケズりで、底面はやや丸みを帯び、板状圧痕が残る。489は底部がほぼ平底で、回転ヘラケズりで整形される。490は壺で、胎土が灰黄色を呈し、軟質で、瓦器塊の可能性もある。底部



第68図 IV区1面下包含層出土土師器実測図 (1/3)



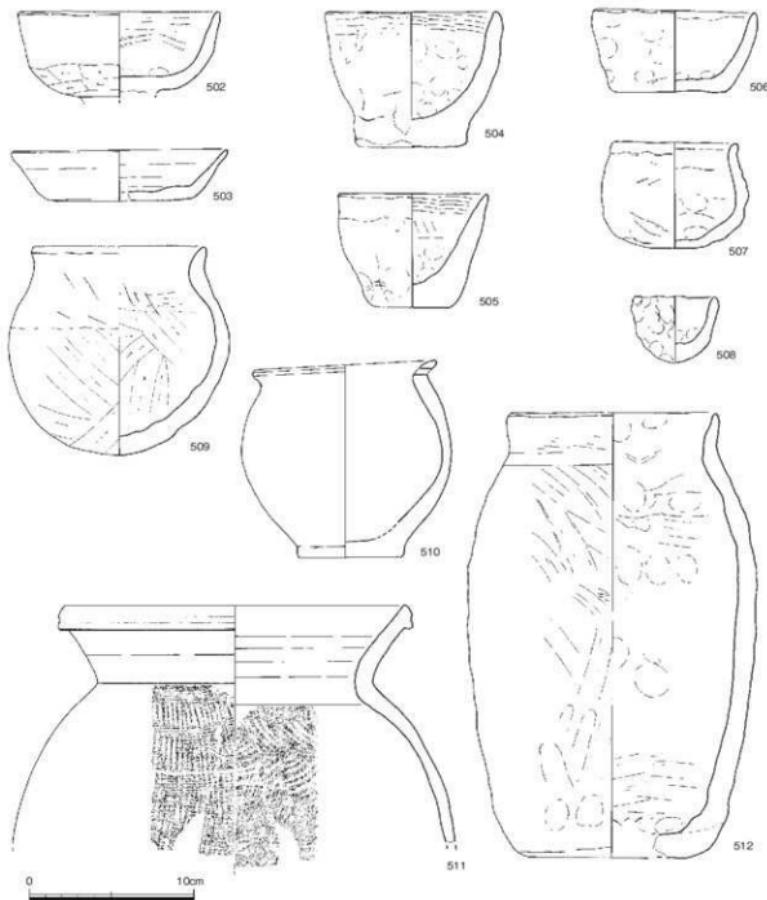
第69図 IV区2面下包含層出土土器実測図 (1/3)

は摩滅しており、調整不明。

491は塊。体部は大きく開く。高台は直線的に開く。胎土は精緻で、鈍い橙色を呈し、全体に摩滅が進む。492は台付皿で、高台は太く、端部が外側に屈曲する。体部は大きく平たく開き、口縁端部がわずかに上方に跳ね上がる。全体に回転横ナデで整形する。

493は甕で、頸部は外湾し、体部は長胴を呈する。体部外面は縦方向の板状工具によるナデ、内面はケズリ痕が残る。

494～501はIV区出土土器。494は壺で、底部は平底で、体部は内湾しながら開き、口縁端部は



第70図 IV区3面下包含層出土土師器・弥生土器実測図 (1/3)

わずかに外反する。内外面とも摩滅が進む。495は高台を持つ环で、須恵器环と形状が近似する。底部は平底で、体部は湾曲して開く。496は皿で、体部は底部から湾曲して立ち上がる。内外面に黒変部分があり、煤または墨痕とみられる。

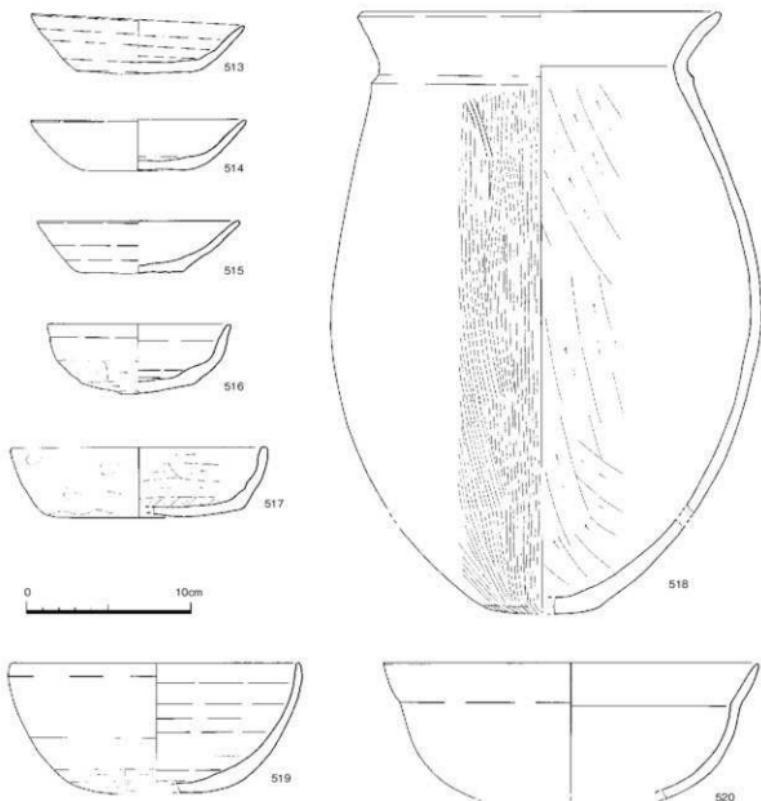
497は高环の环部で、大型の皿状を呈する。底部から体部にかけて緩く湾曲し、口縁部は内湾して立ち上がる。内外面とも摩滅が進む。498は高环で、环部は全体に平たく湾曲し、口縁部は短く湾曲する。脚部は大きく外湾して開く。脚部が内外面とも回転横ナデで、他の部位は風化が進み調整は不明。

499は丸底の塊。全体に半球形を呈し、底部外面はヘラケズリ、内面に暗文が施文される。500は高坏で、坏部は塊形を呈する。脚部は太く作られる。全体に手捏ね感があり、歪む。

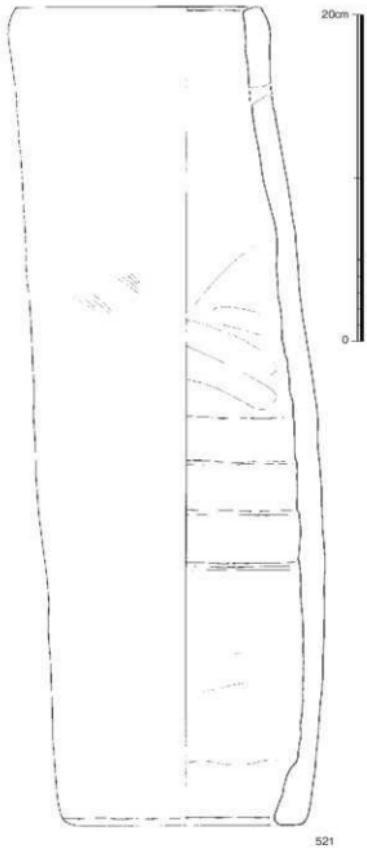
501は瓶。底部を欠くが、体部は寸胴で口縁部付近で外反する。胸部中位に牛角形の把手が付けられる。内外面とも摩滅が進むが、外面にハケ目、内面にケズリの痕跡が残る。

502～512は第3面の下層から出土した土師器。502は高坏の坏部で、坏部は平底で体部は直線的に立ち上がる。内面は粗く調整され、外面は下部が手持ち削り、体部はナデ。503は坏で、底部は平底で、体部はハの字に直線的に開く。底部に板状压痕状の工具痕跡が残る。焼成は良好で、胎土は浅黄橙色を呈する。

504は手捏ねの鉢。底部は平底で分厚く、体部は半球形を呈する。口縁内面はハケ目調整を行う。底面に成形時の台板の痕が残る。505は手捏ねの鉢で、底部は平底で、体部は直線的に開く。口縁内



第71図 IV区出土土師器実測図1 (1/3)



第72図 IV区出土土器実測図2 (1/3)

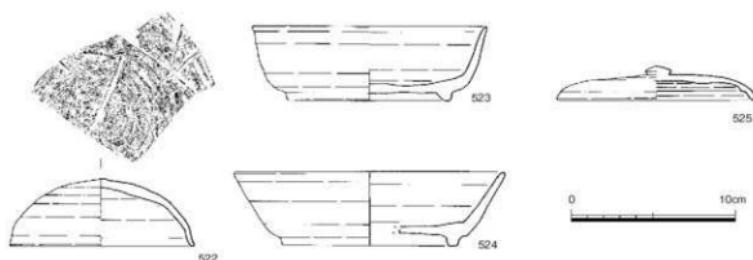
面は粗いハケ目調整を行い、内外面に指圧痕が多く残る。506は手捏ねの坏で、底部は平底で凹凸が多い。体部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面に指圧痕が多く残る。507は手捏ねの小壺で、底部は丸底で、体部は球形に膨らみ、口縁部は外反する。外面は指オサエ工整形後、工具で調整した痕跡が残る。508はミニチュア土器で、小杯形を呈する。底部は丸底で、全体に指圧痕が残る。

509は壺。体部は球形で、頸部は体部から短く外反して開き、端部は丸める。体部は内外面ともにケズリ調整。510は弥生土器の小型壺。底部が平底で、体部が球形を呈し、口縁部は短く外反する。口縁部に焼成前の孔が2ヶ所並んで開けられ、本来は2孔1対で開けられていたとみられる。この個体は弥生時代中期後半～末の時期のものとみられ、他の土器とは時期的に大きく差がある。

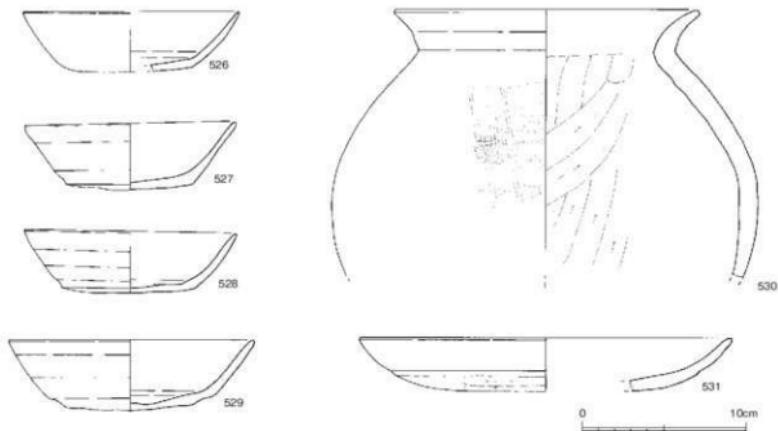
511は甕。頸部は直線的に開き、口縁部直下に突帯が付く。体部は外面をタタキ後カキ目、内面に円形の当て具痕が残り、形状や器面調整は須恵器甕と同じである。

512は長胴の壺。平底で、体部は凹凸が多く、頸部は短く直立する。体部外面は粗いナデで、指圧痕が多く残る。内面もナデで指圧痕が残り、内外面ともに板状工具痕が残る。全体に手捏ねで整形されたと考えられる。

図71はその他の地点から出土した土師器。513～516はCトレーナー出土の壺。513は平底の壺。体部は底部から屈曲して直線的に開く。口縁部の一部が黒変するが、墨痕かどうか判定不能。514は平底の底部に、体部は湾曲して開く。口縁部内面の



第73図 V区出土須恵器実測図 (1/3)



第74図 V区出土土器実測図（1/3）

一部が黒変する。515は平底で、体部は湾曲して開く。焼成は軟質で灰黄色を呈し、須恵器坏に形状が非常に似ている。516は底部は丸底で、体部は球形を呈する。底部にヘラ切り離し時の粘土塊が付着する。胎土は浅黄色を呈し、全体に摩滅が著しい。

517はDトレンチ内の西側で出土した坏。底部が平底で広く、体部は内湾して立ち上がる。外面はナデ、内面は横方向のケズリで調整する。

518は調査区東側の斜面落ち際で出土した甕で、長胴形を呈する。底部はレンズ状を呈し、胴部は最大径が胴部下位にある下膨れ形を呈する。頸部は胴部から屈曲して開き、端部は丸める。体部外面は縦方向のハケ目、内面は縦方向のケズリで調整する。

519はBトレンチ内の東側で出土した鉢。底部は丸底で、体部は内湾して開く。520はDトレンチ内の西側で出土した鉢で、体部は扁平な球形で、頸部は体部から屈曲して外側に開く。頸部外面が部分的に黒変している。

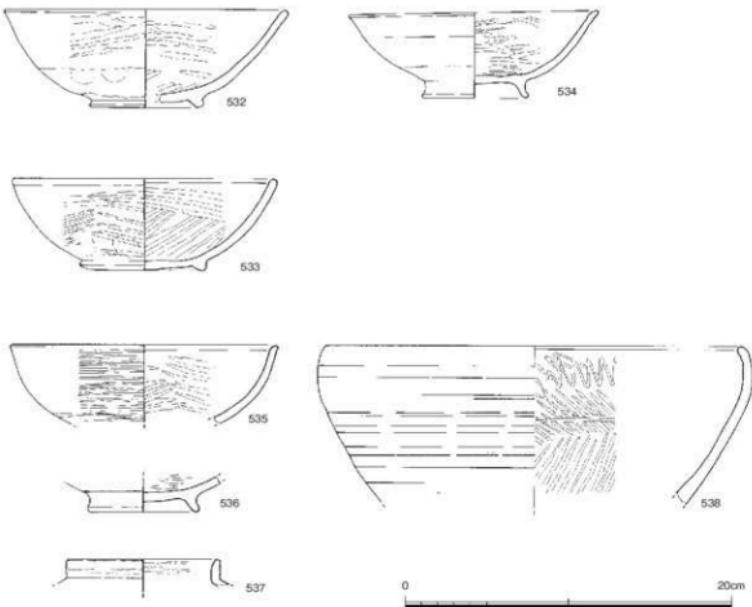
521は大型の筒形土器製品。調査区北側の斜面落ち際と、第3面下層包含層から出土した破片を接合して復元した。全長44.5cm以上、底径15.5cmを計り、ほぼ直線的に延びる。外面はナデで仕上げており、細かい凹凸がみられる。内面もナデで仕上げられ、4段の深い段が付けられる。基部はやや太めにつくられ、端部は上部、下部とも面取りされる。

この調査区からは、この521に類する遺物は破片も含めて検出されておらず、1点のみの出土である。この土器の機能や使用用途、時期は全く不明である。

## (5) V区出土の土器

### 1) 須恵器

522～524は2面上層から出土。522は坏蓋で半球形を呈し、天井部は丸く、頂部に切り離し痕が残る。体部は丸く、口縁部はわずかに外反する。523は低い高台が付く坏身で、体部は底部から湾曲して立ち上がり、口縁部は外反する。524は坏身で、体部が底部から屈曲して直線的に開く。高台は



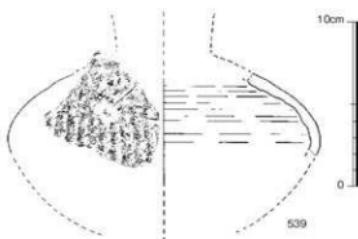
第75図 57次出土黒色土器実測図 (1/3)

短く直立する。外底部は摩滅が進む。

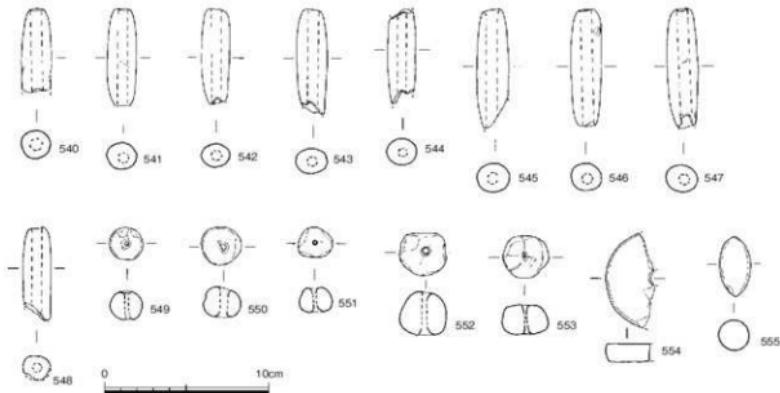
525は2面上層のうち、東側に堆積する灰色土層から出土した壺蓋で、宝珠形摘みが付く。天井部は平坦で、体部は内湾して開き、端部は丸める。受け部の立ち上がりはごく小さい突帯状を呈する。

## 2) 土師器

526～529は第2面上層の黄褐色土層中から出土。526は壺で、平底を呈し、体部は内湾気味に開く。内外面とも摩滅が進む。527は底部は平底で、体部は直線的にハの字に開く。内外面とも摩滅が進む。528は底部がややレンズ形で、体部はわずかに内湾して開く。体部外面は回転横ナデとみられ



第76図 57次出土新羅土器実測図 (1/3)



第77図 57次出土土製品実測図 (1/3)

るが、全体に摩滅が著しい。529は底部がやや膨らみ、回転ヘラ切りで整形した痕跡が残る。体部は膨らみ気味に開く。体部は内外面とも回転横ナデ調整。

530は第2面上層の⑦層黒色土層から出土した壺で、SK-108内の炉内から出土した破片も接合する。頸部は外反して太めに作られる。体部は胴部中位に最大径が位置する形状とみられる。体部外面は縦方向ハケ目、内面はケズリで調整する。

531は第2面造構面の灰色シルト層から出土した皿。体部は底部から湾曲して開き、外側面中位に浅い段がつく。外面下部はケズリ、外面上部から内面にかけては回転横ナデ調整。

#### (6) その他の出土遺物

##### 1) 黒色土器

調査区内から黒色土器が出土しており、総量は多くないが、ここにまとめて図示する。532～534はⅡ区出土の塊。532は内外両面が黒色で、高台は低く、外側に開く。底部から体部にかけて緩く湾曲し、内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。533は内外両面が黒色を呈する。高台はごく低く、体部は全体に半扁球形を呈する。内外面横方向のヘラミガキを施す。534は内黒土器で、高台は高く直立し、端部が短く外反する。体部は湾曲しながら開き、口縁端部は少し外反する。外面は回転横ナデ、内面は横方向のヘラミガキ。

535～538はIV区出土。535は両黒土器の塊で、底部を欠く。体部は球形で、口縁部はわずかに外反する。内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。536は両黒土器の塊底部破片で、高台は外側に開く。内面に横方向のヘラミガキが見られる。537は壺形土器の破片で、内外両側とも黒色を呈する。頸部は短く直立し、内外面とも横方向のハケ目を施す。

538は内黒の鉢で、頸部から口縁部にかけて内湾する。体部は直線的に開く。内面は上部に暗文風の波状のヘラミガキ、中位から下位にかけては縦方向の斜線状のヘラミガキを施す。外面は回転横ナデ調整で、鈍い黄橙色を呈する。

表1 出土土製品一覧表

図面番号	資料名	出土位置	法量(cm)	重量(g)
540	土錘	I -3 区④層	(長 5.1) × 径 1.8 × 孔径 0.7	15.0
541	土錘	IV区谷部包含層 2面下	長 5.9 × 径 1.8 × 孔径 0.6	14.5
542	土錘	IV区谷部包含層 2面下	長 5.8 × 径 1.7 × 孔径 0.6	16.0
543	土錘	IV区谷部包含層 2面下	長 6.4 × 径 1.9 × 孔径 0.7	19.8
544	土錘	IV区 C レンチ南側下層	(長 5.8) × 径 1.8 × 孔径 0.6	15.6
545	土錘	IV区 B レンチ東側延長部	(長 7.3) × 径 2.0 × 孔径 0.7	22.1
546	土錘	IV区谷部包含層 3面下黑色土	長 7.1 × 径 1.9 × 孔径 0.7	25.1
547	土錘	IV区谷部包含層 3面下黑色土	長 7.3 × 径 1.9 × 孔径 0.7	21.4
548	土錘	IV区谷部包含層 3面下黑色土	(長 5.6) × 径 1.7 × 孔径 0.6	14.3
549	土玉	II -5 区③-④層	長 2.0 × 幅 2.0 × 高 1.7	6.5
550	土玉	IV区谷部包含層 3面下黑色土	長 2.3 × 幅 2.5 × 高 1.9	9.7
551	土玉	IV区谷部包含層 3面下造成盛土	長 1.8 × 幅 2.1 × 高 1.5	5.3
552	土玉	IV区 SD-065 西側包含層	長 2.5 × 幅 2.9 × 高 2.7	18.3
553	土玉	I 区・II 区包含層	長 2.5 × 幅 2.8 × 高 1.9	11.8
554	紡錘車	IV区谷部包含層 2面下	(径 6.2) × 高 1.1 × (孔径 1.0)	23.1
555	投弾	IV区谷部東側斜面落ち際	長 3.6 × 最大径 1.9	11.2

## 2) 朝鮮半島系土器

539は新羅土器の肩部破片で、II区8-2区の6層から出土したもの。胎土は灰色で、外側に軸が厚く掛かる。外面に半円文を縱方向に連続して施す。内面は回転横ナデ整形。

層位からみて、古代の包含層に伴うものとみられる。

## 3) 土製品

谷部包含層を含め、調査区内から土錘、紡錘車等の土製品が出土している。出土層位は上層の中世以後の時期から古墳時代の遺構面以下の層位まで分かれている。

540～548は土錘。完形のものは全長5.8～7.3cm、直径1.7～1.9cmでほぼ揃っており、出土地点や層位は異なるが同時期に同じ漁で使用されたものと考えられる。

549～553は丸玉。549～551はやや小型のもので、幅2.0～2.5cmを計る。552・553はやや大型で、幅2.8、2.9cmを計る。いずれも孔の径が2～3mmで、糸に通して装飾品として使用されたとみられる。IV区での出土量が多く、古墳時代の副葬品であった可能性が高い。

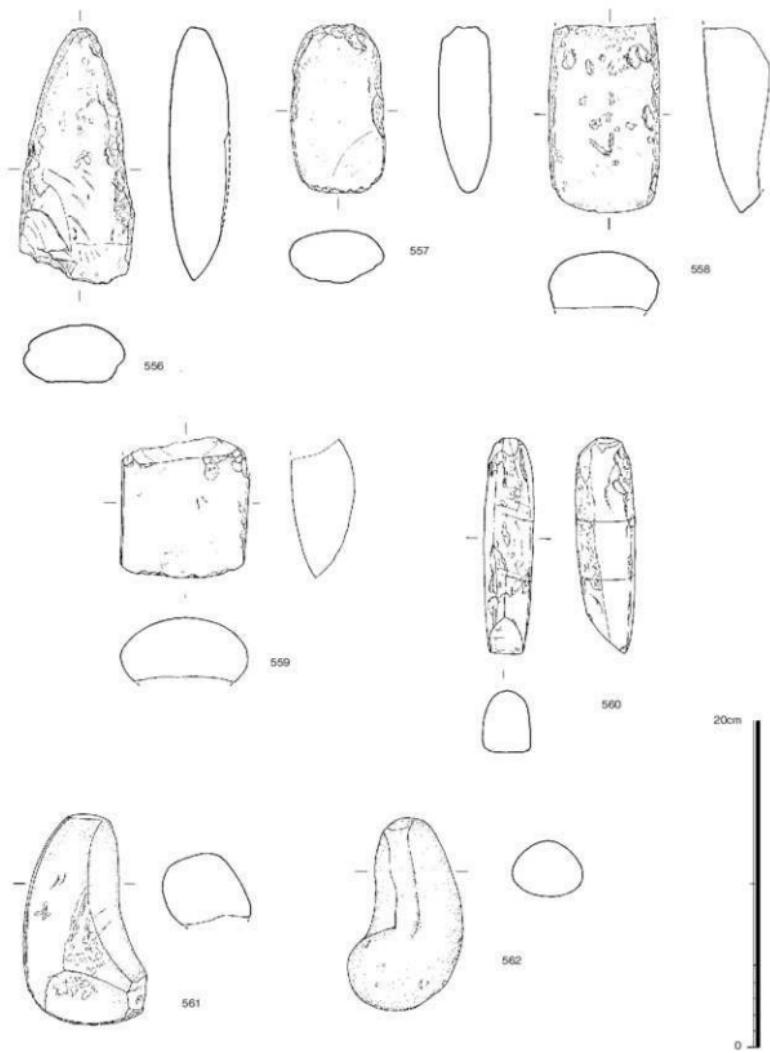
554は土製紡錘車。直徑は約6cm、孔の径9mm程度だったとみられる。石製紡錘車にくらべて厚手の作りである。

555は投弾。全長3.6cm、径1.9cm。紡錘形で、焼成は良好で橙色を呈する。

## 4) 石器・石製品

57次調査では包含層や各遺構から多くの石器が出土した。今回の報告ではその一部を紹介する。他の資料については後日、別報告でまとめる。

556～560は石斧。556は刃部長は7.1cm、厚さ3.7cmで、基部は尖り、平面形は三角形を呈する。中央部に着装痕と見られる側面のわずかな削りが確認できる。557は小型の石斧で平面形は長方形を呈し、刃部長は4.8cm。中央部両側面に着装痕とみられる浅い削りが見られる。基部には叩打痕がみられ、叩打具としても使用された可能性が高い。558は大型で、刃部長6.5cmを計る。表面は研磨され、使用による擦痕が見られる。559は刃部先端に使用痕と見られる刃こぼれが見られる。刃部長は6.5cmで、558とはほぼ同じである。560は柱状片刃石斧で、刃部幅は2.0cmで、刃部に使用痕と見られる擦痕が確認できる。



第 78 図 57 次出土石器・石製品実測図 (1/3)

表2 出土石器一覧表

図面番号	資料名	出土位置	法量(cm)	重量(g)
556	石斧	II区7-3区R-6	15.7×7.1×3.7	508
557	石斧	II区1トレンチ6層	10.2×5.8×3.2	300
558	石斧	III区1面トレンチ内	(11.4)×6.7×(3.9)	468
559	石斧	IV区谷部包含層1面下黒色土	(8.5)×7.3×3.9	436
560	石斧	IV区谷部包含層1面下暗褐色土	13.2×3.7×2.9	248
561	石杵	II区8-1区③④層	12.8×7.6×4.2	608
562	石杵	I区4区②層	10.1×6.9×3.5	365

561・562は石杵。561は杵部の下面是丸く、細かい叩打痕がみられる。杵の先端部は叩打痕とともに研磨痕もみられ、基部の端部にも研磨痕、擦痕がみられる。このような部位で叩打とともに研磨も行っていた可能性がある。把手部の側面にも一部叩打痕があり、この部分も叩打用に使用されたとみられる。562は全体に丸みを持ち、杵部の広い範囲に叩打痕がみられる。

### 5) 墳輪

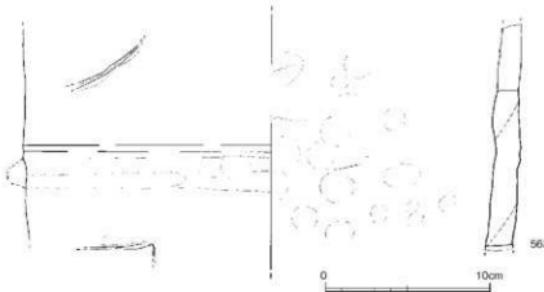
563は円筒埴輪の破片。II-7区の①層出土。小片であるため、器形全体を想定することは難しいが、破片外面に突帯の剥離痕が残っており、また破片上部に三角形透かしの痕跡、破片下部に透かしの一部を確認することができる。外面は縦方向ハケ目、内面には指圧痕が残っている。

現在では調査区周辺に古墳を確認することはできないが、調査区東側の尾根線上あるいは斜面に古墳があった可能性が高い。

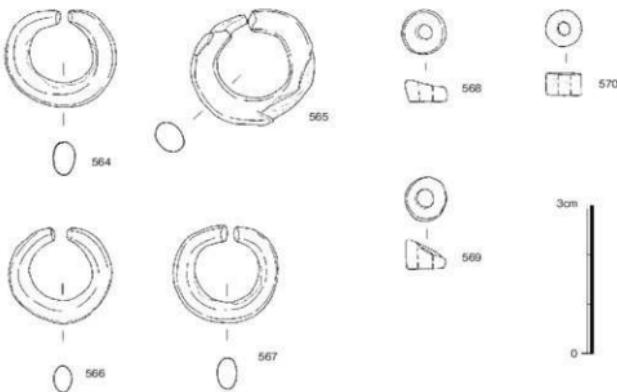
### 6) 耳環・玉製品

包含層から耳環・玉などの古墳時代の装飾品が出土している。564～567は耳環。いずれも金銅張りで、大きさは2.1～2.5cmで揃っている。摩滅により表面の金銅張りが剥離しているものもあり、斜面上方から流れてきたことが考えられる。

568～570は滑石製の玉。径7～9mmで、一連の装身具だった可能性が高い。



第79図 57次出土埴輪実測図(1/3)



第 80 図 57 次出土耳環・玉製品実測図 (1/3)

表3 出土耳環一覧表

図面番号	資料名	出土位置	全長×全幅×径 (cm)	重量 (g)
564	耳環	IV区A トレンチ	2.0 × 2.3 × 0.7	9.1
565	耳環	IV区B トレンチ	2.5 × 2.5 × 0.7	6.5
566	耳環	IV区 SX-065	1.9 × 2.1 × 0.6	6.5
567	耳環	IV区 SX-066 R-2	2.0 × 2.1 × 0.7	7.5

表4 出土玉類一覧表

図面番号	資料名	出土位置	縦×横×高 (mm)	重量 (g)
568	白玉	I区③-④層	9.0 × 9.2 × 4.5	0.5
569	白玉	IV区谷部包含層 3面下黑色土	9.0 × 8.5 × 6.0	0.2
570	白玉	II区 7-3 区	7.0 × 7.4 × 4.7	0.5

## 4. 小結

### (1) 谷部包含層の層位と堆積過程の復元

57次調査区が位置する谷の層位は、包含層出土の遺物から時期的に詳細な検討が可能である。主谷の層位はいくつかの層群に大きく分かれ、本文中で①層から⑦層までの層群に整理している。

①層：黒色土層。古代後半以後の層で、中世に堆積した可能性もある。32次調査ではこの上面まで掘削している。奈良時代以降の操業とみられる鍛冶滓が混じる。

②層：暗黄褐色土層。この層の上面を古代の造構面と認定し、第1面に設定した。この層の上面で製鍊炉等を確認しており、8世紀後半の堆積層と推定される。また、人為的な盛土造成層とも考えられる。

③層下面でも鍛冶炉などの造構が検出され、造成直前の活動痕跡が認められる。

③層：灰色や青灰色の粘質土・粗砂層で、流水による水成堆積層である。現在でも湧水が著しく、木質や有機物が遺存し、木簡等が出土している。この層の下面を第2面とする。

④層：黒色土層。この層の上面から大型の柱穴が掘り込まれている。

⑤層：黄色土層。西側斜面からの流入土層。短時間に地山土が崩壊し流入した層とみられる。

⑥層：黒色土層。炭化物を多く含む。鍛冶炉・製鍊炉稼働後の時期に流入した層とみられる。

⑦層：黒色土層。谷中央部に堆積し、水性層で湧水が著しい。古代の遺物はほとんど含まず、古墳時代の遺物に限定されることから、7世紀以前に徐々に堆積した層とみられる。

以上の①～⑦層の堆積状況より、以下の堆積過程が見出される。

6世紀～7世紀前半：⑦層が堆積する。同時期に谷の両側の尾根に集落や古墳が作られ、須恵器などが谷に流れ込み、自然堆積の状況を呈する。

7世紀後半：④層が堆積する。④層は⑦層から連続的に堆積する。さらに④層の上面を造成して平坦面をつくり、掘立柱建物が建築される（第2面）。

8世紀前半：谷中央部で④層の上面に流水による堆積層（③層）が堆積する。さらに斜面上方からの土砂の流れ込み（⑤・⑥層）がみられ、この時期に前代の造構は一端廃絶したものとみられる。

8世紀後半：②層の造成により、新たな造構面が形成される（第1面）。

9世紀以降：①層が堆積する。この時期以降も斜面の上方では鍛冶炉が操業され続けたものとみられるが、遺物の出土量から見て、活動規模は縮小したとみられる。

中世以降も墓や焼土坑などの造構はみられ、人々の活動範囲の一部として谷が利用され続けたとみられるが、これについては別途造構の報告を行う過程で詳しく検討したい。

### (2) 東側尾根に存在したとみられる古墳について

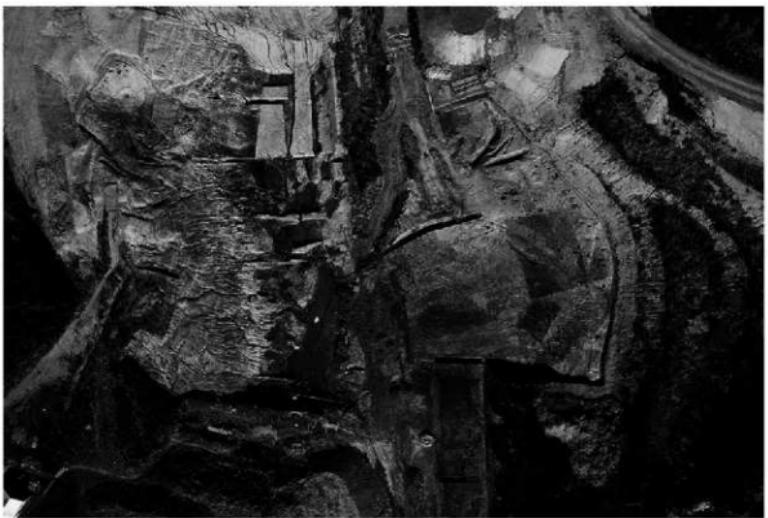
II-7区から円筒埴輪の破片が出土し、IV区から耳環が4点出土している。いずれも古墳の副葬品として考えられるもので、57次調査区の東側の尾根のどこかに古墳が存在した可能性が高い。

だが、現状で東側尾根部は大きな造成を受けており、古墳の痕跡は全く確認できなかった。また、存在したとされる古墳の時期についても、IV区をはじめとする各区の古墳時代の遺物は6世紀から7世紀前半まで間断なく存在する。出土した円筒埴輪も小片で、時期を限定することは困難である。

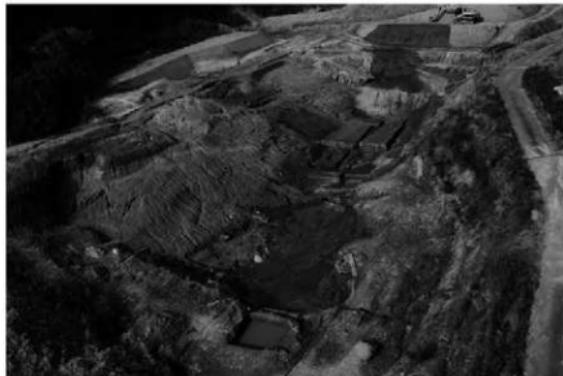
周辺で確認できる古墳を類例として考えるならば、57次調査区の谷から尾根を挟んで西側の谷に面して元岡古墳群G群が作られており、6世紀後半から7世紀初頭にかけて築造されていることが現在まで確認されている。このG群と地理的に一体となる古墳群として、元岡丘陵の北側に位置する桑原石ヶ元古墳群程度の規模の古墳群を想定することも無理ではないと考えられる。



1 調査区全景（北から）



2 調査区俯瞰（IV区 2面調査時）



1 I ~ III 区全景 (南東から)



2 I -1 区北壁 (南東から)



3 I -2 区北壁 (南から)



1 I -4 区東壁（西から）



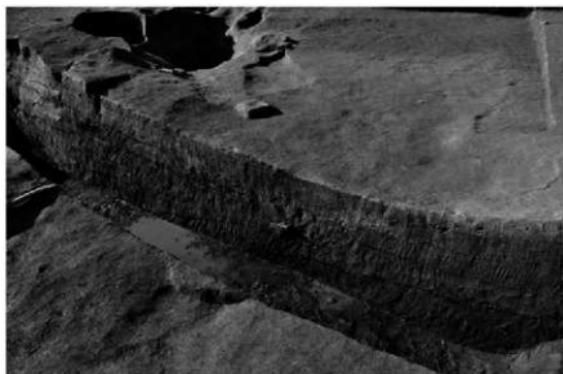
2 I -4 区北壁（南から）



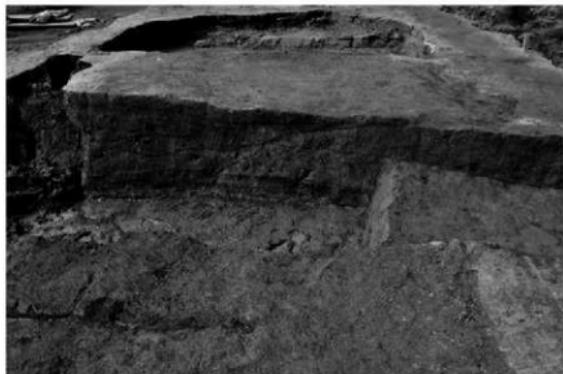
3 I 区東壁（西から）



1 II -5 区北壁西半（東から）



2 II -5 区北壁東半（東から）



3 II -6 区北壁（南東から）



1 II -7・8 区北壁（南から）



2 III区B トレンチ（北西から）



3 III区C トレンチ下層（12  
層以下）（北東から）



1 III区 C トレンチ (南西から)



2 III区 D トレンチ (南東から)



3 III区西側谷 Q トレンチ  
(南東から)



1 III区西側谷 C トレンチ  
(北から)



2 III区西側谷西トレンチ  
(北東から)



3 IV区 B トレンチ (南から)



1 IV区Dトレンチ（3面下）  
(南から)



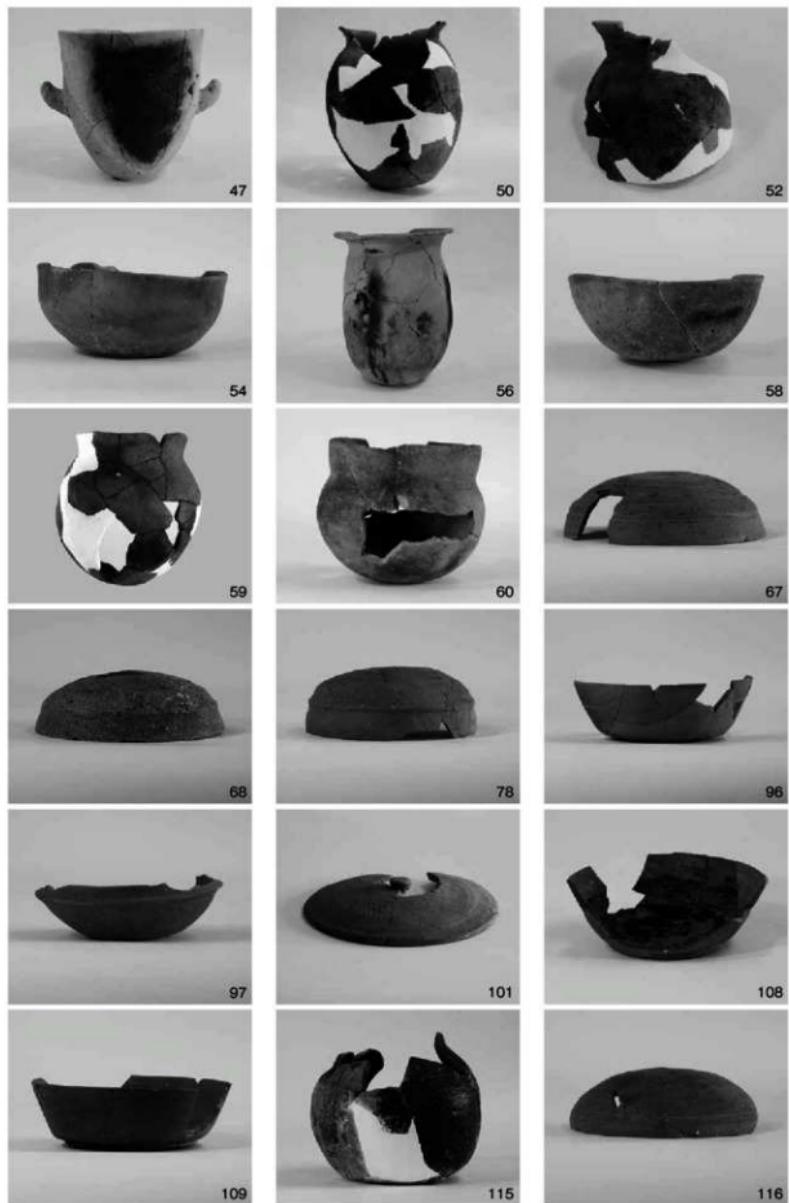
2 V区南東壁（北から）



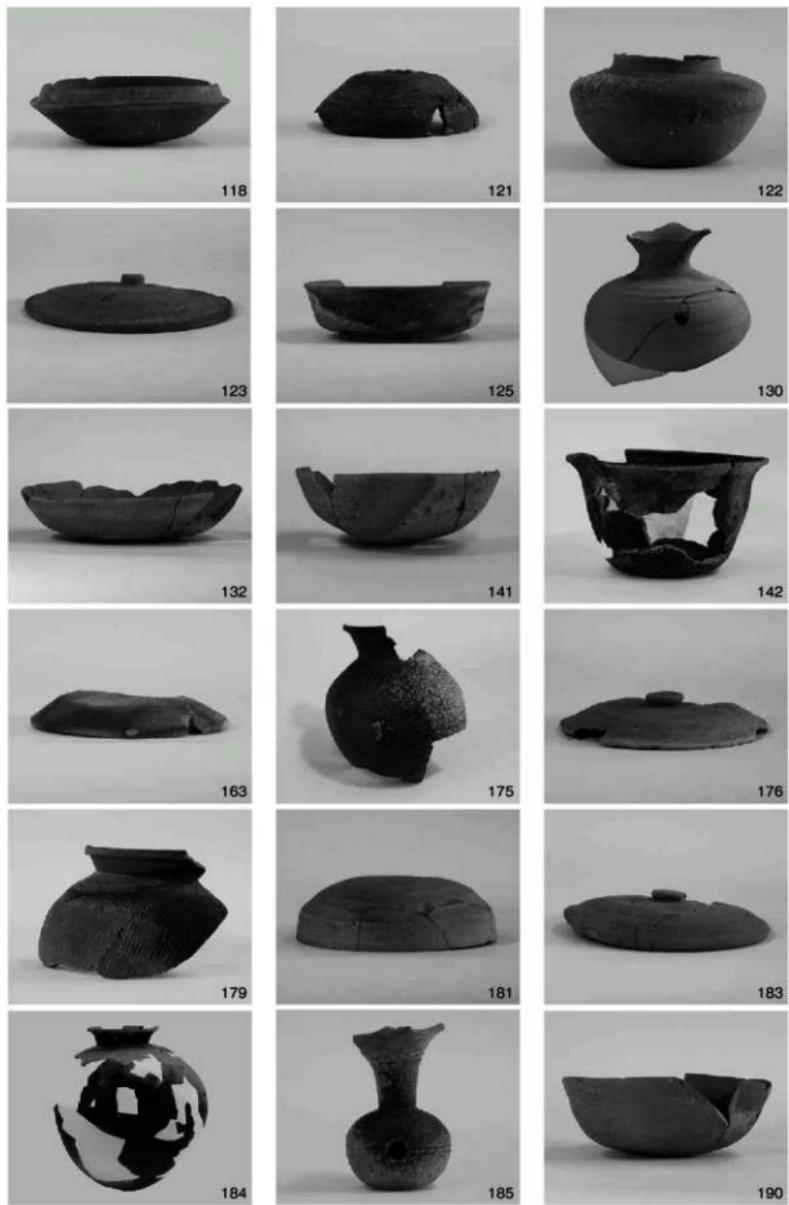
3 V区南壁（北から）



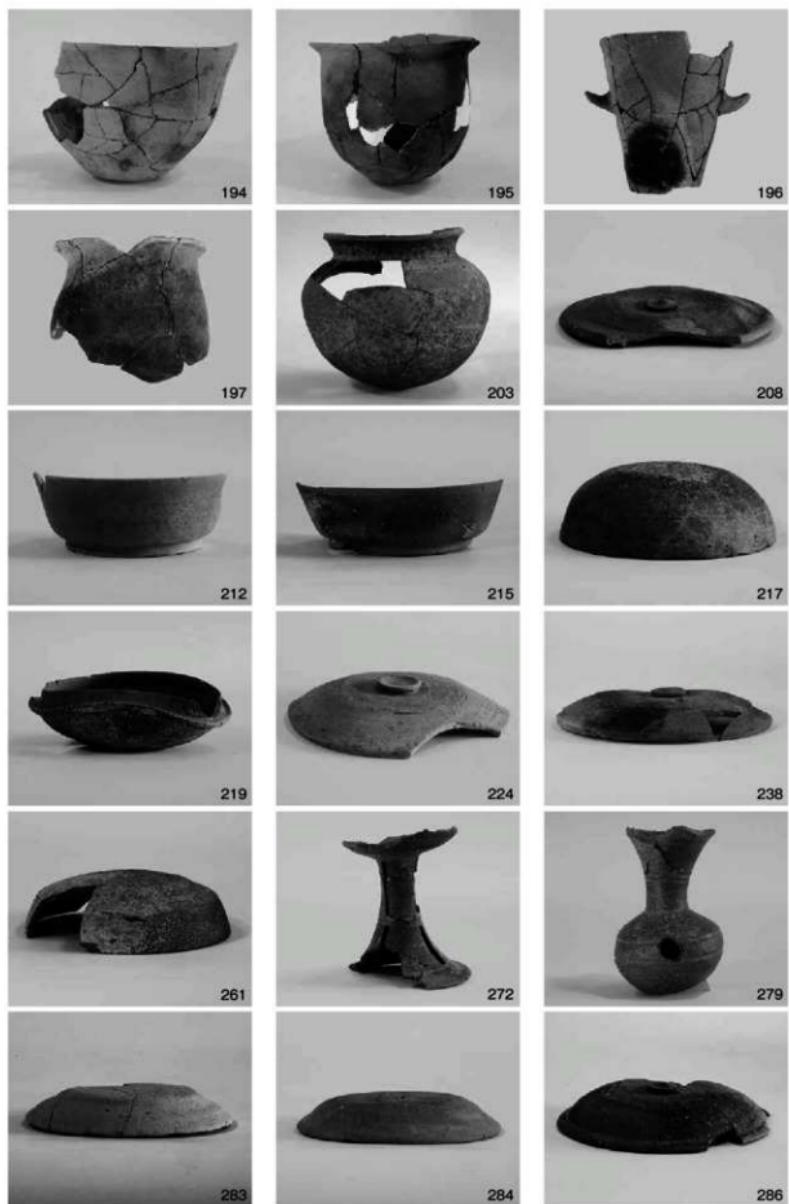
出土遗物 1



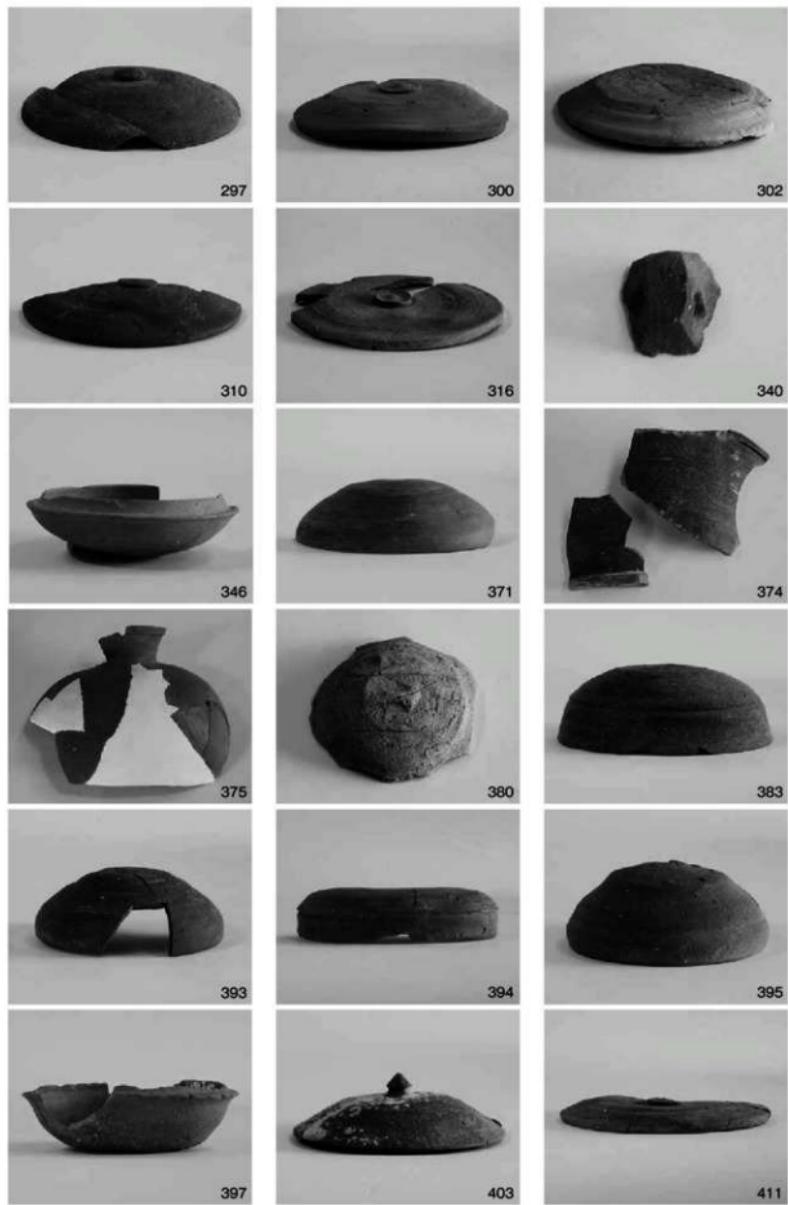
出土遺物 2



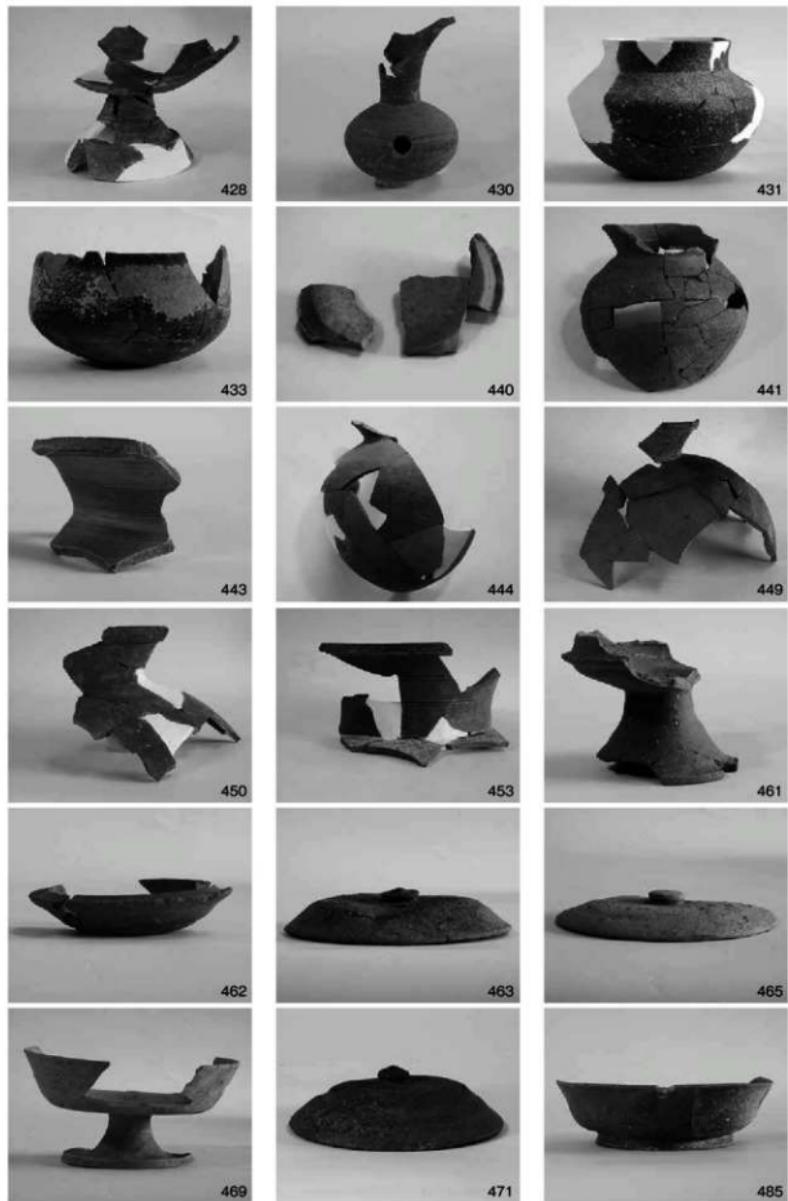
出土遺物 3



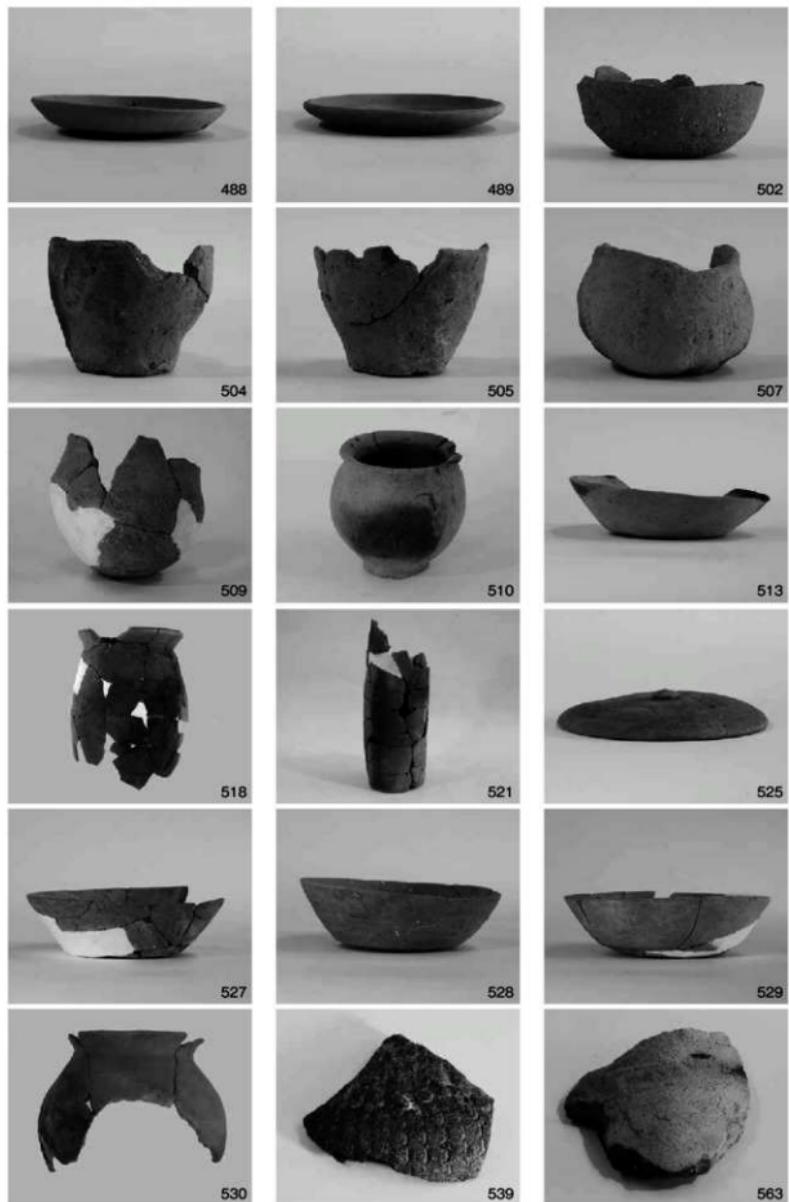
出土遗物 4



出土遺物 5



出土遗物 6



出土遺物 7



198



198



199



198·199



26



25

出土遺物 8

- 254 -

107

## VI. 第63次調査の報告

### 1. 調査の経緯と概要

#### (1) 調査の経緯

元岡・桑原遺跡群第63次調査区は遺跡の南に位置している。近隣では31・41次調査が実施されており、31次調査地点から尾根を一つ隔てた東南に開口する谷部及び尾根部が今回の調査地点にあたる。後世の畑造成の影響により当時の地形の大部分は失われている。対象地は、九州大学統合移転に伴って農学部圃場及び道跡建設が計画されたことを受け、確認調査を平成25年2月22日～26日に実施し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。

確認調査では、谷部では、GL-180cmで遺物包含層に達し、埋土中から土師器等が出土した。その形態から古代～中世の集落痕跡が遺存していることが予想された。また、尾根部では先端部・中央部・基部にそれぞれマウンド状の高まりが形成され、石材の散布が確認されたことから古墳の存在が考えられた。散布している石材は一部立ち上がっており、近隣の集落の信仰の対象としての役割もあったかもしれない。確認調査を受け、谷部および尾根部の約1,244m<sup>2</sup>を調査の対象とし、平成25年10月1日～平成26年4月23日まで発掘調査を実施した。途中約1ヶ月作業は中断したため、約6ヶ月にわたっての調査となった。なお、調査区は谷部をI区、尾根部をII区として報告する。

調査は、谷部分であるI区より着手した。平成25年10月1日にI区を重機によって表土はぎを行い、同月2日より人力掘削を開始した。11月11日～12月18日までの約1ヶ月、一時調査は中断したが平成26年1月6日から再開し、3月4日に空中写真撮影をおこなった。その後、図面記録をとり3月12日にI区の調査を終えた。II区は1月27日から現況の測量をおこない、2月3日から人力掘削を開始した。4月11日に高所作業車による写真撮影をおこなったのちに埋め戻しを行い、4月23日で調査は終了した。

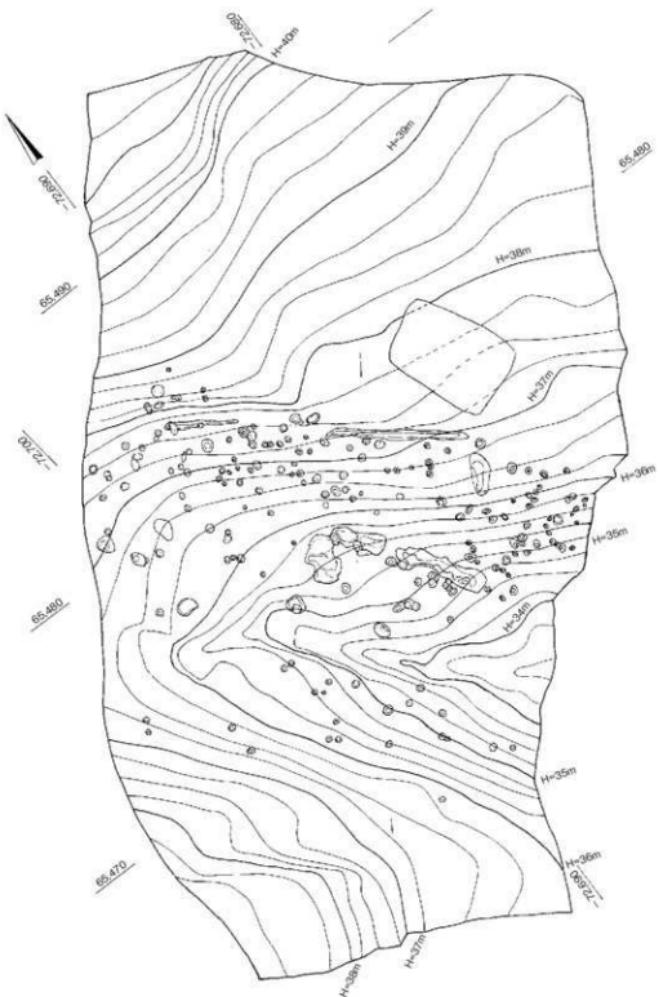
#### (2) 調査の概要

本調査地点では、谷部に当たるI区からは東斜面からは多数のピット状遺構が検出された。ピット状遺構の配置に規則性はなく集落として機能していたとは考え難い。その他に遺構は検出されなかつた。出土遺物は谷の埋没土中からの出土が中心で古代～中世にかけての土師器や白磁等の遺物が出土している。尾根部に当たるII区は当初、古墳が想定されていたが、近世墓が27基検出された。墓は方形の掘方で、深いもので250cmをはかる。いずれも甕の棺ではなく、桶あるいは木棺の可能性がある。検出された墓のうち、細かい骨片や歯のみ出土したものを含めると、17基の墓から人骨が出土した。副葬品として、寛永通宝・キセル・ハサミ等が出土している。

以下、I区、II区の順に報告をおこなう。



第1図 第63次調査地点位置図 (S=1/1000)



第2図 第63次調査 I 区全体図 ( $S = 1/200$ )

### (3) 調査の内容－I 区の調査－

本調査地点は南東方向に開口する谷に位置している。表土180cm以下約200cmにわたって谷の埋没土が堆積している。

#### 1) 基本層序

1層は淡茶褐色粘質土が約40cm堆積する。しまり・粘性ともなく、遺物も含んでいない。やや鉄分が沈着している。2層はにぶい淡茶褐色を呈する。かたくしまっており、粘性もある。3層は黒褐色を呈する粘質土で、かたくしまる。粘性もあり、遺物を少量含む。4層は黒褐色を呈する粘質土。かたくしまっており、遺物を少量含んでいる。5層はにぶい黄褐色を呈する粘質土。かたくしまっており粘性もあるところが、上層と類似している。この層は部分的に炭化物を多く含む所が見受けられ、安定もしていることから生活面としての可能性も考えられたが、遺構は確認されなかった。遺物多数出土する。6層は茶褐色を呈する粘質土、かたくしまり、粘性もある。遺物は少量含んでいるが小片である。7層は茶褐色を呈する粘質土である。内容物によって2層に分かれる。7-1層は茶褐色を呈する粘質土でかたくしまる。遺物も少量確認された。7-2層は7-1層同様に茶褐色を呈する粘質土である。かたくしまり、遺物を少量含んでいる。ただし、拳大の礫を含んでいるところが7-1層との差異となる。8層は淡灰色を呈する砂質土である。しまりはなく遺物も含まない。9層は黄色味がかった茶褐色を呈する粘質土である。かたくしまり、粘性もある。遺物は少量確認された。10層は茶褐色を呈する粘質土である。かたくしまっているが、φ5mm程度の白色砂粒を多く含む砂質土系の土層となる。11層は暗茶褐色を呈する粘質土である。かたくしまり遺物を含まない。12層は黄褐色を呈する砂質土である。しまりはなく粘性もない。遺物は含まない。

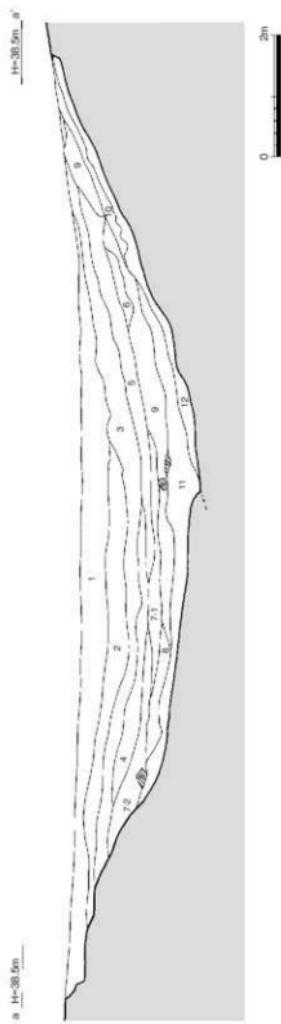
I区調査地点は、基本層序は上記の通りであり、大きくは下部の砂質に近い土から上部に向かう程粘質土が堆積する様相が確認できた。この堆積状況は、谷底に水流があった段階から徐々に埋没していく過程と考えられる。黄褐色土や鉄分沈着の見られる層が確認されることから、埋没の過程は劇的なものではなく、長い時間がかかったゆるやかなものと考えられる。湿地の状態であった時期ややや安定した時期もあったと思われるが、遺構の検出はなく埋没の過程で生活の場所としての利用はなかったと判断される。

#### 2) 検出遺構

谷が埋没する過程での生活地としての利用は確認されなかつたが、埋没前の段階では東側斜面を中心遺構が確認された。

#### ピット状遺構(図2)

谷の東側斜面を中心に多数のピットが確認された。直径20~40cmのものがほとんどで、深さも30cm前後と深くはない。標高36~38mの間に散在しており、その並びにも規則性は見られない。ただし、谷筋に沿って平行していることから、杭あるいは柵列の可能性は考えられる。山城との関連も指摘される大溝が遺跡南側の58・59次調査において確認されているところであり、本調査地点のピット群も関連する防護施設であったとも推察される。しかし、ピット内からの出土遺物は出土しておらず、時期が特定できることから積極的な性格は特定することは困難である。



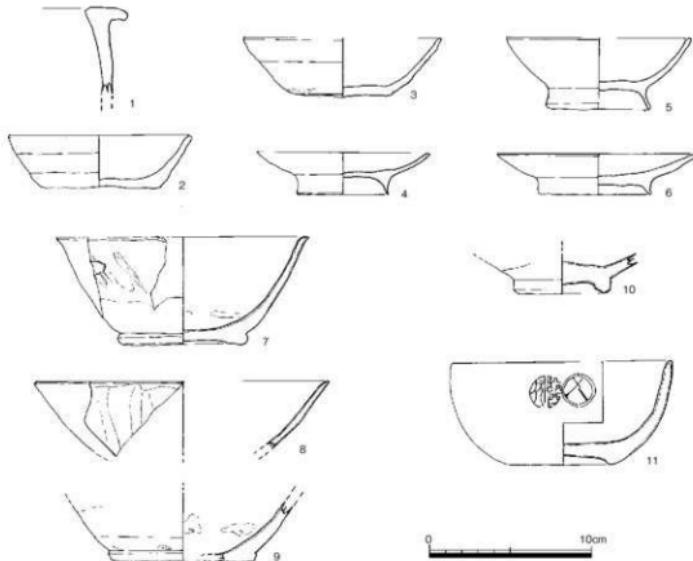
第3図 I区谷内土層断面図 ( $S = 1/80$ )

- 1層：褐色褐色地帯上。しまり・粒性としない。植物は今までなし。  
 2層：比較的褐色。かたくまる。粒性あり。  
 3層：褐色褐色。かたくまる。粒性あり。植物を少含む。  
 4層：褐色褐色。かたくまる。粒性あり。  
 5層：褐色褐色地帯上。かたくまる。粒性あり。植物を少含む。  
 6層：褐色褐色地帯上。かたくまる。粒性あり。植物を少含む。  
 7.1層：其他褐色地帯上。かたくまる。植物を少含む。  
 7.2層：其他褐色地帯上。かたくまる。種を含む。  
 8層：褐色褐色。まろい。  
 9層：褐色褐色地帯上。かたくまる。種を含む。  
 10層：褐色褐色地帯上。かたくまる。種を含む。  
 11層：褐色褐色地帯上。かたくまる。種を含む。  
 12層：褐色褐色地帯上。しまな。粒性なし。植物を含む。

### 3) 出土遺物

I区では、遺構内から遺物は出土していない。そのため谷内包含層出土の遺物を中心に報告するが、包含層内出土遺物は小片が多く、図示できたものは少ない。

1は、甕の口縁部の破片である。小片のため法量の復元は困難である。外面・内面ともにナデ調整がほどこされており、燃成も良好である。胎土は約1mm程度の石英を少量含むが精緻である。弥生時代中期後半に位置づけられよう。2～6は土師器の坏である。2・3は高台がなく、4～6は高台がつく。2は、復元口径は11.4cm、底径は7.3cm、器高は3.3cmを測る。磨滅が激しく詳細な調整は確認できないが、内・外ともにナデ調整が施されている。焼成は良好。3は、復元口径が12.3cm、底径が6.3cm、器高が3.7cmを測る。胎土に約1mm程度の黒色砂粒・赤色砂粒・石英や雲母片を少量含んでいる。調整は内面は磨滅により詳細は不明であるが、外面は胴部から口縁部にかけてはナデ調整、底部はヘラ切りの痕跡が確認できる。器形の特徴から7世紀頃の所産と考えられる。4～6は、高台付き土師器の坏である。4は、復元口径は10.6cm、底径は5.6cm、器高は2.5cmを測る。5は、復元口径は11.4cm、底径は6.4cm、器高4.4cmを測る。6は、復元口径12.4cm、底径6.9cm、器高2.5cmを測る。いずれも、外に開く細く高い高台を持つ。高台の断面は二等辺三角形状で、坏部の底部端に取り付けられている。4・6は坏部分が浅くやや皿状を呈している。高台が細く高い坏は元岡・桑原遺跡群の第7次調査地点でも確認されており、共伴する遺物や遺構から古代の所産と考えられる。時期としては10世紀頃か。



第4図 出土遺物（包含層及び表採）(S=1/3)

7～10は輸入陶磁器である。7・9は越州窯系青磁碗である。7は、復元口径は15.6cm、底径は8.0cm、器高は6.6cmを測る。やや上げ底の底部から緩やかにカーブしながら口縁部に至る。口縁部は短く外反する。外面は釉だまりや他個体の破片が付着するなど、精巧さに欠ける。底部付近は無釉であるがそのほかは施釉が確認される。9は、復元底径8.6cm、残存高3.7cmを有する。底部はふんばる形を呈している。10世紀の所産か。8は、龍泉窯系青磁碗である。復元口径は18.2cm、残存高は4.5cmを測る。口縁部付近に連弁のしのぎがはいる。13世紀の所産と考えられる。10は龍泉窯系青磁碗の底部である。復元底部径は6.0cmを測る。厚み1cmほどの高台はやや外に開き、腰が張っている。13～14世紀の所産と考えられる。

11は表裏の葉のすり鉢である。口径13.8cm、底径6.2cm、器高6.4cmを測る。やや上げ底の底部から丸みを帯びた胴部をもち、内湾する口縁部に至る。外面に丸く緑どられた「醫」「九」の文字が染付けられている。これは、九州大学医学部で使用されていたものであることがわかっている。周辺では茶色の薬瓶も採取されており、どのような経緯でこの地に持ち込まれたのかは不明であるが、当時の九州大学医学部との関連を示す重要な資料である。

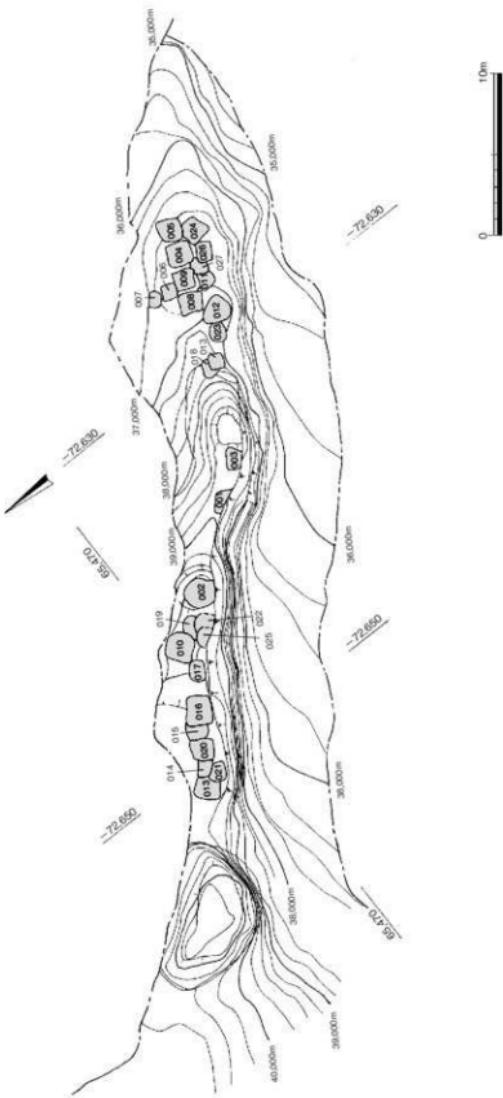
#### (4) 調査の内容—I 区の調査

本調査地点のII区は南東方向に伸びる尾根である。この尾根は北側が比高差15m近くある崖をもつ、幅が5～10m程の竹林が広がる狭小の尾根であった。南側斜面は、竹林以前はみかん畑として利用されていたということもあり、大きく段状の造成がなされたと考えられる。旧地形の大部分が失われ、本来は現在のような痩せ尾根ではなかったと推察される。

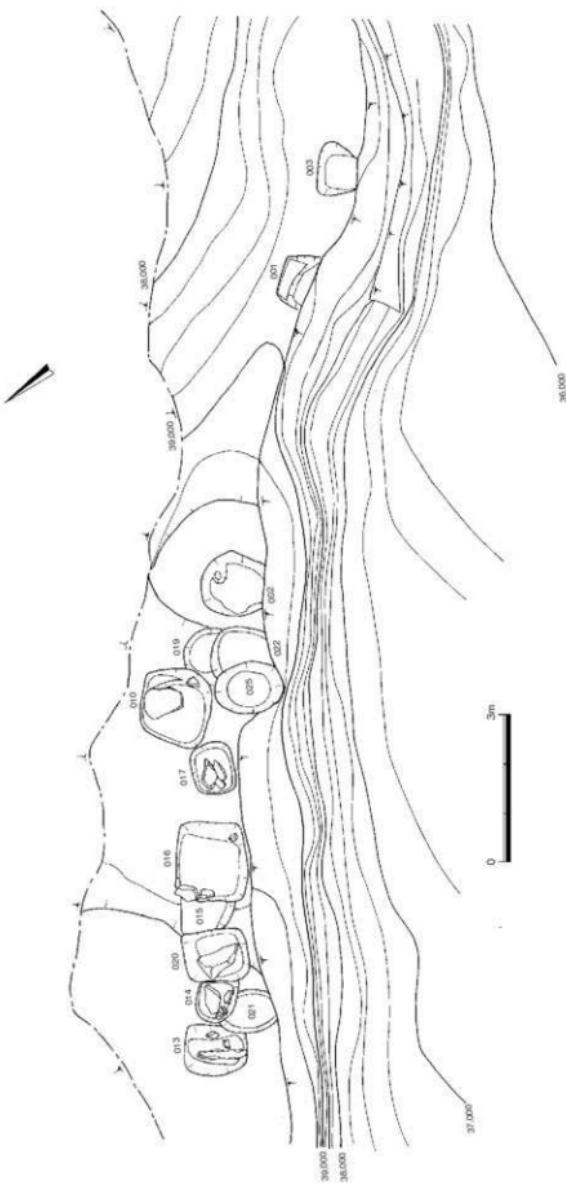
調査当初は尾根の先端部・中央部・基部のそれぞれにマウンド状の高まりが確認でき、特に先端部に大型の扁平な石材の散布が見られたため、古墳の存在が想定されていた。散在する石材を古墳の天井石と想定し、墓壙・墳丘盛土・周溝等の存在の有無の確認に努めたがその痕跡は確認することができなかった。そこで、調査方法を切り替え、尾根上全体を丹念に精査したところ、複数の掘り込みが存在していることが確認され、この掘り込みは近世墓の墓壙であることが判明した。

近世墓は全部で27基検出されている。検出順に番号を付したため、分かりづらいものとなってしまったことをご容赦いただきたい。近世墓の分布の傾向としては、尾根の先端と基部の2エリアに分かれている。先端部（南側）は墓壙のプランがはっきりしており、方形あるいは隅丸方形に近いものが多数を占める。墓壙深度も深いもので200cmを測るなど深いものが多い。墓には原位置を保たれていないものも多いが、扁平な石材を墓石として有しているものが多く、副葬品もハサミや六文銭、陶器等各種出土した。また、人骨の残り具合も良好で、ほぼ全身が遺存しているものも確認できた。尾根基部（北側）の近世墓は、先端部に比べると墓石を有するものはなく、墓壙プランも円形がほとんどである。副葬品を持たないものも多く、浅いことが特徴である。土質によるものと考えられるが、人骨の遺存状態も歯のみが残存しているものが多い。

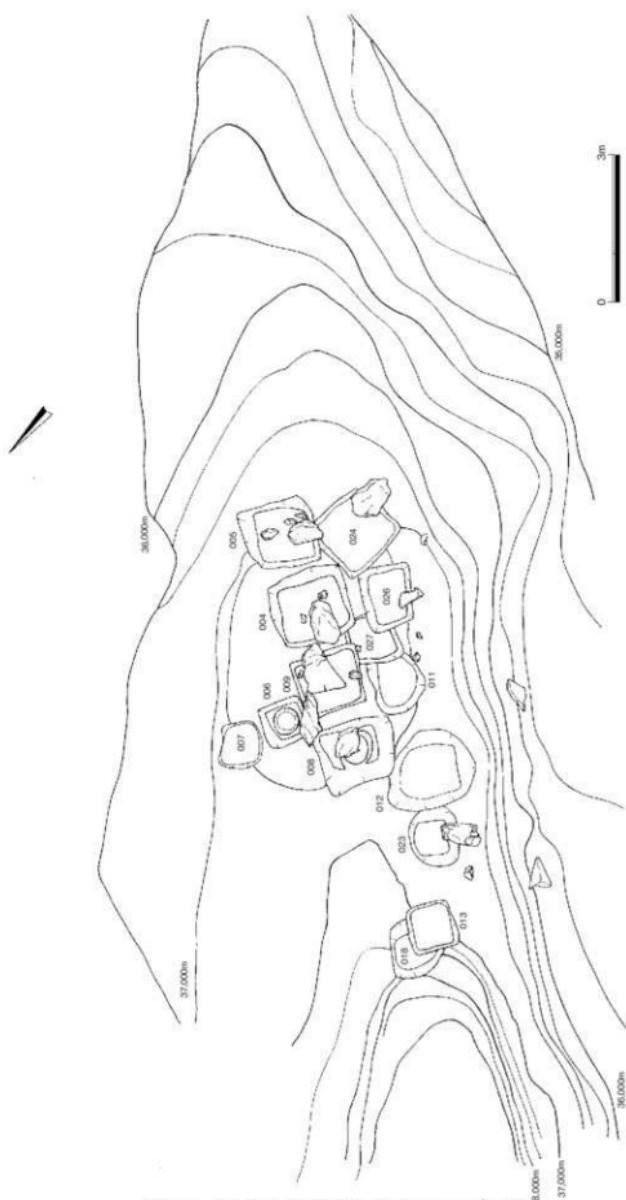
以下、報告をおこなう。出土人骨・出土遺物等の詳細については別表の観察表を参照されたい。なお、人骨の取り上げに際しては、九州大学総合研究博物館の舟橋京子助教（当時）に依頼した。



第5図 II区検出近世墓分布図 (S = 1/300)



第6図 II区検出近世墓北側平面図 (S = 1/100)



第7図 II区検出近世墓南側平面図 ( $S = 1/100$ )

### 1) 遺構と遺物

#### SC003 (第6図)

丘陵中央部に位置する。後世の造成工事の影響で半分は失われているが、墓壙は一辺1.2mの方形プランと考えられる。二段掘りとなっており、最も深いところで75cmを測る。

#### 出土遺物 (第8図)

12は煙管である。雁首・吸口が出土しており同一個体のものと考えられる。吸管部は木製である。吸管部のほとんどは遺存しておらず、雁首の小口側に一部確認できるのみである。首が長く立ち上がる。この特徴から、江戸後期から末にかけてと考えられる。

#### SC004 (第7図)

丘陵先端部に位置する。墓壙は約1.7m×1.5mの方形プランで、深さは1.53mを測る。墓石としての石材の可能性が高いが、長さ1m×幅0.6m、厚み30cm程の花崗岩が確認できた。この石の近くには25cm程の石材も散在しており、本来はこの上に大型の石材を乗せていた可能性もある。

#### 出土遺物 (第8図)

13は、土師器の皿である。灯明皿の可能性もある。口径8.2cm、底径5.9cm、器高0.7~0.9cmを測る。平底から短く外傾して立ち上がる。底面には糸切り痕跡が見られる。内・外面共にナデ調整が施されている。14は寛永通宝である。銭は全部で5枚出土している。「寶」の字体から1668年以降に発行された新寛永に属すると考えられる。

#### SC005 (第7図)

丘陵先端部に位置する。墓壙は約2.5m×3mの方形プランで、深さは1.61mを測る。墓の上には幅1.3m×長さ80cm、厚さ90cmの花崗岩が立った状態で確認されている。この石材は半円形を呈している。平らな部分に文字等は確認されていないが、墓石である可能性が高い。

#### 出土遺物 (第8図)

15は煙管である。雁首・吸口が出土し、同一個体と考えられる。首が短いことが特徴である。16は鉄銭である。サビが激しく文字の判別が困難であるが、寛永通宝と考えられる。当墓から鉄銭以外に銅製の寛永通宝が5枚出土し、計六文が出土したことになる。煙管の形態と複数された寛永通宝内に鉄銭があったことから、鉄銭が発行された1739年以降、江戸時代後期から末にかけての墓であると考えられる。

#### SC006 (第7図)

丘陵先端部に位置する。墓壙は約0.85m×1mの方形プランで、深さは117cmを測る。墓からややずれた位置に1.2m×0.5mの菱形の石材が見られる。当初は墓石として墓壙の中心近くにあり、墓石として利用されたものと考えられる。

#### 出土遺物 (第8図)

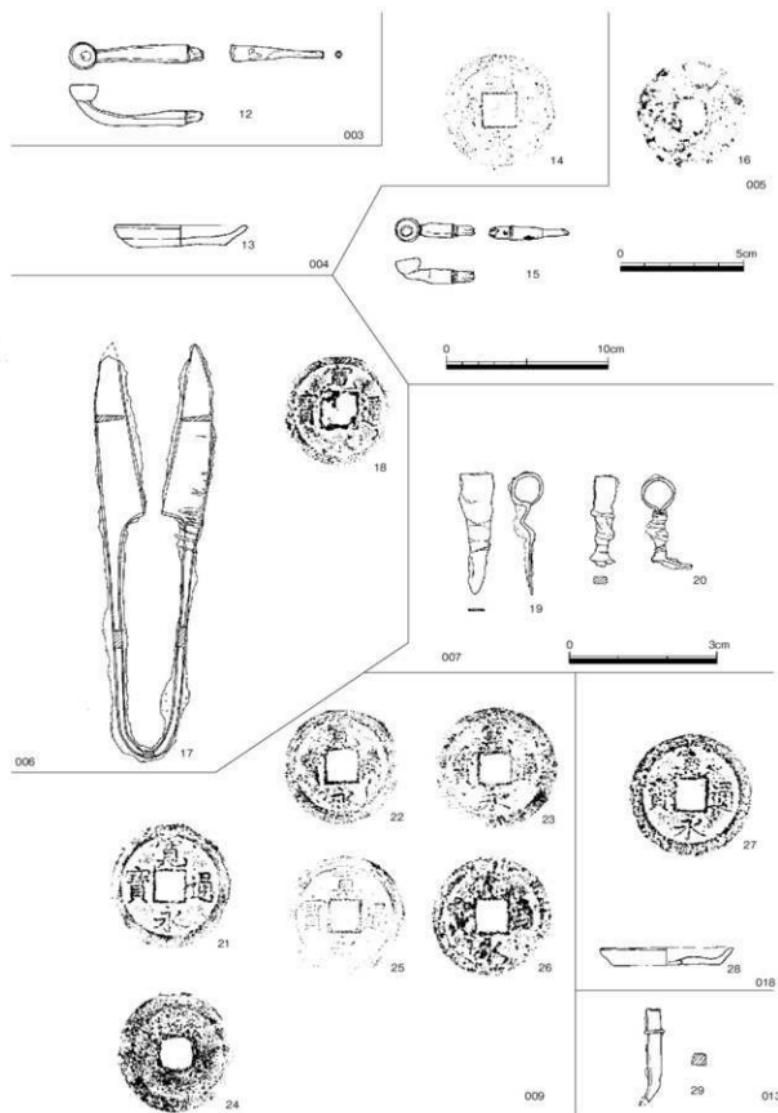
17は和銖である。全長17cm、幅5cmを測る。表面に細い木質が付着しており、櫛の歯である可能性が高い。18は寛永通宝である。字体から新寛永に属すると考えられる。当墓からは他に鉄銭2枚の出土が確認された。

#### SC007 (第7図)

SC006の東側の丘陵最東端に位置する。墓壙は約1m×0.8mの偏方形を呈し、深さは28cmとかなり浅い。

#### 出土遺物 (第8図)

19・20は鉄製の釘である。釘頭が素環状になっている。桶棺あるいは木棺に使用された工具では



第8図 近世墓出土遺物①  
(13・28: S=1/3, 12・15・17: S=1/2, 14・16・18~27・29: S=1/1)

ないかと考えられる。

#### SC008 (第9図)

丘陵先端部に位置する。墓壙は約1.3m×1.5mの長方形プランで、深さは2mを測る。長さ1m程の扁平な花崗岩が墓壙の中央に配されている。墓壙は二段掘りで底から東南方向の頭位に向かた座葬の人骨が出土している。棺桶は見られず、全身がほぼ関接した状態で出土している。顔面は下向き、上・下頬も咬合しており、下肢の乱れもないことからおそらくかなり狭隘な棺で埋葬されたものと推察される。腰椎も右側にひねった状態で出土し、両足は交差させた状態での出土が確認されている。

#### 出土遺物 (第9図)

30は鉄製品である。全体は遺存していないが、刀子の基部と考えられる。頭部付近から出土した。31～34は寛永通宝である。字体から新寛永であろう。合計10枚出土している。全て銅製で鉄錢は含まれていない。

#### SC009 (第7図)

SC008の南に位置する。墓壙は約1.2m×1.2mの方形プランで、深さは1.58mを測る。0.7×1mの三角形状の墓石を配する。

#### 出土遺物 (第8図)

22～26は寛永通宝である。墓内からは6枚出土している。全て重なった状態で出土した。24は布が付着していたことから、6枚布に巻かれた状態で副葬されたものと考えられる。銭の文字も大きな差違はなく同一年代に発行されたものであると考えられ、字体から新寛永に属するものと考えられる。

#### SC013 (第7図)

丘陵中央より位置する。墓壙は1m×1mの方形のプランで、深さは60cmと浅い。丘陵先端の墓群からは少し離れたところに位置している。墓石はなし。

#### 出土遺物 (第8図)

29は鉄釘である。先端が曲がっており、本来は4.5cm程であったと考えられる。断面は方形で棺に使用された可能性が高い。

#### SC018 (第7図)

丘陵中央より位置する。墓壙は直径1.2mの円形プランでSC013に切られる。深さは60cmと浅い。墓石は検出されなかつたが、近隣に石材の散布が見られるため、本来は墓石を有していた可能性もある。

#### 出土遺物 (第8図)

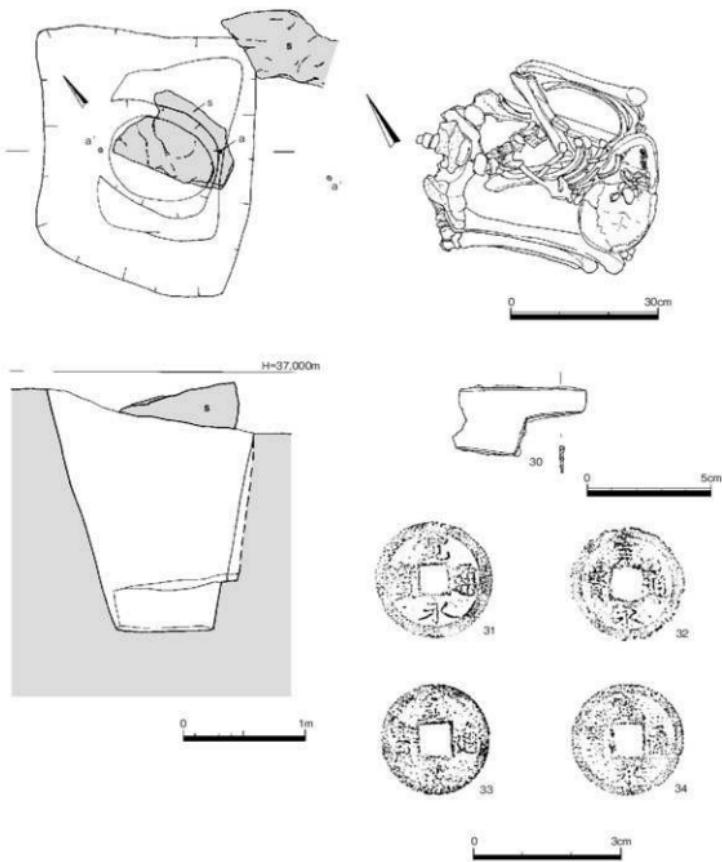
28は土師器の皿である。灯明皿の可能性もある。口径8.2cm、底径6.8cm、器高1cmを測る。平底から短く外傾して立ち上がる。底面には糸切り痕跡が見られる。内・外表面共にナデ調整が施されている。底部中心に穿孔痕跡が見られる。

#### SC024 (第10図)

丘陵先端に位置し、SC005に切られる。墓壙は1.3m×15mの方形プランで、1m×60cmの楕円形の墓石をもつ。

#### 出土遺物

35は和銅である。全長15.5cm、幅3.3cmである。外側には細い木質が付着しており櫛の歯と考えられる。また銅錢も6枚重なった形で貼り付き、それらすべてを覆うように布が付着している。したがって、鉄・六道銭・櫛を布で覆い副葬していたと考えられる。36・37は土師器の皿である。36は口径7.4cm、底径5.2cm、器高1cmを測る。37は口径8.4cm、底径5.8cm、器高1.3cmを測る。

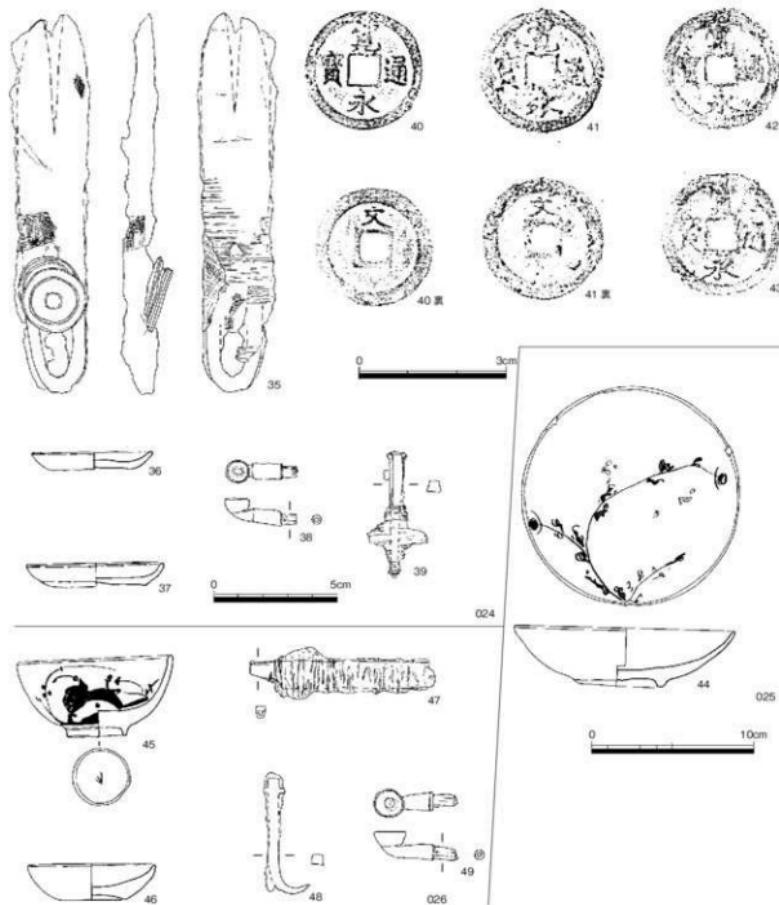


第9図 SC008 (30: S = 1/2, 31~34: S = 1/1)

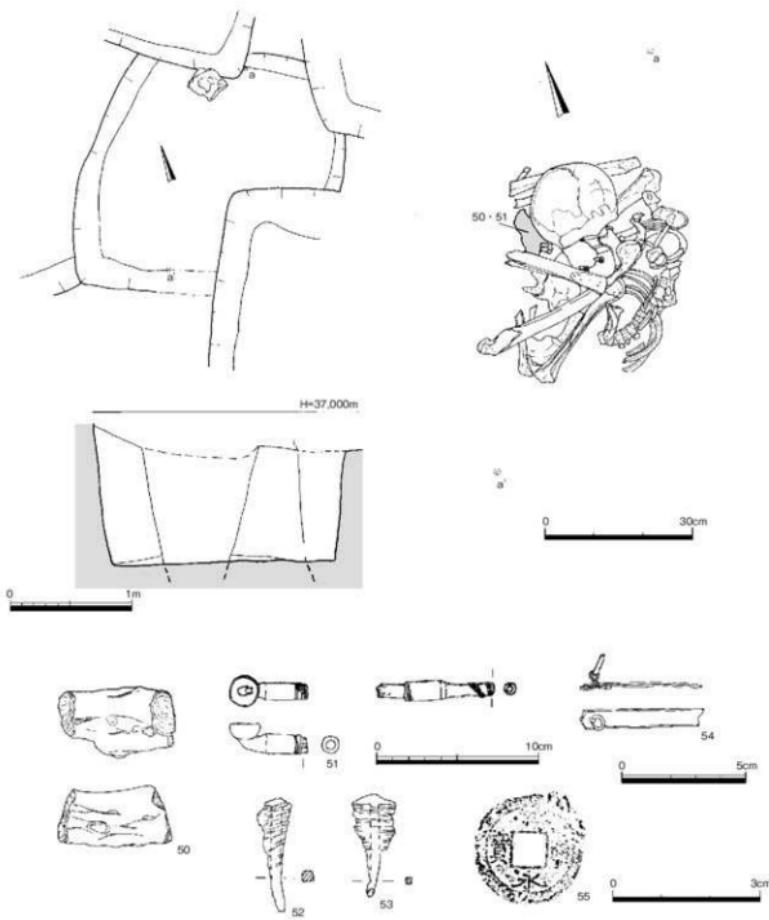
38は煙管である。雁首のみの出土である。首は短く立ち上がる。39は鉄釘である。5.2cmを測り、断面は台形を呈する。40~43は寛永通宝である。6枚のうち2枚の銭の裏に「文」の字が見られる。これは、いわゆる文銭と呼ばれるもので新寛永に属する。表の「寛」と裏の「文」を合わせると「寛文」となることから寛文年間（1668年～）につくられたことを指している。

#### SC025(第7図)

丘陵基部側の墓群に位置する。墓壙は1m×1.3mの楕円形プランで、深さは32cmと浅い。  
出土遺物（第10図）



第10図 近世墓出土遺物②  
(36・37・44~46: S=1/3, 35・38・47・49: S=1/2, 39~43・48: S=1/1)



第11図 SC027 (50・51:S=1/3, 52~54:S=1/2, 55:S=1/1)

44は染付の皿である。口径13.6cm、底径5.3cm、器高3.6cmを測る。垂直に立ち上がる台形の高台から丸みを帯びた胴部へつながる。文様は草花文。

#### SC026（第7図）

丘陵先端部に位置する。墓壙は約1m×1.3mの長方形プランで、深さは1.3mを測る。50cm×20cmの小ぶりの石材が見られるが、墓石としての使用があったかは不明である。

#### 出土遺物

45は染付の碗である。口径9.5cm、底径3.5cm、器高4.9cmを測る。垂直に立ち上がる細い高台からやや腰がはり、垂直気味に立ち上がる。文様は草花文。46は国産磁器の皿である。口径8.0cm、底径4.1cm、器高2.2cmを測る。上げ底の底部をもち緩やかに外傾しながら立ち上がる胴部から内湾する口縁部へと至る。内面に釉薬が施されており外面はない。底部は回転糸切りと考えられるが、ナデ調整も同時に施されている。47は鉄の刀子である。48は鉄釘。49は煙管である。雁首飲みの出土である。首は短く立ち上がる。

#### SC027（第11図）

丘陵先端の墓群に位置し、SC026に切られる。墓壙は1m×1mの方形プランで深さは50cmと浅い。墓壙中心付近からまとめて人骨が出土した。正面を西向きに上肢は下肢の外側にまわし、体操座りのような状態での坐葬である。左右の下肢の間に頭蓋が落下し、その南東から下頸が出土している。両下肢とともに膝関節を強屈した状態である。また、右の手甲骨の直上から煙管等（50・51）の遺物の出土が確認されており、埋葬時に手に持たせた状態での副葬が想起される。

#### 出土遺物

50は有機物片である。炭化した木片で、51の煙管とともに右手の中から出土している。このことから、火起こしに関連するものではないかと考えられる。煙管は雁首・吸口ともに出土し、口付部分には布が巻きつけられている。52・53は鉄釘である。54は青銅製の装飾金具であろう。棺の部品であった可能性が高い。55は寛永通宝である。合計5枚出土しており、全て銅製である。「寶」の字体から新寛永に属すると考えられる。

#### （5）小結

第63次調査では、谷部であるI区からは柵列が、丘陵部であるII区からは近世墓が検出された。I区の柵列の性格は今回の調査で明らかにできなかったが、古代の山城との関連も想定される。II区では、出土遺物から江戸時代の後半から末にかけて営まれた墓であることは分かった。寛永通宝の中でも文錢や鉄錢といった年代の特定が容易な遺物の出土と遺構の切り合いから、当墓群は丘陵西側から東の崖に向かって墓域を拡大したことが読み取れる。ただし、墓域の大部分は後世の烟造成により影響を受けたと考えられる。

表1 元岡63次出土人骨観察表

墓番号	性別	年齢	遺存状態	頭位方向	出土遺物
001	不明	不明	一	不明	なし
004	女性	成年	不良	東	土師皿・寛永通宝
005	女性	熟年	良	不明	キセル・寛永通宝
006	男性	老年	良	南東	鉄・寛永通宝
007	不明	不明	一	不明	鉄釘
008	男性	熟年	良好	東	土師皿・寛永通宝・刀子
009	男性か	熟年	不良	南東	寛永通宝
010	不明	老年	一	不明	なし
012	女性か	成年か	一	不明	なし
013	不明	不明	一	不明	鉄釘
014	不明	不明	一	不明	なし
016	不明	不明	一	不明	なし
018	不明	不明	一	不明	土師皿・寛永通宝
024	男性	熟年	良	東	土師皿・鉄・キセル・鉄釘・寛永通宝
025	不明	成年か	不良	不明	肥前系時期染付皿
026	女性	老年	良	東	皿・刀子・鉄釘・キセル
027	女性	老年	良	東	釘・キセル・鉄釘・寛永通宝・装飾金具



1. I 区全景（南西から）



2. I 区北壁土層断面（南東から）



3. II 区調査前状況（北から）



4. II 区丘陵先端部調査前状況（北から）



5. II区全景（西から）



6. II区丘陵基部近世墓（西から）



7. II区丘陵先端部近世墓（北から）



8. CS008 人骨出土状況①（北から）



9. SC008 人骨出土状況②



10. SC027 人骨出土状況①（西から）



11. SC027 人骨出土状況②頭部付近



12. SC027 頭部付近遺物出土状況



13. SC003 完掘状況（東から）



14. 人骨取り上げ作業風景

## VII 第66次調査の報告

### 1. 66次調査の概要

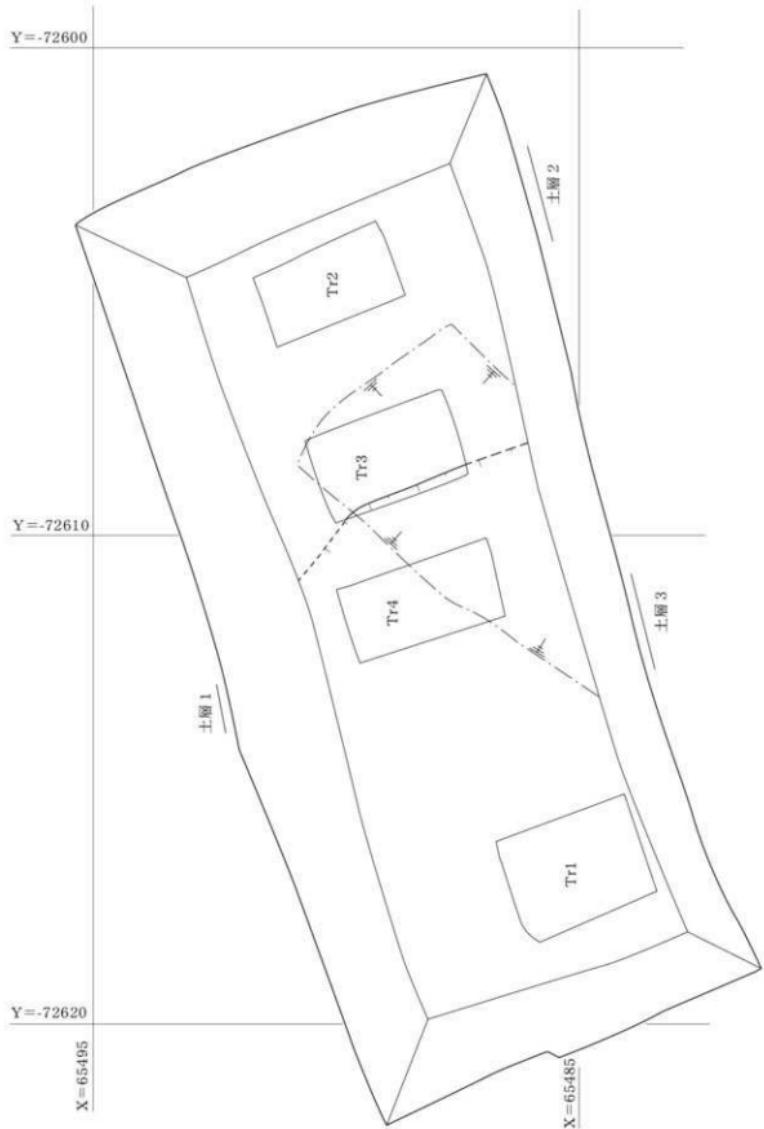
66次調査地点は、北東と南西の両側を尾根にはさまれた谷部に位置する。南西側の尾根上には63次調査地点が立地しており。この尾根とさらに南の尾根にはさまれた谷部には31次調査地点、41次調査地点が立地する。調査期間は平成27年9月29日から10月8日まで。調査面積は167 m<sup>2</sup>である。

調査は9月29日、表土掘削から開始した。現地表面から50cm前後まで現代の客土が堆積しており(第1層)、その下約100cmに近代の層(第2層)が堆積する。以下が中世の遺物を含む包含層(第3層)であったが、調査区中央部を北東から南西にかけて攪乱されていることが判明した。そのため攪乱部分を重機で掘削。残る部分は極力人力による掘削を試みようとしたが、調査の安全上、人が立ち入るには危険と判断した部分は重機を併用しつつ掘削を行った。なお、人力で掘削できなかった場所についても、一旦安全な場所に廃土を仮置きし、遺物の採取につとめた。

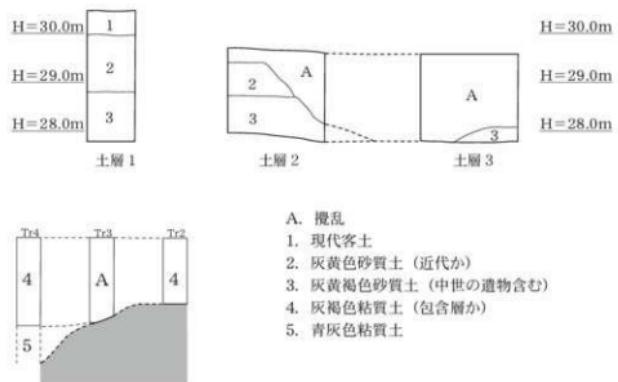
この時点で現地表下2.6m、標高27.8mまで掘削していたが、調査中の雨による調査区の冠水を避けるため、調査区南西部の一部については深く掘削していた。この部分の土層観察を行ったところ、



第1図 66次調査位置図 (1/1000)



第2図 66次調査全体図 (1/100)



第3図 調査区基本層序柱状図(1/100)およびトレニチ土層断面柱状図(1/40)



図版1 66次調査全景(南西から)

青灰色粘質土が堆積していることが確認された。過去の確認調査の結果から谷部の堆積土であるということが明らかになった。したがって、これを仮にトレンチ1として扱うこととし、新たにトレンチを3ヶ所に設定、掘削することで、地山および旧地形の確認を行った。調査区中央部に設定したトレンチ4では50cm前後堆積する灰褐色粘質土の下から谷の堆積土である青灰色粘質土を確認し、最も東に設定したトレンチ2では、包含層下に、灰褐色粘質土が堆積しており、黄橙色粘質土の地山面はその下から検出した。両者の間に設定したトレンチ3には、上述した擾乱がかかつていたものの、その下から地山を検出し、西側には地形の落ちを確認することができた。以上から本調査地点の旧地形は西にかけて落ちており、トレンチ2からトレンチ3にかけてはゆるやかだが、トレンチ3西側で急激に落ちるということが明らかになった。なお、包含層～地山にかけて堆積している灰褐色粘質土からは、その後の再確認時も遺物の出土はなかった。以上の作業が終了したのは10月8日。当日中に撤収し、調査を終了した。

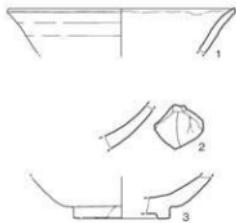
## 2. 包含層出土遺物

第3層は包含層としたが、擾乱もあり遺物の総数はわずか数点しかない。近世以降の遺物を主体としつつ、一部中世の遺物が出土している。ほとんどが小片で図化し得るものは少ない。ここでは中世の遺物を報告する。

1は白磁塊Ⅷ類である。体部上半～口縁部まで残存。いわゆる口ハゲの碗で、口縁端部外側にはするどい稜線をもつ。復元口径は13.8cm。2は龍泉窯系青磁碗の体部片。体部外側に鎬蓮弁を施す碗Ⅱ類である。弁中心の稜はゆるい。3は龍泉窯系青磁碗の底部片である。高台は断面四角形で体部は厚い。碗Ⅰ類であろう。器壁の劣化、二次的な被熱などが要因で色調は極めて悪く灰白色を呈する。また、これと同一個体と思われる口縁片が出土しているが、小片のため図示しえなかつた。その他、青白磁片と思われる土器片なども出土している。

## 3.まとめ

上述したとおり、本調査地点は谷部に位置していることから遺構は残存しておらず、かつ約80cm堆積する包含層も大きく擾乱されており、遺物も予想していた量の出土をみなかつた。そのなかで、調査区内に設定したトレンチから旧地形を明らかにすることは一つの成果といえよう。ここで包含層とした第3層は、出土遺物の量からみて近世段階に堆積したものと思われるが、図示した遺物などから12世紀～14世紀前後の生活遺構が周囲に広がっていたことが推定され、周辺の調査事例とも矛盾しない。



第4図 包含層出土遺物（1/3）

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	もとおか・くわばらいせきぐん28
書名	元岡・桑原遺跡群28
副書名	第20次・第42次・第53次・第57次・第63次・第66次調査の報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1328集
編著者名	大塚紀宣(編)・菅波正人・米倉秀紀・池田祐司・大森真衣子・中尾祐太
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2017年3月27日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	発掘原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
もとおか・くわばらいせきぐん 元岡・桑原遺跡群 だいごくじゅうしおじょうさ 第 57 次調査	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくおおあざもとおか 西区大字元岡	40130	2782	33° 35' 15"	130° 12' 58"	2011.4.12 ～ 2013.9.6	6,700	大学移転	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
元岡・桑原遺跡群 第 57 次調査	集落	古墳時代～ 奈良時代	自然流路・掘立柱建 物・製鉄炉・鍛冶炉	須恵器・土師器・黒色土器・ 陶磁器・石器・金属器	谷部包含層に古墳時代 から古代・中世にかけて各 時代の遺物を包含しながら埋没した状況が確認できる。包含層からは古墳時代中期～後期、7～8世紀 の須恵器・土師器が出土し、谷の斜面で集落や官衙などが営まれたことが想定できる。			谷部包含層に古墳時代 から古代・中世にかけて各 時代の遺物を包含しながら埋没した状況が確認できる。包含層からは古墳時代中期～後期、7～8世紀 の須恵器・土師器が出土し、谷の斜面で集落や官衙などが営まれたことが想定できる。	
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	発掘原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
もとおか・くわばらいせきぐん 元岡・桑原遺跡群 だいごくじゅうしおじょうさ 第 63 次調査	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくおおあざもとおか 西区大字元岡	40130	2782	33° 35' 26"	130° 12' 58"	2013.10.1 ～ 2014.4.23	1,244	大学移転	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
元岡・桑原遺跡群 第 63 次調査	集落・ 墓地	中世～近世	柱穴・土壙墓	陶磁器・銅鏡・金属器					
要 約	尾根頂部で近世墓を検出した。墓壇内からは和鉢や銅鏡、キセル等の副葬品の他、人骨も確認している。 谷斜面からは横列・柱穴が検出され、中世山城との関連が想定される。								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	発掘原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
もとおか・くわばらいせきぐん 元岡・桑原遺跡群 だいごくじゅうしおじょうさ 第 66 次調査	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくおおあざもとおか 西区大字元岡	40130	2782	33° 35' 27"	130° 12' 57"	2015.9.29 ～ 2015.10.8	167	大学移転	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
元岡・桑原遺跡群 第 66 次調査	散布地	中世～近世			青磁・白磁				
要 約	谷部に堆積した灰黄褐色砂質土から中世～近世の遺物が出土した。遺物量は少ないが、12世紀～14世紀の白磁・青磁破片が確認できた。堆積層は近世に形成されたものとみられる。								

## 元岡・桑原遺跡群 28

—第 20 次・第 42 次・第 53 次・第 57 次・  
第 63 次・第 66 次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1328 集

平成 29 年 3 月 27 日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印 刷 ダイヤモンド秀巧社印刷株式会社

福岡市東区松田 3 丁目 9 番 32 号